埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第９集

前　中　西　遺　跡　Ⅵ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ－

２　０　１　１

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第９集

前中西遺跡Ⅵ

（まえなかにしいせき）

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ－

２０１１

埼玉県熊谷市教育委員会

第２号溝跡出土土偶

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。市内上之で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成19・21年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものでございます。今回報告する調査では弥生時代と古墳時代の集落跡やお墓などが確認されました。遺跡の主体となる弥生時代では、溝跡から土器とともに良好な土偶が２つ発見されました。弥生時代の土偶は大変珍しく、前中西遺跡では今回の報告分を含め５つ目の出土であり、貴重な資料と言えます。

前中西遺跡に関する調査報告は今回で６回目となり、遺跡の様相について徐々に明らかにすることができてまいりました。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申しあげます。

平成23年３月

熊谷市教育委員会
教育長　**野原　晃**

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之2688番地３他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59－092）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

　平成19年度：平成19年12月１日～平成20年３月14日

　平成21年度：平成21年６月５日～平成21年10月16日

　整理・報告書作成期間は、平成22年４月26日から平成23年３月18日までである。

5　発掘調査の担当は、平成19年度が熊谷市教育委員会吉野 健、平成21年度は松田 哲が行い、本書の執筆・編集は、松田が行った。

6　発掘調査における写真撮影は吉野・松田が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

　青木克尚　淺間　陽　石川日出志　柿沼幹夫　栗島義明　小出輝雄　小林　高　齋藤弘道

　菅谷浩之　鈴木敏昭　鈴木正博　宅間清公　知久裕昭　轟　直行　藤本早絵　松本 完

　的野善行　宮本久子　村松　篤　吉田 稔

　埼玉県教育局生涯学習文化財課　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…1／800・1／200・1／300　住居跡･竪穴状遺構･土坑…1／60

溝跡平面図…1／80・1／100　溝跡断面図…1／60　井戸跡…1／40

方形周溝墓平面図…1／120・1／100　方形周溝墓断面図…1／60

畠跡平面図…1／120　畠跡断面図…1／60　土器集中箇所…1／20

河川跡平面図…1／400・1／100・1／200　河川跡断面図…1／80

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

＝地　山　　＝焼　土　　＝炭化物

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

弥生土器･須恵器･土師器･土師質土器･陶器…1／4　石器・石製品…1／2・1／4

土製品…1／2・1／4　銅製品…1／2・1／4　木製品…1／4・1／8

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

弥生土器･土師器･土師質土器･陶器･石器･石製品断面：白抜き　須恵器断面：黒塗り

赤彩：

須恵器底部調整　回転糸切り

回転ヘラ削り

回転ヘラナデ

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。（ ）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

L…片岩　M…砂粒　N…礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目　　次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査･報告書作成の経過 …… 1
　3　発掘調査、整理･報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 9
　1　調査の方法 …… 9
　2　検出された遺構と遺物 …… 9
Ⅳ　遺構と遺物 ……15
　1　住居跡 ……15
　2　竪穴状遺構 ……50
　3　溝　跡 ……51
　4　土　坑 ……64
　5　井戸跡 ……69
　6　方形周溝墓 ……70
　7　畠 跡 ……88
　8　ピット ……88
　9　土器集中箇所 ……91
　10　河川跡 ……92
　11　遺構外出土遺物 ……106
Ⅴ　調査のまとめ ……112

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図 …… 4
第２図　周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　調査地点位置図 ……10
第４図　調査区全測図 ……12
第５図　第１区全測図 ……13
第６図　第２区全測図 ……14
第７図　第１号住居跡（1）……16
第８図　第１号住居跡（2）……17
第９図　第１号住居跡遺物出土状況 ……18
第10図　第１号住居跡出土遺物（1）……19
第11図　第１号住居跡出土遺物（2）……21
第12図　第１号住居跡出土遺物（3）……23
第13図　第１号住居跡出土遺物（4）……24
第14図　第２号住居跡 ……29
第15図　第２号住居跡遺物出土状況 ……30
第16図　第２号住居跡出土遺物（1）……31
第17図　第２号住居跡出土遺物（2）……32
第18図　第３号住居跡 ……36
第19図　第３号住居跡遺物出土状況 ……37
第20図　第３号住居跡出土遺物（1）……38
第21図　第３号住居跡出土遺物（2）……39
第22図　第４号住居跡・出土遺物 ……42
第23図　第５号住居跡・出土遺物 ……43
第24図　第６号住居跡 ……44
第25図　第６号住居跡出土遺物 ……45
第26図　第７～９号住居跡･出土遺物 ……47

第27図　第10号住居跡･出土遺物 ……49
第28図　第１号竪穴状遺構･出土遺物 ……50
第29図　第１～４号溝跡 ……52
第30図　第５～11号溝跡 ……55
第31図　第12～17号溝跡 ……58
第32図　溝跡出土遺物（1）……60
第33図　溝跡出土遺物（2）……61
第34図　溝跡出土遺物（3）……62
第35図　第１～４号土坑 ……65
第36図　第５～７号土坑 ……67
第37図　土坑出土遺物 ……68
第38図　第１号井戸跡 ……69
第39図　第１号方形周溝墓 ……71
第40図　第１号方形周溝墓遺物出土状況 ……72
第41図　第１号方形周溝墓出土遺物（1）……73
第42図　第１号方形周溝墓出土遺物（2）……74
第43図　第１号方形周溝墓出土遺物（3）……77
第44図　第１号方形周溝墓出土遺物（4）……79
第45図　第１号方形周溝墓出土遺物（5）……80
第46図　第２号方形周溝墓･出土遺物 ……83
第47図　第３号方形周溝墓･出土遺物 ……85
第48図　第４号方形周溝墓･出土遺物 ……86
第49図　第１号畠跡 ……89
第50図　37-141GP１・２遺物出土状況･ピット出土遺物 …90
第51図　第１号土器集中箇所･出土遺物 ……91
第52図　第１号河川跡（1）……93
第53図　第１号河川跡（2）……94
第54図　第１号河川跡（3）……95
第55図　第１号河川跡出土遺物（1）……97
第56図　第１号河川跡出土遺物（2）……98
第57図　第１号河川跡出土遺物（3）……101
第58図　第１号河川跡出土遺物（4）……103
第59図　遺構外出土遺物（1）……107
第60図　遺構外出土遺物（2）……109

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……７
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 ……25
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 ……34
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 ……40
第５表　第４号住居跡出土遺物観察表 ……42
第６表　第５号住居跡出土遺物観察表 ……43
第７表　第６号住居跡出土遺物観察表 ……45
第８表　第７号住居跡出土遺物観察表 ……48
第９表　第９号住居跡出土遺物観察表 ……48
第10表　第10号住居跡出土遺物観察表 ……50
第11表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表 …50
第12表　溝跡出土遺物観察表 ……63
第13表　土坑出土遺物観察表 ……69
第14表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表 …81
第15表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表 …84
第16表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表 …85
第17表　第４号方形周溝墓出土遺物観察表 …87
第18表　ピット出土遺物観察表 ……91
第19表　第１号土器集中箇所出土遺物観察表 …92
第20表　第１号河川跡出土遺物観察表 ……104
第21表　遺構外出土遺物観察表 ……110

図版目次

図版１　平成19年度調査第１区全景（西から）
図版２　平成21年度調査第２区31～38－137･138G
図版２　全景（東から）
平成21年度調査第2区37･38－137～148G

全景（南から）
遺　構
図版３　第１号住居跡
第１号住居跡P47土器出土状況
第２号住居跡
第３号住居跡
第３号住居跡遺物出土状況
第４号住居跡
第５号住居跡
第５号住居跡遺物出土状況
図版４　第６号住居跡
第６号住居跡遺物出土状況
第７号住居跡
第８号住居跡
第９号住居跡
第10号住居跡
第１号溝跡
図版５　第２号溝跡
第２号溝跡遺物出土状況
第５・６号溝跡
第10号溝跡
図版６　第８・９号溝跡
第12・13号溝跡
第13号溝跡遺物出土状況
第14号溝跡
第15・16号溝跡・第２号方形周溝墓
第17号溝跡
図版７　第１号土坑
第３号土坑
第３号土坑遺物出土状況
第４号土坑
第５号土坑
第６号土坑
第７号土坑
第１号井戸跡
図版８　第１号方形周溝墓南西周溝
第１号方形周溝墓南西周溝遺物出土状況
第１号方形周溝墓南東周溝
第１号方形周溝墓南東周溝遺物出土状況
図版９　第１号方形周溝墓南東周溝壺出土状況(1)
第１号方形周溝墓南東周溝壺出土状況(2)
第３号方形周溝墓
第３号方形周溝墓鉢出土状況
第４号方形周溝墓
第１号畠跡
37－141GP１・２遺物出土状況
図版10　37－147GP1遺物出土状況
第１号土器集中箇所
第１号河川跡（平成19年度調査）
第１号河川跡木製品等出土状況
第１号河川跡（平成21年度調査）(1)
第１号河川跡（平成21年度調査）(2)
第１号河川跡（平成21年度調査）２T土層作業風景
遺　物
弥生土器
図版11　第１号住居跡　第10図１～８
図版12　第１号住居跡　第10図９・12
第11図13～15
第２号住居跡　第16図１
図版13　第２号住居跡　第16図２～４・８・17
第３号住居跡　第20図１・２
図版14　第10号住居跡　第27図１
第２号溝跡　第32図２－１
第３号土坑　第37図３－１
第１号方形周溝墓　第41図１・２
図版15　第１号方形周溝墓　第41図３～５
第42図６・７
図版16　第１号方形周溝墓　第42図８～10・25
第43図32
第44図77・99
第４号方形周溝墓　第48図５

図版17　第１号河川跡　第55図１・26・27
　　第56図28・31
　　遺構外　第59図１・７
図版22　第１号住居跡　第11図22～50
　　第12図51～63
図版23　第１号住居跡　第12図64～105
図版24　第１号住居跡　第12図106～108
　　第13図109～126
　　第２号住居跡　第16図18～29
　　第17図30～38
図版25　第２号住居跡　第17図39～57
　　第３号住居跡　第20図８～30
図版26　第３号住居跡　第20図31～40
　　第21図41～76
図版27　第４号住居跡　第22図２
　　第９号住居跡　第26図９－２
　　第10号住居跡　第27図２・３
　　第１号溝跡　第32図１－２～４
　　第２号溝跡　第32図２－２～24
　　第５号溝跡　第34図５－３・４
　　第８号溝跡　第34図８－１・２
　　第15号溝跡　第34図15－３・４
　　第17号溝跡　第34図17－６～８
図版28　第１号土坑　第37図１－１～７
　　第３号土坑　第37図３－２～５
　　第４号土坑　第37図４－６～９
　　第１号方形周溝墓　第43図27～52
図版29　第１号方形周溝墓　第43図53～76
　　第44図78～95
図版30　第１号方形周溝墓　第44図96～98・100～130
　　第45図131～137
図版31　第２号方形周溝墓　第46図１・２
　　第４号方形周溝墓　第48図６～11
　　37－142GP１　第50図６
　　第１号河川跡　第55図２～25
　　第56図33～40
図版32　第１号河川跡　第56図41～55
　　第57図56～78
図版33　遺構外　第59図２～６・８～35

土師器（古墳時代前期）

図版18　第３号方形周溝墓 第47図１～３・５・６
　　第４号方形周溝墓 第48図2
　　遺構外 第60図48～50
図版34　第１号竪穴状遺構 第28図１・２
　　第５号溝跡 第34図５－１・２
　　第１号河川跡 第58図97～103

須恵器・土師器・土師質土器（古墳時代後期～平安時代）

図版19　第５号住居跡 第23図２
　　第６号住居跡 第25図１～３・５～８
図版20　第６号住居跡 第25図９・10
　　第４号土坑 第37図４－２
　　37－141GP1 第50図１～４
図版21　37－141GP2 第50図５
　　第１号土器集中箇所 第51図１～４
　　第１号河川跡 第58図110
　　遺構外　第60図53
図版34　第１号溝跡 第32図１－１
　　第13号溝跡 第34図13－２
　　第17号溝跡 第34図17－９
　　第４号土坑 第37図４－１
　　第１号河川跡 第58図105・106

陶器（近世）

図版21　第17号溝跡　第34図17－１・２
図版34　第13号溝跡　第34図13－1
　　第15号溝跡　第34図15－２
　　第17号溝跡　第34図17－３

石器・石製品

図版35　第１号住居跡　第13図127～136
　　第２号住居跡　第17図58～62
　　第３号住居跡　第21図77～81
図版36　第10号住居跡　第27図４

第２号溝跡　第32図2－25
37－147GP１　第50図８・９
第１号河川跡　第57図91・92
第58図93・94
遺構外　第60図47
第１号竪穴状遺構　第28図３
第17号溝跡　第34図17－４・５
遺構外　第60図56・57
図版38　第１号方形周溝墓　第45図138
第７号住居跡　第26図７－１
第９号住居跡　第26図９－１

銅製品・古銭

図版38　第13号溝跡　第34図13－３・４
遺構外　第60図58

土製品

図版37　第２号溝跡　第33図２－26・27
図版38　第１号河川跡　第57図90

木製品

図版38　第13号溝跡　第34図13－5
第１号河川跡　第58図111

種子桃・獣骨

図版38　第13・15・17号溝跡

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年６月６日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成７年11月13日から平成８年１月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成８年２月９日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成19年11月13日及び平成21年４月10日付けで提出された。発掘調査は平成19年度及び平成21年度に熊谷市教育委員会により実施された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成19年度　　平成19年11月22日付け熊教社発第1514号
　　平成19年12月３日付け教生文第３－784号
平成21年度　　平成21年６月５日付け熊教社発第1121号
　　平成21年５月25日付け教生文第５－144号

2　発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

平成19年度

平成19年度の発掘調査は二回に分けて行われており、調査の大半は平成21年度に報告済である（熊谷市教委2010）。今回報告する箇所は、平成21年度に第３区として報告した調査区の東西道路西側延長部分にあたり、面積は299.8㎡である。調査期間は、平成19年12月１日から平成20年３月14日までである。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、12月中旬から２月中旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。12月上旬及び２月下旬からは遺構平面図を作成し、12月下旬及び３月中旬には調査区の全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成21年度

平成21年度の発掘調査は計三回行われており、今回報告するのは遺跡範囲北東部で行われた調査についてである。調査区は河川を挟んで東西二つに分かれており、今回は西側調査区554.1㎡分のみが報告対象となる。その他の平成21年度調査については、次年度以降に報告する予定である。

今回報告する調査は８月末より開始した。調査はまず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、９月初旬から下旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。10月初旬からは遺構平面図を作成し、10月上旬に調査区の全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（２）整理・報告書作成

整理･報告書作成作業は、平成22年４月から平成23年３月まで実施した。第１四半期は遺物の洗浄、注記、接合、復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第２四半期に入ると、遺物の実測･トレース、遺構のトレースを開始し、第３四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第４四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、３月中旬に報告書を刊行した。

３　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（１）発掘調査

平成19年度

教育長	野原　晃
教育次長	増田　和己
社会教育課長	関口　和佳
社会教育課担当副参事	今井　宏
社会教育課副課長	新井　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　健
主任	松田　哲
主事	松村　聡

平成21年度

教育長	野原　晃
教育次長	柴崎　久
社会教育課長	斉木　千春
社会教育課担当副参事	小林　英夫

社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主査	鯨井　敬浩
主任	松田　　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹
発掘調査員	長谷川一郎
発掘調査員	原野　真祐

（２）整理・報告書作成事業

平成22年度

教育長	野原　　晃
教育次長	藤原　　清
社会教育課長	斉木　千春
社会教育課担当副参事	小林　英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主幹	吉野　　健
主査	寺社下　博
主査	鯨井　敬浩
主任	松田　　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹

Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町との合併を経て、県北初の20万都市となり、平成21年４月から「特例市」として発足したところである。

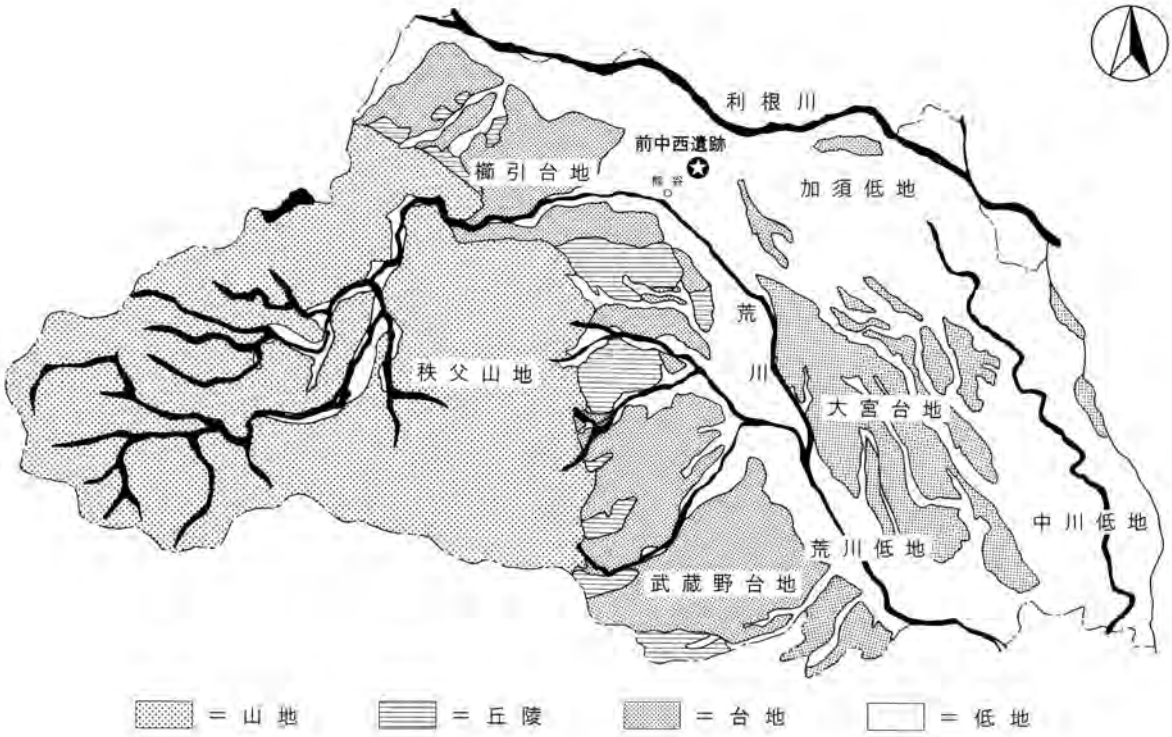
熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約２kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛引台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約1.2km、荒川からは北へ約2.0～2.5km、利根川からは南へ約7.0～9.0kmの距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは１m前後であった。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方



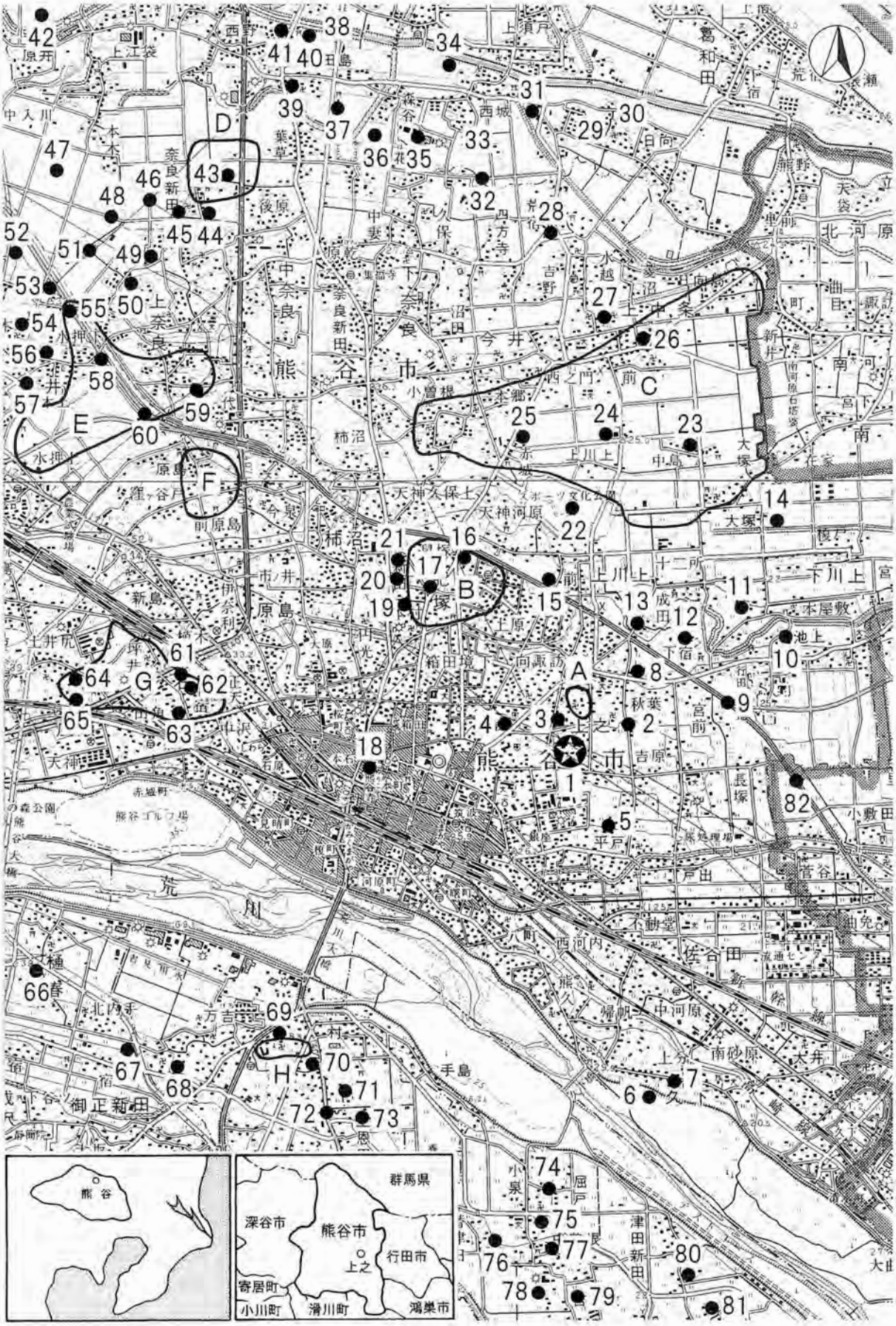
第１図　埼玉県の地形図

城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曽利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地へ進出しはじめ、西城切通遺跡(34)、場違ヶ谷戸遺跡（39）など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。前中西遺跡周辺では隣接する諏訪木遺跡（２）でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では後期に続いて集落が営まれているが、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）や埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007）では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者では遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は隣接する藤之宮遺跡（３）で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（地図未掲載）では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年３月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市（旧妻沼町）飯塚遺跡、飯塚南遺跡（ともに地図未掲載）や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になるとこれまでの状況と一変して集落跡が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（９）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（82）などがあり、本格的に展開される。中期後半は今回報告する前中西遺跡（１）や諏訪木遺跡、北島遺跡（22）などで集落が営まれており、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。特に前中西遺跡では遺跡範囲南東部で方形周溝墓が多数検出されており、集落･墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている（熊谷市教委2002・2003・2009・2010）。諏訪木遺跡では県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）で初めて住居跡と方形周溝墓が確認された。両者はほぼ同一箇所で確認されたことから時間差を持つ。確認された住居跡は１軒のみであり、出土土器も甕１点のみであるため断言はできないが、出土土器の比較では方形周溝墓が住居跡よりも新しい要素を持つ。北島遺跡では大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期初頭以降については藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡としては前中西遺跡、北島遺跡以外に近辺では確認例がない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。前代に引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（埼玉県埋蔵文化財調



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
熊　谷　市			47	別府条里遺跡	奈良・平安
1	前中西遺跡	弥生中、古墳、奈良･平安	48	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	諏訪木遺跡	縄文後･晩、弥生中･後、古墳後、奈良･平安、中･近世	49	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良･平安、中世	50	奈良氏館跡	平安末～中世
4	箱田氏館跡	平安末	51	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
5	平戸遺跡	弥生中･後、古墳後、平安、中･近世	52	寺東遺跡	縄文前～後
6	久下氏館跡	中世	53	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
7	市田氏館跡	中世	54	玉井陣屋跡	平安末～中世
8	成田氏館跡	中世	55	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	56	水押下遺跡	古墳後
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良･平安、中･近世	57	稲荷木上遺跡	古墳後
11	上河原遺跡	奈良･平安、中･近世	58	下河原中遺跡	奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	59	本代遺跡	古墳後、近世
13	成田遺跡	古墳後	60	下河原上遺跡	近世
14	中条条里遺跡	古墳前･中、奈良･平安	61	天神前遺跡	古墳中･後、中世
15	河上氏館跡	中世	62	兵部裏屋敷跡	中世
16	八幡山遺跡	古墳	63	御蔵場跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	64	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
18	熊谷氏館跡	中世	65	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
19	肥塚館跡	中世	66	宮前遺跡	古墳後、奈良･平安、中･近世
20	出口上遺跡	奈良･平安、中･近世	67	宿遺跡	古墳後、奈良･平安、中･近世
21	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	68	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
22	北島遺跡	弥生中･後、古墳、奈良･平安、中世	69	村岡館跡	平安末
23	中島遺跡	古墳後、奈良･平安	70	北西原遺跡	奈良･平安
24	女塚遺跡	古墳後、奈良･平安、中世	71	塚本遺跡	古墳、奈良･平安
25	赤城遺跡	古墳、奈良･平安	72	西浦遺跡	奈良･平安
26	中条遺跡	古墳、奈良･平安、中世	73	腰廻遺跡	奈良･平安
27	中条氏館跡	中世	74	北方遺跡	奈良･平安
28	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中･近世	75	宮前遺跡	奈良･平安
29	先載場遺跡	古墳後、奈良	76	西浦町遺跡	奈良･平安
30	八幡間遺跡	古墳後、奈良	77	宮前町遺跡	奈良･平安
31	東城館跡	平安	78	宮町遺跡	奈良･平安
32	長安寺遺跡	古墳後、奈良･平安	79	仲町遺跡	奈良･平安
33	西城館跡	平安	80	旭町遺跡	奈良･平安
34	西城切通遺跡	縄文後	81	北町遺跡	奈良･平安
35	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良･平安	行　田　市		
36	森谷遺跡	古墳後、奈良･平安	82	小敷田遺跡	弥生中、古墳前･後、奈良･平安
37	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良･平安	古　墳　群		
38	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良･平安	熊　谷　市		
39	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	A	上之古墳群	古墳後～末
40	宮前遺跡	奈良･平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
41	実盛館	平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
42	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
43	横塚遺跡	古墳前、平安	E	玉井古墳群	古墳後
44	東通遺跡	古墳後	F	原島古墳群	古墳後
45	西通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
46	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	H	村岡古墳群	古墳後

査事業団2008)。中条遺跡（26）では木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や藤之宮遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（C：中条古墳群）、市の指定史跡である横塚山古墳（D：奈良古墳群）などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡２箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はＢ種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円

墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良･平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では前中西遺跡北側に分布する上之古墳群（A）の他に、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（14）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（8）、久下氏館跡（6）、市田氏館跡（7）、河上氏館跡（15）、熊谷氏館跡（18）、肥塚館跡（19）、中条氏館跡（27）などがある。このうち、前中西遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡では近年の調査で成田氏関連と思われる遺構や遺物が確認されている。まず県事業団による平成13年度調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。同じく県事業団による平成14年度調査では、井戸枠に器高70㎝を超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものと推定されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度調査では、古墳時代後期の古墳周溝が埋没した後、掘削された土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は現在整理調査中であるが、おそらく15世紀前半を上限とし、枚数が5,000枚以上と膨大な数であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。

中世段階については館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様で隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

今回報告するのは、平成19・21年度に行われた第８次及び第10次調査についてである（第３図）。調査面積は平成19年度が299.8㎡、平成21年度は554.1㎡であり、総面積は853.9㎡である。

調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。今回報告する調査地点のグリッドは、平成19年度調査が東西43から52まで、南北152から154まで、平成21年度調査が東西31から38まで、南北137から148までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、過去の前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

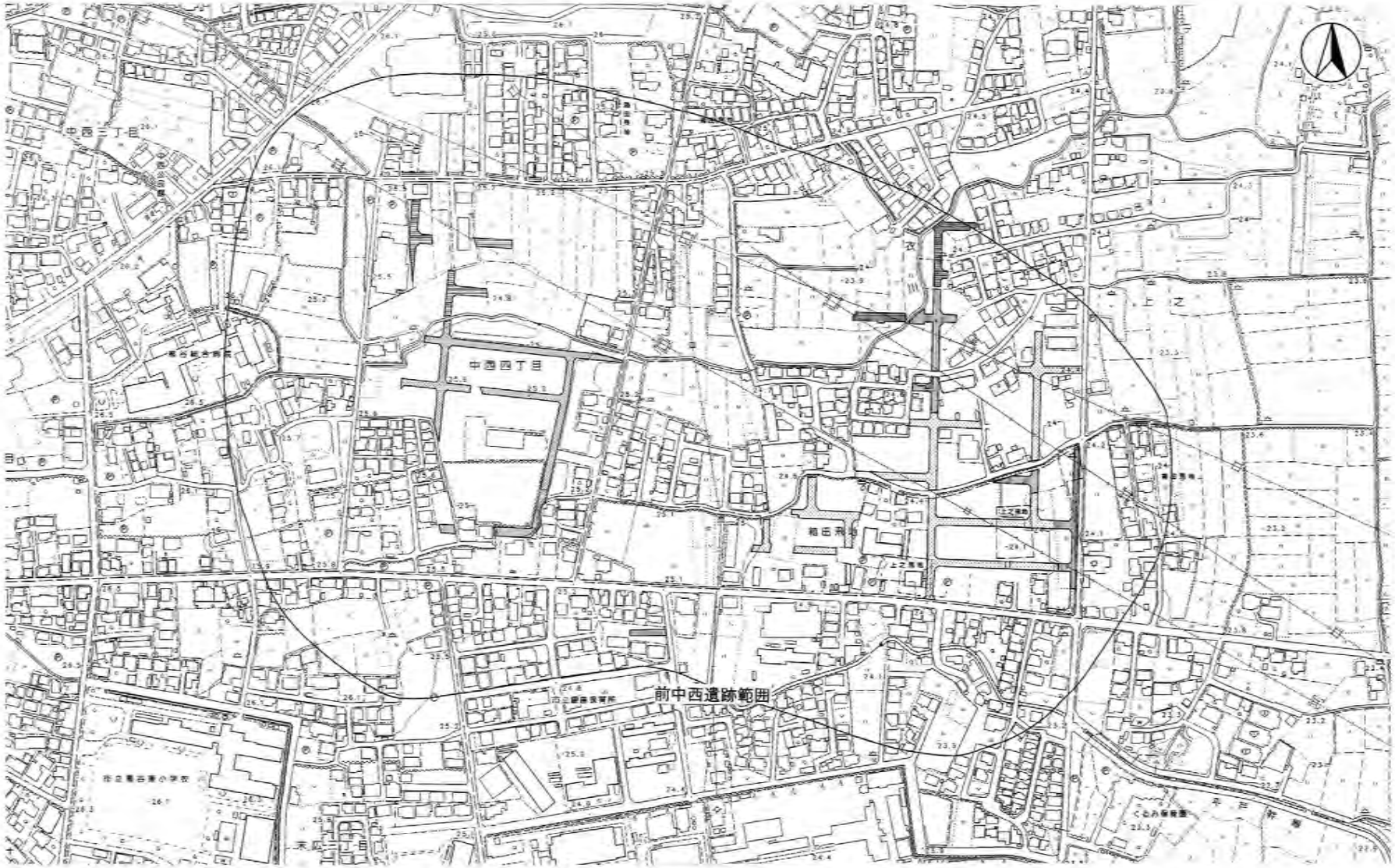
2　検出された遺構と遺物

今回報告する地点は遺跡範囲北東部にあたる。調査地点は２箇所あり、平成19年度調査が第１区、平成21年度調査が第２区である。検出された遺構は、両区を通して住居跡10軒、竪穴状遺構１基、溝跡17条、土坑7基、井戸跡１基、方形周溝墓４基、畠跡１箇所、ピット多数、土器集中箇所１箇所、河川跡１条である（第５・６図）。住居跡、竪穴状遺構、井戸跡は第１区、土器集中箇所は第２区からの検出であり、その他の遺構は両区から検出されている。

住居跡は10軒検出された。時期は弥生時代が３軒、古墳時代後期が６軒である。各時代の内訳は弥生時代が中期中頃１軒、中期後半３軒、古墳時代後期は６世紀前半１軒、７世紀前半１軒、７世紀後半３軒、時期不明１軒である。弥生時代は主に調査区西側、古墳時代後期は東端の河川跡を除いたほぼ全面から検出された。弥生時代は１・２号が全形ないしそれに近い状態で検出され、残存状態が良好であった。なお、１号からは土器棺墓も１基検出された。古墳時代後期は６号のみ全形を検出できたが、他は重複が激しいため、もしくは大半が調査区外にあるため、検出状態が良くない。遺物は弥生時代の住居跡からは弥生土器や石器が検出された。土器は破片、石器は一部を欠くものが多いが、比較的良好な資料を得ることができた。なお、３号は本遺跡では２例目となる中期中頃のものである。古墳時代後期は６号から土師器の良好な一括資料、７・９号から石製紡錘車が検出されたくらいであり、残存状態の悪さに比例して出土量が少ない。

竪穴状遺構は第１区から１基のみ検出された。西側を１号方形周溝墓に切られ、南側大半は調査区外にあるため詳細は不明である。出土遺物は古墳時代前期の土師器があるが、重複遺構との新旧関係から時期は弥生時代中期末以前としか言えない。土坑の可能性もある。

溝跡は第１区が４条、第２区が13条の計17条が検出された。第１区は主にほぼ南北方向に走るが、検出長が短いものが多く、土坑になる可能性もある。時期は弥生時代中期後半が１条、古墳時代後期が１条、その他２条は不明である。２号は弥生時代中期後半の良好な遺物が比較的まとまって検出され、土偶２個体も検出された。第２区は１号河川跡東側にある溝跡は北東から南西方向に走るものが多く、南側の溝跡はほぼ東西、ないし南北方向に走る。時期は前者が主に古墳時代前期、後者が近世である。出土遺



＝ 平成10年度報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)　＝ 平成13年度報告地点(熊谷市教委)　＝ 平成14年度報告地点(熊谷市教委)

＝ 平成20年度報告地点(熊谷市教委)　＝ 平成21年度報告地点(熊谷市教委)　＝ 本報告地点

第３図　調査地点位置図

物は弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の須恵器、近世の瓦質土器、陶器、砥石、板碑、古銭、銅製品、木製品等がある。

土坑は第１区が４基、第２区が３基の計７基が検出された。円形ないし楕円形を呈するものが多い。出土遺物が少なく、時期不明のものが大半を占めるが、３号からは中期中頃に相当する比較的良好な弥生土器甕が逆位に埋設された状態で検出された。

井戸跡は第１区から１基のみ検出された。弥生時代中期末から後期初頭の方形周溝墓を切って掘り込まれていた。図示可能な遺物はなかったが、土師器小片が出土したことから奈良時代と思われる。

方形周溝墓は第１区から１基、第２区から３基検出された。いずれも全形を確認することができず、方台部から主体部と思われる掘り込みも確認されなかった。平面プランは第１区の１号のみ四隅の切れるタイプ、第２区の２～４号は東溝中央に土橋を持つタイプと思われる。遺物は１・３号から良好な遺物が検出された。１号からは弥生土器壺がまとまって検出され、この他にも周辺の住居跡から流れ込んだ弥生時代の異なる時期の遺物が多数検出された。３号からは古墳時代前期の土師器がまとまって検出された。時期は１号が弥生時代中期末～後期初頭、２～４号が古墳時代前期に位置付けられる。

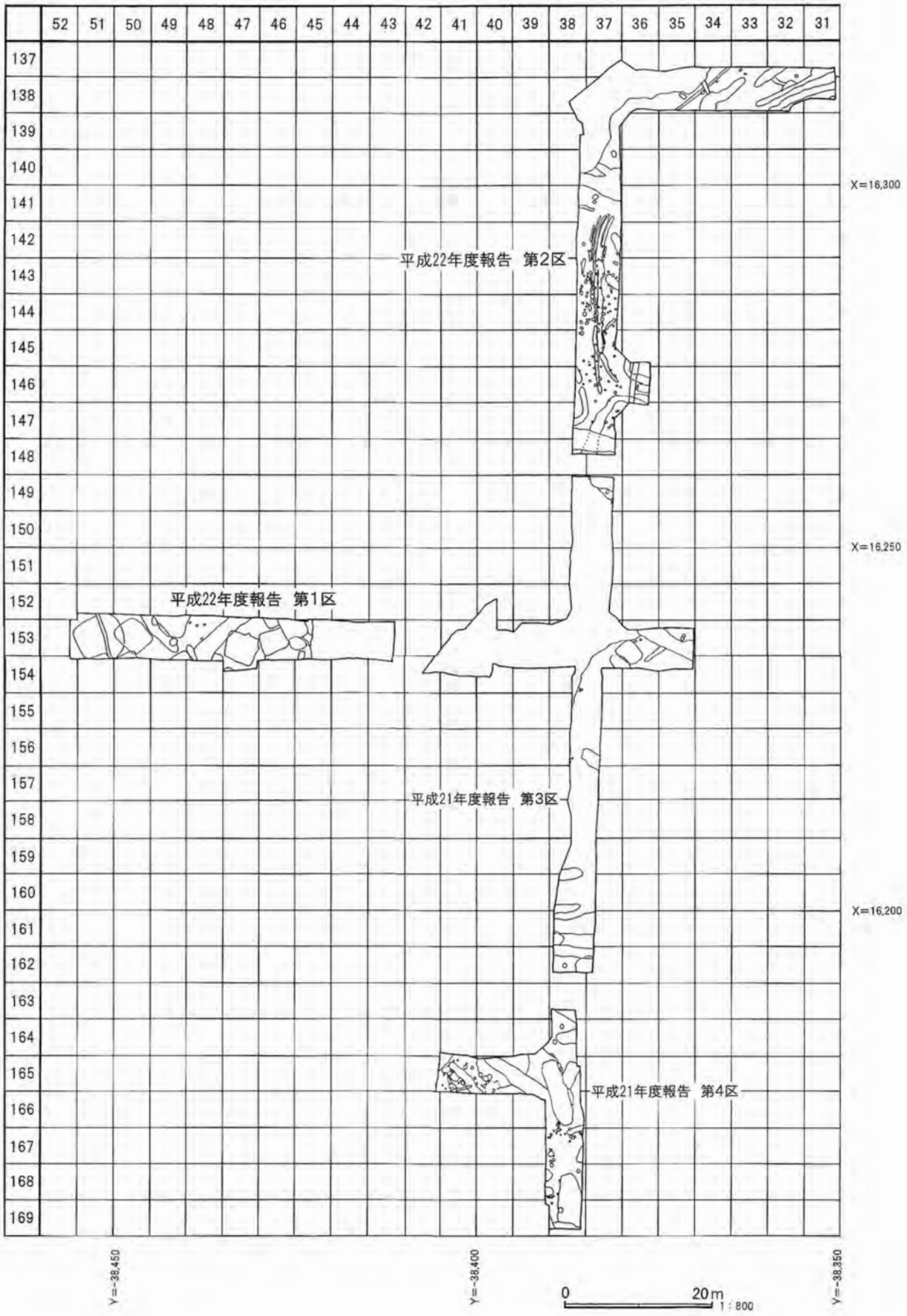
畠跡は第２区から検出された。畝はほぼ南北方向に走り、畝同士が重複する箇所がみられたことから数回にわたって掘り替えられている。出土遺物がないため時期は特定できないが、古墳時代前期以降のものと思われる。

ピットは第１・２区から検出されたが、第２区が多く、主に37･38－141～146グリッドに集中してみられた。奈良時代の良好な土器が検出されたものや弥生時代の石器を栗石として後世に再利用したものも確認されたが、ピットの大半は規則性が見出せず、また出土遺物が皆無に近く、流れ込みが多いことから時期の特定は困難である。

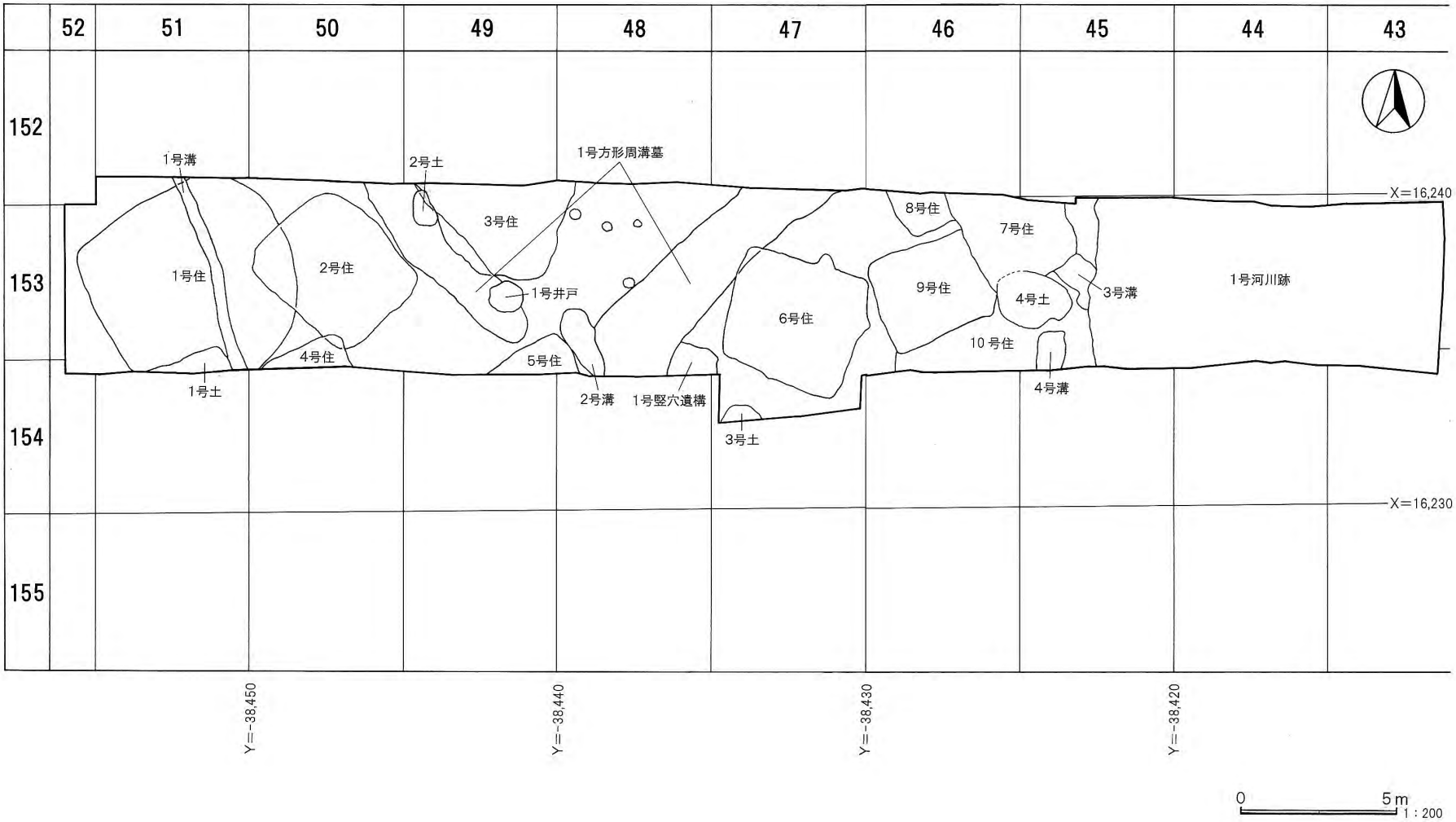
土器集中箇所は第２区から１箇所検出された。掘り込みがなく、奈良時代の土師器坏がまとまって出土したことから土器集中箇所とした。出土位置は上記の奈良時代の遺物が出土したピットに近い。

河川跡は第１・２区から検出された。平成21年度報告の１号河川跡と同じものであり、第１区では西側立ち上がり、第２区では蛇行して流れる北側部分が検出された。遺物は弥生土器、石器、土製紡錘車、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の土師器、須恵器、土師質土器、木製品など大量に検出された。弥生土器が多数検出されており、中期前半、中頃、後半～後期初頭、後期後半のものがある。古墳時代後期以降の遺物は、主に古墳時代後期と平安時代に分けられる。各時代及び時期に出土位置の違い等はみられなかった。

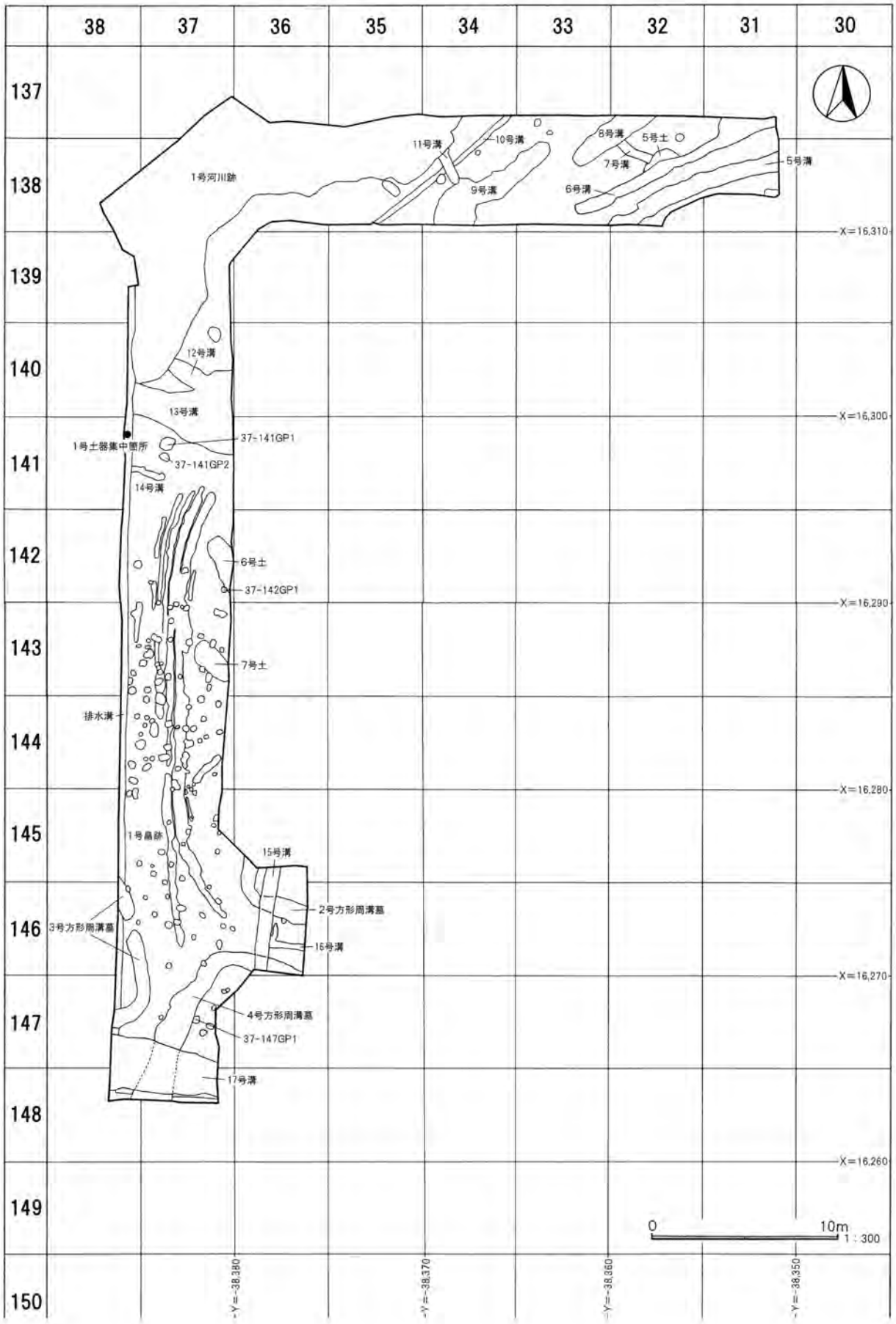
遺構外出土遺物は、弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の須恵器、土師器、砥石、近世の古銭がある。弥生土器が多数検出されており、第１区からの検出が多い。弥生土器は主に中期中頃、中期後半から後期初頭に分けられる。


52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31
137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169
X=16,300
X=16,250
X=16,200
平成22年度報告 第2区
平成22年度報告 第1区
平成21年度報告 第3区
平成21年度報告 第4区
Y=-38,450
Y=-38,400
Y=-38,350
0
20m
1:800

第 4 図　調査区全測図


52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
152
153
154
155
1号溝
2号土
1号方形周溝墓
3号住
1号住
2号住
1号井戸
4号住
5号住
1号土
2号溝
1号竪穴遺構
6号住
3号土
8号住
7号住
9号住
4号土
10号住
3号溝
4号溝
1号河川跡
X=16,240
X=16,230
Y=-38,450
Y=-38,440
Y=-38,430
Y=-38,420
0
5m
1:200

第5図　第1区全測図


38
37
36
35
34
33
32
31
30
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
1号河川跡
11号溝
10号溝
9号溝
8号溝
5号土
7号溝
6号溝
5号溝
12号溝
13号溝
1号土器集中箇所
37-141GP1
37-141GP2
14号溝
6号土
37-142GP1
7号土
排水溝
1号畠跡
15号溝
2号方形周溝墓
3号方形周溝墓
16号溝
4号方形周溝墓
37-147GP1
17号溝
X=16,310
X=16,300
X=16,290
X=16,280
X=16,270
X=16,260
Y=-38,380
Y=-38,370
Y=-38,360
Y=-38,350
0
10m
1：300

第６図　第２区全測図

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

第１号住居跡（第７・８図）

平成19年度調査第１区50～52－152～154グリッドに位置する。中央付近を北西から南東方向へ走る１号溝跡、東壁中央付近を２号住居跡に切られているが、床面までは達しない。南側の調査区境では１号土坑に床面まで掘り込まれている。北東及び南西隅は調査区外にあり、北西隅は撹乱により一部欠く。

本住居跡は北西から南西壁を利用して拡張が行われていた。拡張前の規模は長軸5.9m、短軸4.88mを測り、平面プランは横長のややいびつな隅丸長方形を呈する。拡張後の規模は長軸が6.56m、短軸は6.6m程を測り、平面プランは北西隅がやや角張るいびつな円形を呈する。主軸方向はN－32°－Wを指す。確認面からの深さは西側が0.2m、東側が0.3m前後を測り、東側にやや傾いていた。覆土は一部のピットも含めて30層（１～30層）と非常に多く確認された。いずれの層も混入物が多いが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は４つ検出された。炉１は床面中央からやや北側に位置する。長軸0.8m、短軸0.56mのいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは0.07mと浅い。覆土は３層（31～33層）確認された。焼土や炭化物の他に被熱した灰白色粒等を含み、南東側では最下に炭化物層が薄く広がっていた。炉２・３は炉１の北西側に並んで位置する。炉２は長軸0.53m、短軸0.35mのいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは0.11mを測る。覆土は２層（34・35層）確認された。ともに炭化物を微量含んでいた。炉3は南東側で炉１と接しているが、炉１が新しい。長軸は炉１まで0.38m、短軸は0.28mを測り、楕円形に近い。床面からの深さは0.05mと浅い。覆土は２層（36・37層）確認され、下層は炭化物層であった。炉４は炉１南東約0.5mに位置する。径約0.25mの小さい円形を呈し、床面からの深さは0.03mと浅い。覆土は２層（38・39層）確認され、上層が炭化物層、下層が焼土層であった。

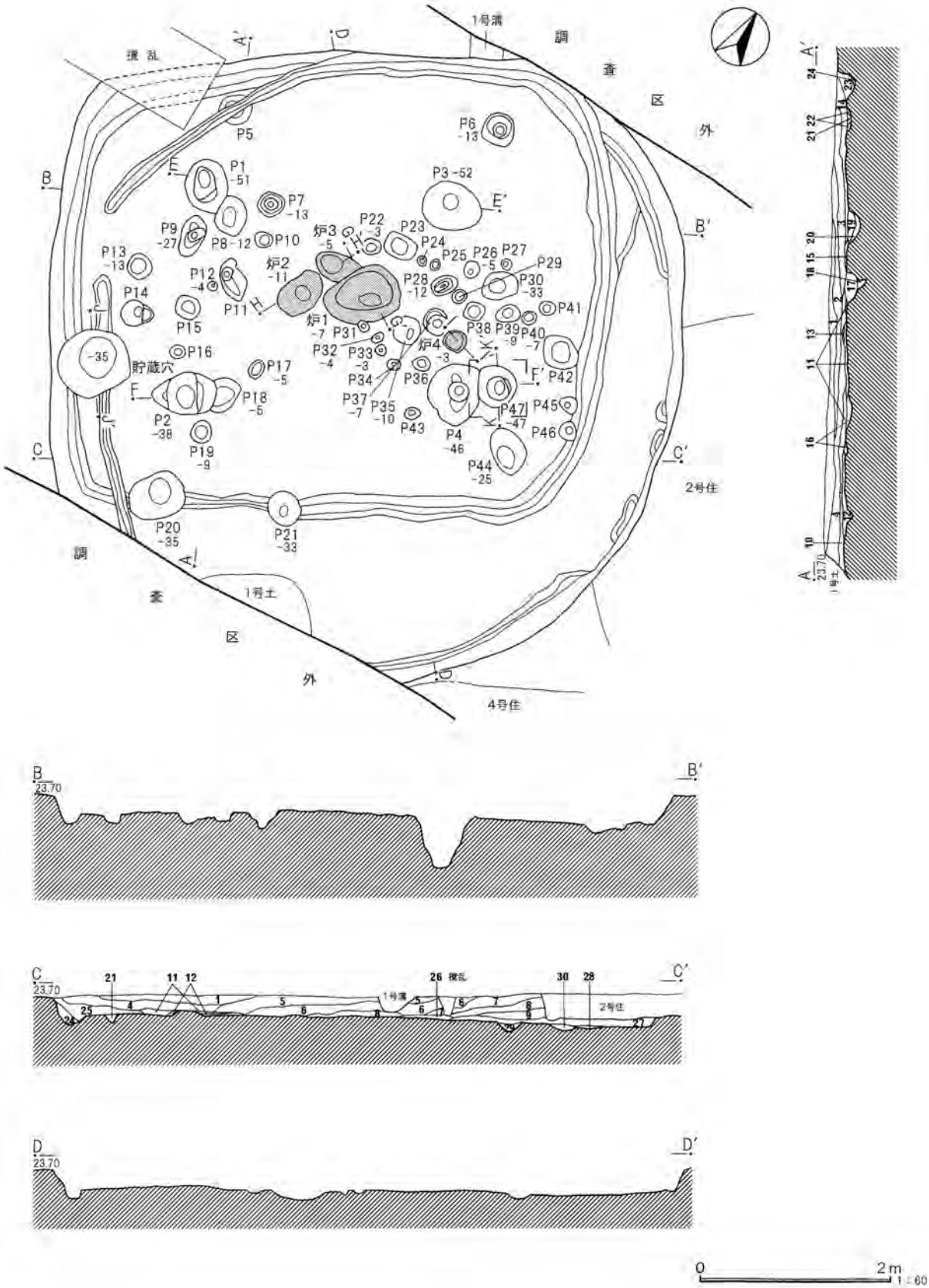
ピットは47基と多数検出された。大半が拡張前の範囲にあり、主に炉1を挟んで東西に位置する。径が小さく、浅いものが多いが、Ｐ１～４は掘り込みが深く、その位置から主柱穴と思われる。またＰ４の東側にはP47が位置しているが、内からはほぼ完形の弥生土器甕と壺の一部（第10図７・12）が出土した。甕12はほぼ正位の状態で出土し、甕の西側からは壺の一部７が出土したことからこれらの土器は組み合わせて使用されたと思われる。その状況から土器棺墓と思われるが、骨等は確認されなかった。これらの土器の詳細については後述する。その他のピットについては、用途･性格は不明である。

壁溝は拡張前が全周するが、拡張後は東壁が一部、西壁は所々途切れる。また拡張後の西側壁溝は0.15～0.44m程離れて巡る。幅は0.25m前後が主体となり、床面からの深さは0.03～0.09mを測る。

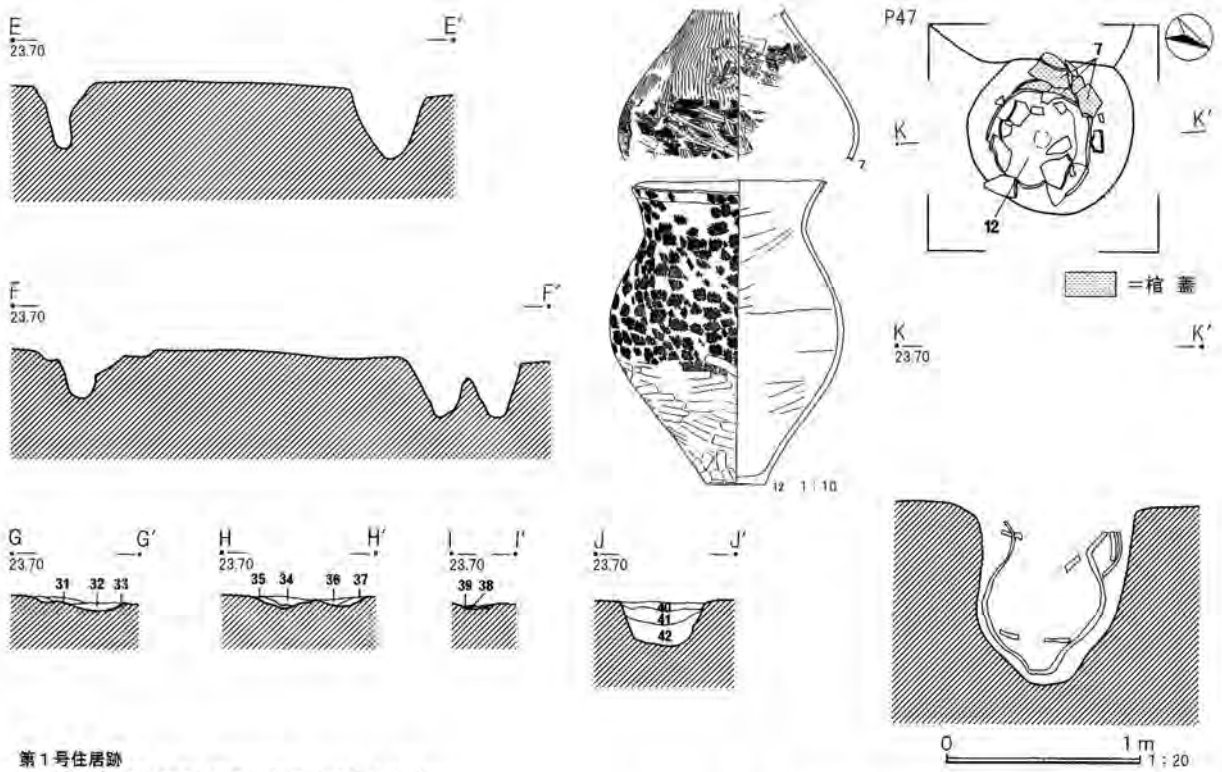
貯蔵穴は西壁ほぼ中央に位置し、新旧の壁溝を抜いて掘り込まれている。径0.7m前後の不整円形を呈し、床面からの深さは0.34mを測る。覆土は３層（40～42層）確認された。いずれも炭化物を含む。

出土遺物（第10～13図）は、弥生土器壺（１～11・22～83）、甕（12～21・84～125）、高坏（126）、磨石（127～136）がある。出土量が多く、ほぼ全面及び全層から検出されている（第９図）。またピットや貯蔵穴、炉跡から検出されたものもある。磨耗が著しいものが多く、残存状態の良いものは少ない。

１～11・22～83は壺。１は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部が大きく開き、頸部はすぼまる。文様は複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、以下は内面とともにヘラナデ調整である。２は口縁部か


1号溝
調
査
区
外
攪乱
P5
P6 -13
P1 -51
P3 -52
P7 -13
P9 -27
P8 -12
P10
炉3 -5
P22 -3
P23
P24
P25
P26 -5
P27
P29
P13 -13
P12 -4
炉2 -11
P28 -12
P30 -33
P14
P11
P15
炉1 -7
P31
P38
P39 -9
P40 -7
P41
P16
P32 -4
P33 -3
炉4 -3
-35
貯蔵穴
P17 -5
P34
P36
P42
P18 -5
P37 -7
P35 -10
P47 -47
P45
P2 -38
P43
P4 -46
P46
P19 -9
P44 -25
2号住
P20 -35
P21 -33
調
査
区
外
1号土
4号住
23.70
1号土
2号住
1号溝
攪乱
0
2m
1:60

第７図　第１号住居跡（１）



第１号住居跡

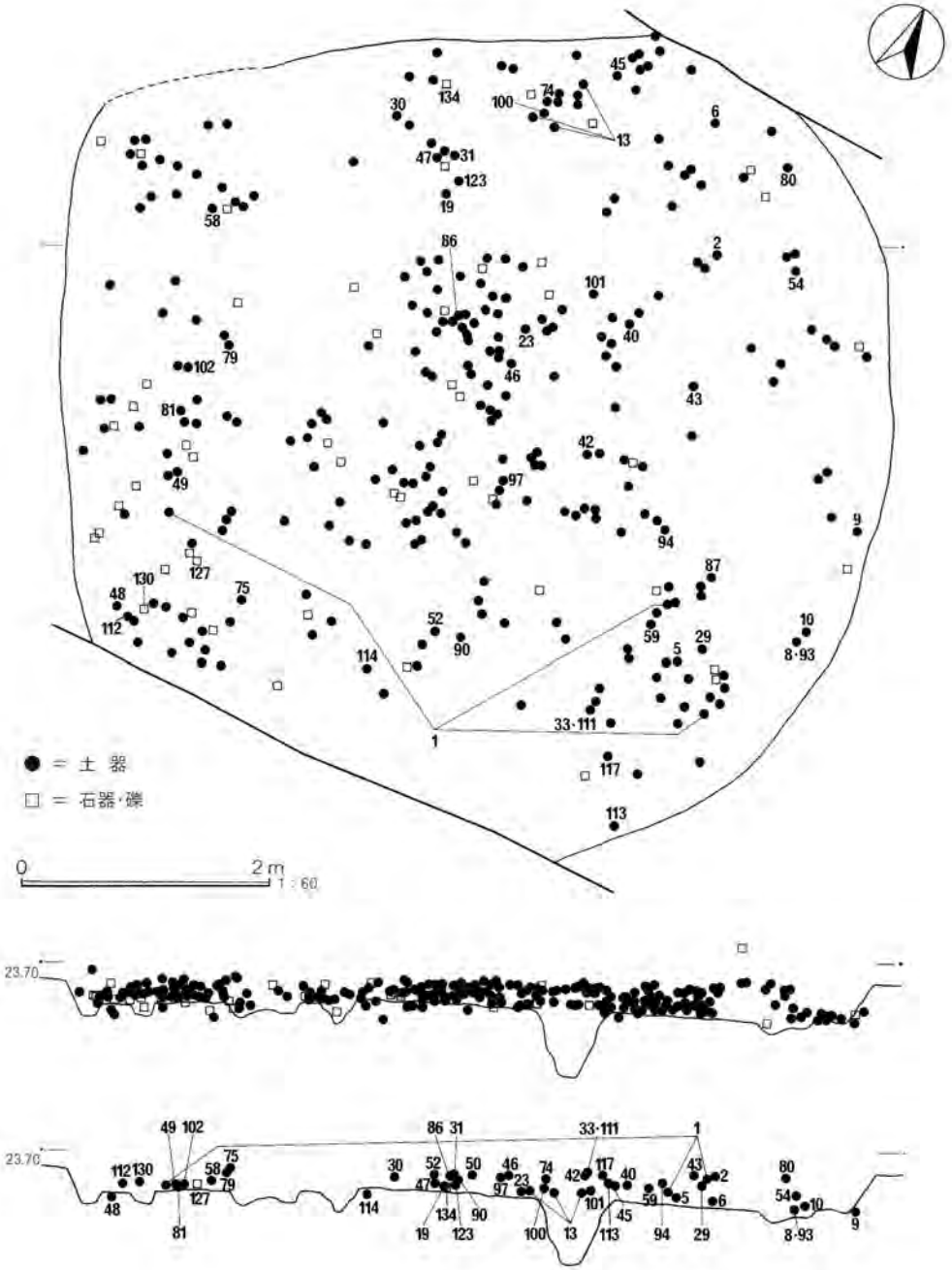
土層説明（AA′ CC′ GG′ HH′ II′ JJ′）

1 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
3 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量含む。
4 黄灰色　土：粘土質。灰白色粒多量、焼土、炭化物、灰色粒微量含む。
5 灰白色　土：粘土質。焼土、炭化物微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量含む。
7 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
8 黄灰色　土：粘土質。灰白色粒多量、焼土、炭化物、灰色粒微量含む。
9 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
12 灰白色　土：粘土質。灰色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
13 灰白色シルト
14 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
15 炭化物層
16 灰白色　土：シルト質。下層に焼土、炭化物帯状に含む。
17 黄灰色　土：粘土質。粘性やや強。灰色粒、灰白色粒微量含む。
18 灰白色　土：粘土質。灰色ブロック少量含む。
19 灰白色　土：粘土質。灰色粒少量含む。
20 灰　色　土：粘土質。灰白色土多量、炭化物微量含む。
21 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
22 灰白色　土：粘土質。灰色粒・ブロック、灰白色粒微量含む。
23 灰白色　土：粘土質。灰色粒微量含む。
24 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
25 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒・ブロック微量含む。
26 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
27 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
28 灰白色　土：粘土質。粘性強。灰色ブロック多量、炭化物微量含む。
29 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
30 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
31 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
32 灰　色　土：粘土質。焼土多量、被熱した灰白色粒少量、灰白色粒微量含む。
33 炭化物層
34 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
35 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色ブロック微量含む。
36 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
37 炭化物層
38 炭化物層
39 焼　土　層
40 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
41 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量、灰白色ブロック微量含む。
42 灰　色　土：粘土質。粘性強。灰白色粒少量、炭化物、礫微量含む。

0　2 m　1:60

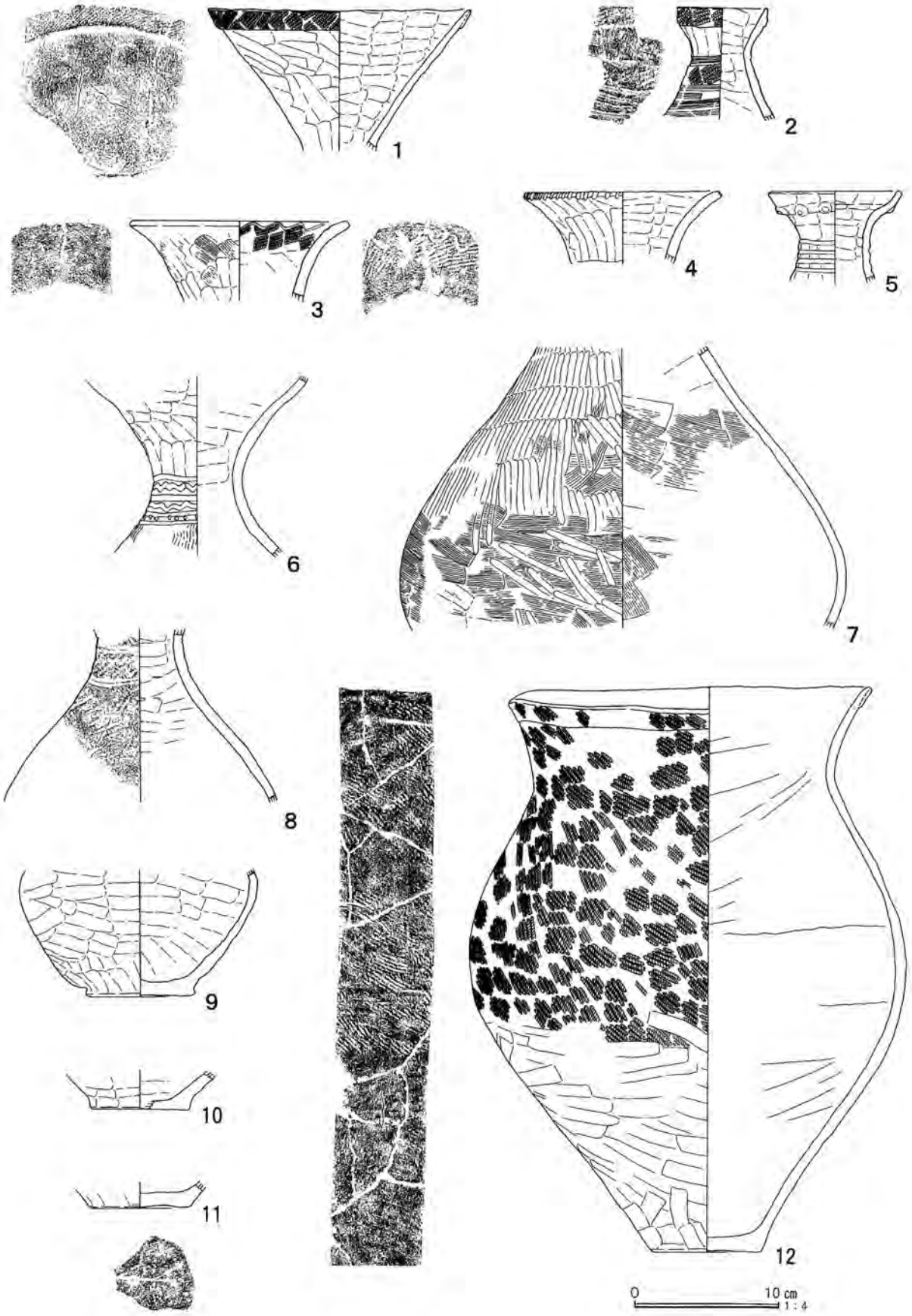
第８図　第１号住居跡（２）

ら肩部にかけての部位。口縁部がやや受け口状を呈し、頸部は中段がやや膨らむ。文様は口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、頸部は縦位のヘラナデ調整による無文部下に３本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が横位に一条、肩部には複数巡り、間にＬＲ単節縄文が充填されている。内面はヘラナデ調整である。３～５は口縁部から頸部にかけての部位。３・４は口縁部が外反しながら大きく開く。３は文様が口縁部内面にのみあり、端部に描かれたやや太い波状沈線下にＬＲ単節縄文が施文されている。外面はハケ



第９図　第１号住居跡遺物出土状況

メ及びヘラナデ、内面の文様下はヘラナデ調整である。４は口縁端部に刻みを持ち、頸部に横位の沈線が巡る。外面無文部及び内面はハケメに近いヘラナデ調整である。５は口縁部が受け口状を呈し、頸部はほぼ直立に近い。口縁部下位に円形の突起が等間隔に付けられており、頸部はやや細い平行沈線が四条巡る。外面無文部及び内面はヘラナデ調整である。６は口縁部下位から肩部にかけての部位。口縁部の開きが大きく、頸部はすぼまる。文様は頸部に太い沈線が上位、細い沈線が下位に二条ずつ巡り、前者の太い平行沈線間には同一工具で波状沈線が描かれ、後者の細い平行沈線間には半円形の刺突列が刻まれている。頸部文様下には等間隔で櫛歯状工具による波状文が垂下する。磨耗が著しいため単位は不明である。口縁部外面及び内面はヘラナデ調整である。７は肩部から胴部中段直下までの部位。肩



第10図　第１号住居跡出土遺物（１）

部から胴上部は緩やかに下り、胴部中段が膨らむ。文様は無く、外面はハケメ後にヘラミガキ調整が施されているが、胴部中段付近は一部のみに施されている。内面は全面ハケメ調整であるが、磨耗が著しいため大半が図示不可能である。P47出土であり、後述する甕12との組み合わせで土器棺墓の棺蓋に使用されたと思われる。 8 は頸部から胴上部にかけての部位。頸部に 2 本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が二条巡り、その間と胴上部にＬＲ単節縄文が施文されている。内面はヘラナデ調整であり、頸部には輪積痕が一部みられた。 9 は胴部中段から底部、10・11は底部である。胴下部が膨らむ器形から壺としたが、11は甕の可能性もある。内外面ともにすべてヘラナデ調整であり、11は底部外面に木葉痕がみられた。

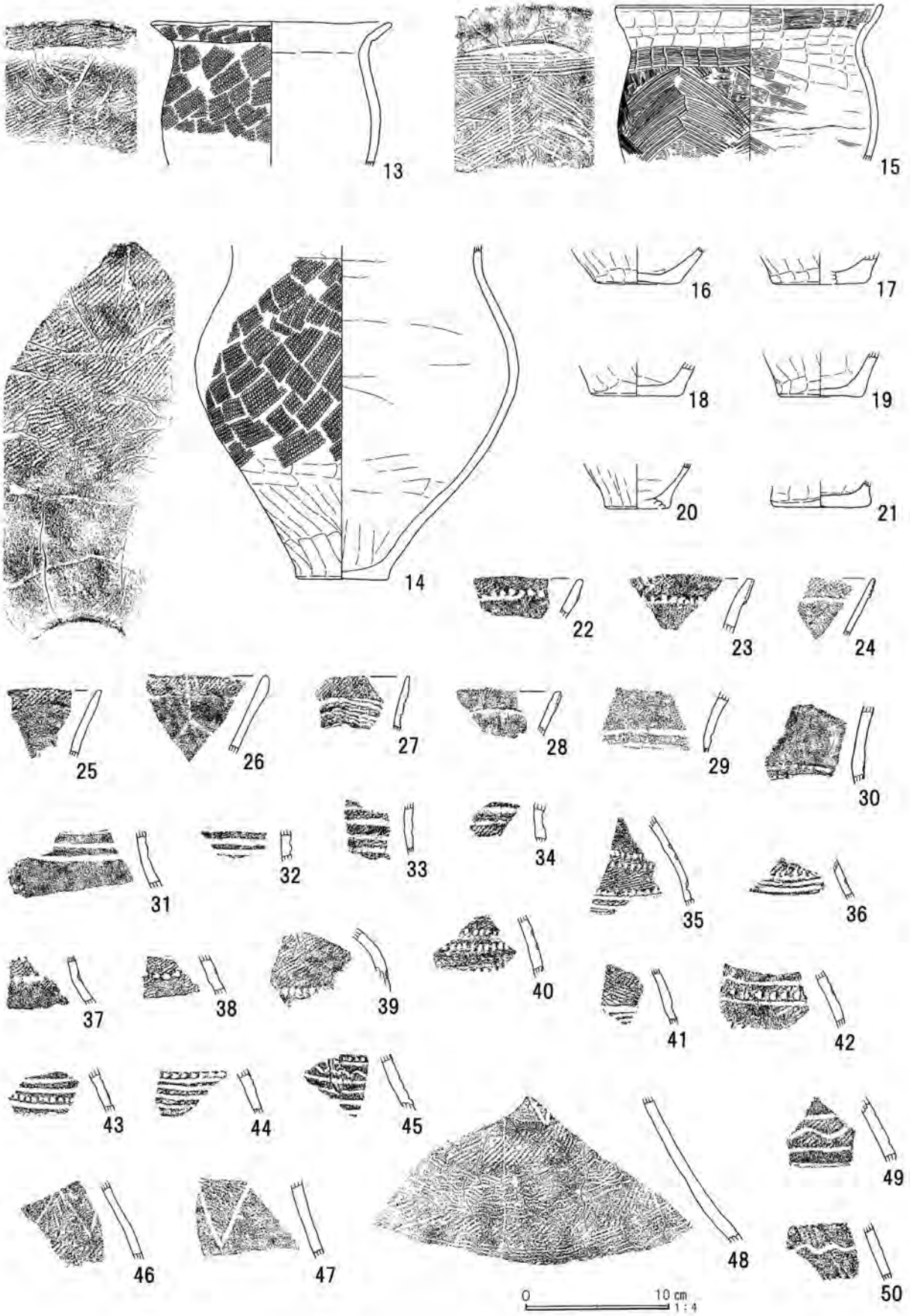
22～28は口縁部から頸部にかけての破片。23・24・28は複合口縁である。22～27は口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、22・23には複合口縁下に円形の刺突列が刻まれている。22～26は縄文及び刺突列以下が無文で26のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデ調整である。27のみ縄文下に 3 本一単位の櫛歯状工具による波状文が複数巡る。28は複合口縁部も含め全面無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整である。

29～34は頸部片ないし頸部から肩部にかけての破片。29・30は上位が無文で下位は29が太い平行沈線、30は分かりづらいが連続して刻まれた半円形の刺突が沈線状に複数巡る。無文部は29が縦位、30が横位のヘラナデ調整である。31～33は太い平行沈線が複数巡る。31は平行沈線下の肩部が無文で横位のヘラナデ調整が施されている。34は上下に突帯が巡り、下の突帯にはＬＲ単節縄文が施文されている。

35～40・42～45は刺突列が刻まれた一群。36～38は肩部片、35・39・40・42～45は胴上部片である。35は半円形の刺突列が無文部下に二列、その下のＬＲ単節縄文下の段に一列刻まれ、以下はやや細い平行沈線が巡る。36はＬＲ単節縄文下に連続して刻まれた半円形の刺突列が沈線状を呈し、以下はやや太い平行沈線が巡る。37・38は弱い段に円形の刺突列が巡り、刺突列上はＬＲ単節縄文が施文され、下は無文で37が縦位のヘラミガキ、38は横位のヘラナデ調整である。39・40は半円形の刺突列が39はＬＲ単節縄文下に一列、40はほぼ等間隔に三列巡る。42～45は平行沈線間に刺突列が刻まれている。42は半円形の刺突列が刻まれたやや細い平行沈線上が無文で横位のヘラナデ調整、下はＬＲ単節縄文が施文されている。43～ 45は複数巡る平行沈線のうち、43は中段、44・45は上位の平行沈線間に刺突列が刻まれている。刺突は43・45が円形、44は半円形を呈する。45は平行沈線下に同一工具による波状沈線も加わる。

46～48は沈線で鋸歯文が描かれる一群。46は胴上部片、47・48は肩部片である。46は鋸歯文下、47は上にＲＬ単節縄文が充填されている。46は鋸歯文上、47は下が無文で46は斜位、47は横･斜位のヘラナデ調整である。48は鋸歯文下にＬＲ単節縄文と 4 本一単位の櫛歯状工具による文様が交互に施文されている。櫛歯状工具による文様は上が波状文三段、下は横位に一段と波状文が巡る。

48～54は波状沈線が描かれる一群。48については上記のとおりである。49～53は胴上部片、54は胴部中段の破片である。49はやや太い平行沈線間に同一工具による波状沈線とＬＲ単節縄文が施文されている。平行沈線上下は無文で横位のヘラナデ調整である。50はやや太い波状沈線上にＲＬ単節縄文が施文され､下は無文で横位のヘラナデ調整である｡51はやや太い波状沈線下に同一工具による平行沈線が巡る。52～54は胴部中段付近に平行沈線と波状沈線が巡る。52は細い平行沈線三条下に波状沈線が描かれるが、弧線文に近い。胴上部は無文で横位のヘラナデ調整である。53はやや太い平行沈線間に同一工具で波状沈線が描かれており、文様上には円形ないし四角形状の文様が描かれている。54は太い平行沈線が四条



第11図　第１号住居跡出土遺物（２）

巡り、上下二条の平行沈線間に波状沈線が描かれている。

55～64は平行沈線と縄文が施文される一群。55は肩部片、56～64は胴上部片である。55は分かりづらいが、一条の細い沈線上と最下に３本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が横位に巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されている。56はＲＬ単節縄文下に太い平行沈線が四条巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。ＲＬ単節縄文上にも斜位の太い沈線が描かれているが、詳細は不明である。57・58・62は細い平行沈線間にＬＲ単節縄文が施文されている。59は太い平行沈線下にＲＬ単節縄文が施文されている。60はＬＲ単節縄文下にやや間隔を空けて太い平行沈線が巡る。61はやや細い平行沈線下に無節Ｌが施文されている。63は一条の太い沈線を挟んでＲＬ単節縄文が施文されている。64は２本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が三条巡り、上下にＲＬ単節縄文が施文されている。

41・65～72は沈線で重四角文が描かれる一群。41・65～71胴上部片、72は胴部中段の破片である。41はＲＬ単節縄文下の段下にやや細い沈線で描かれている。65はやや細い沈線で上下二段に描かれている。66はやや太い沈線で描かれている。区画内に文様はみられない。67は半円形の刺突列下にやや太い沈線で描かれている。68は段下に円形の刺突列が刻まれ、以下に太い沈線で描かれている。段及び重四角文間にはＲＬ単節縄文が施文されている。69・70はやや細い沈線で描かれており、70は地文にＬＲ単節縄文が施文されている。71・72はやや太い沈線が複数垂下する。71は脇に波状沈線と間隔を空けて沈線が垂下する。重四角文としたが、異なる可能性もある。72は重四角文間にＲＬ単節縄文が施文されている。

73～75は沈線で重三角文が描かれる一群。73は肩部片、74・75は胴上部片である。73は複数の太い沈線で描かれ、区画外はＬＲ単節縄文が充填されている。鋸歯状を呈する可能性もある。74は半円形の刺突列下にやや太い沈線で描かれている。75は細い沈線で描かれ、地文にＬＲ単節縄文が施文されている。

76・77は沈線で弧線文が描かれる一群。76は肩部片、77は胴上部片である。ともに沈線間にＬＲ単節縄文が充填されている。沈線は77が二条、77は四条である。

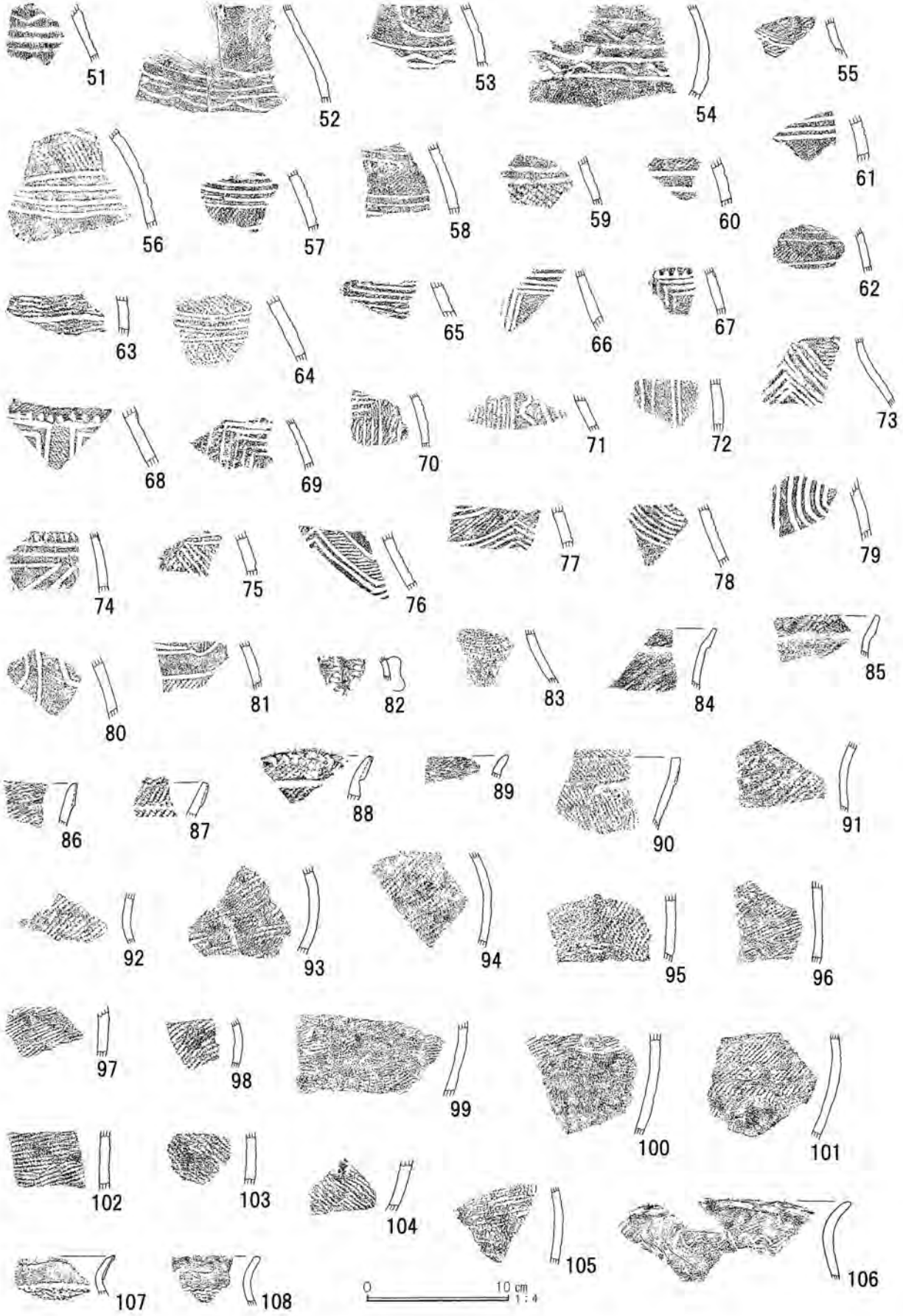
78・79は沈線でフラスコ文が描かれる一群。78は肩部片、79は胴上部片である。78はやや細い沈線七条、79は太い沈線五条で描かれており、79はフラスコ文脇に同一工具による沈線が垂下する。

80～82は胴上部片。80は曲線状の文様が描かれた胴上部片。詳細は不明であるが、沈線がやや太い。81はやや細い沈線で円形文が描かれており、内にＬＲ単節縄文が充填されている。円形文脇には同一工具による平行沈線が巡り、以下は無文部である斜位のヘラナデ調整を挟んで一条の沈線とＬＲ単節縄文が施文されている。82は縦方向に長い突起が付けられており、両脇に半円形の刺突列が刻まれている。

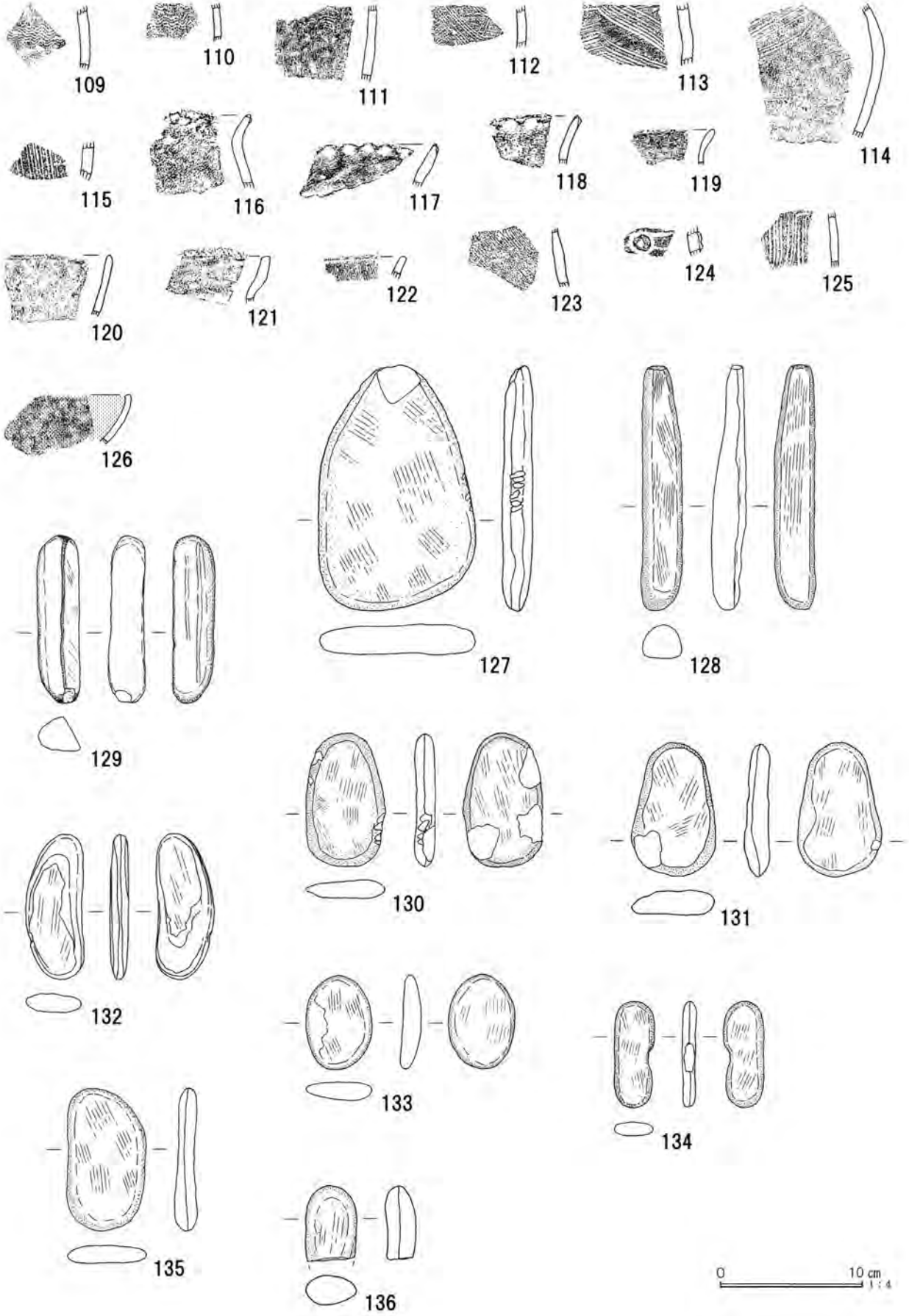
83は５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が横位に二段巡る肩部片。以下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。本住居跡出土遺物の中で最も新しい段階に位置付けられることから流れ込みと思われる。

壺破片22～27・29 ～ 83の内面はすべてヘラナデ調整であり、33が縦位、37・43・45・57・61・62・64・66・79・81・82が斜位、44・48・59・67・72・78が横･斜位、50が縦･斜位、その他は横位に施されている。

12～21・84～125は甕。12は大型で残存状態が良好である。口縁部が緩やかに開き、頸部はすぼまる。最大径を持つ胴部中段が膨らむ。文様は複合口縁部から胴部中段直下まで無節Ｒが施文されている。胴下部以下及び内面はヘラナデ調整であり、外面は縄文施文後に施されている。胴部には輪積痕もみられた。P47出土であり、壺７との組み合わせで土器棺墓の棺身に使用されたと思われる。13は口縁部から胴部中段直下にかけての部位。複合口縁部が大きく開き、口径が最大径となる。頸部はすぼまり、胴部中段



第12図　第１号住居跡出土遺物（３）



第13図　第１号住居跡出土遺物（４）

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	(18.5)	(10.1)	—	ABDEIKN	黄褐色	B	口～頸40%	内面･外面一部磨耗顕著。
2	弥生土器　壺	(6.4)	(7.7)	—	ABEIJN	にぶい黄橙色	B	口～肩30%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器　壺	(9.4)	(6.5)	—	ABCHIKN	灰白色	B	口～頸80%	P20出土。内外面やや磨耗。
4	弥生土器　壺	(14.0)	(5.1)	—	ACIJMN	にぶい褐色	B	口～頸20%	内外面やや磨耗。
5	弥生土器　壺	(15.5)	(5.1)	—	ABHIKN	褐灰色	B	口～頸80%	内外面やや磨耗。
6	弥生土器　壺	—	(15.2)	—	ABDGIMN	灰黄褐色	B	口～肩80%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器　壺	—	(20.0)	—	ABDHIKN	黒褐色	B	肩～胴40%	P47出土。棺蓋。内面磨耗顕著。
8	弥生土器　壺	—	(12.3)	—	AEHIJN	橙色	B	頸～胴25%	頸部内面一部輪積痕有。
9	弥生土器　壺	—	(8.9)	7.7	AIKM	灰黄色	B	胴～底70%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器　壺	—	(2.8)	(7.0)	ACIJMN	にぶい黄橙色	B	底部30%	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器　壺	—	(1.9)	(7.0)	ABIKMN	オリーブ黒色	B	底部30%	P3出土。底部外面木葉痕有。
12	弥生土器　甕	26.1	40.0	7.9	ABCDHIN	浅黄橙･黒褐色	B	ほぼ完形	P47出土。棺身。内面磨耗顕著。
13	弥生土器　甕	(17.2)	(10.3)	—	ABEIJKN	にぶい黄橙色	B	口～胴20%	内面･胴下部外面磨耗顕著。
14	弥生土器　甕	—	(23.8)	6.6	ABDHIJK	にぶい黄橙色	B	頸～底30%	P4出土。内面･胴下部外面磨耗顕著。
15	弥生土器　甕	(19.0)	(11.2)	—	ABGIKN	灰黄褐色	B	口～胴45%	P1出土。
16	弥生土器　甕	—	(2.6)	(6.0)	ABGIM	灰黄褐色	B	底部40%	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器　甕	—	(2.1)	(6.9)	ABHIN	オリーブ黒色	B	底部40%	
18	弥生土器　甕	—	(2.45)	(6.6)	ABIJN	灰黄褐色	B	底部30%	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器　甕	—	(3.1)	6.0	ABIN	褐灰色	B	底部100%	内外面やや磨耗。
20	弥生土器　甕	—	(3.2)	(4.6)	ABDHIJKN	灰黄色	B	底部25%	内外面磨耗顕著。
21	弥生土器　甕	—	(1.9)	(7.2)	AEIKN	にぶい橙色	B	底部70%	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器　壺	—	—	—	ADGIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIK	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器　壺	—	—	—	ABGHIN	にぶい黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器　壺	—	—	—	ACIJN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器　壺	—	—	—	ABCEHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHM	にぶい黄橙色	B	頸部片	内面やや磨耗。
30	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	灰黄色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～肩部片	内面剥離顕著。
32	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	頸部片	
33	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	浅黄橙色	B	頸部片	
34	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIN	灰黄色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器　壺	—	—	—	ABGI	にぶい橙色	B	胴上部片	貯蔵穴出土。
36	弥生土器　壺	—	—	—	ABCI	にぶい橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	にぶい橙色	B	肩部片	
38	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
39	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
40	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDGN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
41	弥生土器　壺	—	—	—	AEHIK	橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
43	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIMN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
44	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
45	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	黄灰色	B	胴上部片	
46	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
47	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIKN	にぶい橙色	B	肩部片	
48	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
49	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	
50	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	胴上部片	
51	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDEIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
52	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
53	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
54	弥生土器　壺	—	—	—	ACHIM	にぶい黄橙色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。
55	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	橙色	B	肩部片	P9出土。
56	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	灰黄色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
57	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	灰黄褐色	B	胴上部片	P3出土。
58	弥生土器　壺	—	—	—	AHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
59	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴上部片	
60	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIJK	オリーブ黒色	B	胴上部片	
61	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	オリーブ黒色	B	胴上部片	
62	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	灰白色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
63	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	褐灰色	B	胴上部片	
64	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIN	黒褐色	B	胴上部片	P44出土。内面磨耗顕著。
65	弥生土器　壺	—	—	—	AIN	灰褐色	B	肩部片	
66	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIJN	暗灰黄色	B	肩部片	
67	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄色	B	胴上部片	
68	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	P3出土。
69	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIJ	にぶい橙色	B	胴上部片	P3出土。内外面磨耗顕著。
70	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGHIK	橙色	B	胴上部片	P3出土。
71	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIN	浅黄橙色	B	胴上部片	
72	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	浅黄色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。
73	弥生土器　壺	—	—	—	BEIKN	浅黄橙色	B	肩部片	外面やや磨耗。
74	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
75	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
76	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	P3出土。
77	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIK	黄灰色	B	胴上部片	炉1出土。
78	弥生土器　壺	—	—	—	ADEHIN	褐灰色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
79	弥生土器　壺	—	—	—	ABCEIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
80	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
81	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
82	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHM	にぶい褐色	B	胴上部片	突起有。
83	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHKN	浅黄橙色	B	肩部片	
84	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIK	灰黄色	B	口～頸部片	P2出土。外面磨耗顕著。
85	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIN	褐灰色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
86	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
87	弥生土器　甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	口縁部片	
88	弥生土器　甕	—	—	—	ABHN	黒褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
89	弥生土器　甕	—	—	—	AHJN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	外面磨耗顕著。
90	弥生土器　甕	—	—	—	ABCDEIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面一部磨耗顕著。
91	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	灰黄褐色	B	頸部片	P3出土。外面磨耗顕著。
92	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	褐灰色	B	頸部片	外面磨耗顕著。
93	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい橙色	B	胴部片	
94	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	灰黄色	B	胴部片	外面磨耗顕著。
95	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	褐灰色	B	胴部片	
96	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄褐色	B	胴部片	外面一部磨耗顕著。
97	弥生土器　甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴部片	
98	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴部片	外面やや磨耗。
99	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	内外面磨耗顕著。
100	弥生土器　甕	—	—	—	ADEIKN	にぶい橙色	B	胴下部片	
101	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHIKN	黒褐色	B	胴下部片	
102	弥生土器　甕	—	—	—	ABCIJN	にぶい橙色	B	胴部片	
103	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴部片	外面やや磨耗。
104	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	胴下部片	P3出土。
105	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴部片	貯蔵穴出土。
106	弥生土器　甕	—	—	—	ABHI	黒色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
107	弥生土器　甕	—	—	—	ADEHKN	淡橙色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
108	弥生土器　甕	—	—	—	ABEGHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
109	弥生土器　甕	—	—	—	BDHIN	黒褐色	B	胴部片	P3出土。
110	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHI	黒褐色	B	胴部片	外面やや磨耗。
111	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIN	褐色	B	胴下部片	
112	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	胴部片	
113	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHIN	黒褐色	B	胴部片	内面磨耗顕著。
114	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。
115	弥生土器　甕	—	—	—	ACHI	橙色	B	胴部片	
116	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
117	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒色	B	口～頸部片	
118	弥生土器　甕	—	—	—	ADHN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
119	弥生土器　甕	—	—	—	BEHN	黒褐色	B	口～頸部片	
120	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	
121	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
122	弥生土器　甕	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
123	弥生土器　甕	—	—	—	ADHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
124	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIJN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
125	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
126	弥生土器高坏		—	—	ABI	赤色	B	口縁部片	P4出土。内外面赤彩。
127	磨　石	最大長17.5cm、最大幅11.2cm、最大厚2.15cm。重量（608）g。一部欠。砂岩製。敲打具兼。							
128	磨　石	最大長17.4cm、最大幅2.3cm、最大厚2.3cm。重量185.1g。完形。粘板岩製。Ｐ１出土。							
129	磨　石	最大長11.9cm、最大幅3.0cm、最大厚2.45cm。重量117.4g。完形。砂岩製。貯蔵穴出土。							
130	磨　石	最大長9.5cm、最大幅5.65cm、最大厚1.5cm。重量（104.1）g。所々欠。砂岩製。							
131	磨　石	最大長9.5cm、最大幅6.0cm、最大厚1.8cm。重量（124.5）g。一部欠。砂岩製。							
132	磨　石	最大長10.35cm、最大幅4.0cm、最大厚1.35cm。重量96.9g。完形。緑泥片岩製。							
133	磨　石	最大長6.6cm、最大幅4.7cm、最大厚1.25cm。重量50.1g。完形。砂岩製。							
134	磨　石	最大長7.5cm、最大幅2.8cm、最大厚0.9cm。重量31.9g。完形。砂岩製。							
135	磨　石	最大長10.2cm、最大幅5.6cm、最大厚1.6cm。重量118.2g。完形。砂岩製。貯蔵穴出土。							
136	磨　石	最大長（5.3）cm、最大幅3.65cm、最大厚2.1cm。重量（60.0）g。半分欠。砂岩製。貯蔵穴出土。							

がやや膨らむ。複合口縁部から胴部中段までＬＲ単節縄文が施文され、胴下部外面及び内面は磨耗が著しいため図示できなかったが、ヘラナデ調整である。14は頸部下位から底部にかけての部位。頸部がほぼ直立し、胴部は中段で大きく膨らむ。胴上部から胴部中段下までＬＲ単節縄文が施文され、頸部と胴下部外面及び内面は無文でヘラナデ調整である。16～21は底部。胴下部が膨らまない器形から甕としたが、壺の可能性もある。内外面ともにすべてヘラナデ調整である。

84～105は縄文ないし擬縄文が施文された一群。84～90は口縁部片ないし口縁部から頸部にかけての破片。84 ～ 88・90は複合口縁である。84～89はＬＲ単節縄文、90のみＲＬ単節縄文が施文されている。87・90は端部まで縄文が施文されており、88は端部に刻みを持つ。91～101はＬＲ単節縄文が施文されており、91･92は頸部、93 ～ 98は胴部中段付近、99～101は胴下部の破片である。100・101は縄文下が無文で100は斜位、101は横位のヘラナデ調整である。102・103は胴部中段の破片でＲＬ単節縄文、104は胴下部片で無節Ｒ、105は胴部中段の破片でオオバコ系の擬縄文が施文されている。

106～111は櫛歯状工具で波状文が描かれる一群。106～108は口縁部から胴上部までに収まる破片である。107のみ複合口縁である。すべて頸部に波状文が巡る。106は３本一単位で描かれ、口縁端部及び胴上部は無文でヘラナデ、口縁部下位は斜位のハケメ調整である。ヘラナデは口縁端部が横位、胴上部が斜位に施されている。107・108は単位不明である。口縁部は内外面ともに横位のヘラナデ調整である。109～111は胴部中段及び胴下部の破片。109は７本一単位の波状文上下が無文で横位のヘラナデ調整である。110は４本一単位の波状文が複数巡る。111は５本一単位の波状文下が無文で斜位のヘラナデ調整である。

112は櫛歯状工具で斜格子文が描かれた胴部中段の破片。密に施文されているが、単位は不明である。

113～115は櫛歯状工具で羽状文が描かれた胴部中段の破片。113は７本一単位で縦位、114・115は単位不明であるが、横位に描かれている。114は羽状文下が無文で横・斜位のヘラナデ調整である。

116～121は内外面ヘラナデ調整の一群。口縁部から胴上部までに収まる破片である。116～118は口縁端部に指頭圧痕、121はＬＲ単節縄文が施文されている。ヘラナデ調整はすべて横位に施されている。

122･123は外面がハケメ調整の一群。122は口縁部片、123は胴上部片であり、ともに斜位に施されている。122は磨耗が著しいため定かではないが、口縁端部に刻みを持つ。

124・125は細い沈線でコの字重ね文が描かれる一群。124はボタン状貼付文脇、125は密に描かれる。

甕破片84～115･122～125の内面はすべてヘラナデ調整であり、86･90･92･93･96･100･102･103･123が横･斜位、125が斜位、その他は横位に施されている。

126は高坏の口縁部片。内外面ともに横位のヘラミガキ調整であり、赤彩が施されている。

127 ～ 136は磨石。扁平なもの（127・130～136）と棒状を呈するもの（128・129）がある。このうち127・130は敲打具を兼ねる。128が粘板岩、132が緑泥片岩、その他は砂岩製である。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第２号住居跡（第14図）

平成19年度調査第１区49・50－152・153グリッドに位置する。北西隅付近で１号住居跡を切っており、南西隅付近では４号住居跡に壁の上位を、時期不明のピットに壁の立ち上がり一部を切られている。

規模は長軸4.58m、短軸3.91mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はＮ－43°－Ｗを指す。確認面からの深さは0.25m前後を測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は19層（１～ 19層）からなる。混入物が多くみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北西寄りに位置する。径0.5m前後の不整円形を呈し、床面からの深さは0.09mを測る。覆土は３層（23～25層）確認された。中層が炭化物層、下層が焼土層であった。

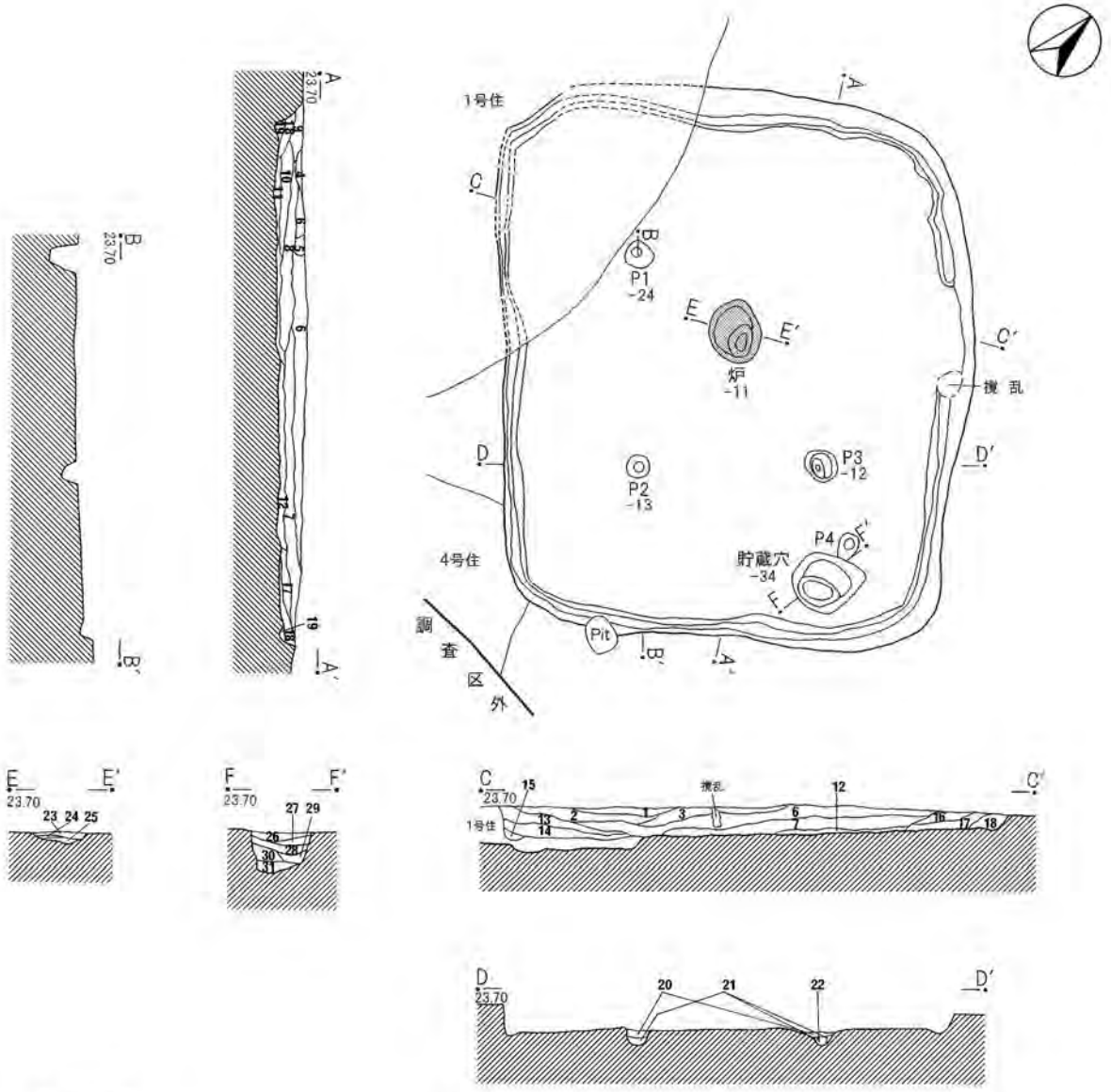
ピットは４基と少ない。このうち、Ｐ１～３は主柱穴であるが、北東部に相当する柱穴は検出されなかった。Ｐ１～３は径0.2m前後の円形を呈し、床面からの深さはＰ１が0.24mと比較的深いが、その他は浅い。覆土を確認したのはＰ２・３のみであるが、柱痕跡は確認されなかった。Ｐ４は貯蔵穴の北西側に接続して位置することから関連するものかもしれない。深さは不明である。

壁溝は東壁中央付近で切れるが、その他は全周する。幅は0.07 ～ 0.35mとバラツキがあるが、0.15m前後が主体となる。床面からの深さは0.03m程と浅い。

貯蔵穴は南東隅に位置する。長軸0.62m、短軸0.5mのいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは最も深い南西部で0.34mを測る。覆土は６層（26～31層）確認された。炭化物を含む層が多い。

出土遺物（第16･17図）は、弥生土器壺（1～10・18～49）、甕（11～15・50～57）、高坏（16）、椀（17）、打製石斧（58）、磨石（59～62）がある。出土量が比較的多く、ほぼ全面及び全層から検出されている（第15図）が、残存状態の良いものは少なく、磨耗の著しいものが多い。また土器片には1号住居跡からの流れ込みである可能性が高いもの（壺32 ～ 37・46、甕50等）がある。

1～10・18～49は壺。１は口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部はやや大きく開き、頸部は短い。肩が張らずに胴上部に向かってほぼ直線的に下る。文様は口縁端部にＲＬ単節縄文、頸部に４本一単位の櫛歯状工具による簾状文､肩部から胴上部にかけてはやや太い平行沈線が等間隔に施文されているが、胴上部のみ二条巡る。また簾状文下及び肩部に巡る平行沈線間には口縁端部と同じくＲＬ単節縄文が施文されている。外面無文部及び内面はヘラナデ調整であり、胴上部内面には一部輪積痕がみられた。２は口縁部下位から頸部にかけての部位。口縁部は端部を欠くが、外反しながら大きく開き、頸部はほぼ直立に近い。文様は頸部以下にあり、等間隔に巡る太い平行沈線間及び下にＬＲ単節縄文が施文されている。外面無文部及び内面はヘラナデ調整であるが、内面は磨耗が著しいため図示不可能である。３は頸部下位から胴上部にかけての部位であるが、残存状態が比較的良好である。頸部がほぼ直立し、肩は張らずに胴上部に向かって緩やかに下る。文様は無節Ｒと２本一単位の櫛歯状工具による文様が交互に施文されているが、後者は肩部が横位に三条、胴上部は波状文が横位に四条巡る。外面無文部及び内面はヘラナデ調整であるが、内面は磨耗が著しいため図示不可能である。４は胴上部から底部。接合関係は認められなかったが､№47・48と同一個体である。胴部は球形を呈し、最大径をほぼ中段に



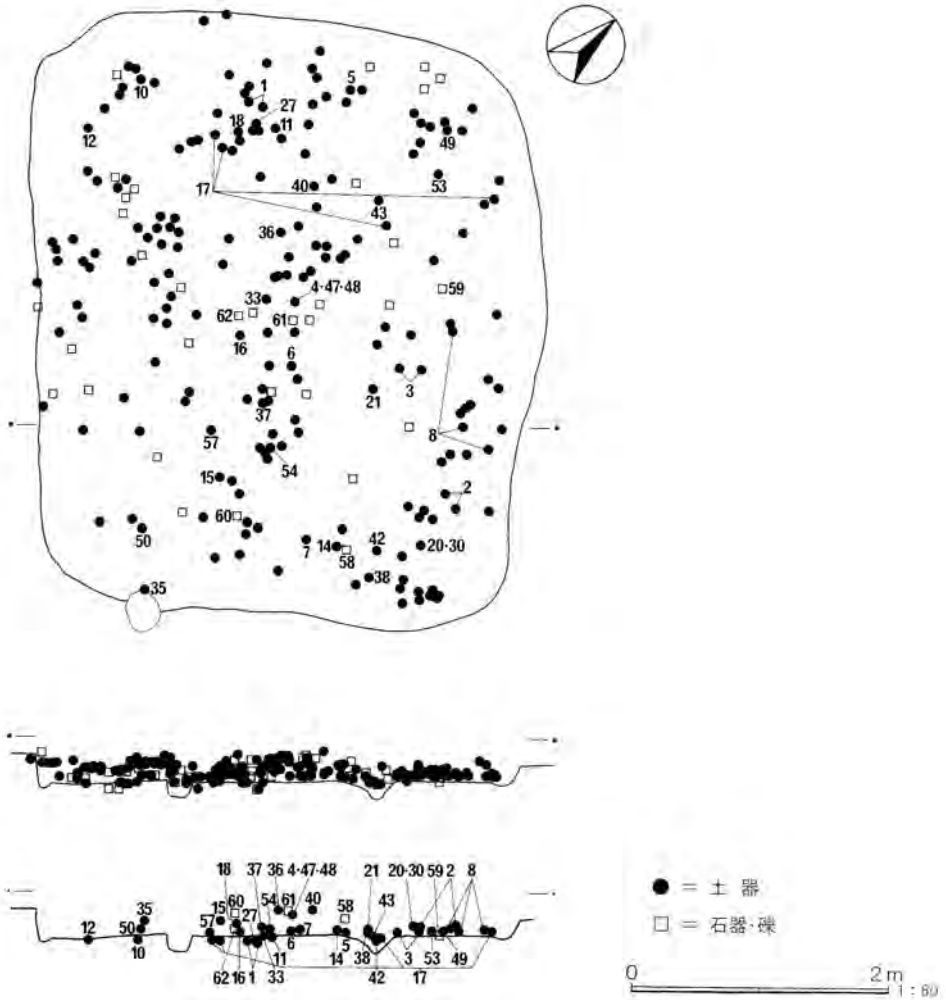
第２号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＣＣ′ ＤＤ′ ＥＥ′ ＦＦ′）

1 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物少量含む。
3 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
4 灰　色　土：粘土質。焼土、灰白色粒微量含む。
5 灰 白 色 土：粘土質。灰色ブロック微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
7 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック微量含む。
9 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
10 灰 白 色 土：粘土質。焼土、炭化物微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粒、炭化物微量含む。
12 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
13 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
14 青 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
15 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
16 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
17 灰 白 色 土：シルト質。炭化物微量含む。
18 黄 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量、灰色粒微量含む。
19 灰 白 色 土：シルト質。
20 灰 白 色 土：粘土質。灰色粒微量含む。
21 灰白色ブロック
22 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
23 灰 白 色 土：粘土質。焼土、炭化物。灰色粒微量含む。
24 炭 化 物 層
25 焼　土　層
26 灰 白 色 土：粘土質。炭化物微量含む。
27 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
28 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
29 明青灰色土：粘土質。灰白色粒多量含む。
30 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
31 青 灰 色 土：粘土質。灰色粒多量、灰白色粒少量含む。

0　2m
1：60

第14図　第２号住居跡



第15図　第２号住居跡遺物出土状況

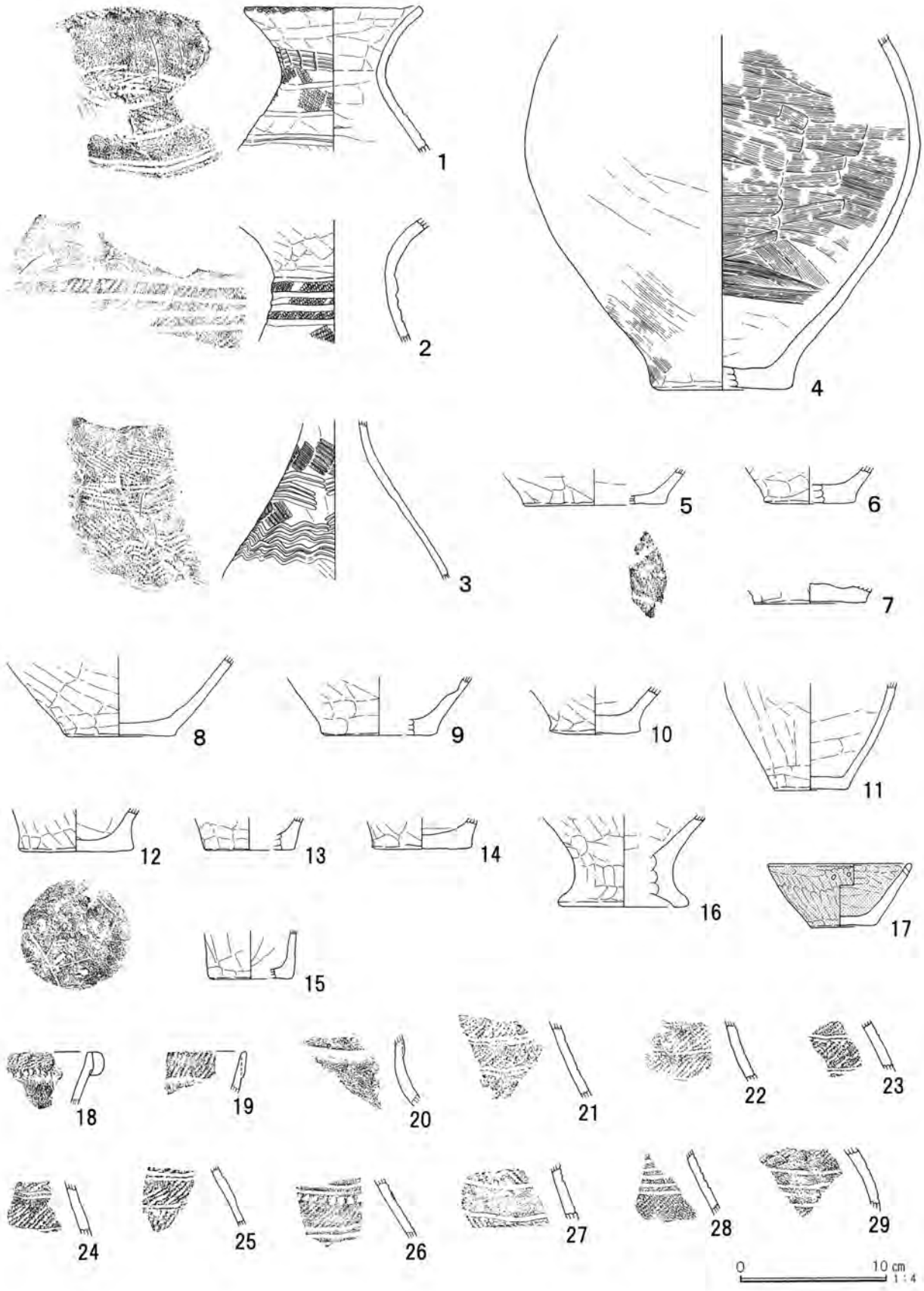
持つ。磨耗が著しいため図示できない部分が多いが、内外面ともにハケメ調整のみであり、文様はみられない。

５～10は胴下部から底部ないし底部。胴下部が膨らむ器形から壺としたが、甕の可能性もある。内外面ともにすべてヘラナデ調整であり、５のみ底部外面に木葉痕がみられた。

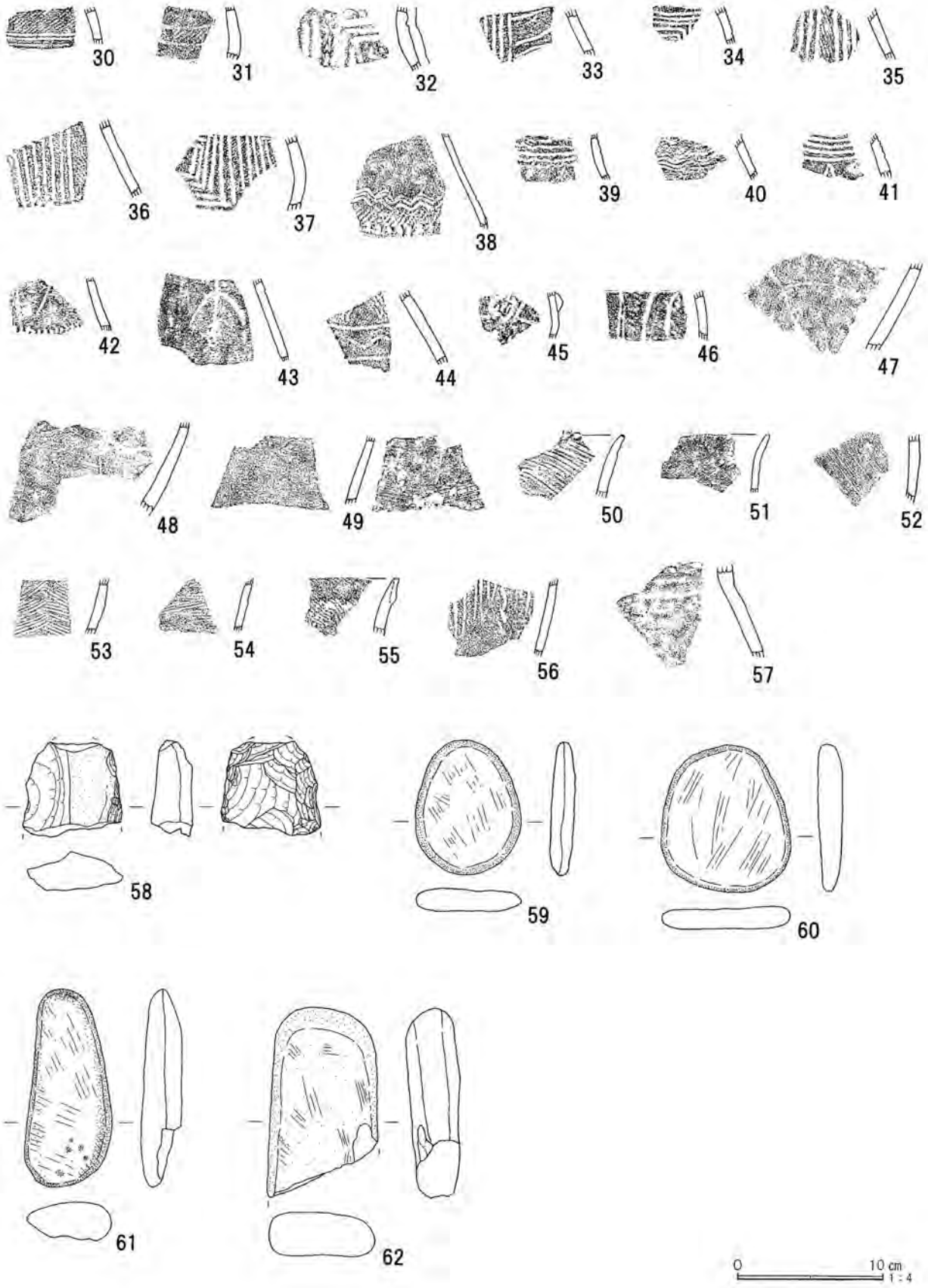
18・19は口縁部片。ともに複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で18が横位、19が斜位のヘラナデ調整である。18は端部に突起が付けられ、縄文下は半円形の刺突列が巡る。20は頸部下位から肩部にかけての破片。ＬＲ単節縄文が施文された突帯下は無文で横位のヘラナデ調整である。

21～31は平行沈線と縄文が施文される一群。21～28は肩部片。21～25は同一個体であり、2本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が等間隔で巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されている。26はやや太い平行沈線間上位に半円形の刺突列、下位に無節Ｌを施文している。27はやや太い平行沈線の上下にＲＬ単節縄文を施文しており、間は無文でヘラナデ調整である。28はやや細い平行沈線下に細かいＲＬ単節縄文が施文されている。29・30は胴上部片。29は細い平行沈線が等間隔に三条巡り、上下にＬＲ単節縄文が施文されている。30はＬＲ単節縄文下に２本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が複数巡る。31は胴部中段の破片。細い平行沈線間にＬＲ単節縄文が施文され、上下は無文で横位のヘラナデ調整である。

32～37は沈線で重四角文が描かれる一群。32は頸部下位から肩部にかけての破片。垂下する隆帯脇に



第16図　第２号住居跡出土遺物（１）



第17図　第２号住居跡出土遺物（２）

太い沈線で描かれ、円形の刺突列も沿って刻まれている。33～36は肩部片。33は区画内にＬＲ単節縄文と波状沈線が充填されている。34はやや小振りの壺で沈線が細い。35・36は間にＲＬ単節縄文が施文されている。37は胴部片。分かりづらいが、地文に細かいＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文されている。

38～40は沈線で波状文が描かれる一群。38は肩部から胴上部にかけての破片、39・40は肩部片である。38は肩部が無文で横位のヘラナデが施され、胴上部は３本一単位の櫛歯状工具による波状文下に附加条一種ＬＲ＋Ｌと弱い段に刻まれた半円形の刺突列が巡る。39は一本描による複数の細い波状沈線下にＬＲ単節縄文と思われる縄文が施文されている。40は４本一単位の櫛歯状工具で波状文が描かれており、上下は磨耗が著しいため定かではないが、ＲＬ単節縄文か無節Ｒが施文されている。

41～43は沈線で鋸歯文ないし近い文様が描かれる一群。41・42は肩部片、43は胴上部片である。41はやや細い平行沈線下に同一工具で描かれている。42は細い沈線で描かれており、下に半円形の刺突列が刻まれた弱い段が巡る。磨耗が著しいため鋸歯文内外に縄文が施文されているか定かでない。43はやや太い沈線で矢印状の文様が描かれている。無文部は横･斜位のヘラナデ調整である。

44は細い平行沈線間に波状沈線が描かれた胴上部片。平行沈線上にはＲＬ単節縄文が施文されている。45はボタン状貼付文が付けられた胴部中段の破片。両脇に沈線で文様が描かれているが、詳細は不明である。46はやや太い沈線で渦巻文が描かれた胴部中段の破片。磨耗が著しいため定かではないが、沈線間がＲＬ単節縄文と思われる縄文施文部と無文部が交互に配置されている。

47～49は胴下部片。47・48は接合関係が認められなかったが､№４と同一個体である。内面は磨耗が著しいため図示できなかったが、内外面ともにハケメ調整である。外面は斜位、内面は横位に施されている。49は内外面ともに横位のヘラナデ調整であるが、内面は一部ハケメもみられた。

壺破片18～49の内面はヘラナデ調整であり、21・38・42が横･斜位、その他は横位に施されている。

11～15・50～57は甕。11～15は胴下部から底部ないし底部。胴下部が膨らまない器形から甕としたが、壺の可能性もある。内外面ともにすべてヘラナデ調整であり、12のみ底部外面に木葉痕がみられた。

50～53は櫛歯状工具で羽状文が描かれる一群。50～52は横位、53のみ縦位に描かれている。50・51は口縁部片であり、50は口縁端部に刻みを持つ。51は単位不明であるが、目が細かくハケメに近い。52は胴部中段の破片。51と同じく細かく、ハケメに近い。53は胴下部片。櫛歯状工具の単位は４本である。

54はハケメ調整の胴下部片。斜位に施されている。55は縄文が施文された複合口縁部片。全面にＲＬ単節縄文が施文されている。56はやや細い沈線でコの字重ね文が描かれた胴下部片。無文部は横･斜位のヘラナデ調整である。57は頸部から胴上部にかけての破片。磨耗が著しいため分かりづらいが、頸部に簾状文が巡る。簾状文の上下は無文で上は横位、下は斜位のヘラナデ調整である。

甕破片50～57の内面はすべてヘラナデ調整であり、53のみ横・斜位、その他は横位に施されている。

16は高坏の接合部から脚部にかけての部位。脚部が短い。内外面ともにヘラナデ調整である。

17は椀。ほぼ完形である。口縁部から体部がほぼ直線的に開く。底部はやや上げ底である。内外面ともにヘラミガキ調整で赤彩が施されている。口縁部には一箇所のみ２個一対で孔を持つ。

58～62は石器。58は打製石斧の基部。片面に自然面を残す。粘板岩製。59～62は扁平な磨石。61は片端一部、62は約1/3を欠く。すべて砂岩製である。

本住居跡の時期は、１号住居跡との新旧関係から弥生時代中期後半でも新しい段階と思われる。

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

№.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	(12.5)	(10.25)	—	ABCHIJN	にぶい黄橙色	B	口～胴30%	胴上部内面一部輪積痕有。
2	弥生土器　壺	—	(8.55)	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	口～頸40%	内面磨耗顕著。
3	弥生土器　壺	—	(11.15)	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴80%	内面磨耗顕著。
4	弥生土器　壺	—	(24.7)	(9.8)	ADN	にぶい黄橙色	B	胴～底40%	内面胴下部･外面磨耗顕著。№47･48と同一個体。
5	弥生土器　壺	—	(2.5)	(10.0)	ABCEHIJM	にぶい橙色	B	底部15%	内面磨耗顕著。底部外面木葉痕有。
6	弥生土器　壺	—	(2.5)	(6.4)	ABCEHIKN	にぶい橙色	B	底部45%	外面やや磨耗。
7	弥生土器　壺	—	(1.4)	7.8	ABDJMN	にぶい黄橙色	B	底部100%	内外面やや磨耗。
8	弥生土器　壺	—	(5.6)	7.8	ABCEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底70%	内面やや磨耗。
9	弥生土器　壺	—	(4.0)	(8.0)	ABCDEIJN	にぶい黄橙色	B	胴～底20%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器　壺	—	(3.2)	(6.3)	ABGHIN	灰褐色	B	胴～底25%	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器　甕	—	(7.4)	5.1	ABIM	にぶい黄橙色	B	胴～底80%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器　甕	—	(3.0)	8.0	ABDHIN	灰黄褐色	B	底部100%	底部外面木葉痕有。
13	弥生土器　甕	—	(2.25)	(6.3)	ACGIJN	橙色	B	底部30%	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器　甕	—	(2.2)	(6.8)	AHN	黒褐色	B	底部45%	
15	弥生土器　甕	—	(3.4)	(6.0)	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴～底20%	
16	弥生土器高坏	—	(6.4)	(9.0)	ABCHIN	灰黄褐色	B	接～脚20%	
17	弥生土器　椀	10.0	4.4	4.6	ABEHI	暗赤褐色	B	ほぼ完形	内外面赤彩。口縁部孔二つ有。
18	弥生土器　壺	—	—	—	ACIJMN	褐色	B	口縁部片	口縁部突起有。
19	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGIK	浅黄橙色	B	口縁部片	
20	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIK	灰黄褐色	B	頸～肩部片	
21	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	肩部片	№22 ～ 25と同一個体。
22	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	肩部片	№21･23～25と同一個体。
23	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIN	褐灰色	B	肩部片	№21･22・24・25と同一個体。
24	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	黄灰色	B	肩部片	№21～23･25と同一個体。
25	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	肩部片	№21～24と同一個体。
26	弥生土器　壺	—	—	—	ABEMN	灰白色	B	肩部片	
27	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	明赤褐色	B	肩部片	
28	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGIN	にぶい黄色片	B	肩部片	
29	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	胴上部片	
30	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
31	弥生土器　壺	—	—	—	ABCEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器　壺	—	—	—	ABEI	にぶい黄橙色	B	頸～肩部片	
33	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄色	B	肩部片	
34	弥生土器　壺	—	—	—	AIKN	明赤褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
35	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	
36	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKM	にぶい黄色	B	肩部片	
37	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIKMN	橙色	B	胴部片	外面磨耗顕著。
38	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIJN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	
39	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	灰黄褐色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
40	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIJMN	にぶい橙色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
41	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIMN	にぶい黄橙色	B	肩部片	外面やや磨耗。
42	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIKN	灰白色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
43	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
44	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKM	灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
45	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	ボタン状貼付文有。
46	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIKMN	にぶい橙色	B	胴部片	外面磨耗顕著。
47	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内面磨耗顕著。№4･48と同一個体。
48	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内面磨耗顕著。№4･47と同一個体。
49	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIN	灰黄褐色	B	胴下部片	
50	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口縁部片	
51	弥生土器　甕	—	—	—	ADHIN	暗灰黄色	B	口縁部片	
52	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒色	B	胴部片	内面やや磨耗。
53	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴下部片	
54	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	胴下部片	
55	弥生土器　甕	—	—	—	AIKM	黒色	B	口縁部片	
56	弥生土器　甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴下部片	内面磨耗顕著。
57	弥生土器　甕	—	—	—	ABCIKN	灰黄色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
58	打製石斧	最大長（5.7）cm、最大幅（5.8）cm、最大厚（2.85）cm。重量（139.2）g。基部のみ残。粘板岩製。							
59	磨　石	最大長9.3cm、最大幅7.3cm、最大厚1.6cm。重量148g。完形。砂岩製。							
60	磨　石	最大長10.3cm、最大幅9.0cm、最大厚1.7cm。重量190.7g。完形。砂岩製。							
61	磨　石	最大長13.7cm、最大幅5.9cm、最大厚2.7cm。重量279.5g。片端一部欠。砂岩製。							
62	磨　石	最大長(13.2)cm、最大幅7.65cm、最大厚4.1cm。重量518.9g。約1/3欠。砂岩製。							

第３号住居跡（第18図）

平成19年度調査第1区48・49－152・153グリッドに位置する。北側大半が調査区外にあり、西側では２号土坑及び１号方形周溝墓と重複する。新旧関係は発掘調査段階では本住居跡が２号土坑より古く、１号方形周溝墓よりも新しいと判断されたが、出土遺物の比較の結果、本住居跡が最も古い。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は約３ｍ、東西は5.1ｍを測る。平面プランはいびつな隅丸方形を呈し、主軸方向はＮ－33°－Ｗを指すと思われる。確認面からの深さは0.15ｍ前後を測り、床面は概ね平坦であった。覆土は11層（１～11層）確認された。炭化物を含む層が多く、西端を除く床面直上ほぼ全面に広がっていた。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央から南東に位置すると思われる。長軸0.55ｍ、短軸0.4ｍの楕円形を呈し、床面からの深さは0.08ｍと浅い。覆土は３層（12～14層）確認された。中層が炭化物層、下層は焼土層であった。

ピットは17基確認された。主柱穴と思われるピットは確認されなかったが、このうちＰ１～12は径が小さく浅いが、炉跡を囲むように位置していることから炉跡に関連するものと思われる。またP17は西壁中央近に位置することから貯蔵穴の可能性がある。

壁溝は西壁中央付近にのみ確認された。幅0.15ｍ前後、床面からの深さは0.05ｍを測る。

出土遺物（第20・21図）は、弥生土器壺（１～５・８～55）、甕（６・56～76）、高坏（７）、打製石斧（77）、磨石（78～81）がある。主に炉やピットが集中する箇所からの出土が多い（第19図）。磨耗が著しいものが多く、残存状態の良いものは少ない。

１～５・８～55は壺。１は肩部から胴部中段までの部位。肩部はほぼ直線的で胴部は中段に向かって緩やかに膨らむ。文様は主に一本描のやや細い沈線で描かれている。肩部は平行沈線が複数巡り、以下は垂下した複数の沈線脇に縦位の短沈線と鋸歯文が描かれ、鋸歯文内外には円形の刺突が充填されている。そして、これらの文様下にさらに平行沈線が複数巡る。内面は横位のヘラナデ調整である。

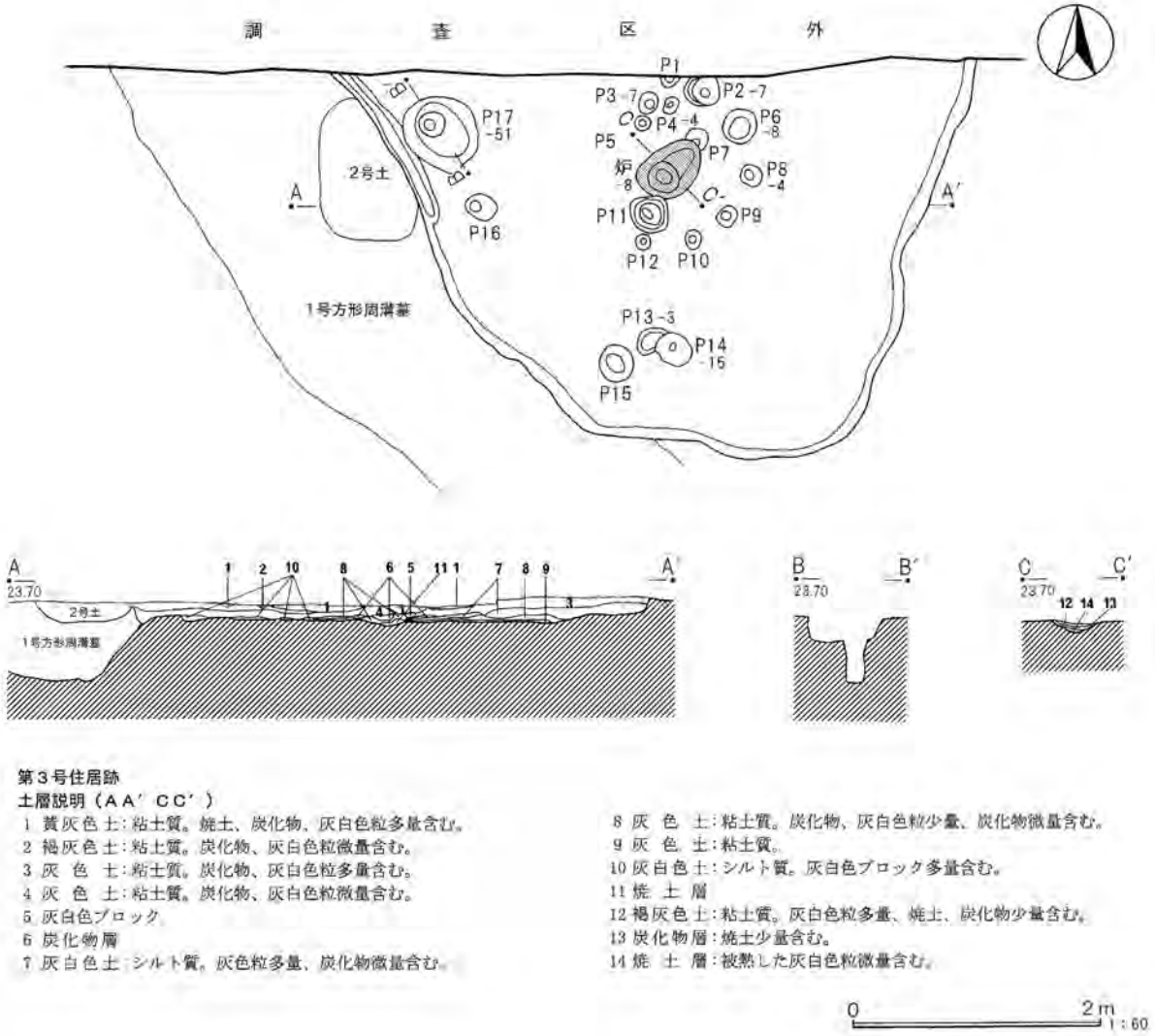
２～５は胴下部から底部ないし底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。胴下部が膨らむこと、外面がヘラミガキ調整であることから壺としたが、４以外は甕の可能性もある。４は外面に赤彩が施されており、底部外面には木葉痕がみられた。

８～10は口縁部片。８はＲＬ単節縄文下に半円形の刺突列と二条のやや細い平行沈線が巡る。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。９・10は受け口状を呈する。９は無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整である。10は端部を欠くが、やや細い短沈線で横位の羽状文が描かれている。

11は頸部から肩部にかけての破片。垂下する複数の太い沈線間に無節Ｒが施文されている。12～18は同一個体。12は肩部、13～16は胴上部、17は胴上部から中段にかけて、18は胴部中段の破片である。地文にカナムグラ系の擬縄文が施文され、細い沈線が肩部のみ横位に巡るが、以下は王字状の文様が縦位に描かれている。19・20はやや太い平行沈線下に刺突列が刻まれた肩部片。刺突は半円形を呈する。

21～24は平行沈線と縄文が施文された胴上部片。重四角文の可能性もある。21は太い沈線を挟んで上下にＬＲ単節縄文が施文されている。22は無節Ｌ下に間隔を空けてやや太い平行沈線が巡る。23・24は等間隔で太い平行沈線が複数巡る。器壁が厚く、23は地文にカナムグラ系の擬縄文が施文されている。

25・26は櫛歯状工具による多条沈線が巡る一群。25は肩部片、26は胴上部片である。櫛歯状工具の単位は25が３本、26が４本である。

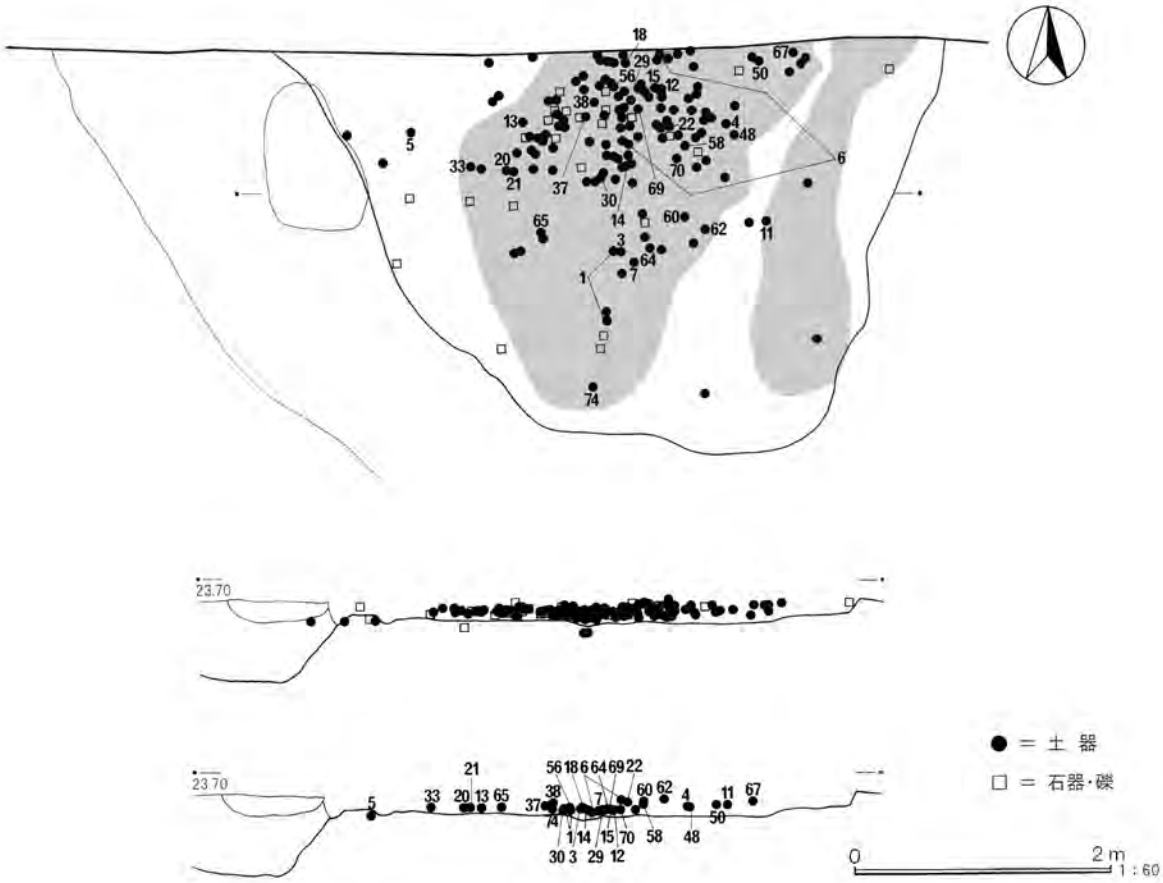


第18図　第３号住居跡

27～40は沈線で重四角文が描かれる一群。27～33は同一個体であり、器壁が厚い。27～29は肩部、30・31は胴部中段、32・33は胴下部に近い破片である。太い沈線で上下二段ずらして描かれている。胴下部の無文部及び内面は横位のヘラナデ調整である。34・35は肩部片。34は垂下する太い沈線区画内に円形の刺突が刻まれている。35は沈線が細い。区画内上位が無文で下に横位の沈線とＬＲ単節縄文が施文されている。36～39は胴上部片。沈線が太い。36は地文にＲＬ単節縄文が施文されている。37～39は区画内に半円形の刺突列が刻まれている。40は胴部中段の破片。地文にＲＬ単節縄文が施文されており、太い沈線区画内に円形の刺突列が刻まれている。

41は肩部片。半円形の刺突列が刻まれた細い平行沈線が縦・横位に巡り、区画内に無節Ｒが施文されている。42は胴上部片。細い沈線で重三角文が描かれている。43～46は太い沈線で重菱形文が描かれた胴上部片。43は上に同一工具による平行沈線が複数巡る。44～46は区画内に円形の刺突が刻まれている。

47～51は刺突列が刻まれた一群。47・48は肩部片、49～51は胴上部片である。47は地文に無節Ｌが施文され、半円形の刺突列とやや太い平行沈線が巡る。48はＬＲ単節縄文下に半円形の刺突列が二列刻まれている。49は無節Ｌ下にやや太い沈線と半円形の刺突列が巡る。50は上下に無節Ｌが施文され、間に



第19図　第３号住居跡遺物出土状況

半円形の刺突列が三列刻まれている。51はＬＲ単節縄文下に半円形の刺突列が刻まれている。

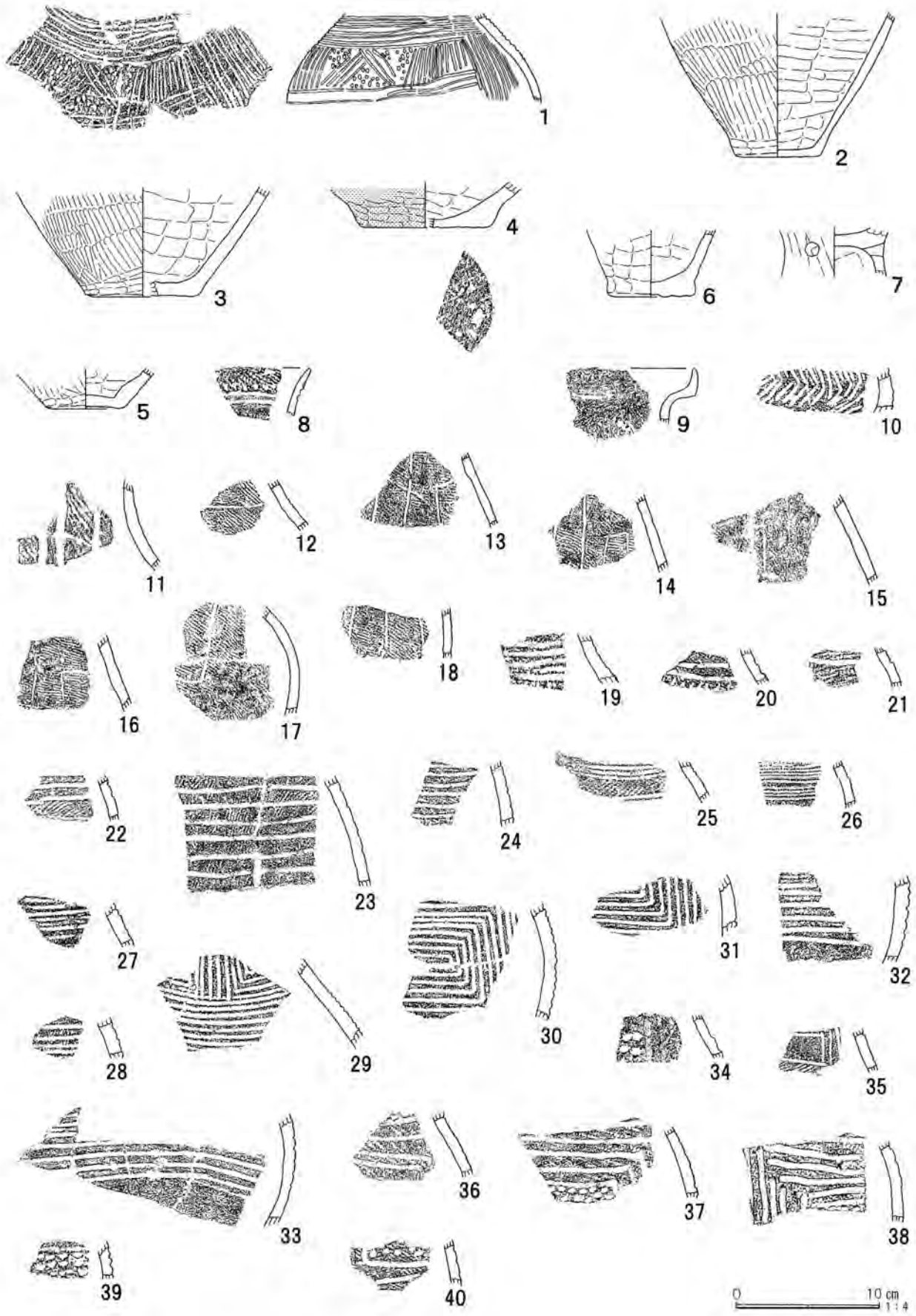
52は櫛歯状工具による波状文が巡る胴上部片。単位は４本である。波状文下にはＬＲ単節縄文が施文されている。53は太い沈線で弧線文が描かれた胴部中段の破片。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。54・55は肩部片。54はハケメに近い櫛歯状工具が斜位に施文されている。55は非常に細い沈線で渦巻状の文様が描かれた東北地方南部の川原町口式。時期的に合わないことから流れ込みと思われる。

壺破片８～55の内面はすべてヘラナデ調整であり、11のみ縦･斜位、14・22・24・37・40・51が横･斜位、34・35が斜位、その他は横位に施されている。

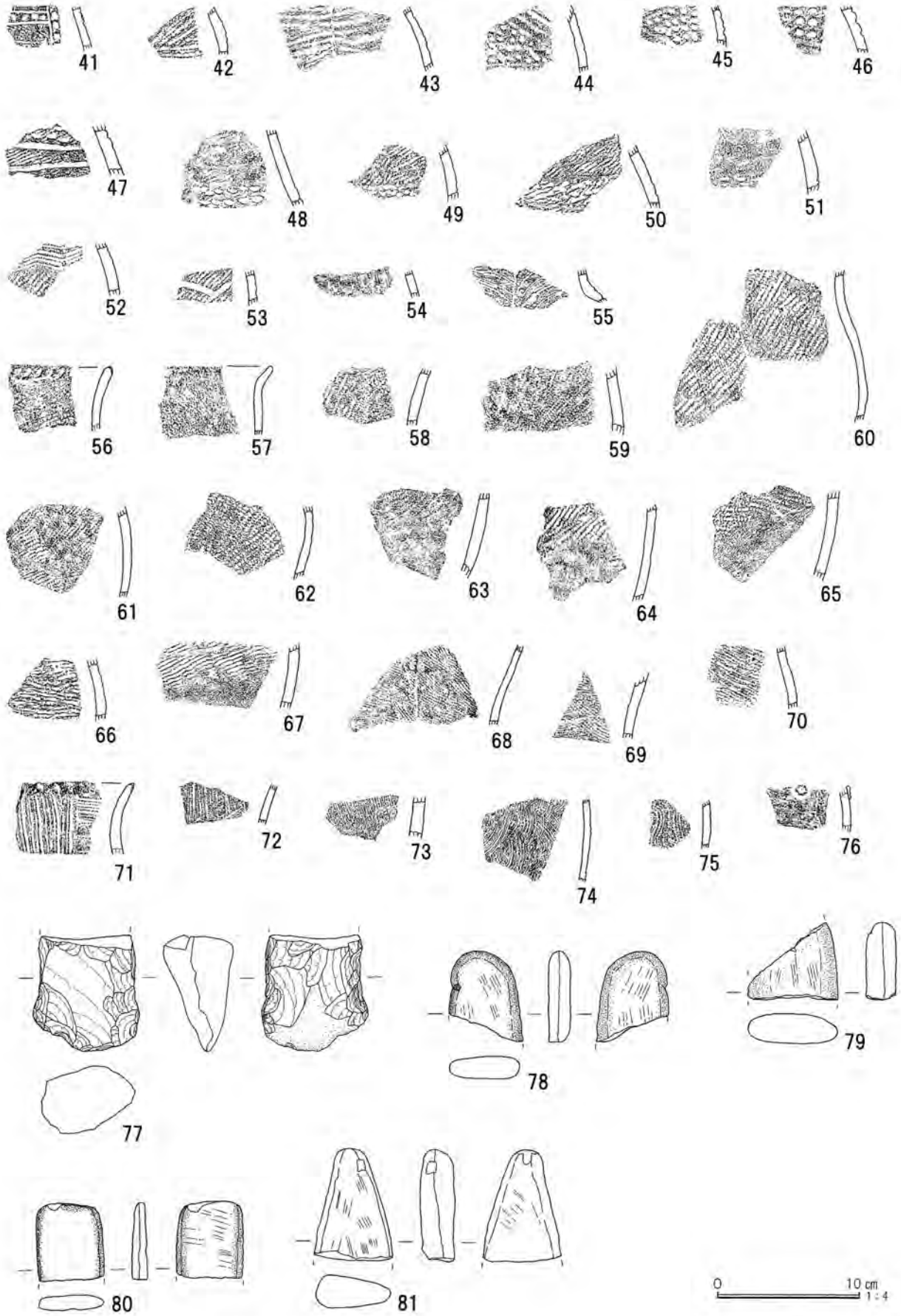
６・56～76は甕。６は胴下部から底部。胴下部が膨らまない器形から甕としたが、壺の可能性もある。内外面ともにヘラナデ調整である。

56～70は縄文ないし擬縄文が施文される一群。56・57は口縁部から頸部にかけて、58・68・69は頸部、66・70は胴上部、59・61は胴部中段、60は頸部から胴部中段にかけて、62～65・67は胴下部の破片である。56・58～64はＬＲ単節縄文が施文されている。56は口縁端部に刻みを持つ。胴下部の63・64は縄文下が無文で63・65は横･斜位、64は横位のヘラナデ調整である。57・65はＲＬ単節縄文が施文されている。57は磨耗が著しいため、無節Ｒの可能性もある。65は縄文下が無文で横・斜位のヘラナデ調整である。66・67は無節が施文されている。66はＲ、67はＬが施文されており、67は縄文下が無文で横位のヘラナデ調整である。68～70はカナムグラ系の擬縄文が施文されている。

71～75は櫛歯状工具で文様が描かれる一群。71は口縁部から頸部にかけて、72は頸部、73は胴下部、



第20図　第３号住居跡出土遺物（１）



第21図　第３号住居跡出土遺物（２）

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

№.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	—	(6.35)	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	肩～胴40%	内面磨耗顕著。
2	弥生土器　壺	—	(10.3)	6.0	ABHIJK	灰黄褐色	B	胴～底20%	
3	弥生土器　壺	—	(7.8)	(8.0)	ABIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底25%	内面やや磨耗。
4	弥生土器　壺	—	(2.7)	(9.0)	ABEHIJN	赤色	B	底部30%	外面赤彩。底部外面木葉痕有。
5	弥生土器　壺	—	(2.8)	5.6	ABEIK	にぶい橙色	B	底部60%	外面磨耗顕著。
6	弥生土器　甕	—	(4.8)	(6.2)	ABEHN	にぶい黄橙色	B	胴～底40%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器高坏	—	(3.5)	—	ABDHIJKN	明赤褐色	B	接合部40%	孔三つ有。
8	弥生土器　壺	—	—	—	ACHIKN	にぶい褐色	B	口縁部片	
9	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKM	灰黄色	B	口縁部片	
10	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIJKN	褐灰色	B	口縁部片	
11	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIN	橙色	B	頸～肩部片	
12	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	肩部片	№13～18と同一個体。
13	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。№12･14～18と同一個体。
14	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。№12・13・15～18と同一個体。
15	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	№12～14･16～18と同一個体。
16	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	灰褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。№12～15･17･18と同一個体。
17	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	胴部片	内面やや磨耗。№12～16･18と同一個体。
18	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	胴部片	内面磨耗顕著。№12～17と同一個体。
19	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	灰黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
20	弥生土器　壺	—	—	—	ADIJM	浅黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
21	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	暗褐色	B	胴上部片	
22	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	明黄褐色	B	胴上部片	
23	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
24	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	
25	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIN	灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	にぶい橙色	B	胴上部片	
27	弥生土器　壺	—	—	—	AIKMN	褐灰色	B	肩部片	内外面やや磨耗。№27 ～ 32と同一個体。
28	弥生土器　壺	—	—	—	ABIJN	黒褐色	B	肩部片	内面やや磨耗。№26･28 ～ 32と同一個体。
29	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	№26･27･29 ～ 32と同一個体。
30	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴部片	内外面やや磨耗。№26 ～ 28･30 ～ 32と同一個体。
31	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	暗灰黄色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。№26 ～ 29･31･32と同一個体。
32	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴部片	内面やや磨耗。№26 ～ 30･32と同一個体。
33	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	暗灰黄色	B	胴部片	内外面やや磨耗。№26 ～ 31と同一個体。
34	弥生土器　壺	—	—	—	ABEI	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
36	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
37	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIN	橙色	B	胴上部片	
38	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
39	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	
40	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴部片	内面やや磨耗。
41	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
42	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIK	橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
44	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIN	橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
45	弥生土器　壺	—	—	—	ADHI	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
46	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIN	褐灰色	B	胴上部片	
47	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
48	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIK	浅黄橙色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
49	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
50	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	
51	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
52	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
53	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい褐色	B	胴部片	
54	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	褐色	B	肩部片	内面やや磨耗。
55	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	肩部片	内面やや磨耗。川原町口式。
56	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
57	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
58	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIKN	灰黄褐色	B	頸部片	
59	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEGIKN	にぶい黄褐色	B	胴部片	
60	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	頸～胴片	内面やや磨耗。
61	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴部片	
62	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒色	B	胴下部片	

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
63	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEIJN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	外面磨耗顕著。
64	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
65	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	灰褐色	B	胴下部片	内面やや磨耗。
66	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
67	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIJKN	灰黄褐色	B	胴下部片	
68	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIJKN	にぶい橙色	B	頸部片	
69	弥生土器　甕	—	—	—	ABHN	橙色	B	頸部片	内面磨耗顕著。
70	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	
71	弥生土器　甕	—	—	—	AHIN	褐灰色	B	口～頸部片	
72	弥生土器　甕	—	—	—	ABIJN	黒褐色	B	頸部片	
73	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内面やや磨耗。
74	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	胴部片	No.75と同一個体。
75	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	胴部片	No.74と同一個体。
76	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIJN	黒褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
77	打製石斧	最大長(8.35)cm、最大幅(7.6)cm、最大厚(5.0)cm。重量(297.0)g。刃部のみ残。粘板岩製。							
78	磨　石	最大長(6.5)cm、最大幅(5.1)cm、最大厚1.6cm。重量(69.2)g。半分欠。砂岩製。							
79	磨　石	最大長(5.55)cm、最大幅6.4cm、最大厚2.15cm。重量(84.3)g。大半欠。砂岩製。							
80	磨　石	最大長(5.6)cm、最大幅4.8cm、最大厚1.1cm。重量(44.2)g。半分欠。砂岩製。							
81	磨　石	最大長(8.1)cm、最大幅(5.65)cm、最大厚(2.55)cm。重量(97.9)g。半分欠。凝灰岩製。							

74・75は胴部中段の破片である。71は口縁端部に指頭圧痕、以下に５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が縦･横位に施文されている。72・73は細かく、ハケメに近い。72は４本一単位で縦位、73は単位不明であるが、斜位に施文されている。74・75は同一個体。８本一単位で縦位に波状文様が描かれている。

76はボタン状貼付文が付けられた胴上部片。磨耗が著しいため文様が施文されているか定かではない。

甕破片56～76の内面はすべてヘラナデ調整であり、61・63・65・68・69・71・73が横・斜位、66が斜位、その他は横位に施されている。

７は高坏の接合部。内外面ヘラナデ調整である。脚部に透かし孔が三箇所変則的にみられた。

77～81は石器。77は打製石斧の厚い刃部。片面一部に自然面を残す。粘板岩製。78～81は磨石。半分のみの検出が多い。81のみ凝灰岩、その他はすべて砂岩製である。

本住居跡の時期は、弥生時代中期中頃と思われる。

第４号住居跡（第22図）

平成19年度調査第１区50－153・154グリッドに位置する。北東隅で２号住居跡を切っている。検出できたのは北東隅付近のみであり、大半は調査区外にある。

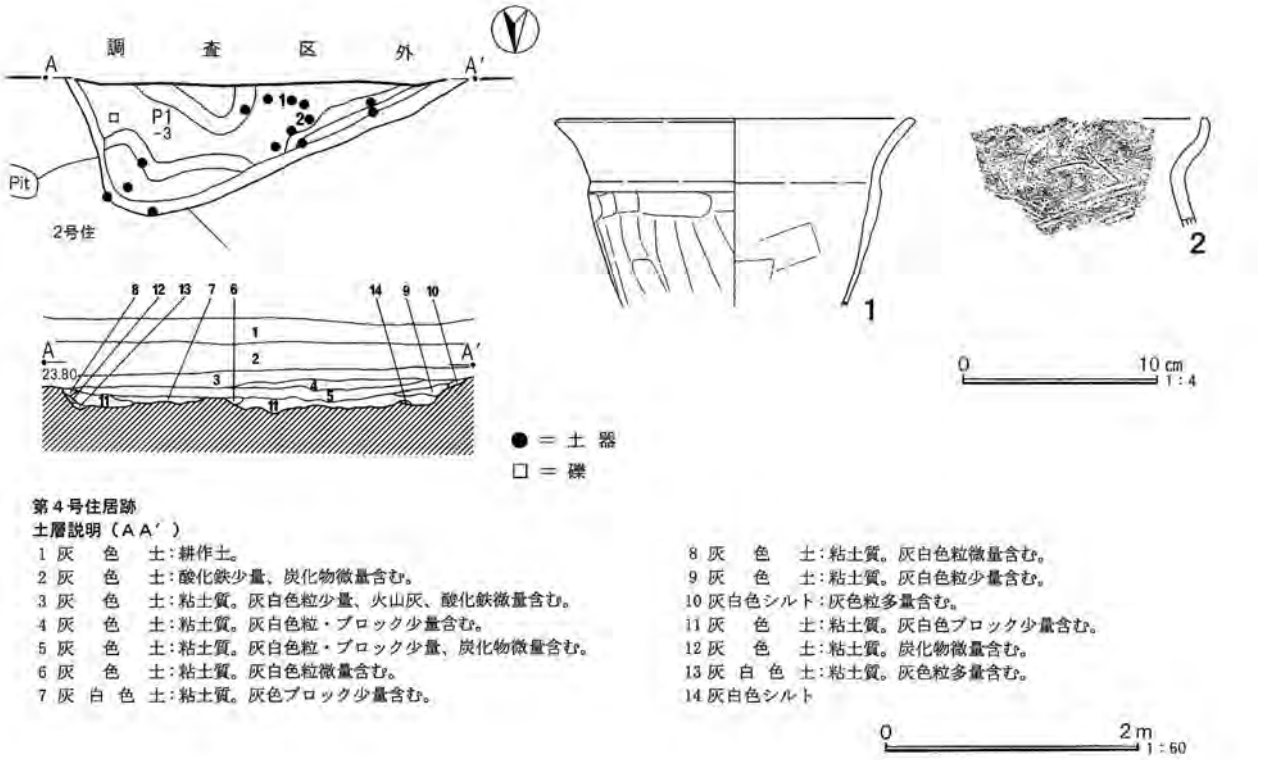
正確な規模は不明であるが、検出できた南北は1.05m、東西は3.15mを測る。平面プランは正方形ないし長方形を呈し、主軸方向はＮ－64°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さは0.15m前後を測る。床面はやや凹凸がみられた。覆土は11層（４～14層）確認された。ブロック土を含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは調査区境で１基検出された。正確な規模は不明であるが、楕円形状を呈し、床面からの深さは0.03mと非常に浅い。用途･性格については不明である。

壁溝は北東隅から北壁にかけて確認されたが、一部途切れている。幅は北東隅付近が0.4m程と広いが、北西部は0.25m前後が主体となる。床面からの深さは0.03mと浅い。

カマドや貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、土師器甑（１）と流れ込みの弥生土器甕（２）のみである。１は床面直上から検出された。また図示不可能な遺物で本住居跡に伴うと思われる須恵器でかえりの付く蓋と土



第22図　第４号住居跡・出土遺物

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　甑	(19.0)	(9.9)	—	ACDHKN	灰黄褐色	B	口～胴25%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器　甕	—	—	—	ABIJKN	黄灰色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。

師器有段口縁坏の小片も検出されている。

１は小型の甑。胴下部から底部を欠く。やや外反する口縁部に最大径を持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。２は弥生時代中期後半の甕。口縁部から頸部にかけての破片。受け口状を呈する口縁部にやや太い沈線で山形文が描かれており、頸部は無文で横位のヘラナデ調整、胴上部は３本一単位の櫛歯状工具による縦位の羽状文が施されている。磨耗が著しいため、口縁部に縄文が施文されているかは不明である。内面は横位のヘラナデ調整である。

本住居跡の時期は、７世紀後半を中心とする段階としか言えない。

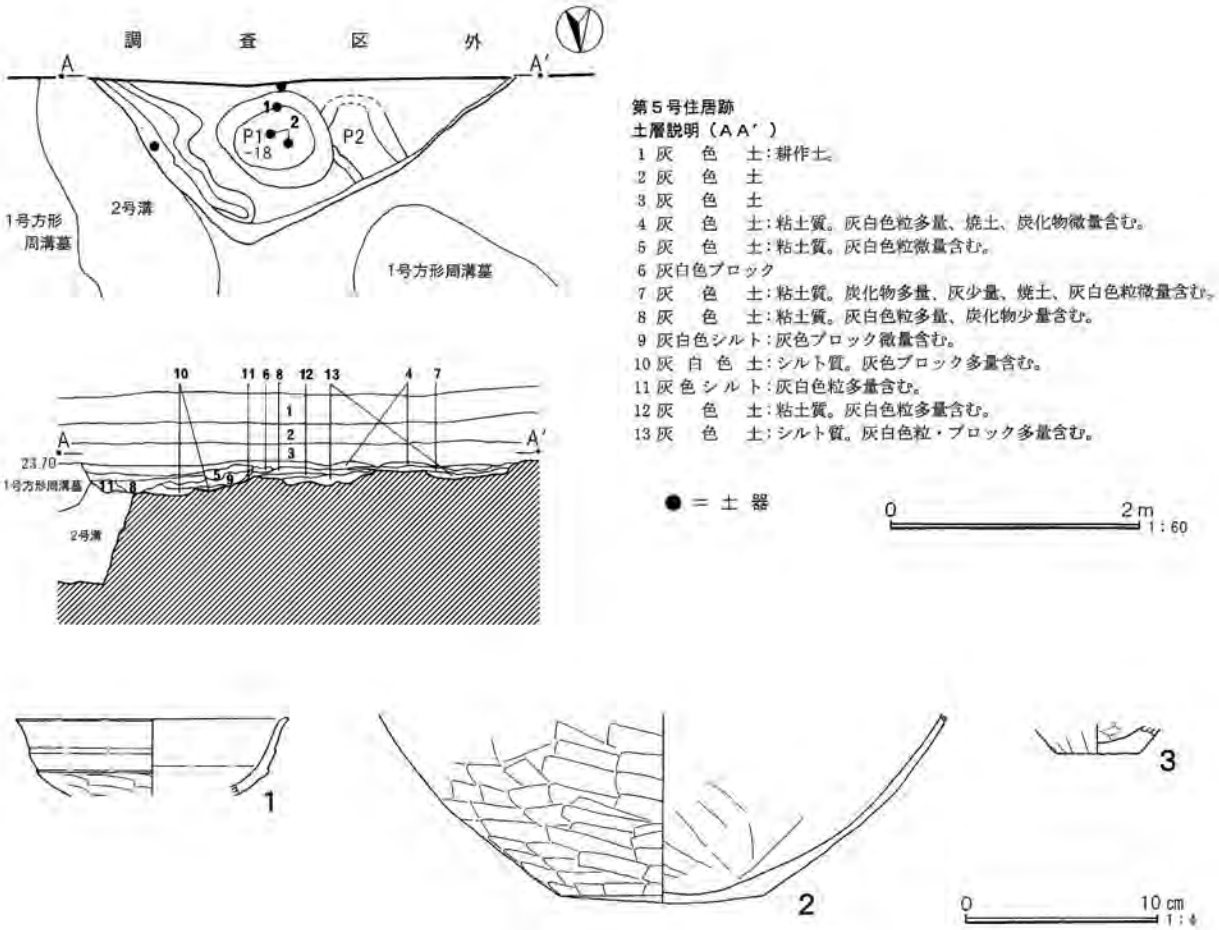
第５号住居跡（第23図）

平成19年度調査第１区48・49－153・154グリッドに位置する。東側で２号溝跡を切っている。検出できたのは４号住居跡と同じく北東隅付近のみであり、大半は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は約1.25m、東西は約3.35mである。平面プランは正方形ないし長方形を呈し、主軸方向はＮ－52°－Ｅを指すと思われる。床面は凹凸がみられ、確認面からの深さは最も深い所で0.23mを測る。覆土は10層（4～13層）からなる。混入物が多くみられ、ランダムな層位を示しているが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

ピットは北東隅で重複する2基が検出されたが、新旧関係や用途･性格は不明である。

壁溝は北東隅から東壁にかけて確認された。やや蛇行している。幅は一定していないが、0.25m前後



第23図　第５号住居跡・出土遺物

第６表　第５号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	(14.4)	(4.1)	—	ABHIKN	橙色	B	15%	
2	土師器　甕	—	(10.0)	10.8	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	
3	土師器　甕	—	(1.6)	4.5	ABCDHIN	にぶい褐色	B	底部50%	

が主体となり、床面からの深さは0.03mと浅い。

カマドや貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物は、古墳時代後期の土師器坏（１）、甕（２・３）がある。１・２はＰ１上、３は覆土から検出された。

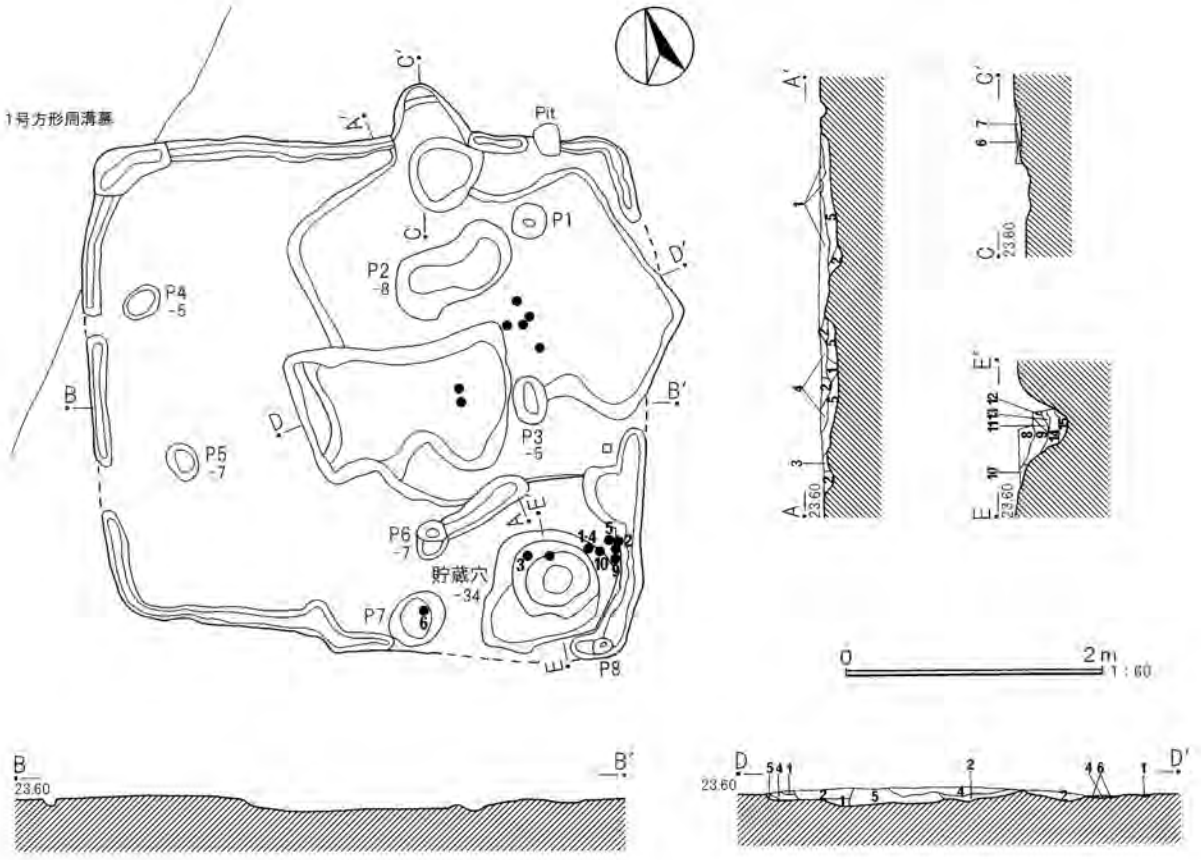
１はやや浅身の有段口縁坏。段は沈線化しているが、体部と底部の境にある稜は比較的明瞭である。器壁がやや薄い。口縁部から体部は横ナデ、底部はヘラ削り調整である。２は丸胴甕の胴下部から底部。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。器壁がやや薄い。3は長胴甕の底部。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。器壁が厚い。

本住居跡の時期は、７世紀後半と思われる。

第６号住居跡（第24図）

平成19年度調査第１区46・47－153・154グリッドに位置する。北西隅で１号方形周溝墓を切っている。

規模は長軸4.3m、短軸3.97mを測り、平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はＮ－17°－Ｅを指す。確認面からの深さはほとんど無く、壁を検出できなかった箇所が大半である。床面はやや凹凸



第6号住居跡
土層説明（AA′ CC′ DD′ EE′）

1 黄 灰 色 土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、黒褐色ブロック、炭化物微量含む。
2 黒 褐 色 土：灰白色粒少量含む。
3 黄灰色シルト：灰白色シルト多量、黒褐色粒微量含む。
4 灰白色シルト：黄灰色ブロック少量、炭化物微量含む。
5 灰 白 色 土：粘土質。黒褐色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
6 黄 灰 色 土：粘土質。炭化物、灰、灰白色粒微量含む。
7 黒 褐 色 土：灰白色粒多量、焼土、炭化物微量含む。
8 灰 色 土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
9 暗青灰色粘土：焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰白色シルト：灰色ブロック多量含む。
11 暗 灰 色 粘 土：灰白色粒少量、焼土微量含む。
12 灰白色シルト：暗灰色粒多量、炭化物微量含む。
13 灰 色 シ ル ト：暗灰色粒微量含む。
14 明青灰色シルト：灰色粒微量含む。
15 灰白色シルト：灰色粒多量含む。

第24図　第６号住居跡

がみられ、東側では土坑状の掘り込みが検出されたが、覆土にブロックを多量含み、ランダムな層位であったことから掘り方と思われる。住居跡自体が浅いため覆土は図示できなかったが、黒色系の土が薄く堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

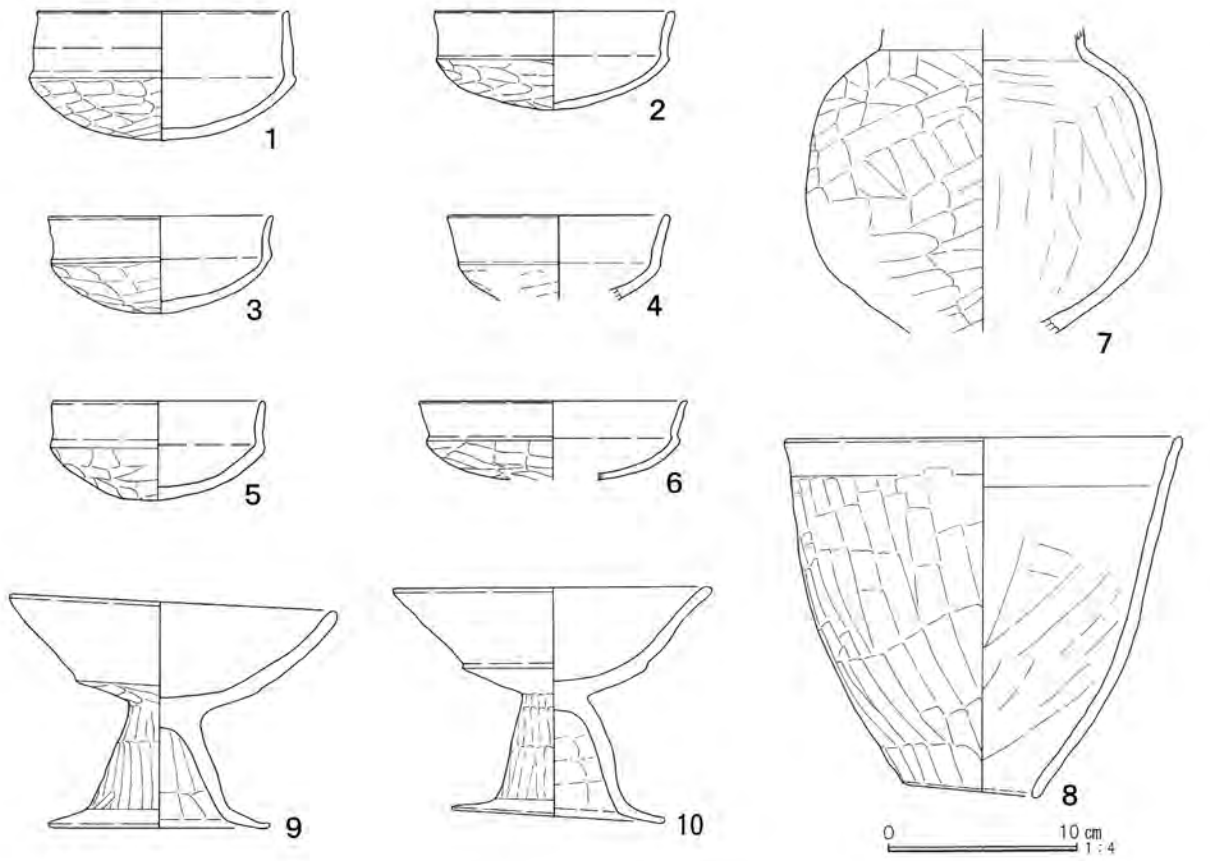
カマドは北壁中央からやや東寄りに設けられている。壁外への張り出しは0.4mと短いが、これは確認面の影響と思われる。袖部は確認されず、焚口部に径0.55m前後、床面からの深さ0.1mを測る土坑状の掘り込みが検出された。煙道部は短く、先端は緩やかに立ち上がる。覆土は煙道部のみの確認であり、天井部崩落土等はみられず、炭化物や焼土などが確認されたにとどまる。

貯蔵穴は南東隅から検出された。長軸1.14m、短軸0.96mのいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは0.34mを測る。覆土は８層（８～15層）確認された。混入物を含む粘土やシルトが多く認められた。

壁溝はほぼ全周するが、所々で途切れる。幅は0.15m前後、床面からの深さは0.05mを測る。

ピットは７基検出された。深さが不明なものもあるが、いずれも浅く、主柱穴ではないと思われる。

出土遺物（第25図）は、土師器坏（１～６）、壺（７）、甑（８）、高坏（９・10）がある。遺物は主



第25図　第６号住居跡出土遺物

第７表　第６号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	13.5	6.95	—	ABDGIN	橙色	B	ほぼ完形	
2	土師器　坏	(13.0)	5.3	—	ABDGKM	橙色	B	50%	
3	土師器　坏	(12.0)	5.3	—	ABHKN	赤褐色	B	70%	
4	土師器　坏	(12.0)	(5.6)	—	ABCDEHJK	赤色	B	20%	外面磨耗顕著。
5	土師器　坏	(11.4)	5.3	—	BCJKN	明赤褐色	B	70%	
6	土師器　坏	(14.4)	(4.2)	—	ADEKN	赤褐色	B	30%	
7	土師器　壺	—	(16.4)	—	ABCDEHN	赤褐色	B	頸～胴30%	
8	土師器　甑	21.4	19.4	7.35	ABCHKN	にぶい橙色	B	ほぼ完形	
9	土師器　高坏	17.6	12.5	11.8	ABDHIK	橙色	B	ほぼ完形	
10	土師器　高坏	17.2	12.6	11.4	ABDHIN	橙色	B	75%	坏部内外面磨耗顕著。

に土坑状の掘り込み及び貯蔵穴付近から検出され、特に後者からは残存状態の良い土器がまとまって出土した。

１～６は土師器坏。１は坏身模倣坏、２～６は坏蓋模倣坏である。口径はバラツキがあるが、器高は浅身の６以外は5.5㎝前後を測り、深身のものが多い。坏蓋模倣坏の口縁部は、ほぼ直立に近いか開きが小さい。口縁部から体部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整である。７は壺の頸部から胴下部にかけての部位。頸部がほぼ直立し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。頸部は内外面ともに横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。８はやや小振りの甑。口縁部が短く、最大径を持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ、以下は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。９・10はやや扁平な高坏。口縁部が大きく開き、坏部に明確な稜を持つ。脚部は短く、裾部で大きく開く。

調整は内外面ともに口縁部が横ナデ及びナデ、坏部から脚部はヘラナデ、裾部は横ナデ調整である。

本住居跡の時期は、６世紀前半を中心とする段階と思われる。

第７号住居跡（第26図）

平成19年度調査第１区45・46－152・153グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係にあり、北西部では８号住居跡、南東部では９号住居跡を切っている。南側では３号溝跡、４号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。また10号住居跡とは直接的な切り合い関係にないが、本住居跡の方が新しい。検出できたのは南側の約２／３程度であり、残りは調査区外にある。

規模は長軸が不明であるが、検出できた南北は約3.1m、短軸は3.31mを測り、平面プランは横長の長方形を呈し、主軸方向はＮ－65°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さは0.35m前後であり、床面はやや凹凸がみられた。覆土はカマドを除くと７層（１・３・６・８～11層）確認された。混入物が多くみられ、シルトないしシルト質の土がレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

カマドは半分のみの検出であり、北側が調査区外にある。東壁中央付近に設けられていると思われ、壁外への張り出しは約0.7mと短い。袖部は確認されず、焚口部に径0.6m前後、床面からの深さ0.13mの土坑状の掘り込みが検出された。煙道部は短く、先端は鋭角に立ち上がる。覆土は４層（２・４・５・７層）確認された。天井部崩落土等はみられず、中層の４層以下に炭化物や焼土などが確認されたにとどまる。

ピットは３基検出された。Ｐ１は床面中央からやや南東寄りに位置する。長軸0.92m、短軸0.74mの土坑状を呈し、床面からの深さは0.21mを測る。覆土は６層（12～17層）確認された。ブロック等を含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性がある。床下土坑か。Ｐ２は0.06mと非常に浅いが、Ｐ３とともにその位置から主柱穴であろうか。ともに径は0.3m前後の不整円形を呈する。

壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、石製紡錘車（７－１）のみである。この他にも図示不可能な遺物に須恵器坏、土師器有段口縁坏、北武蔵型坏の小片も検出されている。

７－１はやや小振りで厚い石製紡錘車。完形。上面及び側面に細かい線刻がみられた。砂岩製。

本住居跡の時期は、図示不可能な土器片の存在から7世紀後半としておきたい。

第８号住居跡（第26図）

平成19年度調査第１区46－152･153グリッドに位置する。東側を７号住居跡に切られている。検出できたのは南西隅付近のみであり、大半は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は約1.3m、東西は約1.7mである。平面プランは正方形ないし長方形を呈し、主軸方向はＮ－68°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さはほとんど無く、西壁は検出されなかったが、南側に壁溝が巡ることから住居跡と判断した。床面はやや凹凸がみられた。覆土は３層（18～20層）確認された。ブロック土を多量含むことから埋め戻された可能性がある。

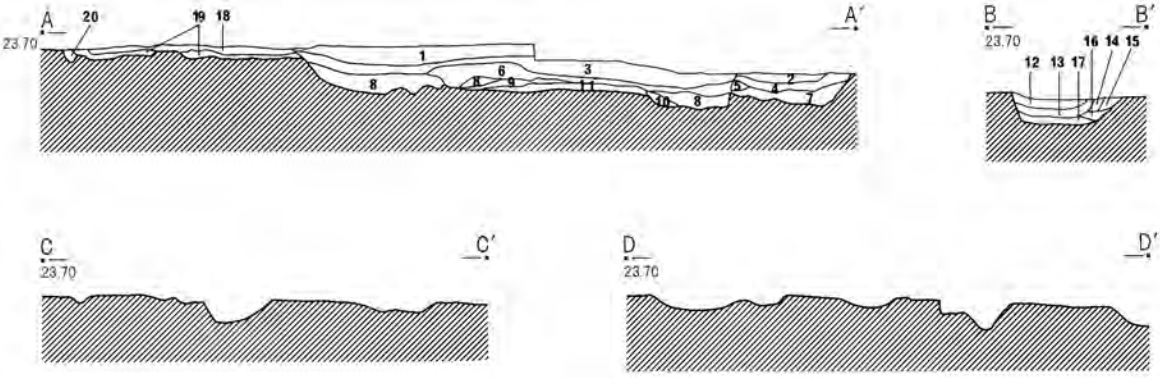
カマドや貯蔵穴、壁溝、ピット等付属する施設は何も確認されなかった。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、古墳時代後期の土師器甕の小片が検出されている。

本住居跡の時期は重複する７号住居跡との関係から７世紀後半以前の古墳時代後期としか言えない。

第９号住居跡（第26図）

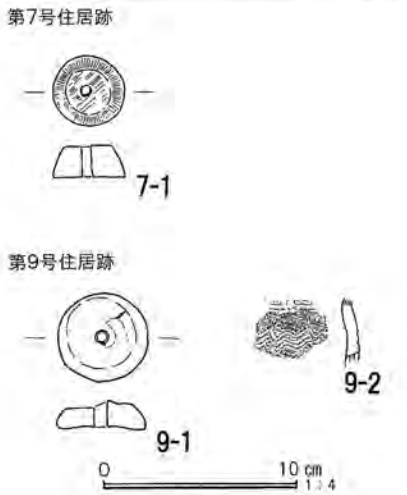
平成19年度調査第１区46－153グリッドに位置する。東壁大半を７号住居跡に切られている。南側は10号住居跡、南東隅付近では一部４号土坑と重複しているが、出土遺物の比較の結果、10号住居跡より



第7・8号住居跡

土層説明（AA′ BB′）

1 黄灰色シルト：焼土、炭化物、灰色ブロック、灰白色粒微量含む。
2 黄灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
4 黄灰色シルト：灰白色粒多量、焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
5 灰色シルト：炭化物、灰白色粒微量含む。
6 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック微量含む。
7 黄灰色土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒・ブロック多量含む。
8 灰白色土：シルト質。炭化物、灰色ブロック微量含む。
9 灰白色土：シルト質。灰色粒微量含む。
10 オリーブ灰色シルト：灰色ブロック少量、灰白色ブロック微量含む。
11 灰白色シルト：灰色粒・ブロック少量含む。
12 明青灰色シルト：灰白色シルト多量含む。
13 灰白色シルト：炭化物多量、灰白色ブロック少量含む。
14 灰白色土：粘土質。
15 明オリーブ灰色シルト：灰白色粒少量含む。
16 明青灰色粘土：灰白色ブロック少量含む。
17 灰白色粘土：灰白色ブロック微量含む。
18 灰色土：粘土質。灰白色粒少量含む。
19 灰白色シルト：灰色粒・ブロック多量含む。
20 灰色シルト：灰白色粒多量含む。



第26図　第７～９号住居跡・出土遺物

第８表　第７号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	石製紡錘車	最大径3.75㎝、最大厚1.7㎝、孔径0.55㎝。重量(33.2)g。ほぼ完形。砂岩製。							

第９表　第９号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	石製紡錘車	最大径4.7㎝、最大厚1.35㎝、孔径0.7㎝。重量48.9g。完形。滑石製。							
2	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	頸～胴上片	

新しく、４号土坑より古い。

正確な長軸は不明であるが、およそ3.8m、短軸は３m程を測る。平面プランは長方形を呈し、主軸方向はＮ－71°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さはほとんど無く、壁を検出できたのは南東隅と西壁のみである。床面は凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。住居跡自体が浅いため覆土は図示できなかったが、灰色系の土が若干堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは検出されなかったが、西南北壁に痕跡が無いことから東壁に設けられていたと思われる。

壁溝は北壁のみ確認されたが、二箇所途切れている。幅0.15m前後、床面からの深さは0.05mを測る。

ピットは11基と多数確認されたが、すべてが本住居跡に伴うものか不明である。また西壁からやや離れて溝状の掘り込みが南北に走るが、掘り方の可能性が高い。

出土遺物で図示可能なものは、石製紡錘車（９－１）と流れ込みの弥生土器甕（９－２）のみであるが、図示不可能な遺物に７世紀前半と思われる土師器比企型坏の小片も検出されている。

９－１はやや扁平な石製紡錘車。上下側面いずれも線刻等はみられない。滑石製。２は甕の頸部から胴上部にかけての破片。弥生時代中期末から後期初頭に相当する。頸部には４本一単位の櫛歯状工具による簾状文、胴上部には同一工具で波状文が巡る。胴上部には文様施文前に斜位のハケメ調整が施されている。内面は横･斜位のヘラナデ調整が施されている。

本住居跡の時期は、図示不可能な土器片の存在から７世紀前半としておきたい。

第10号住居跡（第27図）

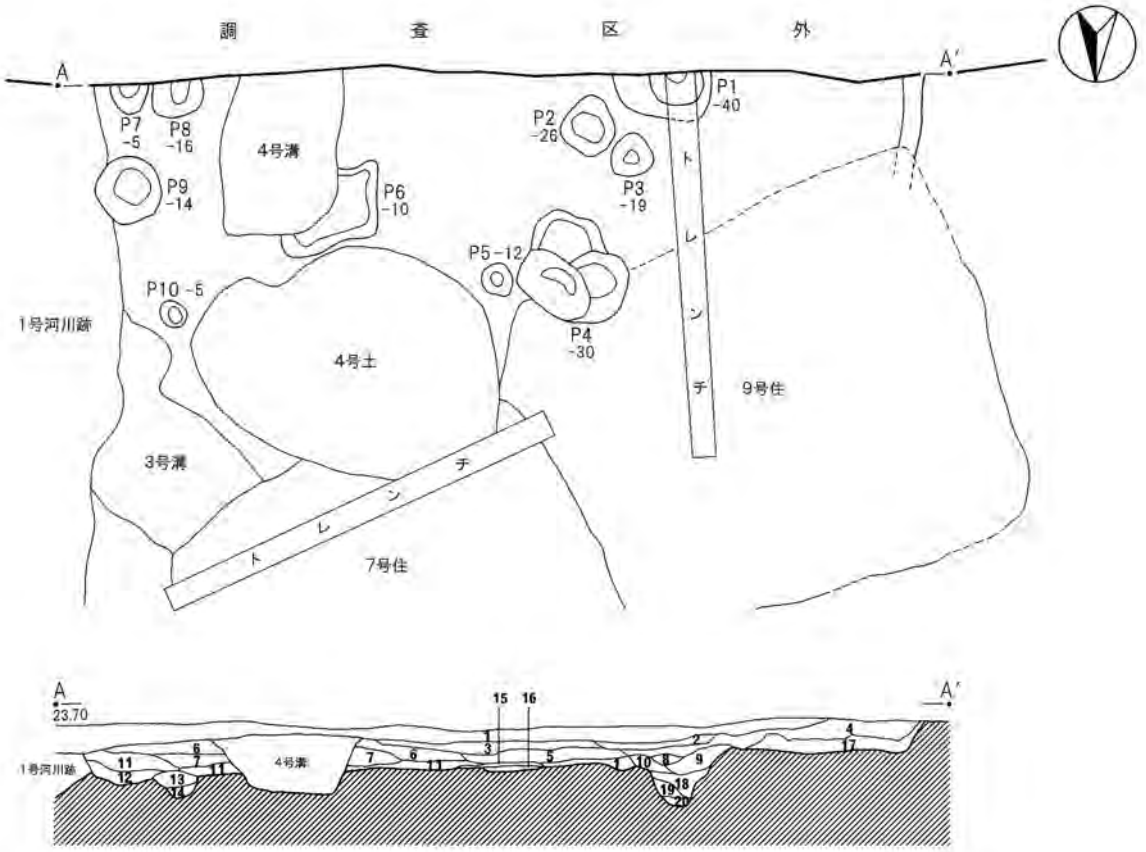
平成19年度調査第１区45・46－153・154グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係にあり、残存状態が悪い。東側では４号溝跡、１号河川跡と重複し、４号溝跡には切られているが、１号河川跡との新旧関係は発掘調査段階では本住居跡が新しいと判断されたが、出土遺物の比較の結果、本住居跡が古いことが判明した。北側は９号住居跡、４号土坑に切られており、３号溝跡との新旧関係は不明である。また７号住居跡とは直接的な切り合い関係にないが、本住居跡が古い。南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は6.5m程であり、東西ははっきりしない。また平面プラン及び主軸方向も不明と言わざるを得ない。確認面からの深さは0.4m前後であり、南側は比較的掘り込みがしっかりしていたが、北側は壁を検出することができなかった。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は調査区境にあるピットも含めて20層（１～20層）が確認された。混入物がややみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは10基検出された。径・深さともにバラツキがあり、規則性もみられない。Ｐ２以外は本住居跡に伴うものか不明である。

炉や壁溝、貯蔵穴等は確認されなかった。

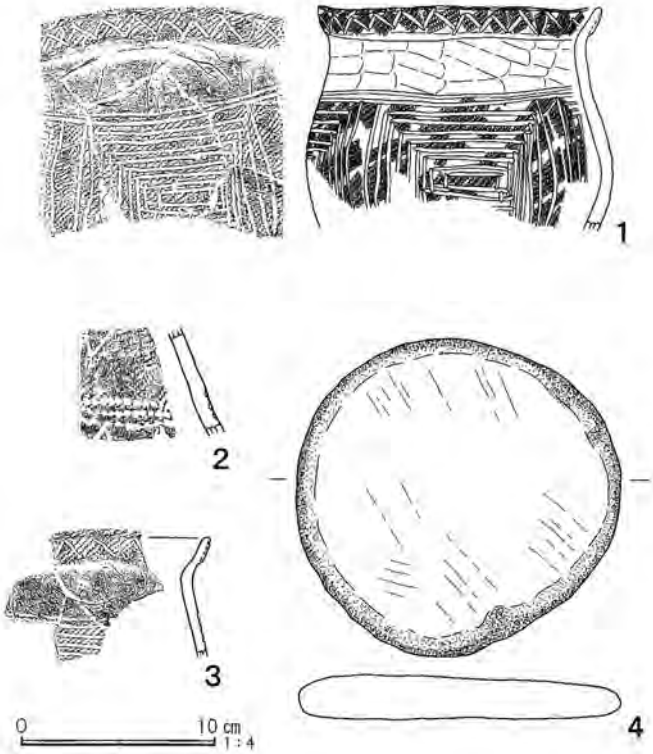
出土遺物は少なく、図示可能な遺物は、弥生土器壺（２）、甕（１・３）、砥石（４）の四点のみである。



第10号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

1 灰　　色　　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 暗 青 灰 色 土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
3 灰　　色　　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
4 灰　　色　　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
5 青　灰　色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
6 灰　　色　　土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
7 灰白色シルト：灰色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
8 灰 色 シ ル ト
9 灰白色シルト：炭化物、灰色ブロック微量含む。
10 明青灰色シルト：炭化物、灰白色粒微量含む。
11 灰　　色　　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
12 灰白色シルト
13 青　灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
14 灰白色シルト
15 炭　化　物　層
16 灰　白　色　土：粘土質。
17 灰　　色　　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
18 灰　　色　　土：シルト質。灰白色粒微量含む。
19 青灰色シルト
20 灰　　色　　土：粘土質。灰白色ブロック少量含む。

0　2m　1：60



第27図　第10号住居跡・出土遺物

第10表　第10号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　甕	15.0	(11.8)	—	ABHIN	にぶい褐色	B	口～胴60%	№3と同一個体。
2	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	灰黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
3	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIK	灰褐色	B	口～胴上片	№1と同一個体。
4	砥　石	最大長16.8cm、最大幅16.9cm、最大厚2.7cm。重量1,201g。完形。花崗岩製。一面のみ平滑。							

1・3はP２内、２・４は覆土から検出された。

２は壺の肩部片。上下に細い沈線で鋸歯文が描かれており、間は弱い段上にＬＲ単節縄文、下に円形の刺突列が三列巡る。内面は横位のヘラナデ調整である。１・３は接合関係が認められなかったが、同一個体である。１は口縁部から胴部中段下までの部位、３は口縁部から胴上部にかけての破片である。口縁部は複合口縁であり、受け口状を呈する。頸部はすぼまり、胴部は中段でやや膨らむ。最大径を胴部中段に持つが、口径とあまり変わらない。口縁部及び胴部は地文にＬＲ単節縄文が施文されており、口縁部はやや細い沈線で山形文が描かれ、胴部には同一工具で重四角文が描かれている。頸部は無文で内面とともに横位のヘラナデ調整である。４は砥石。一面のみ平滑であり、擦痕が認められた。花崗岩製。

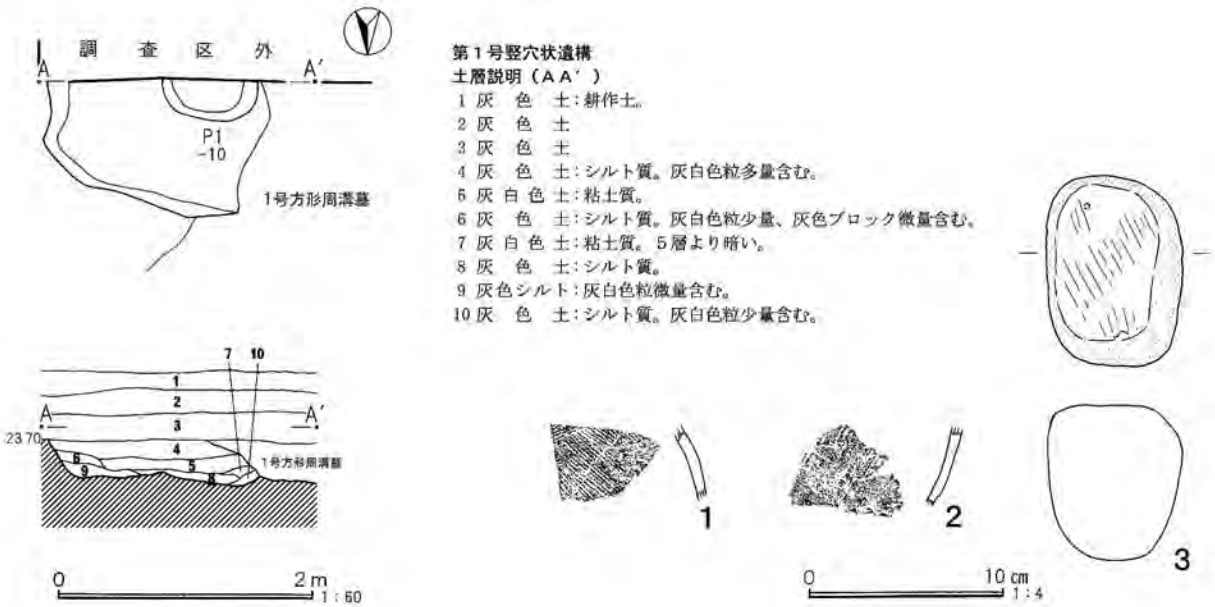
本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

2　竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第28図）

平成19年度調査第１区47・48－153・154グリッドに位置する。西側を１号方形周溝墓に切られている。検出できたのは北東隅付近のみであり、大半は調査区外にある。土坑の可能性もある。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は1.09m、東西は1.21mを測る。平面プランは正方形か



第 28 図　第１号竪穴状遺構・出土遺物

第11表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　甕	—	—	—	ABIJN	にぶい褐色	B	胴上部片	№2と同一個体。
2	土師器　甕	—	—	—	BDIJN	にぶい褐色	B	胴下部片	№1と同一個体。
3	砥　石	最大長16.8cm、最大幅16.9cm、最大厚2.7cm。重量1,201g。完形。花崗岩製。一面のみ平滑。							

長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.3m前後であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は７層（４～10層）確認された。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は古墳時代前期の土師器甕（１・２）と砥石（３）のみである。覆土からの検出であり、１号方形周溝墓との新旧関係から流れ込みの可能性が高い。

１・２は同一個体。１は甕の胴上部片、２は胴下部片である。外面はともに斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデ調整である。３は砥石。一面のみ平滑であり、擦痕が認められた。花崗岩製。完形である。

本遺構の時期は、１号方形周溝墓との新旧関係から弥生時代中期末以前としか言えない。

３　溝 跡

第１号溝跡（第29図）

平成19年度調査第1区51－152～154グリッドに位置する。１号住居跡の覆土及び１号土坑の東側一部を切っている。

北西から南東方向にやや蛇行して走り、北西端及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは6.7m、幅は0.4m前後を測る。確認面からの深さは0.2m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は３層（３～５層）確認された。やや水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第32図）は、須恵器甕（１－１）と弥生土器壺（１－２・３）、甕（１－４）があるが、本溝跡に伴うのは前者である。

１は須恵器の胴下部片。外面はカキ目に近い回転ナデ調整であり、内面は分かりづらいが、一部あて具痕が残る。末野産。２～４は弥生時代中期後半から後期初頭に収まる土器。２・３は壺の肩部片。２はやや太い沈線で重四角文が描かれており、区画外にはＬＲ単節縄文が施文されているが、区画内は無文である。３はやや太い平行沈線が複数巡る。重四角文の可能性もある。２・３の内面はともにヘラナデ調整であり、２は横・斜位、３は斜位に施されている。４は甕の頸部から胴上部にかけての破片。頸部は6本一単位の櫛歯状工具による簾状文、胴上部は同一工具による波状文が巡る。外面無文部及び内面はヘラナデ調整であり、外面は縦･斜位、内面は横･斜位に施されている。

本溝跡の時期は、古墳時代後期としか言えない。

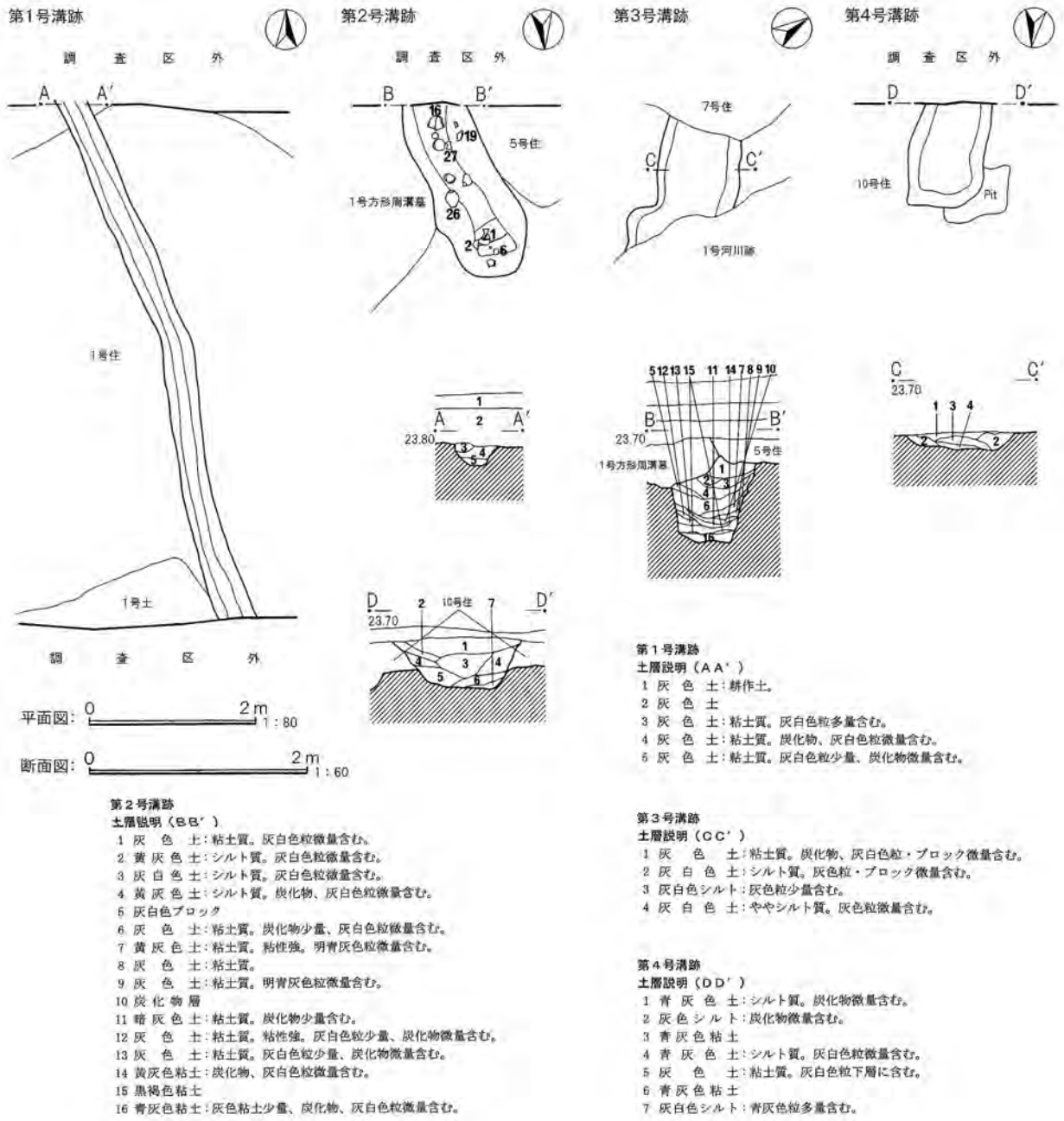
第２号溝跡（第29図）

平成19年度調査第１区48－153・154グリッドに位置する。東側を１号方形周溝墓、西側を５号住居跡に切られている。溝跡としたが、土坑になる可能性もある。

北西から南東方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.32m、幅は0.8m前後を測る。確認面からの深さは0.95mと深く、断面形は逆台形状を呈する。覆土は16層（1～16層）確認された。混入物がややみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第32・33図）は、弥生土器壺（２－１・３～16）、甕（２－２・17～24）、打製石斧（２－25）、土偶（２－26・27）がある。検出した範囲は僅かであったが、比較的残存状態の良好な遺物がまとまって出土した。出土層位は示さなかったが、１・２は上層、６・16・19・26・27は中層から検出された。

１・３～16は壺。１は口縁部から胴上部にかけての部位であるが、残存状態は良好である。口縁部の開きは小さく、頸部はすぼまる。肩部から胴部は瓢箪状を呈する。口縁部にＬＲ単節縄文、その下に半円形の刺突列が二列施文されており、頸部は無文で縦位のヘラミガキ調整である。肩部には細い波状沈



第1号溝跡
土層説明（AA′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土
3 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。
4 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。

第2号溝跡
土層説明（BB′）
1 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 黄灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
3 灰白色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
4 黄灰色土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
5 灰白色ブロック
6 灰　色　土：粘土質。炭化物少量、灰白色粒微量含む。
7 黄灰色土：粘土質。粘性強。明青灰色粒微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。
9 灰　色　土：粘土質。明青灰色粒微量含む。
10 炭化物層
11 暗灰色土：粘土質。炭化物少量含む。
12 灰　色　土：粘土質。粘性強。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
13 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
14 黄灰色粘土：炭化物、灰白色粒微量含む。
15 黒褐色粘土
16 青灰色粘土：灰色粘土少量、炭化物、灰白色粒微量含む。

第3号溝跡
土層説明（CC′）
1 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒・ブロック微量含む。
2 灰白色土：シルト質。灰色粒・ブロック微量含む。
3 灰白色シルト：灰色粒少量含む。
4 灰白色土：ややシルト質。灰色粒微量含む。

第4号溝跡
土層説明（DD′）
1 青灰色土：シルト質。炭化物微量含む。
2 灰色シルト：炭化物微量含む。
3 青灰色粘土
4 青灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。灰白色粒下層に含む。
6 青灰色粘土
7 灰白色シルト：青灰色粒多量含む。

第29図　第1～4号溝跡

線二条と刺突列が二列巡り、刺突列間にＬＲ単節縄文が充填されている。胴上部以下はＬＲ単節縄文地に重四角文が描かれ、区画内上下に刺突列と波状沈線が充填されている。内面は横位のヘラナデ調整である。

3～6は肩部片。6以外は弱い段を持つ。3は分かりづらいが、地文にＬＲ単節縄文が施文されており、段には半円形の刺突列が刻まれ、上にやや太い沈線で鋸歯文が描かれている。4は段に連結して縦長の突起が付けられており、段と突起に沿って半円形の刺突列が刻まれ、区画内にも刺突列が横位に刻まれている。5は地文に無節Ｒが施文されており、段には半円形の刺突列が刻まれている。その下はやや太い沈線が縦･横位に複数描かれている。6は縄目を縦位に施文した無節Ｌ地にやや細い平行沈線が複数

巡る。

7～15は胴上部片。7・8は斜位のハケメ調整後に文様が描かれており、7は縦位のやや太い沈線両脇に半円形の刺突列と細かい櫛歯状工具による多条沈線が垂下する。8は櫛歯状工具による多条沈線が垂下し、脇にやや太めの沈線で四角文が描かれ、区画内に沿って円形の刺突が刻まれている。9～14は沈線で重四角文が描かれている。9・10は同一個体であり、沈線がやや細い。区画内には一部ＬＲ単節縄文が充填されている。11はやや太い沈線で描かれた重四角文下にＬＲ単節縄文が施文されている。12は沈線が細く、地文にＬＲ単節縄文が施文されている。13・14は非常に細い沈線で描かれており、14は重四角文下が無文で横位のヘラナデ調整である。15は分かりづらいが、ＬＲ単節縄文地に刺突列二列とやや太い沈線一条がほぼ等間隔で巡る。刺突は半円形で連続して刻まれており、沈線状を呈する。

16は胴下部片。内外面ヘラナデ調整で外面は上位が横位、下位が斜位、内面は横･斜位に施されている。

壺破片3～16の内面はすべてヘラナデ調整であり、3・8・13は斜位、5・15は横･斜位、その他は横位に施されている。

2・17～24は甕。2は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部は受け口状を呈し、頸部がすぼまる。口縁部は地文にＬＲ単節縄文が施文され、やや太めの沈線で山形文が描かれている。頸部以下の無文部は内面とともに横位のヘラナデ調整である。

17～22は縄文が施文された破片。17は頸部、18～21は胴部中段付近、22は胴下部の破片である。17・18は無節Ｒ、19は無節Ｌ、20はＬＲ単節縄文、21・22はＲＬ単節縄文が施文されている。19・22は胴部中段以下が無文で19は斜位、22は縦･斜位のヘラナデ調整である。19は外面一部に煤が付着していた。

23は櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれた胴部中段の破片。単位は6本である。24は無文で頸部から胴下部にかけての破片。内外面ともにヘラナデ調整であるが、外面は丁寧で縦･斜位に、内面は上位が横位、下位が縦位に施されている。

甕破片17～23の内面はすべてヘラナデ調整であり、19が横･斜位、その他は横位に施されている。

25は打製石斧の基部。中段付近が狭まる形状から分銅型を呈し、やや大型のものと思われる。片面に自然面を残す。粘板岩製。

26・27は土偶。26は壺の胴部以下に肩と腕部、胸部に乳が二つ付けられた形状を呈する。腕部の先端を欠くことは確かであるが、頭部や顔部の有無については頸部に欠損痕とも見ることができる跡があることから存在した可能性が高い。欠損箇所はあるが、残存状態は比較的良好であり、現存高は17.85㎝を測る。肩部は怒り肩で腕部を欠くが、おそらく下に向かって細くなる形状を呈すると思われる。胸部の乳は左側が先端を欠くが、ともに下向きである。胴部は球形を呈し、最大径を持つ中段が膨らむ。文様は頸部周囲と胴下部にあるが、いずれも前方にのみ施文されている。頸部周囲には半円形の刺突列四列と細い沈線二条が弧状に巡り、首飾りが表現されている。胴下部はＲＬ単節縄文が施文されているが、何を表現したか不明である。文様施文前には全面にヘラナデ調整が施されている。

27は現存高7.45㎝を測る小型の土偶。26と同じく腕部及び頭部、顔部を欠き、裾の一部も欠く。形状は円錐状を呈し、上位に長方形状の張り出す肩・腕部が付けられている。胸部は欠損箇所が多いが、やや前方に張り出すことから乳を表現したものと思われる。文様は両側の肩から脇下にかけて細い沈線が前後に描かれている。左側のみ脇下に沈線がないが、襷のようなものが描かれていることから貫頭衣を表現したものであろうか。また胴部中段より下には孔があり、へそを表現したものと思われる。文様施

文前には全面にヘラミガキ調整が施されている。

本溝跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第３号溝跡（第29図）

平成19年度調査第１区45－153グリッドに位置する。北西部で７号住居跡、南東部で１号河川跡、南側で10号住居跡と重複しており、残存状態が悪い。また、これらの遺構との新旧関係は不明である。検出した範囲が僅かであり、土坑になる可能性もある。

北西から南東方向に走り、１号河川跡付近が蛇行する。検出された長さは1.16mと短く、幅は１m前後を測る。確認面からの深さは0.15m程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は４層（１～４層）確認された。上層にブロック土を含み、ランダムな層位であるが、自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である。

遺物が無く、重複する遺構との関係も不明であることから本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第４号溝跡（第29図）

平成19年度調査第１区45－153・154グリッドに位置する。10号住居跡内に位置し、切っている。本溝跡も検出した範囲が僅かであるため、土坑になる可能性がある。

ほぼ南北方向に走り、南端以降は調査区外に延びる。検出された長さは1.32mと短く、幅は0.9m前後を測る。確認面からの深さは浅かったが、調査区壁での土層断面観察から0.46m程の掘り込みであったことが確認された。断面形は逆台形状を呈する。覆土は７層（１～７層）確認された。混入物は少なく、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、10号住居跡との新旧関係から本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降としか言えない。

第５号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区31～33－138グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、北西部には同方向に６・８号溝跡が併走しており、同時期に存在した可能性が高い。

北東から南西方向に走り、北東及び南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは8.9m、幅は0.95m前後が主体となる。北西側にテラス状の段を持つが、32－138グリッドで無くなる。確認面からの深さは、テラス状の段までが0.06m、最も深い南東側が0.2m前後を測る。覆土は２層（１･2層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、下層に粘土を多量含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。

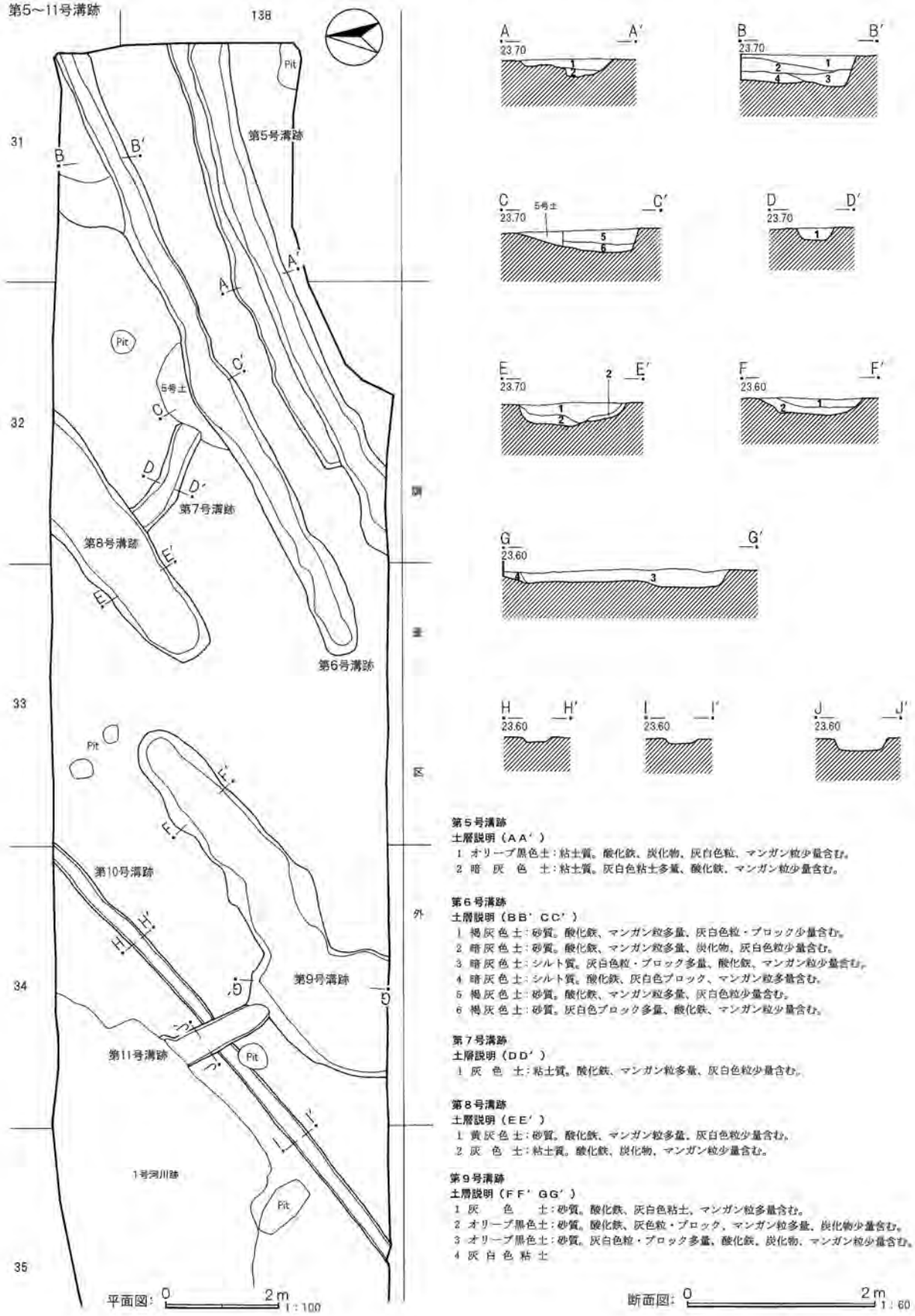
出土遺物（第34図）は、古墳時代前期の土師器甕（５－１・２）があり、この他に流れ込みの弥生土器甕（５－３・４）も検出された。

１は甕の口縁部片、２は胴下部片である。外面がハケメ、内面はヘラナデ調整であり、内外面ともに１は斜位、２は縦・斜位に施されている。３・４は甕の口縁部から頸部にかけての破片。ともに弥生時代中期後半から後期初頭に収まる。３は複合口縁であり、４は口縁端部に刻みを持つ。内外面ともに横位のヘラナデ調整が施されている。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第６号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区31～33－137・138グリッドに位置する。32－138グリッドで５号土坑を切っている。また直接的な切り合い関係はないが、５号土坑を挟んで確認された７号溝跡が延長上で重複する



第30図　第５号～11号溝跡

と思われるが、新旧関係は本溝跡が新しい。北西部には８号溝跡、南東部には５号溝跡が併走しており、同時期に存在した可能性が高い。

５・８号溝跡の間を北東から南西方向に走り、北東端は調査区外に延び、南東端は33－138グリッドで途切れる。検出された長さは11.8mであり、幅は北東端の調査区境付近が大きく膨らむが、0.6m前後が主体となる。確認面からの深さは0.25m前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は北東端の膨らむ箇所で４層（１～４層）、５号土坑との重複箇所では２層（５・６層）確認された。ブロック土を含む層が多いことから人為的に埋め戻された可能性がある。なお、北東端の膨らみは、当初土坑が重複していると思われたが、土層断面の観察で切り合いが認められなかったことから本溝跡に含めることとした。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、弥生土器や古墳時代前期の土師器の小片が検出されている。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係や出土遺物から古墳時代前期と思われる。

第７号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区32－138グリッドに位置する。南東部で５号土坑、北西部で８号溝跡に切られている。また直接的な切り合い関係はないが、南東部は５号土坑を挟んで延長上で６号溝跡と重複すると思われるが、本溝跡が６号溝跡よりも古い。

北西から南東方向に走るが、検出された長さは1.95mと短い。幅は0.45m前後を測る。確認面からの深さは0.13mと浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土一層のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示可能なものはないが、弥生時代中期後半から後期初頭に収まる段階の土器片が検出されている。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半から後期初頭としか言えない。

第８号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区32･33－137･138グリッドに位置する。32－138グリッドで７号溝跡を切っている。南東部には５・６号溝跡が併走しており、同時期に存在した可能性が高い。

北東から南西方向に走る。北東端以降は調査区外に延び、南西端は33－138グリッドで途切れる。検出された長さは4.15m、幅は1.35m前後を測る。確認面からの深さは0.25m程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は２層（１・２層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第34図）は、弥生土器壺（８－１）、甕（８－２）の二点のみであるが、流れ込みと思われる。

１は壺の口縁部片。やや細い沈線で山形文が描かれており、その下には平行沈線が巡る。内面は横位のヘラナデ調整である。２は甕の頸部から胴上部かけての破片。単位は不明であるが、頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡り、以下は無文で内面とともに横位のヘラナデ調整である。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係から古墳時代前期と思われる。

第９号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区33・34－138グリッドに位置する。34－138グリッドで11号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。東側にはやや離れて５・６・８号溝跡が同方向に走っており、これらの溝跡と同時期に存在した可能性が高い。

33－138グリッドから34－138グリッドほぼ中央までは北東から南西方向に走るが、以降は南側に向きを変えている。検出された長さは6.95mであり、幅は北東から南西方向に走る箇所は１m前後であるが、

南側に走る箇所は2.2m前後と幅広になる。確認面からの深さは0.15m前後である。覆土は33－138グリッドと34－138グリッドの二箇所で確認した。ともに２層ずつ確認されたが、内容が異なる。レンズ状に堆積していたが、粘土やブロック土を含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、弥生土器や古墳時代前期の土師器の小片が検出されている。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係や出土遺物から古墳時代前期と思われる。

第10号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区33～35－137・138グリッドに位置する。34－138グリッドほぼ中央で11号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。北西部には１号河川跡が流れ、東側には５・６・８・９号溝跡が同方向に走っており、これらの溝跡と同時期に存在した可能性が高い。

北東から南西方向に走り、北東及び南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは9.35m、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.05m程と浅く、断面形は逆台形状を呈する。覆土は図示できなかったが、粘土質の黒色土一層のみであった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったが、本溝跡の時期は周辺遺構との関係から古墳時代前期と思われる。

第11号溝跡（第30図）

平成21年度調査第２区34－138グリッドに位置する。９・10号溝跡及び1号河川跡と重複するが、新旧関係は不明である。

北西から南東方向に走る。検出された長さは1.79mと短く、幅は0.55m前後を測る。確認面からの深さは0.12㎝程である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は図示できなかったが、粘土質の灰色土一層のみであった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が無く、重複する遺構との関係も不明であるため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第12号溝跡（第31図）

平成21年度調査第２区37－140グリッドに位置する。北西部で１号河川跡と重複するが、新旧関係は不明である。南東部では同時期と思われる13号溝跡に接続する。

北西から南東方向に走る。検出された長さは1.98mと短く、幅は1.05m前後を測る。確認面からの深さは0.1mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰色粘土一層のみであり、13号溝跡の上層にも堆積していた。13号溝跡の覆土はレンズ状に堆積していたことから本溝跡も自然堆積と思われる。

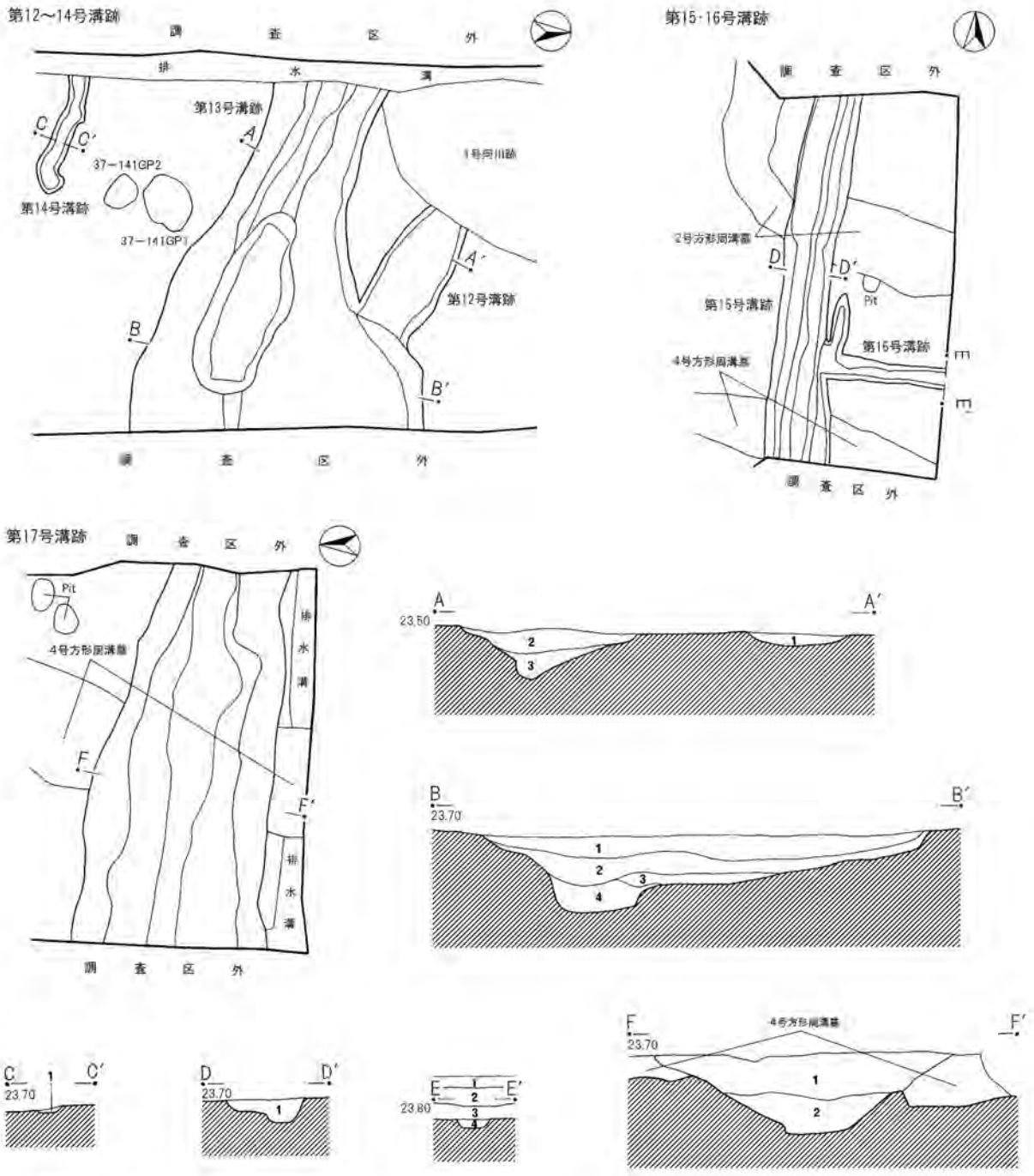
遺物が検出されなかったが、13号溝跡と同時期と思われることから近世としておきたい。

第13号溝跡（第31図）

平成21年度調査第２区37・38－140・141グリッドに位置する。北側で同時期と思われる12号溝跡が接続し、北西部では１号河川跡と若干重複するが、新旧関係は不明である。

北西から南東方向に走り、北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.62m、幅は北西部が1.6m前後で狭く、12号溝跡と接続する南東部は4.4mと幅広い。確認面からの深さは北西部が0.47mであり、中段に段を持つ。南東部は0.69mと深くなり、底面が土坑状を呈していた。覆土は４層（１～４層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第34図）は、瓦質土器鍋（13－１）、須恵器瓶（13－２）、古銭（13－３）、不明銅製品（13－４）、不明木製品（13－５）があるが、須恵器瓶、古銭は流れ込みと思われる。また写真のみの掲載であるが、種子桃も多数検出されている。



第12・13号溝跡
土層説明（AA′ BB′）
1 灰 色 粘 土：酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
2 暗緑灰色粘土：酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。
3 明 黄 褐 色 砂：酸化鉄、灰色粘土、マンガン粒多量含む。
4 青 黒 色 砂：灰白色粘土少量含む。

第14号溝跡
土層説明（CC′）
1 灰 色 土：砂質。灰白色砂多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第15号溝跡
土層説明（DD′）
1 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第16号溝跡
土層説明（EE′）
1 灰 色 土：耕作土。
2 黒 褐 色 土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
3 褐 灰 色 土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
4 褐 灰 色 土：酸化鉄、淡黄色粒、マンガン粒多量含む。

第17号溝跡
土層説明（FF′）
1 褐 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
2 緑 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

平面図：0 2m 1：100　断面図：0 2m 1：60

第31図　第12～17号溝跡

１は在地系瓦質土器鍋の口縁部片。口縁端部が内湾する。内外面ともに回転ナデ調整である。２は須恵器瓶の底部片。内外面ともに回転ナデ調整であるが、外面は部分的にヘラナデが施されている。末野産。３は政和通宝。摩滅が著しい。４は不明銅製品。片端が匙状に若干屈曲し、匙状屈曲部下が幅広となり、もう片端に向かって細くなっている。完形。５は尖った角錐状の不明木製品。片端を欠き、分かりづらいが円形の孔が穿たれている。

本溝跡の時期は近世と思われる。

第14号溝跡（第31図）

平成21年度調査第２区37・38－141グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、北側に12・13号溝跡が同方向に併走しており、これらの溝跡と同時期に存在した可能性が高い。

北西から南東方向にやや蛇行して走る。北西端以降は調査区外に延び、南東部は37－141グリッド内で終息する。検出された長さは1.98mと短く、幅は0.35m前後を測る。確認面からの深さは0.05mと浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は砂質の灰色土一層のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったが、12・13号溝跡と同時期と思われることから近世としておきたい。

第15号溝跡（第31図）

平成21年度調査第２区36－145･146グリッドに位置する。16号溝跡と２・４号方形周溝墓を切っている。

ほぼ南北方向に走り、南北ともに調査区外に延びる。検出された長さは5.66m、幅は0.8m前後を測る。西側にテラス状の段を持ち、東側が深い。確認面からの深さはテラス状の段までが0.13m、最も深い東側が0.23mを測る。覆土は粘土質のオリーブ黒色土一層のみであり、自然堆積と思われる。

出土遺物（第34図）は、瓦質土器鍋（15－１）、陶器甕（15－２）があり、この他にも流れ込みの弥生土器甕（15－３・４）が検出された。また写真のみの掲載であるが、種子桃も若干検出された。

１は在地系瓦質土器鍋の胴下部から底部。胴下部外面は指頭圧痕、底部及び内面はヘラナデ調整である。２は陶器甕の胴部片。外面に鉄釉が掛けられている。常滑産。３・４は弥生時代中期後半から後期初頭に収まる土器。３は頸部から胴上部にかけて、4は胴下部の破片である。３は頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴上部は無文で内面とともにヘラナデ調整であり、胴上部外面は斜位、内面は横位に施されている。

本溝跡の時期は近世と思われる。

第16号溝跡（第31図）

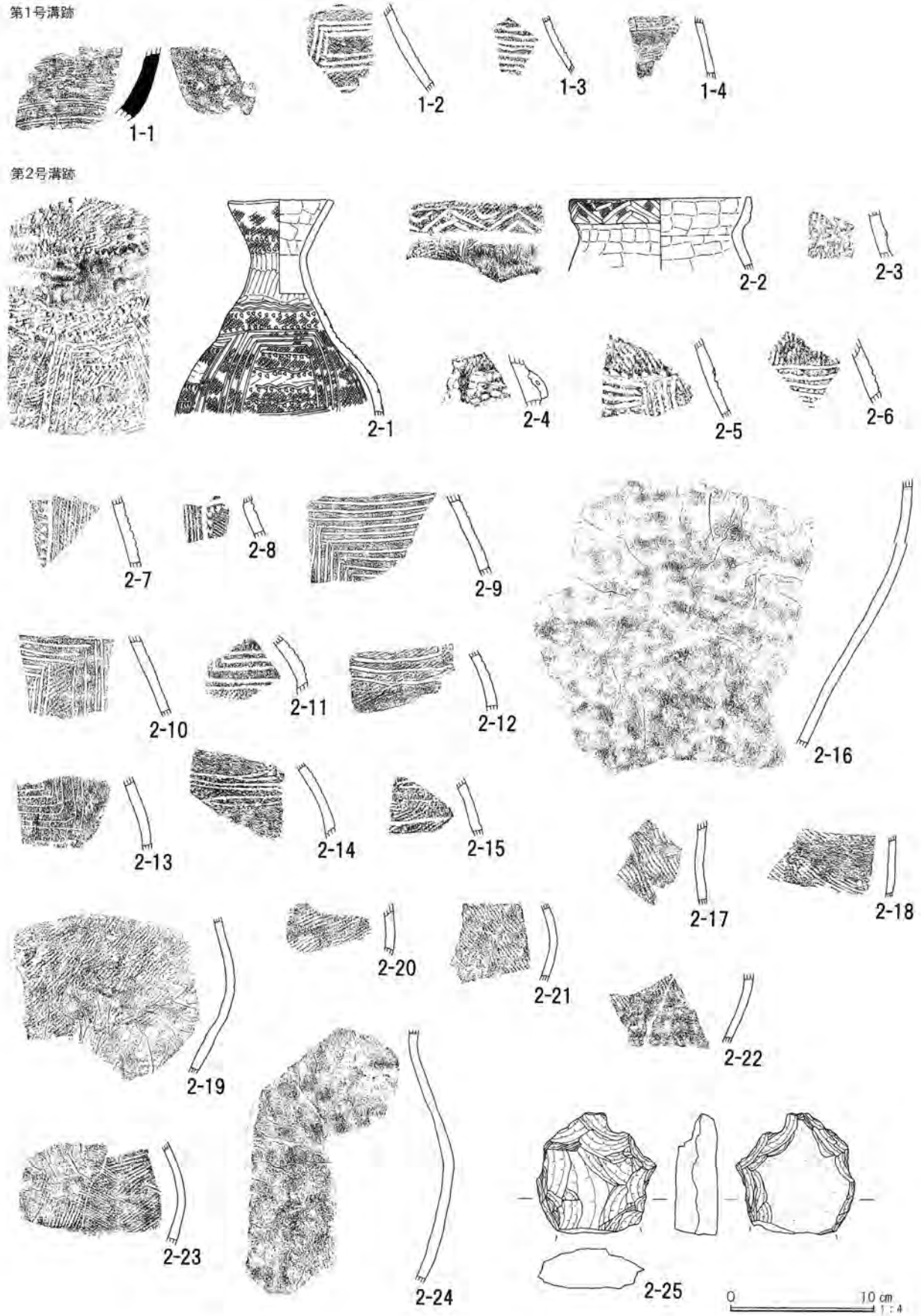
平成21年度調査第２区36－146グリッドに位置する。西側で15号溝跡に切られている。

ほぼ東西方向に走り、西端以降は調査区外にある。15号溝跡との重複箇所手前では北方向にもう一条派生している。検出された長さは東西方向が1.93m、北方向は0.97mと短い。幅はともに0.35m前後を測る。確認面からの深さは0.08mと浅く、断面形は逆台形状を呈する。覆土は褐灰色土一層のみであり、自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、弥生時代中期後半から後期初頭に収まる段階の土器小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半から後期初頭としておきたい。

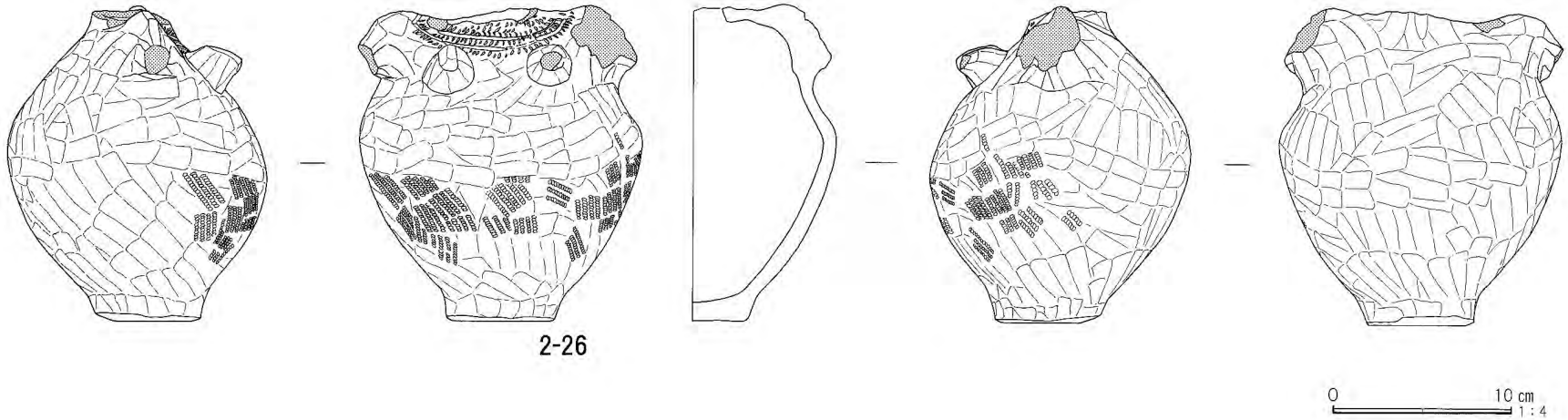
第17号溝跡（第31図）

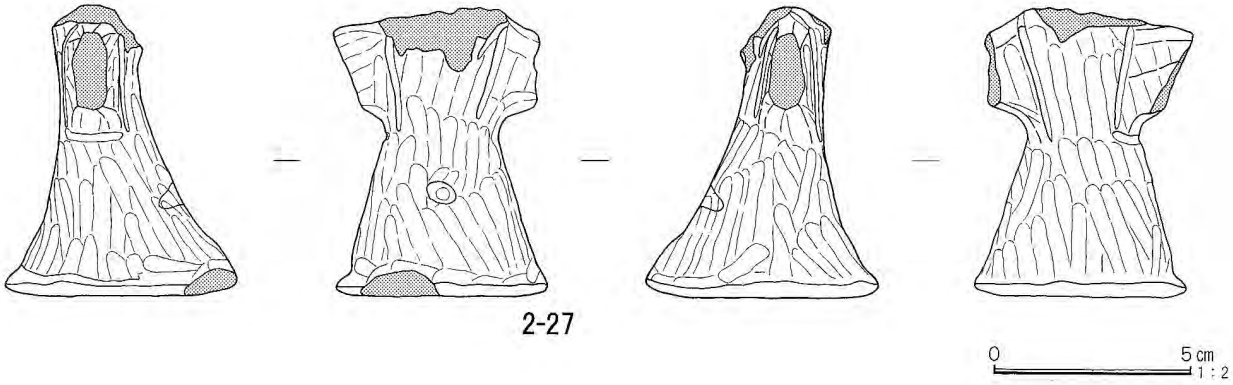
平成21年度調査第２区37・38－147・148グリッドに位置する。４号方形周溝墓を切っている。



第32図　溝跡出土遺物（1）

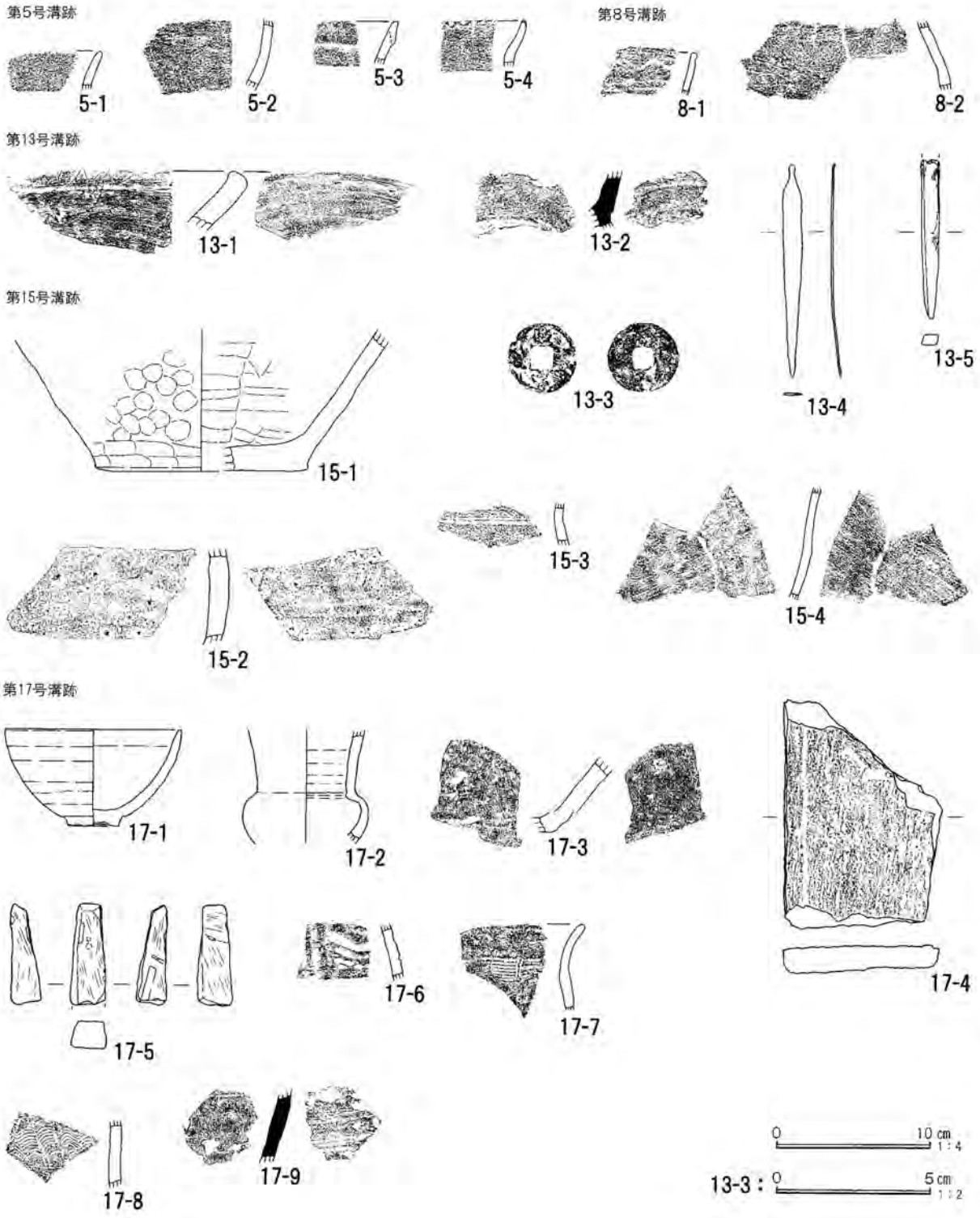
第2号溝跡





＝ 欠損箇所

第33図　溝跡出土遺物（2）



第34図　溝跡出土遺物（３）

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは5.82m、幅は西側が2.96m、東側が1.74mを測る。確認面からの深さは0.73mと深く、断面形は逆台形状を呈する。覆土は２層（１・２層）確認された。ともに厚く堆積しており、急速に埋没したと思われる。自然堆積。

出土遺物（第34図）は、陶器椀（17－１）、花器（17－２）、瓦質土器鍋（17－３）、板碑（17－４）、

第12表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	1号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AELN	青灰色	B	胴下部片	末野産。
1-2	1号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKM	灰黄褐色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
1-3	1号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
1-4	1号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	外面やや磨耗。
2-1	2号溝跡	弥生土器　壺	7.4	(15.3)	—	ABEIKN	灰褐色	B	口～胴80%	
2-2	2号溝跡	弥生土器　甕	(12.8)	(5.1)	—	ABCDEIN	にぶい黄橙色	B	口～頸40%	
2-3	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	褐灰色	B	肩部片	
2-4	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	灰黄色	B	肩部片	
2-5	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJK	灰黄褐色	B	肩部片	
2-6	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	肩部片	
2-7	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
2-8	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDI	灰黄色	B	胴上部片	
2-9	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	№2-10と同一個体。
2-10	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	黄灰色	B	胴上部片	№2-9と同一個体。
2-11	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
2-12	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴上部片	
2-13	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHI	暗灰黄色	B	胴上部片	
2-14	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
2-15	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIJK	灰黄褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
2-16	2号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
2-17	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	頸部片	
2-18	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴部片	
2-19	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	胴部片	外面やや磨耗、一部煤付着。
2-20	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴部片	
2-21	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIJK	灰黄褐色	B	胴部片	
2-22	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIJK	灰黄褐色	B	胴下部片	
2-23	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色	B	胴部片	
2-24	2号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい赤褐色	B	頸～胴下片	内外面やや磨耗。
2-25	2号溝跡	打製石斧	最大長(9.1)cm、最大幅(8.45)cm、最大厚(2.9)cm。重量(258.0)g。基部のみ残。粘板岩製。							
2-26	2号溝跡	土　偶	最大高(17.85)cm、最大幅15.9cm。重量(1,120)g。胎土:ABEHIKN。色調:にぶい黄橙色。焼成:B。肩一部･腕部欠。頸部以上欠?							
2-27	2号溝跡	土　偶	最大高(7.45)cm、最大幅5.4cm。重量(119)g。胎土:ABCIJKN。色調:灰黄褐色。焼成:B。頭部･腕部欠。							
5-1	5号溝跡	土師器　甕	—	—	—	ABHK	明赤褐色	B	口縁部片	内面磨耗顕著。
5-2	5号溝跡	土師器　甕	—	—	—	ABDEGHKN	明赤褐色	B	胴下部片	
5-3	5号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHN	淡黄色	B	口～頸部片	
5-4	5号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
8-1	8号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
8-2	8号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDMN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
13-1	13号溝跡	瓦質土器　鍋	—	—	—	—	黄灰色	B	口縁部片	
13-2	13号溝跡	須恵器　瓶	—	—	—	ALN	黄灰色	B	底部片	末野産。
13-3	13号溝跡	古　銭	最大径2.36cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量（1.9）g。ほぼ完形。「政和通寶」。北宋初鋳1111年。							
13-4	13号溝跡	不明銅製品	最大長14.1cm、最大幅1.2cm、最大厚0.15cm。重量11.8g。完形。片端匙状。							
13-5	13号溝跡	不明木製品	最大長(10.55)cm、最大幅1.15cm、最大厚(0.7)cm。重量(1.7)g。片端欠。円形孔有。							
15-1	15号溝跡	瓦質土器　鍋	—	(9.4)	(14.0)	—	黒色	B	胴～底30%	在地系。
15-2	15号溝跡	陶器　甕	—	—	—	—	灰褐色	B	胴部片	常滑産。外面鉄釉。
15-3	15号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	暗灰黄色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
15-4	15号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIKN	浅黄色	B	胴下部片	
17-1	17号溝跡	陶器　碗	(11.6)	6.4	(3.4)	—	黒褐色	A	25%	内面・口縁部外面鉄釉。瀬戸･美濃系。
17-2	17号溝跡	陶器　花器	—	(7.6)	—	—	灰オリーブ色	A	頸～胴30%	外面灰釉。瀬戸･美濃系。
17-3	17号溝跡	瓦質土器　鍋	—	—	—	—	青灰色	A	底部片	在地系。
17-4	17号溝跡	板　碑	最大長(15.4)cm、最大幅(10.45)cm、最大厚(1.9)cm。重量(466.0)g。側面一部のみ残。緑泥片岩製。							
17-5	17号溝跡	砥　石	最大長(6.7)cm、最大幅(2.35)cm、最大厚(2.0)cm。重量(34.2)g。片端欠。砂岩製。							
17-6	17号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKM	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
17-7	17号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ADIKN	灰褐色	B	口～胴上片	
17-8	17号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIJKN	暗褐色	B	胴部片	内外面やや磨耗。
17-9	17号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABCHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。

砥石（17－５）があり、この他に流れ込みの弥生土器壺（17－６）、甕（17－７・８）、須恵器甕（17－９）も検出された。また写真のみの掲載であるが、獣骨一点と種子桃が多数検出されている。

１は陶器天目茶碗。口縁部が外反しない。内面と外面は体部まで鉄釉が掛けられている。２は陶器花器中段の部位。外面には灰釉が掛けられている。１・２は瀬戸･美濃系。３は在地系瓦質土器鍋の底部片。外面は指頭圧痕とヘラナデ、内面は回転ナデ調整である。４は緑泥片岩製板碑の側部。破片であり、詳細については不明と言わざるを得ない。５は砥石。砂岩製。片端を欠く。四面使用している。

６～８は弥生時代中期後半から後期初頭に収まる土器。６は壺の胴上部片。太い沈線で重四角文と思われる文様が描かれており、区画内に同一工具による波状沈線と半円形の刺突列が施文されている。内面は横位のヘラナデ調整である。７・８は甕で７は口縁部から胴上部にかけて、８は胴部中段の破片。ともに７本一単位の櫛歯状工具により文様が描かれており、７は頸部に簾状文、８は波状文が描かれている。７は頸部以外が無文で内面とともに横位のヘラナデ調整が施されている。８も内面は横位のヘラナデ調整である。9は古墳時代後期以降の須恵器の胴下部片。内外面ともに回転ナデ調整である。末野産。

本溝跡の時期は近世と思われる。

4　土 坑

第１号土坑（第35図）

平成19年度調査第１区51－153・154グリッドに位置する。１号住居跡を切っており、東端で１号溝跡に切られている。検出できたのは一部であり、大半は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は約0.8m、東西は約2.8mである。平面プランは正方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは最も深い部分で0.62mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は東側が窪む。覆土は13層（５～17層）確認された。粘土質の灰色土が主体となり、焼土や炭化物を含む傾向にあった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第37図）は、弥生土器壺（１－１～５）、甕（１－６・７）があるが、１号住居跡からの流れ込みと思われる。

１～５は壺。１・２は肩部片。１は縄目を縦位に施文したＬＲ単節縄文下に半円形の刺突列が刻まれた段が二段巡る。段の間は無文で横位のヘラナデ調整である。２はやや細い沈線で重四角文が描かれ、区画内にも同一工具で平行沈線が描かれている。3は胴上部片。重四角文と思われるやや太い沈線が垂下する。４は胴部中段の破片。太い沈線で弧線文が描かれており、以下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。５は肩部から胴上部にかけての破片。肩部に６本一単位の櫛歯状工具による波状文が間隔を空けて垂下し、以下は細い平行沈線が等間隔で巡る。波状文間は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。

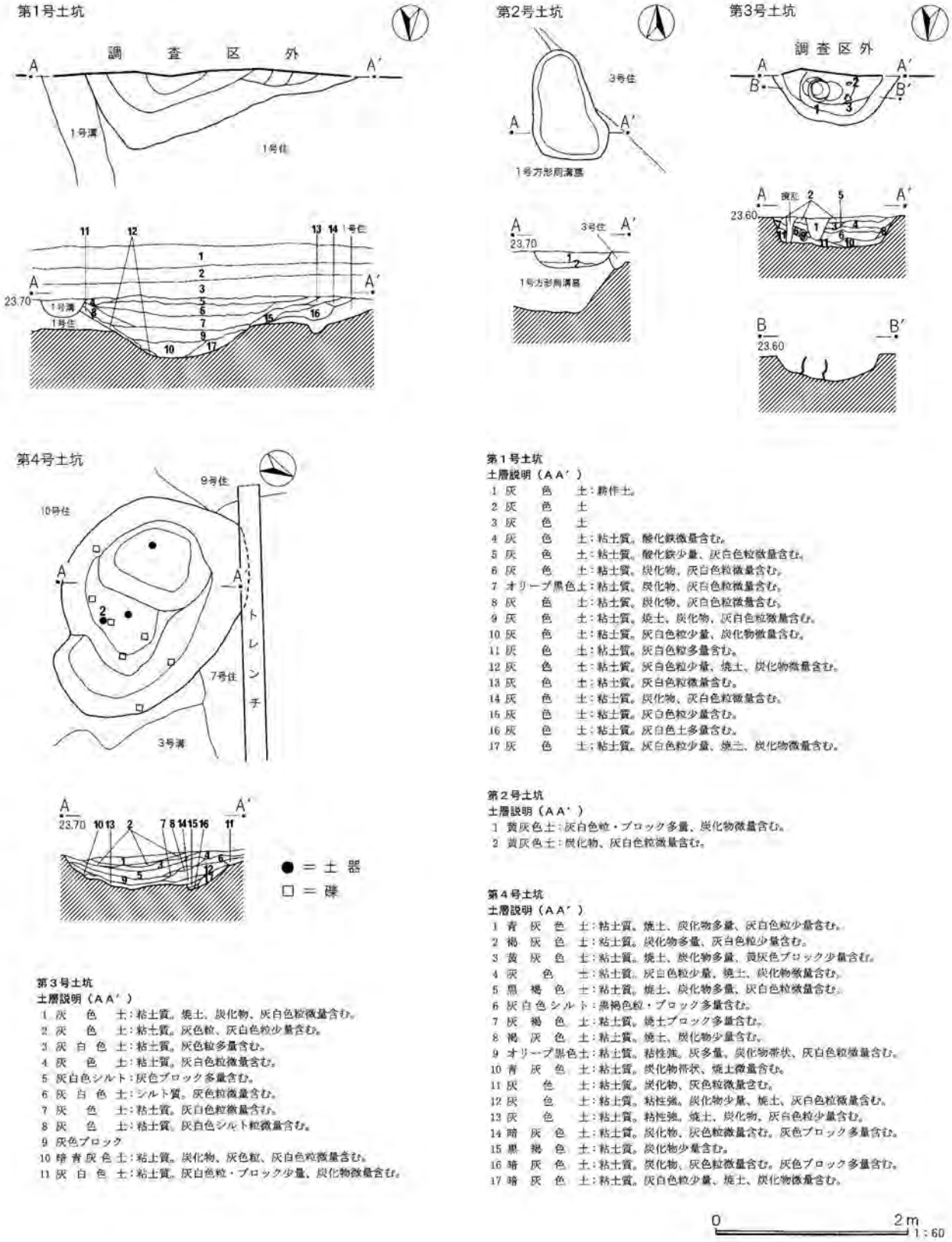
壺破片１～５の内面は２が横・斜位、３が斜位、その他は横位のヘラナデ調整である。

６・７は甕。６は口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁にＬＲ単節縄文が施文されている。７は胴上部片。櫛歯状工具による縦位の羽状文が施文されている。単位は不明である。甕破片６・７の内面は、ともに横位のヘラナデ調整である。

本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代中期後半以降、１号溝跡より古い古墳時代後期以前としか言えない。

第２号土坑（第35図）

平成19年度調査第１区49－152・153グリッドに位置する。１号方形周溝墓の覆土上層に掘り込まれており、北東部では３号住居跡を切っている。



第1号土坑
土層説明（AA′）

1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土
3 灰　色　土
4 灰　色　土：粘土質。酸化鉄微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。炭化物。灰白色粒微量含む。
7 オリーブ黒色土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。炭化物。灰白色粒微量含む。
9 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。
12 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
13 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
14 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
15 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
16 灰　色　土：粘土質。灰白色土多量含む。
17 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。

第2号土坑
土層説明（AA′）

1 黄灰色土：灰白色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
2 黄灰色土：炭化物、灰白色粒微量含む。

第4号土坑
土層説明（AA′）

1 青　灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物多量、灰白色粒少量含む。
2 褐　灰　色　土：粘土質。炭化物多量、灰白色粒少量含む。
3 黄　灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物多量、黄灰色ブロック少量含む。
4 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。
5 黒　褐　色　土：粘土質。焼土、炭化物多量、灰白色粒微量含む。
6 灰白色シルト：黒褐色粒・ブロック多量含む。
7 灰　褐　色　土：粘土質。焼土ブロック多量含む。
8 褐　灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物少量含む。
9 オリーブ黒色土：粘土質。粘性強。炭多量、炭化物帯状、灰白色粒微量含む。
10 青　灰　色　土：粘土質。炭化物帯状、焼土微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。炭化物、灰色粒微量含む。
12 灰　色　土：粘土質。粘性強。炭化物少量、焼土、灰白色粒微量含む。
13 灰　色　土：粘土質。粘性強。焼土、炭化物。灰白色粒少量含む。
14 暗　灰　色　土：粘土質。炭化物、灰色粒微量含む。灰色ブロック多量含む。
15 黒　褐　色　土：粘土質。炭化物少量含む。
16 暗　灰　色　土：粘土質。炭化物、灰色粒微量含む。灰色ブロック多量含む。
17 暗　灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、焼土、炭化物微量含む。

第3号土坑
土層説明（AA′）

1 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。灰色粒、灰白色粒少量含む。
3 灰　白　色　土：粘土質。灰色粒多量含む。
4 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
5 灰白色シルト：灰色ブロック多量含む。
6 灰　白　色　土：シルト質。灰色粒微量含む。
7 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。灰白色シルト粒微量含む。
9 灰色ブロック
10 暗青灰色土：粘土質。炭化物、灰色粒、灰白色粒微量含む。
11 灰　白　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。

第35図　第１～４号土坑

長軸1.15m、短軸0.77mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は２層（１・２層）からなる。上層の１層にはブロッ

ク土を多量含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は弥生時代後期初頭以降としか言えない。

第３号土坑（第35図）

平成19年度調査第１区47－154グリッドに位置する。他の遺構と重複せず、南側が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は0.55m、東西は1.33mを測る。平面プランは円形ないし楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.32mを測る。立ち上がりはやや鋭角で底面はほぼ平坦であった。覆土は11層（１～11層）確認された。ピットと思われる１層は後世のものと思われる。その他はブロック土を含む層もあるが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第37図）は、弥生土器壺（３－２）、甕（３－１・３～５）がある。１は東側底面直上から逆位の状態で出土した。２・３は１の西側からの検出である。

２は壺の胴上部片。磨耗が著しいが、やや太い沈線で平行沈線下に重菱形文が描かれており、区画内外に半円形の刺突が刻まれている。内面は斜位のヘラナデ調整である。

１・３～５は甕。１・３・４は文様構成が同じであるが、同一個体ではない。１は底部付近を欠くが、残存状態は良好である。口縁部は緩やかに開き、頸部はすぼまる。胴部は中段よりやや上が膨らむ。最大径を口縁部に持つが、胴部中段の径とあまり変わらない。文様は口縁端部にＲＬ単節縄文、以下は５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が斜位に施文されている。頸部付近は蜜であるが、以下は雑で文様施文前の横位のヘラナデ調整が所々見えている。３は頸部片、４は口縁部から胴上部にかけての破片である。ともに頸部以下に櫛歯状工具による多条沈線が弧状に垂下する。単位は３が５本、４は４本である。４は複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文されている。５は胴下部片。斜位のハメケ調整である。甕１・３～５の内面はすべてヘラナデ調整であり、５のみ斜位、その他は横位に施されている。

本土坑の時期は、弥生時代中期中頃と思われる。

第４号土坑（第35図）

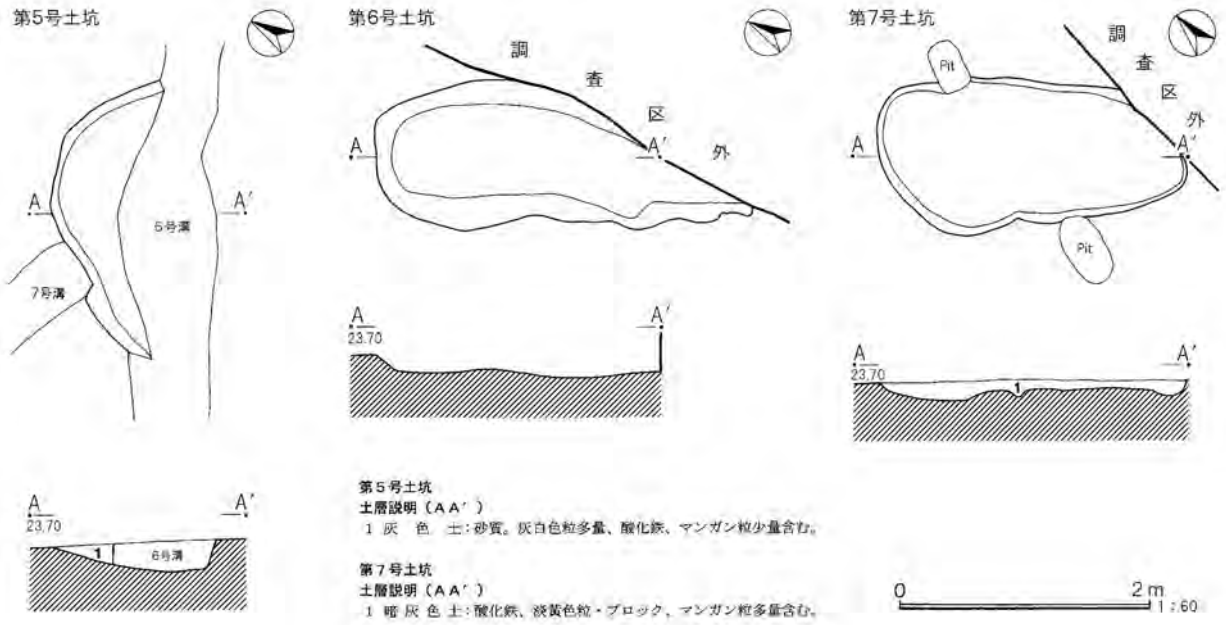
平成19年度調査第１区45・46－153グリッドに位置する。10号住居跡を切っており、北側は７号住居跡、西側は９号住居跡の南東隅付近が一部重複している。９号住居跡とは出土遺物の比較から本土坑が新しいが、７号住居跡はほぼ同時期と思われ、判断が難しい。

長軸2.47m、短軸1.8mのいびつな楕円形を呈する。擂り鉢状を呈するが、東側にテラス状の段を持ち、西側が最も深い。確認面からの深さは0.35mを測る。覆土は17層（１～17層）確認された。焼土や炭化物を多く含む傾向にあったが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第37図）は、須恵器壺（４－１）、土師器坏（４－２）、甕（４－３・４）があり、この他に流れ込みの弥生土器壺（４－６～９）、甕（４－５）も検出された。２はほぼ中央のテラスから出土した。

１は須恵器壺の胴部中段の破片。内外面ともに回転ナデ調整であり、外面上位に自然釉が付着している。２は土師器坏蓋模倣坏。器壁が厚く、平底に近い。口縁部から体部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整である。３・４は長胴甕。３は口縁部から胴上部にかけての部位。最大径を持つ口縁部がやや外反しながら開く。器壁が厚い。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部は外面が縦･斜位のヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。４は胴下部から底部にかけての部位。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。

５～９は弥生時代中期後半の土器。６～９は壺。６が肩部、７・８は胴上部、９は胴部中段の破片である。



第36図　第５～７号土坑

６・７は細い沈線で鋸歯文が描かれている。６は鋸歯文上が無文であるが、下はＬＲ単節縄文が充填され、弱い段を挟んでその下に円形の刺突列が三列刻まれている。７は地文にＬＲ単節縄文が施文されており、鋸歯文下にやや太い平行沈線が巡る。８は３本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が横位に複数巡り、その下は磨耗が著しいため定かではないが、無節Ｌと思われる縄文が施文されている。９はＬＲ単節縄文下にやや細い波状沈線が一条巡る。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。壺破片６～９の内面はすべてヘラナデ調整であり、６・９が横・斜位、７・８は横位に施されている。５は甕の底部。壺の可能性もある。内外面ともにヘラナデ調整であり、底部外面には木葉痕がみられた。

本土坑の時期は、７世紀後半と思われる。

第５号土坑（第36図）

平成21年度調査第２区32－138グリッドに位置する。南東部を６号溝跡に切られており、北西部では７号溝跡を切っている。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は0.55m、東西は2.22mを測り、平面プランは円形ないし楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは最深部で0.15mを測る。立ち上がりは緩やかで底面に向かって下る。覆土は砂質の灰色土一層のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

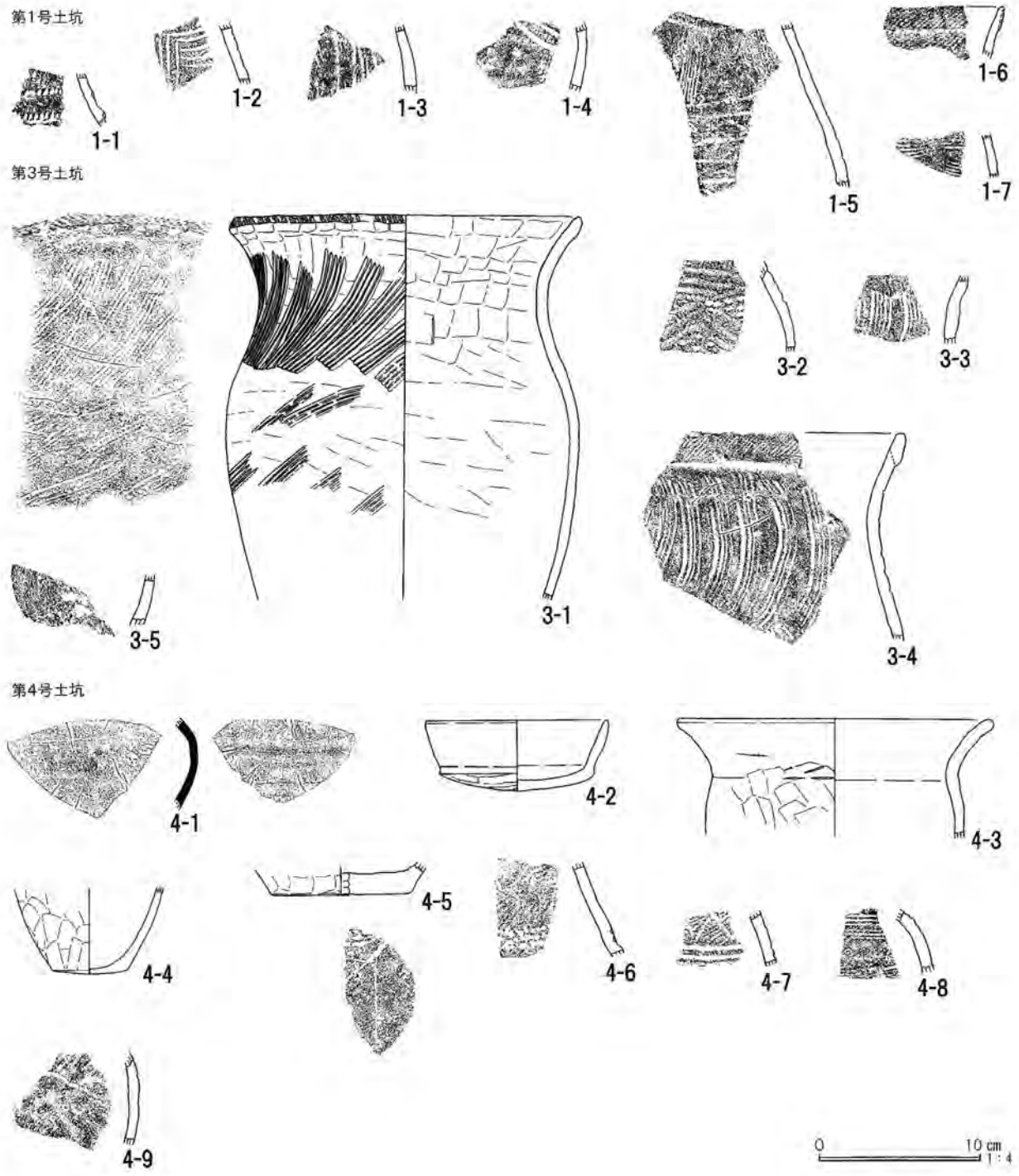
遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降、古墳時代前期以前としか言えない。

第６号土坑（第36図）

平成21年度調査第２区37－142グリッドに位置する。他の遺構と重複せず、南東部が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸３m以上、短軸1.15m前後の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.2m程である。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は図示できなかったが、灰色系の土にブロック土が多量含まれていたことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。



第37図　土坑出土遺物

第７号土坑（第36図）

平成21年度調査第２区37－143グリッドに位置する。南北の立ち上がりで一部時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。南東部の立ち上がり付近は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸2.45m程、短軸1.2m前後の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.16mとやや浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面は凹凸がみられた。覆土は暗灰色土一層のみである。ブロック土を多量含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。

第13表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	1号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
1-2	1号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	暗灰黄色	B	肩部片	
1-3	1号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
1-4	1号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴部片	
1-5	1号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	外面磨耗顕著。
1-6	1号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
1-7	1号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ADIKM	黒褐色	B	胴上部片	
3-1	3号土坑	弥生土器　甕	22.3	(24.3)	—	ABDIK	にぶい褐色	B	口～胴70%	内面一部･外面磨耗顕著。
3-2	3号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
3-3	3号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ABGHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	
3-4	3号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	
3-5	3号土坑	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGHIKN	明赤褐色	B	胴下部片	内外面磨耗顕著。
4-1	4号土坑	須恵器　壺	—	—	—	AB	褐灰色	B	胴部片	外面上部自然釉付着。
4-2	4号土坑	土師器　坏	11.5	4.4	—	AGHKN	黒色	A	ほぼ完形	
4-3	4号土坑	土師器　甕	(20.0)	(7.45)	—	ABDKN	にぶい黄橙色	B	口～胴20%	
4-4	4号土坑	土師器　甕	—	(5.5)	4.7	ABH	暗赤灰色	B	胴～底100%	
4-5	4号土坑	弥生土器　甕	—	(1.9)	(9.0)	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	底部45%	内面磨耗顕著。底部外面木葉痕有。
4-6	4号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
4-7	4号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
4-8	4号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHN	明黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
4-9	4号土坑	弥生土器　壺	—	—	—	ABEJN	にぶい黄橙色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。

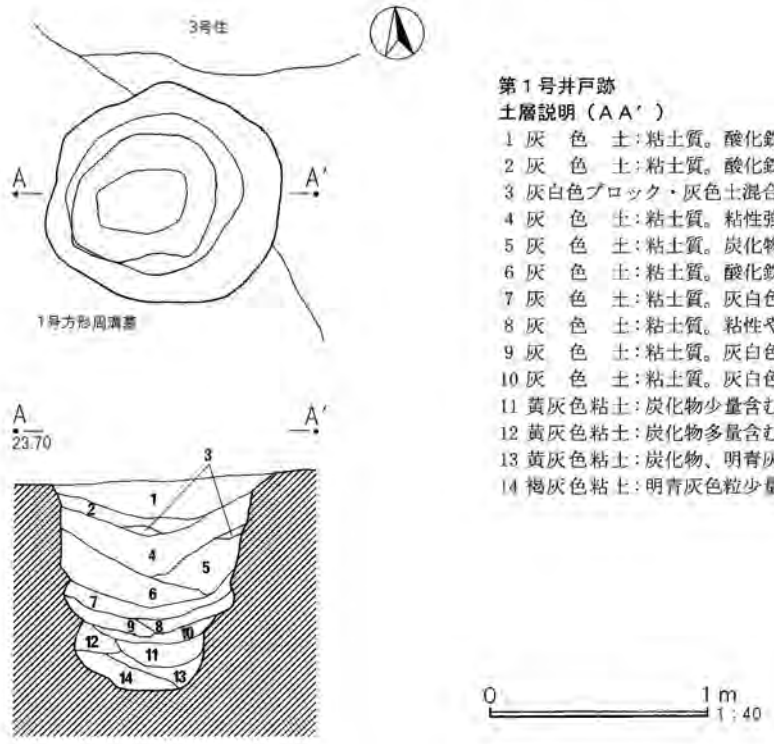
遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

5　井戸跡

第１号井戸跡（第38図）

平成19年度調査第１区49－153グリッドに位置する。１号方形周溝墓を切っている。

径1.05m前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは0.99mを測り、井戸にしては浅い。ほぼ垂直に掘り込まれていたが、中段付近は若干テラス状を呈する箇所もみられた。覆土は14層（１～14層）確



第１号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量、灰白色粒・ブロック微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、灰色粒、灰白色粒微量含む。
3 灰白色ブロック・灰色土混合層
4 灰　色　土：粘土質。粘性強。炭化物、灰白色ブロック微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。炭化物微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、炭化物微量含む。
7 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。粘性やや強。灰白色粒微量含む。
9 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
10 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。
11 黄灰色粘土：炭化物少量含む。
12 黄灰色粘土：炭化物多量含む。
13 黄灰色粘土：炭化物、明青灰色粒・ブロック少量含む。
14 褐灰色粘土：明青灰色粒少量、炭化物微量含む。

第38図　第１号井戸跡

認された。混入物が多くみられ、ブロック土を含む層も一部みられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。井筒等の痕跡は認められなかった。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、奈良･平安時代の土師器坏と甕の小片が検出されていることから、本井戸跡の時期は奈良･平安時代としか言えない。

6　方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第39図）

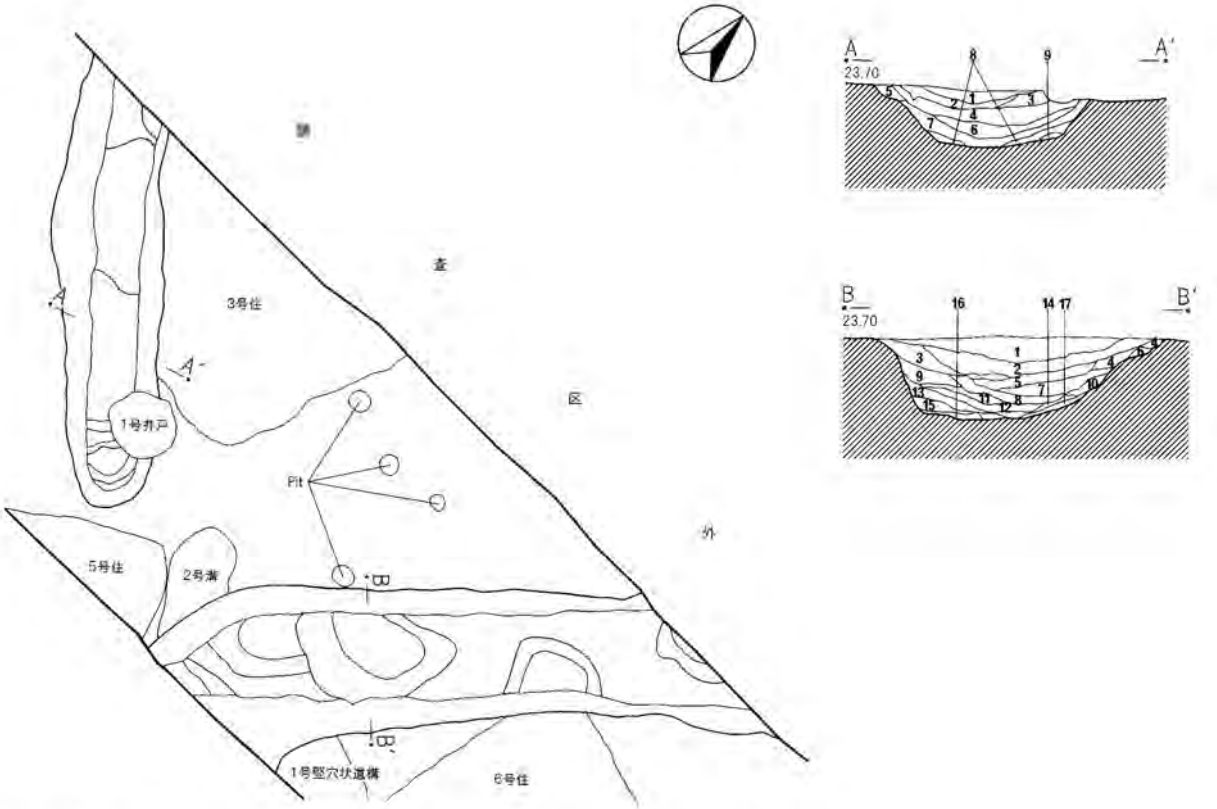
平成19年度調査第１区47～50－152～154グリッドに位置する。検出できたのは南西及び南東側の周溝のみであり、全形を検出できたわけではない。南西周溝は方台部に位置する３号住居跡を切っており、図では示さなかったが覆土上層を２号土坑に切られている。南東周溝は西端で方台部内に位置する２号溝跡を切っており、外側では１号竪穴状遺構を切り、６号住居跡に立ち上がり一部を切られている。また方台部内には時期不明のピットが4基みられたが、本遺構が古いと思われる。南西周溝は北側、南東周溝は両端の立ち上がりが調査区外にあり、北東及び北西側に相当する周溝も調査区外にある。

正確な規模は不明であるが､おそらく溝の外縁で７ｍ程になり､平面プランは方形を呈すると思われる。南西部に土橋を持っており、四隅の切れるタイプと思われる。検出された長さは南西周溝が6.6m、南東周溝が8.36mであるが、本来は８～９ｍ程であったと思われる。幅は南西が1.8m、南東が2.2m前後、確認面からの深さは南西が0.9m、南東が1.3m前後を測り、南東周溝が幅広で深い。断面形はいずれも逆台形を呈し、底面は凹凸がみられた。特に南東周溝では浅い土坑状の掘り込みがいくつか確認された。覆土は南西周溝が9層（ＡＡ′１～９層)、南東周溝は17層（ＢＢ′１～17層）確認された。ともに混入物が多く、特に南東周溝はブロック土を含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。南東周溝では最上層の1層に火山灰も認められた。

方台部はおそらく10.5m程の規模になると思われるが、他の遺構と重複し、大半が調査区外にあるため詳細は不明と言わざるを得ない。ただ図示しなかったが、調査区壁の土層断面観察では盛土や主体部等の痕跡は認められなかった。

出土遺物（第41～45図）は、弥生土器壺（１～16・27～70・77～98)、甕（17～24・71～76・99～137)、高坏（25・26)、打製石鏃（138）がある。土器が多数検出されているが、同じ弥生土器でも本遺構に伴わない時期のものも含まれており、大きく三段階（弥生時代中期中頃、中期後半、中期末から後期初頭）に分けることできる。このうち確実に伴うのは中期末から後期初頭に相当する壺１～10･27～31であるが、壺・甕の底部（11～24）と高坏の脚部（25・26）や中期後半とした土器（77～137）には伴うものがあるかもしれない。遺物は出土位置を図示できないものが多いが、伴うか否かにかかわらず南西周溝からの出土が多い。また伴う遺物で比較的残存状態の良い１～４・６・８～10は、１・２・10が南東周溝南東端付近の中層から、3・4・6・8・9が南西周溝の中層からほぼ等間隔で列状に出土した（第40図)。以下、出土遺物について時期別及び番号順に述べる。

１～10・27～31は弥生時代中期末から後期初頭にかけての壺。１～４・6～10は残存状態が比較的良好であり、文様を頸部にのみ持つものが多い。１は口縁部を欠く。頸部がほぼ直立し、最大径を持つ胴部中段が膨らむ。頸部は細い平行沈線が等間隔に三条巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されるが、粗雑で一部はみ出ている。頸部文様以外は全面ヘラミガキ調整で内面は頸部以下が実測不可能であったが、へ



第１号方形周溝墓

土層説明（ＡＡ′）

1 灰　色　土：炭化物、灰白色粒微量含む。
2 灰白色土：粘土質。炭化物微量含む。
3 黄灰色土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
4 灰　色　土：シルト質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
5 灰白色土：粘土質。黄灰色粒微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
7 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
8 灰白色土：粘土質。灰色粒少量含む。
9 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。

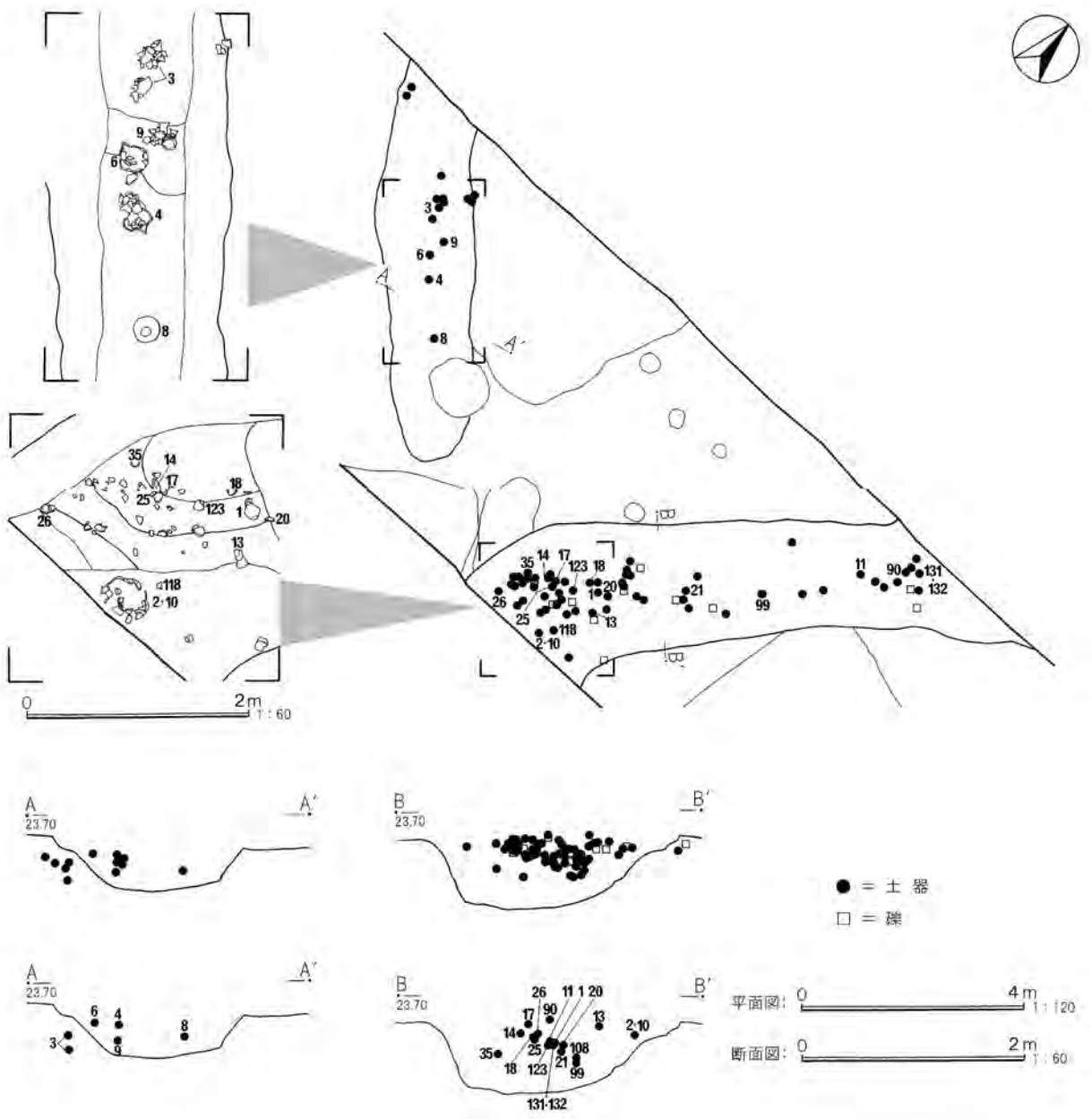
土層説明（ＢＢ′）

1 黄　灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量、火山灰、炭化物微量含む。
2 灰　　色　土：シルト質。灰白色粒多量、黄灰色粒・ブロック少量、焼土微量含む。
3 灰　　色　土：シルト質。灰白色粒・ブロック微量含む。
4 明オリーブ灰色シルト：灰色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
5 黄　灰　色　土：シルト質。黄灰色ブロック多量、灰白色粒少量、焼土微量含む。
6 灰白色シルト：灰色粒多量、炭化物少量含む。
7 黄　灰　色　土：シルト質。灰白色シルト多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
8 灰　　色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒・ブロック微量含む。
9 黄　灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色ブロック微量含む。
10 黄　灰　色　土：シルト質。炭化物微量含む。
11 灰　　色　土：粘土質。焼土、灰白色粒多量、炭化物微量含む。
12 灰　　色　土：粘土質。明オリーブ灰色粒・ブロック下層に多量、炭化物微量含む。
13 灰　　色　土：シルト質。黄灰色ブロック、灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
14 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
15 灰　白　色　土：粘土質。炭化物微量含む。
16 灰　　色　土：粘土質。灰色シルト多量含む。
17 灰白色シルト：灰色粒・ブロック多量含む。

平面図：0　4m　1：120
断面図：0　2m　1：60

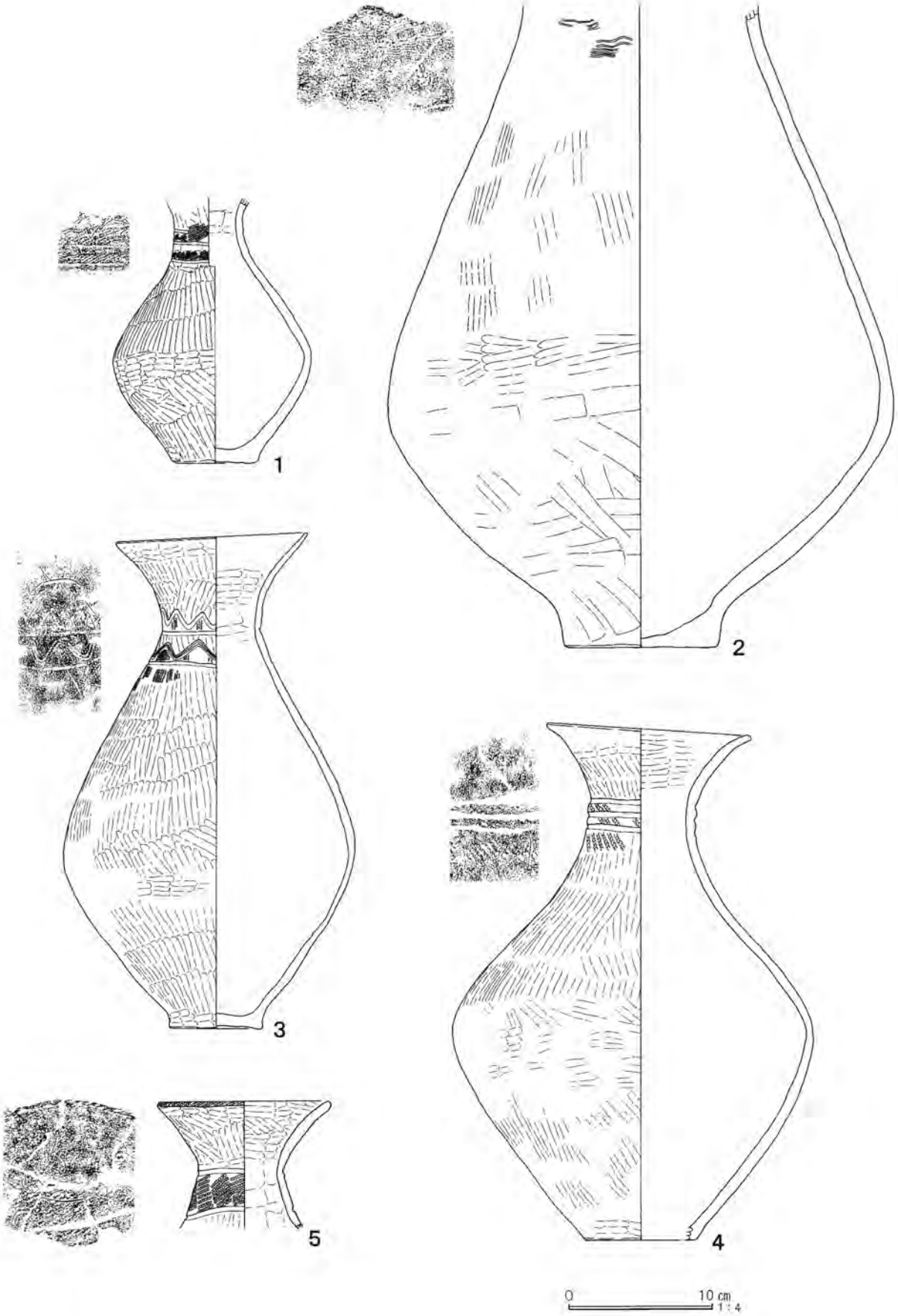
第39図　第１号方形周溝墓

ラナデ調整である。2は口縁部から頸部上位を欠く。肩が張らず、胴部中段下の最大径まで緩やかに下る。磨耗が著しいため一部のみの確認であるが、頸部には単位不明の櫛歯状工具による波状文が巡る。頸部文様以下は最大径を持つ胴部中段までがヘラミガキ、以下はヘラナデ調整である。内面は磨耗顕著により図示できなかったが、ヘラナデ調整である。３・４は唯一全形を知り得る壺。口縁部が大きく開くが、３はほぼ直線的、４はやや外反しながら開く。頸部はほぼ直立し、胴部は３がやや下、４はほぼ中段が膨らみ、最大径を持つ。頸部文様は３が波状及び平行沈線が交互に巡るが、上の波状及び平行沈線は一本描でやや太く、下の波状文のみ２本一単位の櫛歯状工具により描かれている。波状及び最下の平行沈線下にはカナムグラ系の擬縄文が粗雑に施文されている。４は太い平行沈線を等間隔に三条巡らせ、平行沈線間と最下の沈線下にＲＬ単節縄文が粗雑に施文されている。上の平行沈線間は突帯状を呈する。

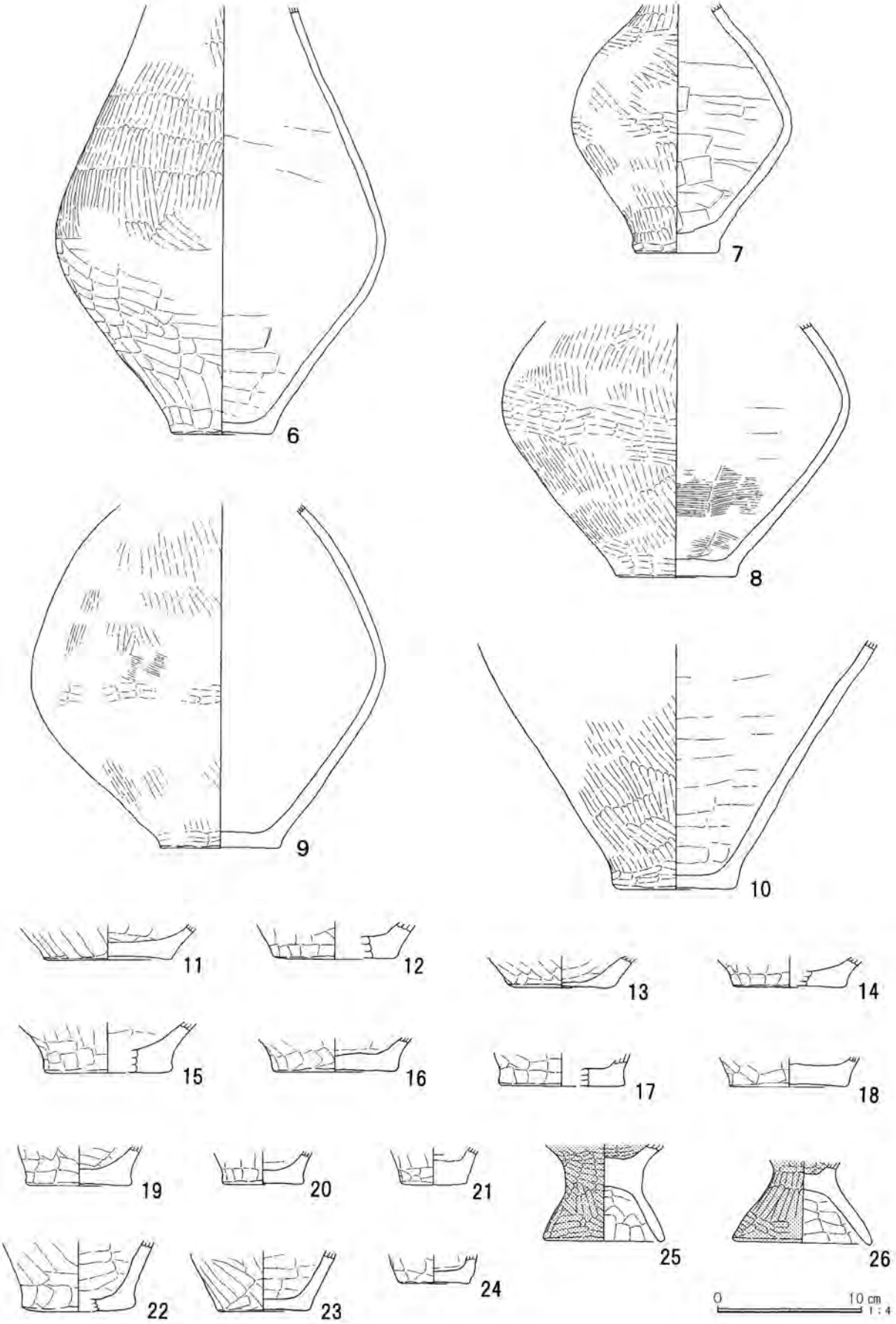


第40図　第１号方形周溝墓遺物出土状況

３・４ともに頸部文様以外は全面ヘラミガキ調整、内面は口縁部から頸部がヘラミガキ、頸部以下は実測不可能であったが、ヘラナデ調整である。５は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部はやや外反しながら大きく開き、頸部はほぼ直立する。文様は口縁端部と頸部のやや太い平行沈線間にＬＲ単節縄文が施文されている。無文部は口縁部内面とともにヘラミガキ調整、頸部内面以下はヘラナデ調整である。６～９は肩部ないし胴上部から底部、10は胴下部から底部にかけての部位である。６は肩が張らず、胴部中段下の最大径まで緩やかに下り、２に似ている。７～９はやや算盤玉状を呈し、最大径を中段に持つ。すべて無文で外面はヘラミガキ調整が主体となるが、６のみ胴部中段までがヘラミガキ、以下はヘラナデ調整であり、調整技法も２と同じである。内面は磨耗が著しいため図示できなかったものもあるが、ハケメの８以外はすべてヘラナデ調整である。



第41図　第１号方形周溝墓出土遺物（１）



第42図　第１号方形周溝墓出土遺物（２）

27は口縁部片。内面にのみ文様があり、端部にやや細い沈線で鋸歯文が描かれ、上の区画内に円形の刺突が刻まれている。外面は無文で縦･斜位のヘラミガキ調整であり、内外面ともに赤彩が施されているが、大半は剥落している。28は頸部片。太い平行沈線が巡る。無文部は横･斜位のヘラナデ調整である。29～31は肩部片。29はやや細い平行沈線下が無文で縦･斜位のヘラナデ調整が施されている。30・31は４本一単位の櫛歯状工具により鋸歯文に近い波状文が描かれている。壺破片28～31の内面はすべてヘラナデ調整であり、30のみ横・斜位、その他はすべて横位に施されている。

11～16は壺の底部、17～24は甕の底部ないし胴下部から底部。前者は胴下部付近が膨らむことから、後者は膨らまないことから壺と甕に分類したが、異なる可能性もある。いずれも内外面ともにヘラナデ調整である。25・26は高坏の接合部から脚部にかけての部位。ともに坏部内面及び外面がヘラミガキ調整で赤彩が施されているが、大半は剥落している。脚部内面はヘラナデ調整である。前述のとおり、11～26については本遺構に伴うものがあるかもしれない。

32～76は弥生時代中期中頃の土器。南西周溝出土のものは、３号住居跡からの流れ込みと思われる。

32～70は壺。32は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部の開きが小さく、頸部はほぼ直立する。ＲＬ単節縄文が全面に施文されている。内面はヘラナデ調整である。33・34は口縁部片。33は全面に半円形の刺突が刻まれている。34は複合口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。

35～48は沈線で重四角文が描かれる一群。横位に巡るものは平行沈線の可能性もある。35～38は肩部、39～47は胴上部、48のみ胴部中段の破片である。35は太い沈線で描かれた重四角文上に山形文が描かれており、山形文上にＬＲ単節縄文が施文されている。重四角文区画内には５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が垂下し、脇に円形の刺突が刻まれている。36はやや細い沈線が横位に巡り、区画内に円形の刺突列が複数刻まれている。37は横位に巡る半円形の刺突列下にやや太い沈線で描かれている。38はやや太い沈線で描かれた重四角文上が無文で横位のヘラナデ調整である。39はやや細い沈線で描かれた重四角文内に円形の刺突列が刻まれている。40・41は太い沈線で描かれており、40は区画内に円形の刺突が刻まれ、41は無節Ｌ地に重四角文が上下二段に描かれている。42・43は沈線がやや細く、43は区画内に同一工具による平行沈線が描かれている。44はやや太い沈線で描かれた重四角文下の段に円形の刺突列が刻まれており、以下は太い平行沈線が複数巡る。45はやや太い沈線で描かれた重四角文脇にＲＬ単節縄文が施文されている。46はＬＲ単節縄文地にやや太い沈線で描かれている。47は沈線の幅が一定していない。48は細い沈線が横位に複数巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

49・50は沈線で重三角文が描かれた肩部片。49は七条の沈線で描かれ、下の区画内にカナムグラ系の擬縄文が充填されている。50は重三角文頂点に小さい突起が付けられている。区画内は無文である。

51・52は平行沈線が主体となる一群。51は胴上部片。太い平行沈線が複数巡り、上位の平行沈線間に波状沈線が一条描かれている。52は肩部片。５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が上下に巡り、間に同一工具で縦位に短く施文されている。

53は非常に太い波状沈線が複数巡る肩部片。地文にＲＬ単節縄文が施文されている。

54～56は刺突列と沈線が施文された一群。54は肩部片、55・56は胴上部片である。54は垂下する太い沈線脇の上下に半円形の刺突列が刻まれ、間に無節Ｌが施文されている。55・56はやや細い平行沈線が複数巡り、55は平行沈線間に円形の刺突列、縦位の細い短沈線、ＬＲ単節縄文が施文されている。文様上下は無文で上が斜位、下は横位のヘラナデ調整である。56は分かりづらいが、平行沈線が四条巡り、

上下の沈線間に半円形の刺突列、真中の沈線間には波状沈線、以下は無節Ｌが施文されている。

57・58はやや細い沈線と縄文が施文された一群。57は胴上部、58は胴部中段付近の破片である。57は地文にＲＬ単節縄文が施文され、平行沈線下に同一工具による波状沈線が複数描かれている。58は斜位のハケメ調整後に格子状の文様が描かれているが、沈線間の間隔が異なる。間隔の広い方は無文であるが、狭い方にはＲＬ単節縄文が縄目を縦位に施文されている。

59～63は太い平行・波状沈線間に刺突が刻まれる一群。59は肩部、60は胴上部、61～63は胴部中段付近の破片である。59は平行沈線間真中に三条の波状沈線が描かれ、上下に円形の刺突が刻まれている。60は横位の沈線下に波状沈線が二条巡り、横位の沈線と上の波状沈線間に半円形の刺突、横位の沈線上と波状沈線間には無節Ｌが施文されている。61・62は波状沈線が横位に巡り、61は波状沈線下に円形、62は上に半円形の刺突が刻まれている。63は横位の沈線下に波状沈線が二条描かれ、波状沈線間は無文であるが、平行・波状沈線間には円形の刺突が刻まれている。

64～67は太い沈線で重菱形文が描かれ、区画内に刺突が刻まれる一群。64は胴部中段、65～67は胴上部の破片である。刺突は66のみ半円形であり、その他は円形を呈する。64・65は重菱形文の連結部にも刺突が刻まれている。64は重菱形文下に横位の沈線が一条巡り、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。66は沈線が浅いため分かりづらいが、斜位に複数描かれている。67は刺突が列状に刻まれている。

68は無節Ｒ地に刺突が刻まれた胴部中段の破片。刺突は小さい円形でランダムに刻まれている。69は細い沈線二条でΩ状の文様が描かれた胴上部片。Ω内にはＲＬ単節縄文が充填されている。70は太い沈線が横位に巡る胴下部片。沈線下は無文で横･斜位のヘラナデ調整が施されている。

壺破片33～70の内面はすべてヘラナデ調整であり、34～37・39・43～45・49・56・57・59・63・64・66・67・69は横・斜位、51・52は斜位、55は縦・斜位、その他は横位に施されている。

71～76は甕の破片。71～74は櫛歯状工具で文様が描かれる一群。71・74は口縁部から頸部にかけて、72は頸部付近、73は胴部中段の破片である。71は３本一単位の波状文が横位に複数巡る。72・73は横位の羽状文が描かれるが、72は間に同一工具による多条沈線が横位に巡る。74は口縁端部に刻みを持ち、以下に櫛歯状工具による多条沈線がやや弧状に施文されている。

75・76はＬＲ単節縄文が施文された口縁部から頸部の破片。75は口縁端部にも施文されている。

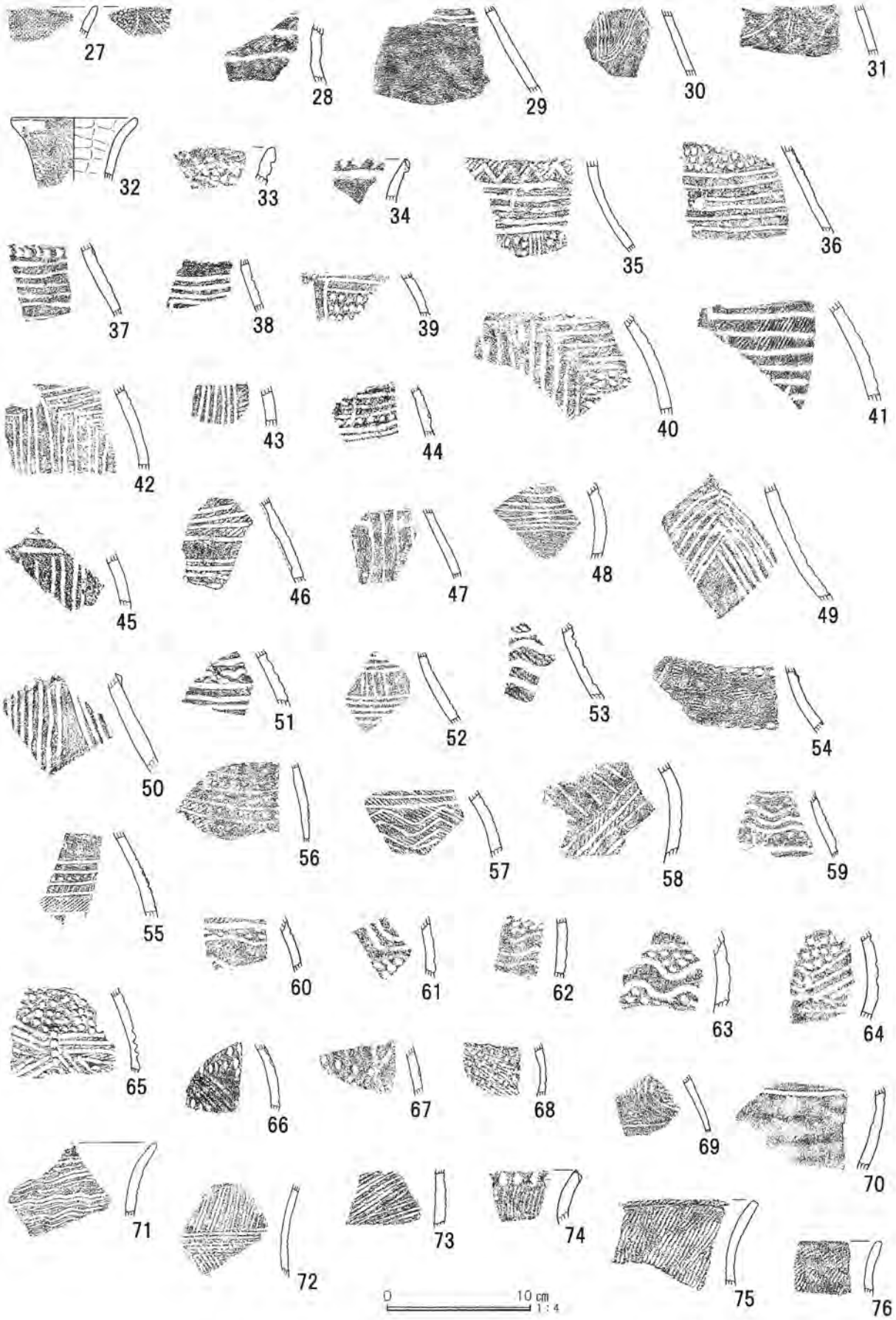
甕破片71～76の内面はすべてヘラナデ調整であり、71のみ斜位、その他は横位に施されている。

77～137は弥生時代中期後半の土器。南西周溝出土が多く、１・２号住居跡からの流れ込みと思われる。

77～98は壺。77は頸部。ヘラミガキ調整による無文部下にやや太い沈線と半円形の刺突列が巡り、間にＲＬ単節縄文が充填されている。以下は鋸歯文が描かれ、区画内外にＲＬ単節縄文が粗雑に施文されている。内面はヘラナデ調整である。

78は口縁部片。複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。

79～82は沈線で鋸歯文が描かれた肩部片。79は沈線が太い。磨耗が著しいため、縄文が施文されているか不明である。80・81は沈線が細く、鋸歯文下にＬＲ単節縄文が充填されている。ともに鋸歯文上は無文で縦･斜位のヘラナデ調整である。80は縄文下に半円形の刺突列が刻まれた弱い段が巡る。82は２本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が横位に巡り、下に複数の太い沈線で鋸歯文が描かれている。無文部は縦･斜位のヘラミガキ調整で鋸歯文外に赤彩が施されている。中期後半に含めたが、本遺構に伴う段階に含めた方が妥当かもしれない。



第43図　第１号方形周溝墓出土遺物（３）

83～86は弱い段に刺突列が刻まれた肩部片。刺突は86のみ円形、その他は半円形を呈する。83は刺突列上下が無文で横位のヘラナデ調整が施されている。84は刺突列上にＬＲ単節縄文が施文され、下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。85は刺突列下にＬＲ単節縄文と細い平行沈線四条が施文され、刺突列上と平行沈線下は無文で横位のヘラナデ調整である。86は弱い段に刻まれた刺突列上に細い沈線が複数垂下する。地文に無節Ｌが施文されている。刺突列下は重四角文と思われる文様が描かれている。

87～90は櫛歯状工具で波状文が描かれた一群。87は肩部、88・89は胴上部、90は胴部中段付近の破片である。87はＬＲ単節縄文下に３本一単位で密に複数巡る。88は２本一単位で複数巡るが、やや間隔を空けた波状文間に無節Ｌが施文されている。89は４本一単位で密に巡る。90はＬＲ単節縄文下に３本一単位で三段巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

91・92は平行沈線とＬＲ単節縄文が施文された胴上部片。91は平行沈線間に縄文と無文部を交互に配置している。92はＬＲ単節縄文下に２本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が巡る。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

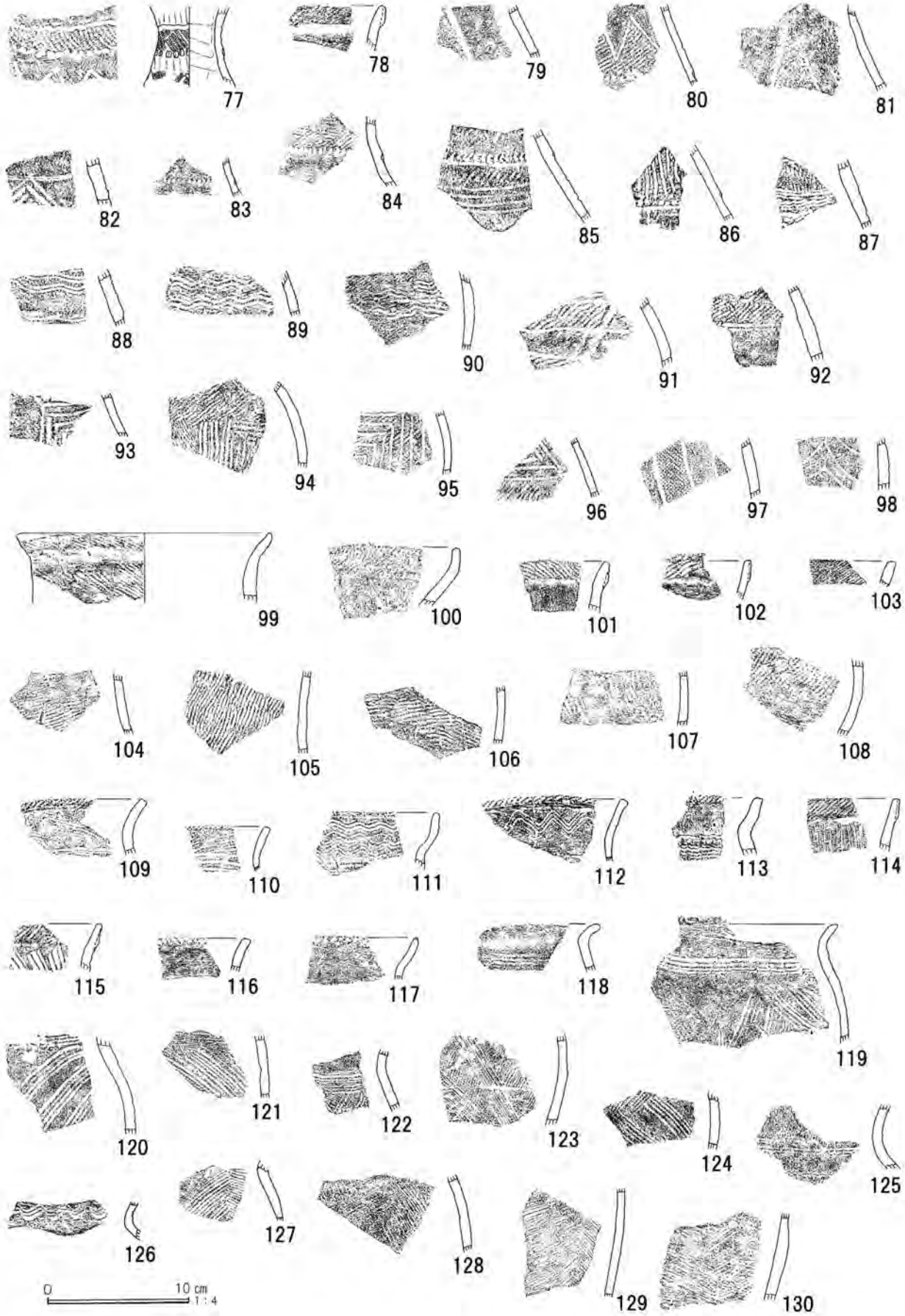
93～95は沈線で重四角文が描かれる一群。93は肩部片、94・95は胴上部片である。93はやや太い沈線で描かれた重四角文脇にＲＬ単節縄文が施文されている。94は２本一単位の櫛歯状工具で描かれており、区画外にＲＬ単節縄文が施文されている。95はＬＲ単節縄文地に細い沈線で描かれている。

96は細い沈線で重三角文が描かれた胴上部片。重三角文下には無節Ｌが施文されている。97はやや太い沈線で渦巻文が描かれた胴上部片。沈線間はＲＬ単節縄文施文部と無文部を交互に配置しており、縄文部には赤彩が施されている。98は複数の細い沈線で弧線文が描かれた胴部中段の破片。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。

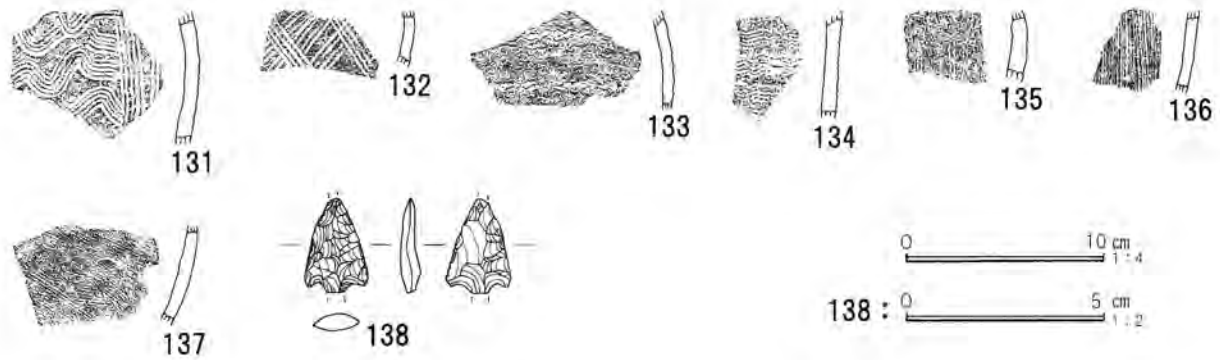
壺破片78～98の内面はすべてヘラナデ調整であり、80が縦位、83・85・86・91・92・94・97が横･斜位、96が斜位、その他は横位に施されている。

99～137は甕。99～108は縄文が施文される一群。99は口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部の開きが小さく、頸部以下はほぼ直線的に下る。全面にＲＬ単節縄文が施文されている。内面は磨耗顕著により図示できなかったが、ヘラナデ調整である。100～103は口縁部から頸部までに収まる破片である。100は受け口状を呈し、口縁部にのみＬＲ単節縄文が施文され、頸部は無文で縦･斜位のヘラナデ調整である。101・102は複合口縁であり、101はＲＬ、102はＬＲ単節縄文が施文されている。頸部は無文で101が横･縦位、102は横位のヘラナデ調整である。103はＬＲ単節縄文が施文されている。104は頸部から胴上部にかけて、105は頸部、106・107は胴部中段、108は胴下部の破片。107のみＲＬ、その他はＬＲ単節縄文である。104は頸部、108は縄文下が無文で104は横･斜位、108は横位のヘラナデ調整である。

109～115は縄文と櫛歯状工具で文様が描かれる一群。すべて口縁部から頸部にかけての破片である。111・113は受け口状を呈し、114・115は複合口縁である。109～113は口縁端部に縄文が施文され、以下に櫛歯状工具で文様が描かれている。縄文は111のみＲＬ、その他はＬＲ単節縄文である。109は口縁部が無文で斜位のハケメ調整である。頸部は単位不明であるが、櫛歯状工具による簾状文が巡る。110は口縁部にもＬＲ単節縄文が施文され、頸部にはやや細い平行沈線が複数巡る。111・112は口縁部に櫛歯状工具による波状文が描かれ、頸部に簾状文が巡る。櫛歯状工具の単位と波状文は、111が2本で三段、112が3本で一段のみ巡る。113は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。頸部は４本一単位の波状文が複数巡る。114・115は複合口縁部に無節Ｌが施文され、以下に櫛歯状工具が114は縦位、115は斜位



第44図　第１号方形周溝墓出土遺物（４）



第45図　第１号方形周溝墓出土遺物（５）

に施文されている。114は単位不明であるが、ハケメに近い。115の単位は３本である。

116・117は口縁端部にのみ文様が施文されているが、後述する櫛歯状工具で文様が描かれる一群に含まれるかもしれない。116は口縁部片、117は口縁部から頸部にかけての破片である。116は口縁端部にＲＬ単節縄文、117は刻みが施文されており、以下は無文でともに横位のヘラナデ調整である。

118～134は櫛歯状工具で文様が描かれる一群。118・119は口縁部から頸部ないし胴上部にかけての破片であり、頸部に簾状文が巡る。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整であるが、119は端部にＲＬ単節縄文が施文されている。櫛歯状工具の単位は118が不明であるが、119は４本である。119は胴部に同一工具で縦位の羽状文に近い文様が描かれているが、粗雑であることから本遺構に伴う段階に含めた方が良いかもしれない。120～124は胴部に横位の羽状文が描かれている。120～122は頸部から胴上部にかけて、123・124は胴部中段付近の破片である。櫛歯状工具の単位は120が４本、121・123は不明、122は３本、124は５本である。120～122は頸部に同一工具で簾状文が描かれており、122は簾状文上の頸部が無文で横位のヘラナデ調整である。123は羽状文下に斜位のハケメ調整が施されている。125・126は波状文が巡る頸部片。単位は125が５本、126は３本である。125は頸部に同一工具による簾状文が巡り、簾状文上の頸部は無文で斜位のヘラナデ調整である。127～130は胴部に縦位の羽状文が描かれている。127・128は胴上部片、129・130は胴下部片である。櫛歯状工具の単位は不明であるが、いずれも密に施文されている。131は垂下する櫛歯状工具による多条沈線脇に同一工具で波状文が複数描かれた胴部中段の破片。単位は６本であり、丁寧に描かれている。132は斜格子文が描かれた胴部中段の破片。単位は４本である。133・134は波状文が横位に複数巡る。133は胴上部、134は胴部中段の破片である。単位は133が５本、134は４本である。133はやや間隔を空けて、134は密に描かれている。

135～137はハケメ調整による一群。135は胴部中段、136・137は胴下部の破片である。135・136は縦位、137は斜位に施されている。

甕破片100～137の内面はすべてヘラナデ調整であり、104・108・109・114・115・119～121・128・137が横・斜位、105・124・136が斜位、129が縦・斜位、その他は横位に施されている。

138は打製の有茎石鏃。刃部先端及び基部を欠く。ホルンフェルス製。

本遺構の時期は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての段階と思われる。

第14表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	—	(18.8)	(6.1)	ABIN	黒色	B	頸～底90%	南東周溝出土。
2	弥生土器　壺	—	(45.6)	10.9	AIN	橙色	B	頸～底60%	南東周溝出土。内外面剥離・磨耗顕著。
3	弥生土器　壺	(15.5)	35.7	6.5	ABCIKN	橙色	B	70%	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
4	弥生土器　壺	(14.5)	36.7	(8.0)	ABDIKN	浅黄橙色	B	70%	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
5	弥生土器　壺	(12.3)	(9.1)		ABCHKN	浅黄色	B	口～頸80%	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
6	弥生土器　壺	—	(30.2)	7.0	ABHIK	褐灰色	B	肩～底70%	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
7	弥生土器　壺	—	(17.8)	5.8	BDEIK	にぶい黄橙色	B	肩～底80%	南西周溝出土。外面磨耗顕著
8	弥生土器　壺	—	(18.2)	8.2	ABDHN	橙色	B	胴～底100%	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
9	弥生土器　壺	—	(24.3)	8.3	ABDIN	浅黄橙色	B	肩～底70%	南西周溝出土。内外面剥離・磨耗顕著。
10	弥生土器　壺	—	(17.7)	8.7	ABCDIK	黄橙色	B	胴～底80%	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器　壺	—	(2.5)	(9.0)	ABHIK	にぶい黄橙色	B	底部45%	南東周溝出土。
12	弥生土器　壺	—	(2.6)	(8.8)	ABEIJKN	明褐色	B	底部30%	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
13	弥生土器　壺	—	(2.2)	(7.6)	ABEIJN	橙色	B	底部40%	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
14	弥生土器　壺	—	(2.15)	(9.0)	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	底部45%	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
15	弥生土器　壺	—	(3.55)	(9.0)	ABEHIJKN	浅黄橙色	B	底部40%	南西周溝出土。内面剥離顕著。
16	弥生土器　壺	—	(2.4)	(8.9)	ABIKN	にぶい黄橙色	B	底部30%	南西周溝出土。
17	弥生土器　甕	—	(2.35)	(8.8)	ABEIKMN	橙色	B	底部40%	南東周溝出土。
18	弥生土器　甕	—	(2.0)	8.4	ABEIKN	にぶい橙色	B	底部75%	南東周溝出土。
19	弥生土器　甕	—	(2.8)	7.5	ABDIK	にぶい黄橙色	B	底部80%	南東周溝出土。
20	弥生土器　甕	—	(2.3)	(5.8)	ABIKN	灰褐色	B	底部50%	南東周溝出土。
21	弥生土器　甕	—	(2.7)	4.65	ABDIKN	灰黄褐色	B	底部100%	南東周溝出土。
22	弥生土器　甕	—	(5.0)	(8.0)	ABCEIKN	橙色	B	胴～底25%	南西周溝出土。外面やや磨耗。
23	弥生土器　甕	—	(4.25)	6.6	ABHIN	にぶい黄橙色	B	胴～底55%	南西周溝出土。
24	弥生土器　甕	—	(2.05)	5.0	ABIN	にぶい褐色	B	底部100%	南西周溝出土。
25	弥生土器高坏	—	(6.85)	(8.6)	ABDIN	浅黄橙色	B	接～脚40%	南東周溝出土。坏部内面・外面赤彩。
26	弥生土器高坏	—	(5.8)	(10.0)	ABHIN	浅黄橙色	B	接～脚40%	南東周溝出土。坏部内面・外面赤彩。
27	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDEIN	赤褐色	B	口縁部片	南西周溝出土。内外面赤彩、大半剥落。
28	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHN	灰白色	B	頸部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
29	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDEHIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
30	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
31	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄色	B	肩部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
32	弥生土器　壺	(9.0)	(4.45)	—	ABCIJN	にぶい褐色	B	口～頸25%	南西周溝出土。
33	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIJ	橙色	B	口縁部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
34	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	黒褐色	B	口縁部片	南西周溝出土。
35	弥生土器　壺	—	—	—	ABEKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
36	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHKN	橙色	B	肩部片	南東周溝出土。内面やや磨耗。
37	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGHIM	浅黄色	B	肩部片	南東周溝出土。内外面やや磨耗。
38	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
39	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	胴上部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
40	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	胴上部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
41	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
42	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	南東周溝出土。
43	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南東周溝出土。
44	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDIN	にぶい橙色	B	胴上部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
45	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。
46	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。内面磨耗・剥離顕著。
47	弥生土器　壺	—	—	—	AHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。
48	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	胴部片	南東周溝出土。
49	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
50	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	肩部片	南西周溝出土。
51	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	南東周溝出土。
52	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	肩部片	南東周溝出土。
53	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHKN	橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
54	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKN	橙色	B	肩部片	南東周溝出土。
55	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	オリーブ黒色	B	胴上部片	南東周溝出土。
56	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	褐灰色	B	胴上部片	南西周溝出土。外面磨耗顕著。
57	弥生土器　壺	—	—	—	AHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
58	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	にぶい黄橙色	B	胴部片	南西周溝出土。
59	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
60	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	南東周溝出土。
61	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	胴部片	南東周溝出土。
62	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGIKN	にぶい橙色	B	胴部片	南東周溝出土。

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
63	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	橙色	B	胴部片	南西周溝出土。
64	弥生土器　壺	—	—	—	ABIJN	褐色	B	胴部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
65	弥生土器　壺	—	—	—	ADEIKN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
66	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南西周溝出土。
67	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
68	弥生土器　壺	—	—	—	ABHI	にぶい橙色	B	胴部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
69	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKM	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南東周溝出土。外面磨耗顕著。
70	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	暗灰黄色	B	胴下部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
71	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	褐灰色	B	口～頸部片	南東周溝出土。
72	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJN	黒褐色	B	頸部片	南東周溝出土。
73	弥生土器　甕	—	—	—	AHIN	黒褐色	B	胴部片	南西周溝出土。
74	弥生土器　甕	—	—	—	AHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
75	弥生土器　甕	—	—	—	ABHN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
76	弥生土器　甕	—	—	—	AHIJKN	褐灰色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
77	弥生土器　壺	—	(5.75)	—	ABHIK	灰黄色	B	頸部90%	南西周溝出土。
78	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
79	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	にぶい橙色	B	肩部片	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
80	弥生土器　壺	—	—	—	AHIK	灰黄褐色	B	肩部片	南東周溝出土。
81	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
82	弥生土器　壺	—	—	—	BDIK	赤褐色	B	肩部片	南西周溝出土。
83	弥生土器　壺	—	—	—	ABHK	にぶい黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
84	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHIJKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	南西周溝出土。
85	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEHKN	浅黄橙色	B	肩部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
86	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIJ	橙色	B	肩部片	南西周溝出土。
87	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIJN	浅黄色	B	肩部片	南西周溝出土。外面やや磨耗。
88	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	灰白色	B	胴上部片	南西周溝出土。外面磨耗顕著。
89	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	灰白色	B	胴上部片	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
90	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	南東周溝出土。内外面磨耗顕著
91	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKMN	にぶい橙色	B	胴上部片	南東周溝出土。内外面磨耗顕著。
92	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
93	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	灰黄褐色	B	肩部片	南西周溝出土。外面磨耗顕著。
94	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	明黄褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。内外面やや磨耗。
95	弥生土器　壺	—	—	—	ADHIKN	黒褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。
96	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	暗灰黄色	B	胴上部片	南西周溝出土。外面磨耗顕著。
97	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南東周溝出土。縄文施文部赤彩。
98	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴部片	南東周溝出土。内外面やや磨耗。
99	弥生土器　甕	(18.3)	(5.05)	—	ABEHIN	黒褐色	B	口～胴20%	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
100	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
101	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJ	暗灰黄色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
102	弥生土器　甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
103	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIK	橙色	B	口縁部片	南西周溝出土。
104	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIJN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	南西周溝出土。
105	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIK	浅黄色	B	頸部片	南東周溝出土。
106	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIN	明赤褐色	B	胴部片	南西周溝出土。内面磨耗顕著。
107	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴部片	南西周溝出土。
108	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIK	浅黄橙色	B	胴下部片	南東周溝出土。
109	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	南東周溝出土。
110	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	南東周溝出土。
111	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	南東周溝出土。外面やや磨耗。
112	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHIN	黒褐色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
113	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEIN	黒褐色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
114	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
115	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKM	黒褐色	B	口～頸部片	南西周溝出土。
116	弥生土器　甕	—	—	—	AHIK	にぶい黄橙色	B	口縁部片	南西周溝出土。
117	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	南東周溝出土。
118	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIJKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	南東周溝出土。外面磨耗顕著。
119	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIKN	褐色	B	口～胴上片	南西周溝出土。
120	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南東周溝出土。外面磨耗顕著。
121	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南東周溝出土。
122	弥生土器　甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	頸～胴上片	南西周溝出土。
123	弥生土器　甕	—	—	—	ABHI	褐灰色	B	胴部片	南東周溝出土。
124	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	南西周溝出土。
125	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	頸部片	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
126	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKMN	黒褐色	B	頸部片	南西周溝出土。
127	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	南西周溝出土。外面やや磨耗。
128	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJK	黒褐色	B	胴上部片	南西周溝出土。
129	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIN	黒褐色	B	胴下部片	南東周溝出土。
130	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	南東周溝出土。内面磨耗顕著。
131	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい褐色	B	胴部片	南東周溝出土。
132	弥生土器　甕	—	—	—	ABCIK	にぶい黄橙色	B	胴部片	南東周溝出土。
133	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIK	浅黄色	B	胴上部片	南西周溝出土。内外面磨耗顕著。
134	弥生土器　甕	—	—	—	BEIKN	にぶい褐色	B	胴部片	南西周溝出土。
135	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIK	灰黄色	B	胴部片	南東周溝出土。外面やや磨耗。
136	弥生土器　甕	—	—	—	ABHI	にぶい黄褐色	B	胴下部片	南西周溝出土。
137	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIJK	黒色	B	胴下部片	南西周溝出土。
138	打製石鏃	最大長(2.45)cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cm。重量(2.0)g。刃部先端・基部欠。ホルンフェルス製。南西周溝出土。							

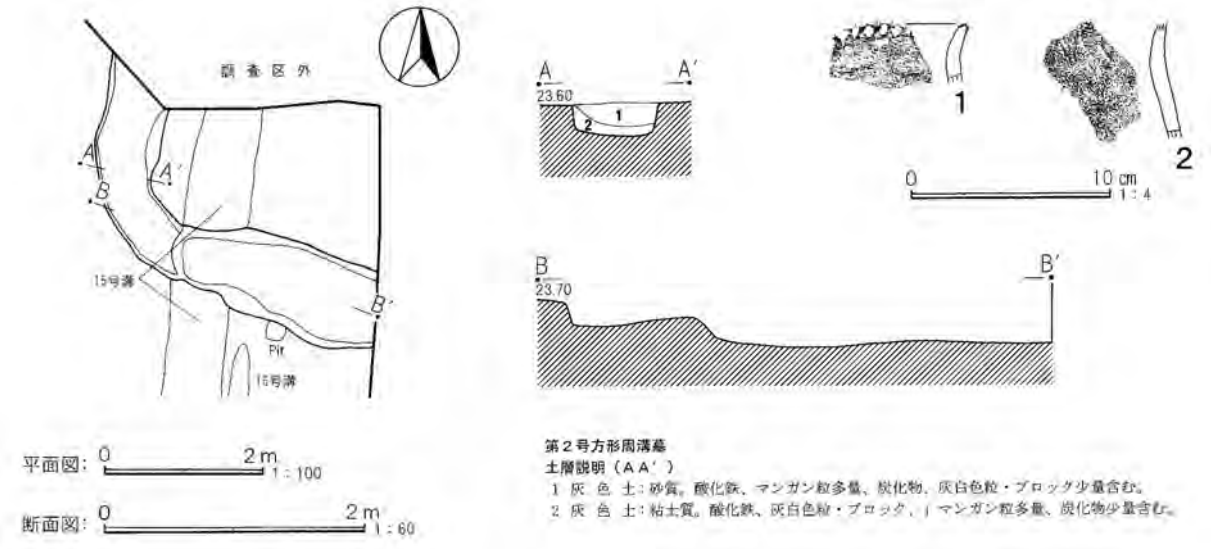
第２号方形周溝墓（第46図）

平成21年度調査第２区36－145・146グリッドに位置する。検出できたのは南西隅付近のみであり、大半は調査区外にある。南北に走る15号溝跡に切られており、南側周溝は外側立ち上がりで時期不明のピットと重複するが、新旧関係はおそらく本遺構が古いと思われる。西側及び南側には同時期の３・４号方形周溝墓が位置しており、本遺構を含め周辺には墓域が広がっている。

正確な規模は不明であるが、検出できた周溝の長さは西側が1.9m、南側が3.76mを測り、平面プランは方形を呈すると思われる。検出された周溝は全周しており、隅に土橋を持たないことからおそらく西側に位置する３号方形周溝墓と同じく東側周溝中央に土橋を持つタイプと思われる。幅は西側が0.8m、南側が1.1m前後、確認面からの深さは西側が0.27m、南側が0.39mを測り、南側周溝が幅広でやや深い。断面形はいずれも逆台形状を呈し、底面は西側から南西隅付近まではほぼ平坦であったが、南側は一段下がっていた。覆土は西側周溝のみの確認であるが、２層（１・２層）確認された。ブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

方台部は大半が調査区外にあるため詳細は不明と言わざるを得ないが、調査区壁の土層断面観察では盛土等の痕跡は認められなかった。

出土遺物は、弥生土器甕（１・２）の二点のみであり、流れ込みと思われる。



第46図　第２号方形周溝墓・出土遺物

第15表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　甕	—	—	—	ABCDN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
2	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黄橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。

１は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。２は頸部から胴上部にかけての破片。磨耗が著しいため分かりづらいが、頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。１・２の内面はともに横位のヘラナデ調整である。

本遺構の時期は、周辺の遺構との関係から古墳時代前期と思われる。

第３号方形周溝墓（第47図）

平成21年度調査第２区37・38－145～147グリッドに位置する。検出できたのは東側周溝の中央から南東隅付近にかけての部分のみであり、大半は調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられないが、東側には同時期の２・４号方形周溝墓が位置しており、本遺構を含め周辺には墓域が広がっている。

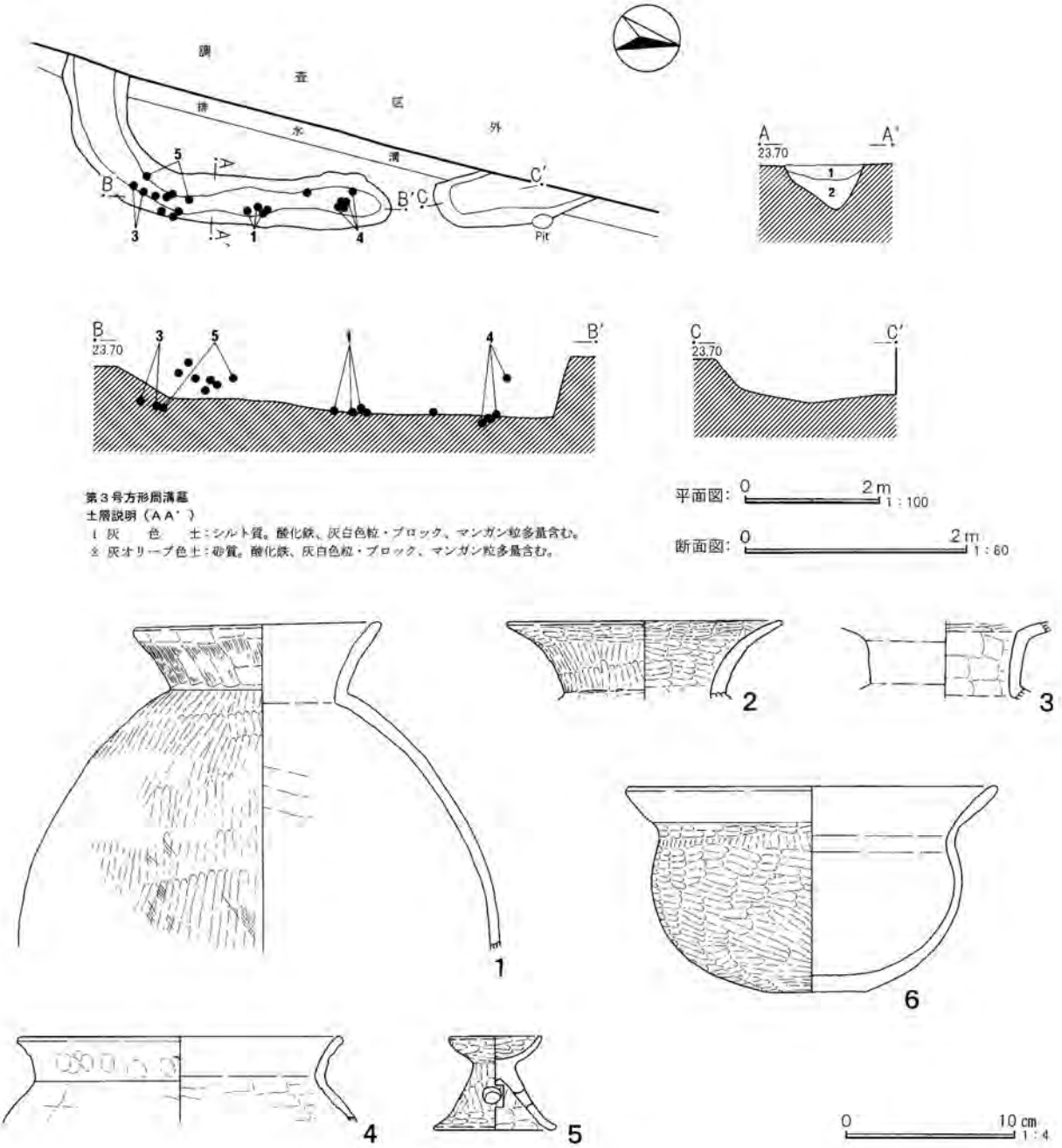
正確な規模は不明であるが、東側周溝が中央に土橋を持つことからおそらく溝の外縁で10.4m程になり、平面プランは方形を呈すると思われる。検出した周溝の長さは東側が土橋部分も含めて4.6m、西側が2.08mを測る。東西ともに幅は0.8m前後、確認面からの深さは最深部で0.54mを測る。断面形は船底状を呈し、底面はやや凹凸がみられ、南東隅付近の掘り込みがやや浅い。覆土は東側周溝のみの確認であり、２層（１・２層）確認された。ブロック土を多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

方台部はおそらく8.5m程の規模になると思われるが、大半が調査区外にあるため詳細は不明である。ただ他の墓と同じく調査区壁の土層断面を観察した結果では、盛土等の痕跡は認められなかった。

出土遺物は、古墳時代前期の土師器壺（１～３）、甕（４）、器台（５）、鉢（６）がある。４以外は比較的残存状態が良好であり、すべて東側周溝の土橋南側から検出された。

１～３は壺。１は胴部中段以下を欠く。口縁部から頸部まで短く、口縁部はやや外反しながら小さく開き、頸部はすぼまる。胴部は球形を呈し、おそらく中段付近に最大径を持つ。調整は口縁端部が横位のヘラナデ、頸部は縦位のハケメ、胴部はヘラミガキ調整であるが、胴部はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。内面は磨耗が著しいためほとんど図示できなかったが、口縁部から頸部までがヘラミガキ、胴部はヘラナデ調整である。２は口縁部から頸部にかけての部位。１同様、口縁部から頸部まで短く、口縁部は外反しながら大きく開き、頸部はすぼまる。内外面ともにヘラミガキ調整である。３は口縁部下位から頸部にかけての部位。口縁部は大きく開き、頸部はほぼ直立する。調整は外面が磨耗顕著のため不明であるが、内面は口縁部がヘラミガキ、頸部はヘラナデ調整である。４は甕の口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部から頸部まで短く、口縁部は開きが小さい。胴部は口径以上に膨らむ。調整は内外面ともに口縁部が横ナデ、胴部はヘラナデ調整である。口縁部外面には指頭圧痕も認められた。５は残存状態が良好な器台。器受部は丸みを持ち、台部はハの字に開く。台部には透かし孔が三つほぼ等間隔にみられた。調整は器受部内外面及び台部外面がヘラミガキ、台部内面はヘラナデ調整である。６は残存状態が良好な鉢。最大径を持つ肥厚した口縁部が大きく開き、頸部はすぼまる。胴部は中段がやや膨らむ。調整は口縁部が内外面ともに横ナデ、頸部以下は外面がヘラミガキ、内面はナデ調整である。

本遺構の時期は、古墳時代前期と思われる。



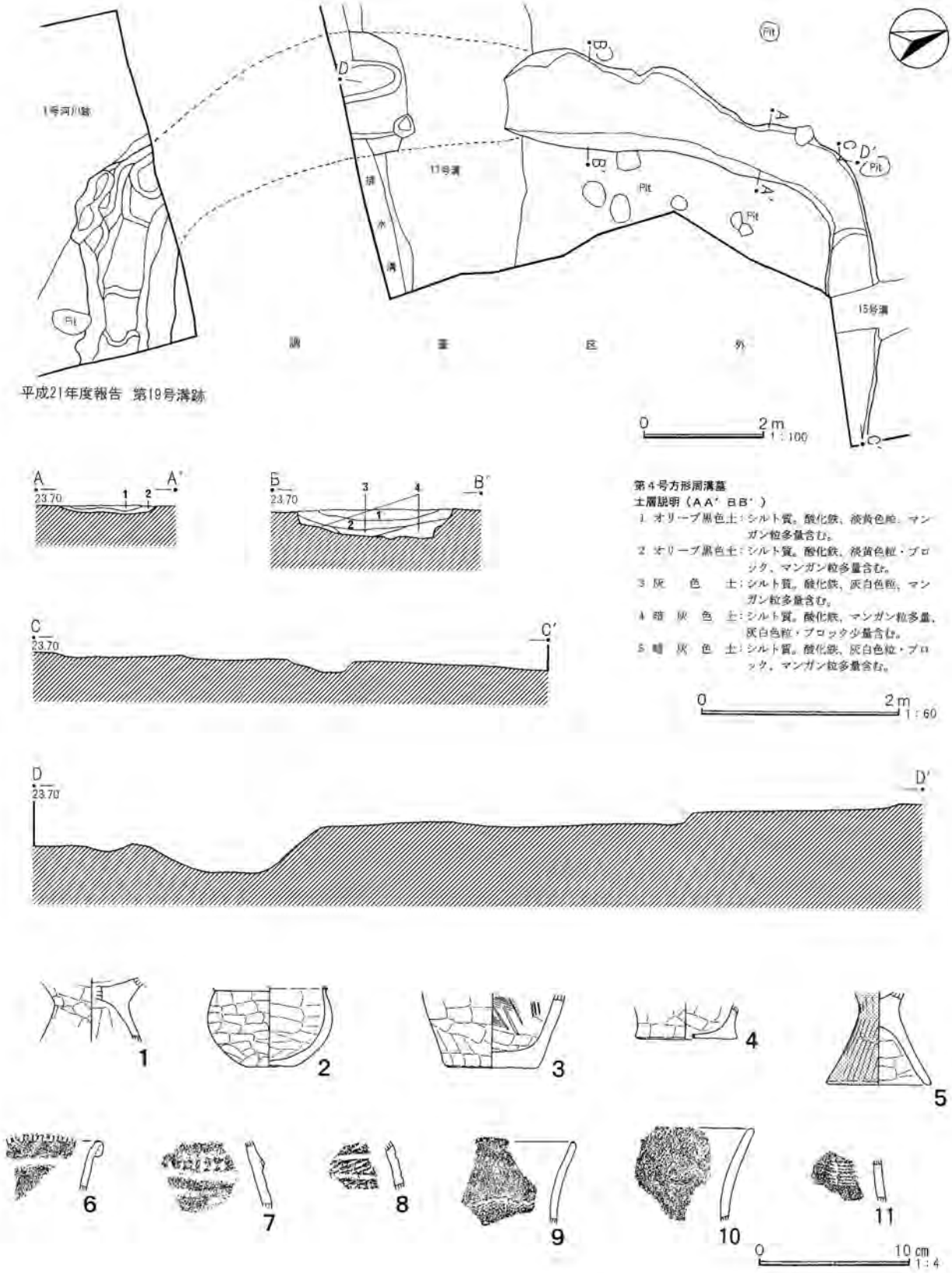
第47図　第３号方形周溝墓・出土遺物

第16表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	14.4	(19.85)	—	ABEIJK	にぶい橙色	B	口～胴40%	内外面磨耗顕著。
2	土師器　壺	(16.6)	(4.7)	—	ABEHKN	浅黄橙色	B	口～頸40%	内外面磨耗顕著。
3	土師器　壺	—	(4.65)	—	ABDH	黄橙色	B	口～頸100%	外面磨耗顕著。
4	土師器　甕	(19.6)	(5.15)	—	ABEN	橙色	B	口～胴20%	内外面磨耗顕著。
5	土師器　器台	5.6	5.7	(7.4)	ABEHIJKN	橙色	B	80%	透孔三つ有。外面磨耗顕著。
6	土師器　鉢	(22.4)	12.4	5.5	ABCDEHIKN	橙色	B	80%	内外面やや磨耗。

第４号方形周溝墓（第48図）

平成21年度調査第２区36～38－146～148グリッドに位置する。検出できたのは西側周溝中央から北側周溝中央付近にかけての部分であるが、平成21年度に19号溝跡として報告した溝跡に接続し、方形に巡



第48図　第４号方形周溝墓・出土遺物

ることから方形周溝墓であることが判明した。西側周溝中央は東西に走る17号溝跡、北側周溝は南北に走る15号溝跡に切られており、方台部及び北西隅では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は本遺構が古いと思われる。平成21年度報告分も含めて東側半分が調査区外にある。北側及び西側には同時期

第17表　第４号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付甕	—	(4.3)	—	ABDEHMN	橙色	B	接合部80%	外面磨耗顕著。
2	土師器小型壺	—	(5.5)	(3.0)	ABEGIJKN	赤褐色	B	頸～底40%	
3	弥生土器　甕	—	(5.0)	6.2	ABGIN	赤褐色	B	胴～底65%	外面磨耗顕著。
4	弥生土器　甕	—	(2.35)	(6.9)	ABCDEHIN	にぶい黄橙色	B	底部25%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器高坏	—	(6.2)	(7.1)	ABEHIK	赤色	B	接～脚75%	外面赤彩。
6	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
7	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIJN	明黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	灰黄褐色	B	胴上部片	
9	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHMN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEIN	にぶい褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIJN	暗褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。

の３・４号方形周溝墓が位置しており、本遺構を含め周辺には墓域が広がっている。

規模及び平面プランは、西側周溝が12.43mを測ることから溝の外縁で13.5m程の方形を呈すると思われる。幅は西側周溝が1.4～1.8m、北側が0.8m前後、確認面からの深さは西側が0.26m、北側が0.08mを測り、西側周溝が幅広で深い。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦であったが、北西隅付近は一段高くなっており、掘り込みが浅い。覆土は西側周溝のみの確認であるが、北西隅付近では２層（１・２層）、中央付近では４層（１～４層）確認された。１層以外はブロック土を含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

方台部はおそらく11m程の規模になると思われるが、他の遺構が重複しており、大半が調査区外にあるため詳細は不明と言わざるを得ない。しかし、他の方形周溝墓と同じく調査区壁の土層断面を観察した結果、盛土等の痕跡は認められなかった。

出土遺物で伴うのは、古墳時代前期の甕（１）、小型壺（２）の二点のみであり、この他に流れ込みの弥生土器壺（６～８）、甕（３・４・９～11）、高坏（５）がある。５は北側、その他は西側周溝から検出された。

１は台付甕の接合部。内外面ともにヘラナデ調整である。２は小型壺の頸部から底部。頸部がくびれ、胴部は中段がやや膨らむ。底部は若干上げ底である。胴部は内外面ともにヘラナデ調整である。

３～11は弥生時代中期後半から後期初頭に収まる土器。６～８は壺。６は口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。７は肩部片。横位のヘラナデ調整による無文部下に突帯状を呈する段を持ち、半円形の刺突列が刻まれている。以下は太い沈線が二条巡る。８は胴上部片。無節Ｌ地にやや太い平行沈線が巡る。壺破片６～８の内面はすべて横位のヘラナデ調整である。

３・４・９～11は甕。３は胴下部から底部、４は底部である。胴下部が膨らまない器形から甕としたが、壺の可能性もある。内外面ともにヘラナデ調整が主体となるが、３は内面に一部ハケメが認められた。９・10は口縁部から頸部にかけての破片。９は口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。頸部は単位不明の櫛歯状工具による波状文が巡る。10は分かりづらいが、全面にＬＲ単節縄文が施文されている。胎土に白雲母を多量含む。11は頸部から胴上部にかけての破片。頸部に単位不明の簾状文が巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。甕破片９～11の内面はすべて横位のヘラナデ調整である。

５は高坏の接合部から脚部にかけての部位。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整であり、外面は赤彩が施されている。

本遺構の時期は、古墳時代前期と思われる。

7　畠 跡

第１号畠跡（第49図）

平成21年度調査第２区37・38－141～146グリッドに位置する。時期不明のピットが集中する箇所に位置しており、所々で重複しているが、一部を除いて大半との新旧関係が不明である。

畝はほぼ南北方向に走るが、北東及び南東方向に反っており、東側の調査区外に流れる１号河川跡に沿って掘られた地形的な制約によるものと思われる。畝は所々で途切れており、北側では五条、真中では三条、南側では二条のみ確認されたが、確認面の影響と思われる。また東西の畝が重複した箇所がみられたことから数回にわたって掘り替えられている。畝の幅は狭い所で0.16m、幅広の所で0.56mを測る。確認面からの深さは概ね0.13m前後と浅い。覆土は砂質の暗灰色土一層（１層）のみである。自然堆積と思われ、混入物には火山灰も認められた。

出土遺物が無く、図示可能な遺物も無いため時期の特定が難しいが、覆土の特徴や周辺遺構との関係から古墳時代前期以降であることは間違いない。

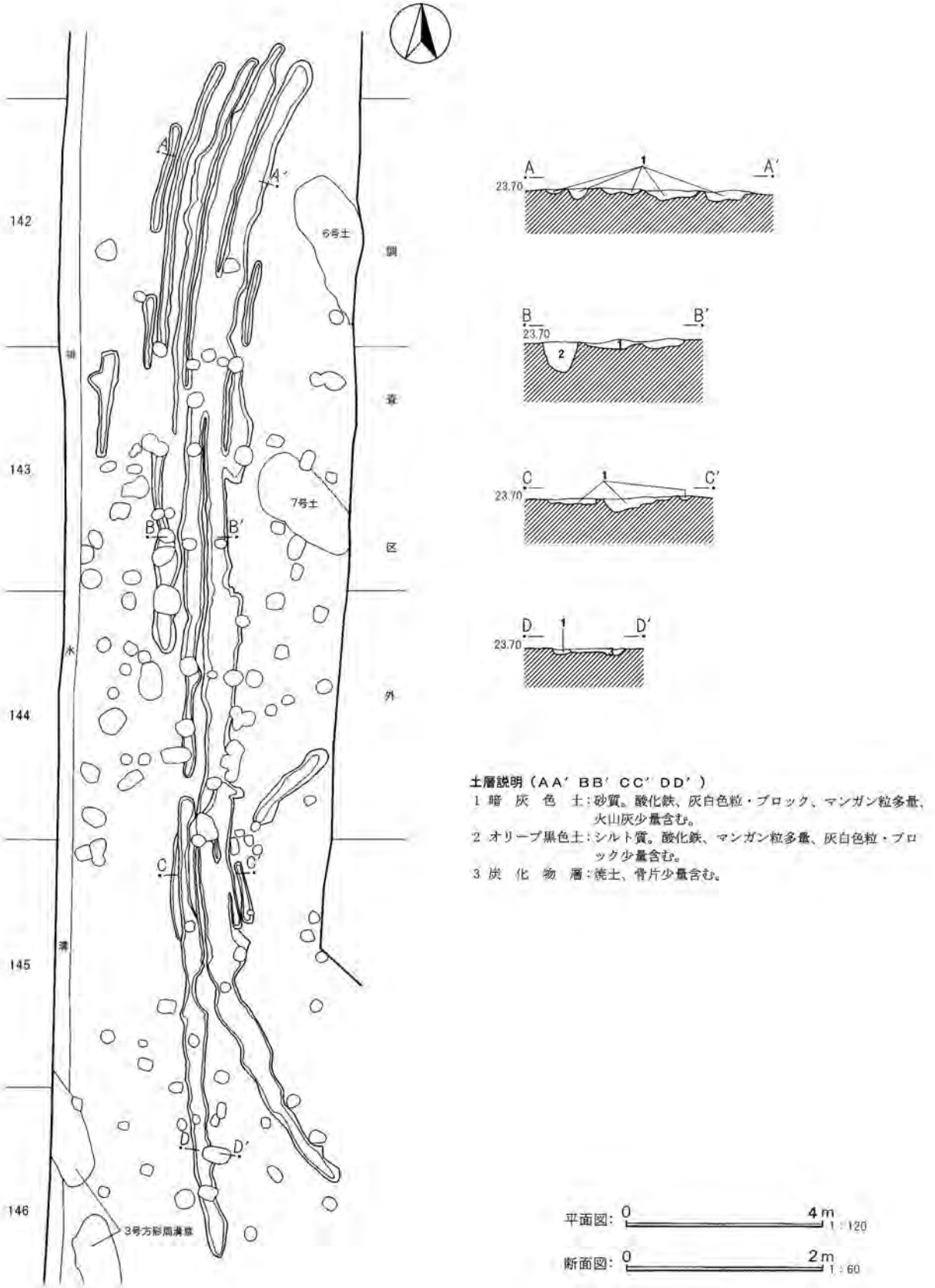
8　ピット

ピットは第１・２区から検出されているが、１区は少ない。１区は48－153グリッドの１号方形周溝墓方台部内で確認された４基と単独のピット２基の計６基のみの検出であるが、住居跡内で確認されたピットには住居跡に伴わないものがあるかもしれない。２区はほぼ全面から検出されているが、主に37・38－141～146グリッドに集中する。また37－141グリッドでは残存状態の良好な土器が検出されたピットが２基確認された（第50図）。ピットは所々で他の遺構と重複するものが多いが、時期の特定が難しいため新旧関係を把握することは困難であった。また、そのほとんどが規則的に並ばないため、詳細については不明と言わざるを得ない。

出土遺物は少なく、図示不可能なものも含めて最も多く検出されたのは弥生時代の遺物であるが、流れ込みの可能性が高く、かつ後世に再利用されたと思われるものもある。図示可能な遺物（第50図）は、奈良時代の須恵器坏（１・２）、長頸瓶（５）、土師器坏（３）、甕（４）、弥生時代中期後半から後期初頭の甕（６）、打製石斧（８）、磨製石斧（９）、古墳時代後期の円筒埴輪（７）がある。また掲載しなかったが、種子桃が検出されたピットもみられた。以下、出土ピット及び番号順に述べるが、これらの遺物が出土したピットのみ全測図にピット名を記載してある。

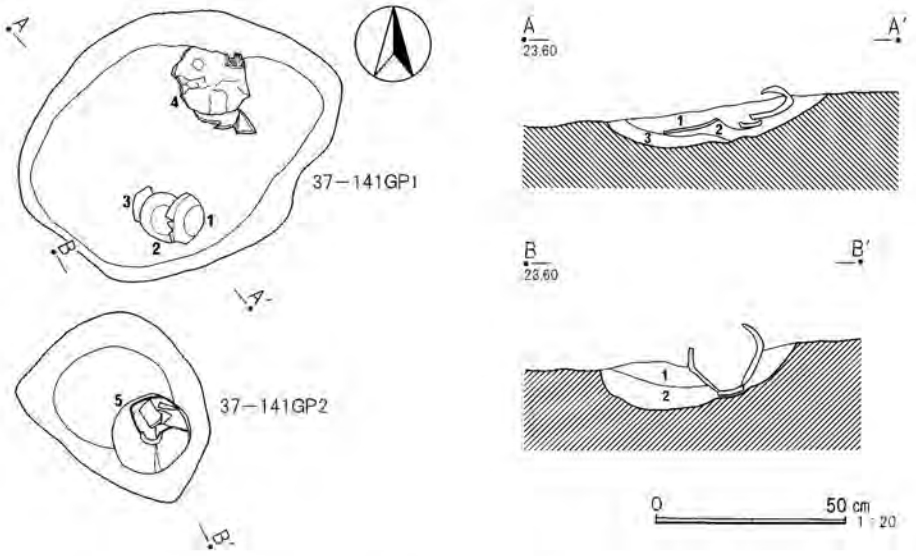
１～４は平成21年度調査第２区37－141GP1出土。１～３は南側、４は北側から検出された。１・２は逆位の状態で重なり合っており、３はその下から検出された。１・２は南比企産の須恵器坏。ともに残存状態が良好である。口径13cm、器高3.6cm、底径7.4cm程を測り、口縁部から体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部外面は全面回転ヘラ削り調整である。３は浅身の土師器坏。口縁部はほぼ直立し、底部は平底に近い。口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り調整である。４は長胴甕の胴部中段から底部にかけての部位。器壁が薄く、外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。胴部内面には輪積痕が一部みられた。

５は須恵器長頸瓶であるが、口縁部から頸部を欠く。平成21年度調査第２区37－141GP２出土であり、南東隅から正位の状態で検出された。肩が張り、胴部中段よりやや上に最大径を持つ。ハの字に開く高



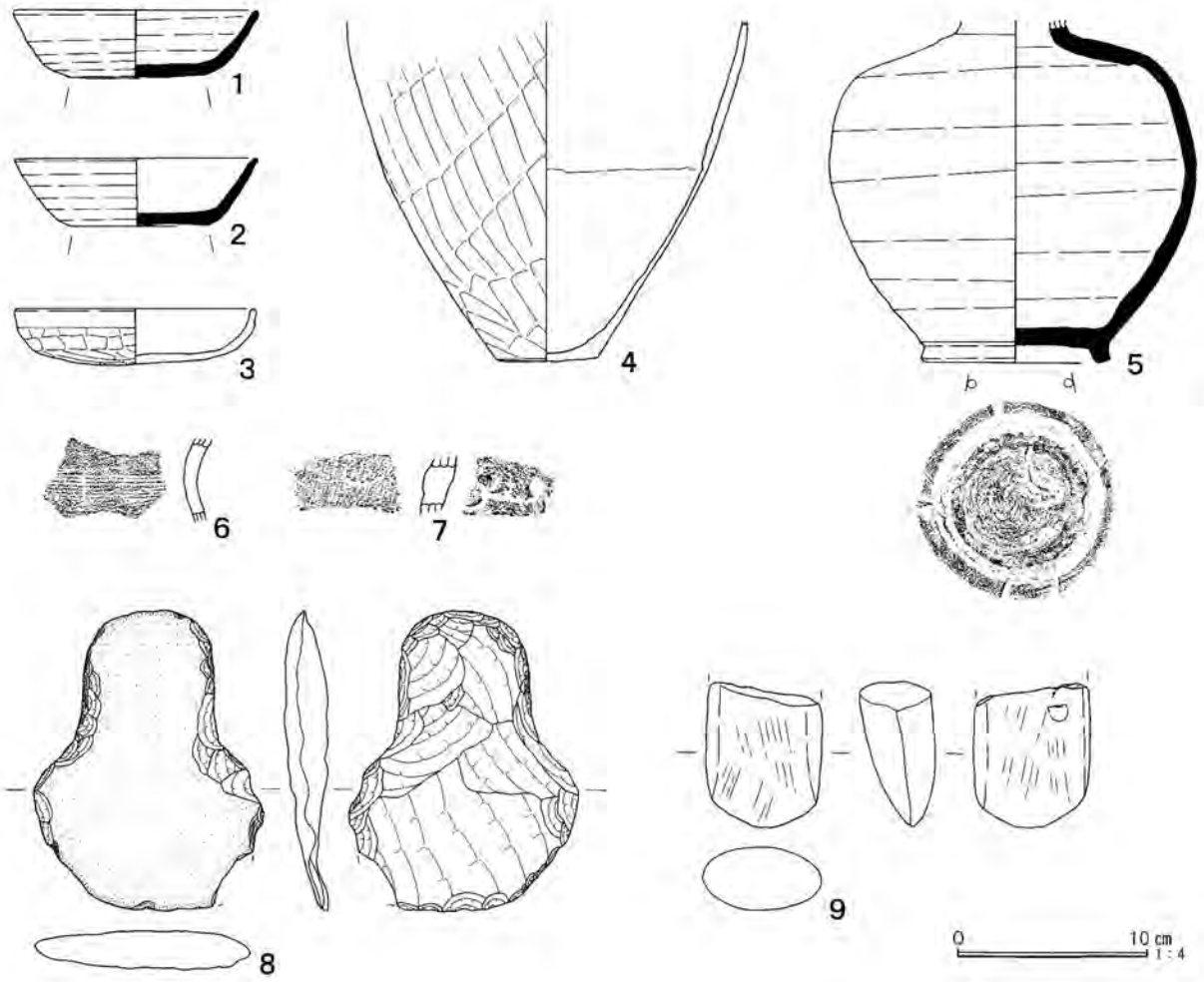
第49図　第１号畠跡

台が付く。内外面ともに回転ナデ調整であり、底部外面は回転糸切り痕を残す。肩部外面及び底部内面には自然釉が付着している。末野産。



土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：砂質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土、炭化物少量含む。
2 炭化物層
3 灰 色 土：砂質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

土層説明（ＢＢ′）
1 灰 色 砂：酸化鉄多量含む。
2 青灰色砂：酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。



第50図　37-141GP１・２遺物出土状況・ピット出土遺物

第18表　ピット出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	37-141GP1	須恵器　坏	13.2	3.65	7.4	ABFN	灰色	B	ほぼ完形	南比企産。
2	37-141GP1	須恵器　坏	13.1	3.6	7.4	ABFHN	灰黄色	B	ほぼ完形	南比企産。
3	37-141GP1	土師器　坏	13.0	3.1	—	ABHK	にぶい黄橙色	B	50%	
4	37-141GP1	土師器　甕	—	(18.3)	5.4	ABCKN	灰黄色	B	胴～底50%	
5	37-141GP2	須恵器長頸瓶	—	(18.3)	10.2	ABLN	灰色	B	肩～高80%	末野産。外面及び底部内面自然釉付着。
6	37-142GP1	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHJN	にぶい橙色	B	頸部片	
7	37-142GP1	円筒埴輪	—	—	—	ABEJN	明赤褐色	B	胴下部片	
8	37-147GP1	打製石斧	最大長16.2cm、最大幅12.1cm、最大厚2.3cm。重量(465.0)g。刃部一部欠。粘板岩製。							
9	37-147GP1	磨製石斧	最大長(7.85)cm、最大幅6.25cm、最大厚3.9cm。重量(283.6)g。刃部のみ残。緑色岩製。							

6・7は37－142GP１出土。ともに流れ込みである。6は弥生土器甕の頸部片。頸部に7本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡り、上下は無文で横位のヘラナデ調整である。内面も横位のヘラナデ調整であるが、一部ハケメに近い箇所がみられた。6は円筒埴輪の胴下部片。外面は斜位のハケメ、内面は横･斜位のヘラナデ調整であり、内面には輪積痕がみられた。

8・9は37－147GP１出土。ともに弥生時代の石器であり、8は打製、9は磨製の石斧である。ピット底面に自然礫とともに据えられた状態で出土したことから後世に栗石として使用されたと思われる。8は肩の張るやや大型の打製石斧。刃部の一部を欠く。片面に自然面大半を残す。粘板岩製。9は緑色岩製磨製石斧の刃部。刃こぼれが生じている。信州からの搬入品と思われる。

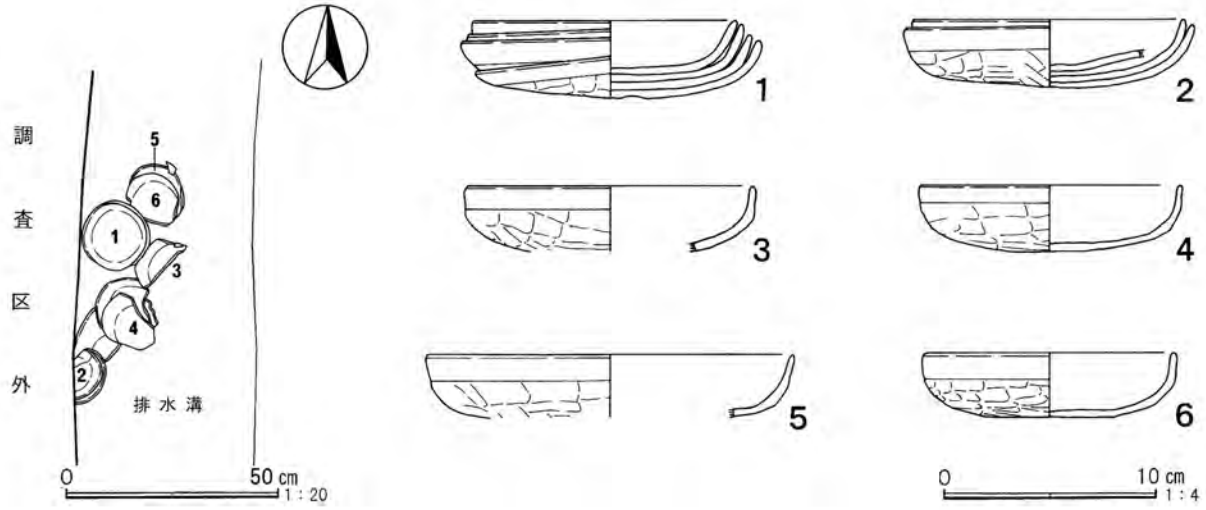
9　土器集中箇所

第１号土器集中箇所（第51図）

平成21年度調査第２区38－141グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、東側に同時期の遺物が出土した37－141グリッドP１・２が位置する。

掘り込みがなく、確認面から土師器坏がまとまって出土したことから土器集中箇所とした。調査区境から検出され、西側は調査区外にあるが、掘り込みは調査区壁の土層断面観察においても認められず、土器は大半が重なり合っていた。多いものは４個体、少ないものは２個体重なっていた。

出土遺物は土師器坏のみである。発掘調査段階では重なったものも含め、計14個体が確認されていたが、水分を含み、脆かったことから大半が取り上げの際に粉々になってしまった。よって、図示可能なもの



第51図　第１号土器集中箇所・出土遺物

第19表　第１号土器集中箇所出土遺物観察表

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　坏	最大径14.1cm、最大高3.7cm。胎土:ABHN。色調：にぶい黄橙色。焼成:B。残存率：60%。四枚重。							
2	土師器　坏	最大径13.9cm、最大高3.7cm。胎土:ABHK。色調：にぶい橙色。焼成:B。残存率:70%。三枚重。							
3	土師器　坏	(14.0)	(3.1)	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	20%	
4	土師器　坏	(12.5)	3.15	—	ABDHK	橙色	B	60%	
5	土師器　坏	(17.6)	(3.05)	—	ABHKN	にぶい橙色	B	10%	
6	土師器　坏	(12.2)	3.1	—	ABDGHK	橙色	B	40%	

は６個体（１～６）であり、このうち二つは重なった状態である。すべて浅身で口縁部がほぼ直立し、体部は内湾、底部は平底に近い。

１は４個体が重なっている。一番下は土圧により変形しているが、一個体の法量は口径13cm、器高3.5cm前後を測る。２は３個体が重なっているが、一番上は底部付近のみの検出である。真中及び下の土器は口径13.5cm、器高３cm前後を測る。３～６は器高が3.1cm前後を測り、ほぼ同じであったが、口径はバラツキがみられた。このうち５は口径が17.6cmと大型のものであった。

本遺構の時期は８世紀前半と思われ、河川跡に隣接することから水辺の祭祀に使用されたものであろうか。

10　河川跡

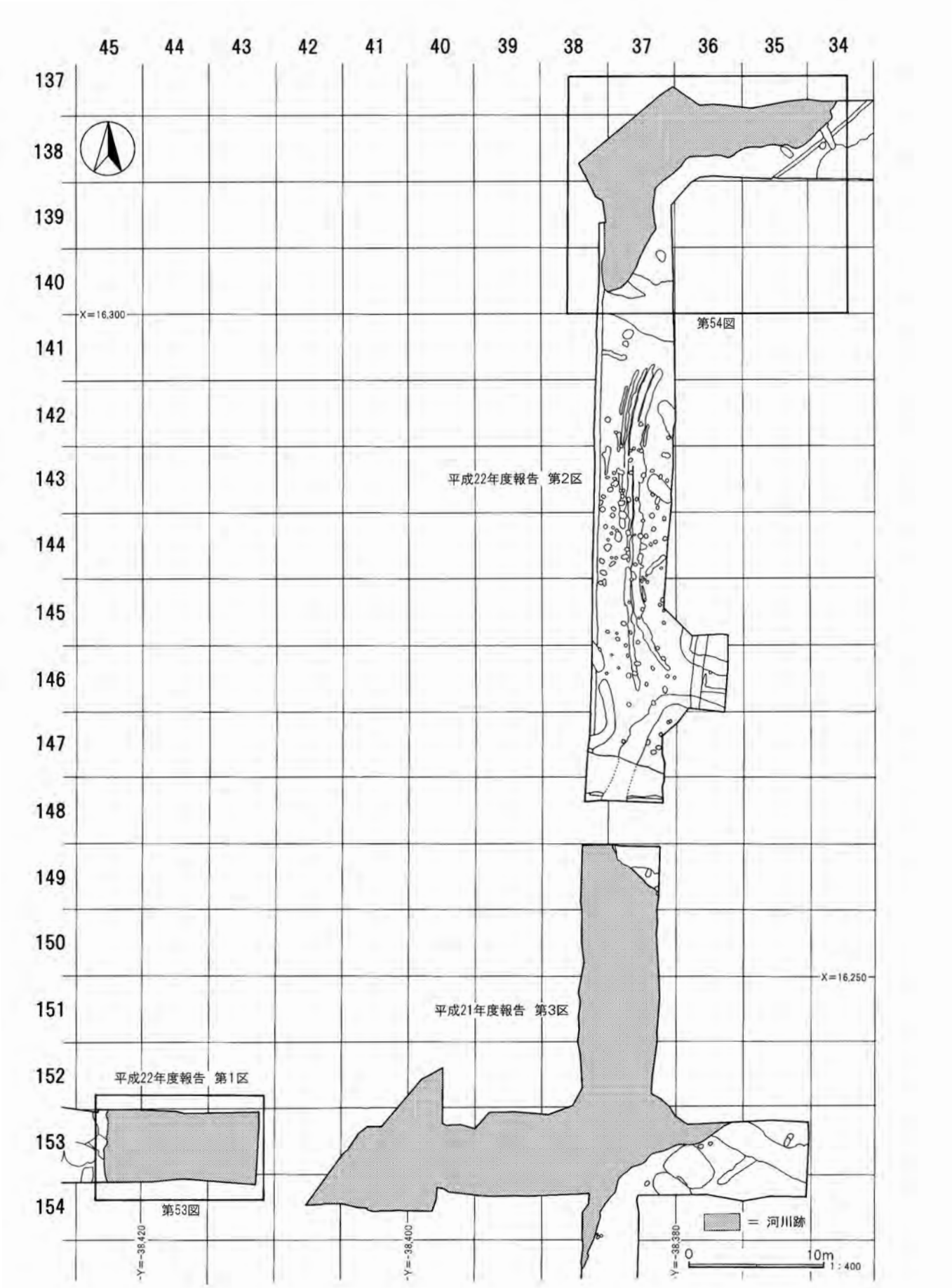
第１号河川跡（第52～54図）

平成19年度調査第１区では43～45－153・154グリッド、平成21年度調査第２区では34～38－137～140グリッドで確認された。１号河川跡は平成21年度報告の第３区でも確認されており、今回報告する１号河川跡と同じものである。今回の報告では平成19年度調査第１区で西側の立ち上がりが、平成21年度調査第２区では蛇行して流れる北側部分が確認された。１号河川跡は現在も流れる衣川の前身と思われ、平成21年度調査第２区は現在の衣川のすぐ南側にあり、地盤が非常に軟弱であったことから安全面を考慮してトレンチ調査のみの実施である。平成19年度調査第１区では西側で10号住居跡を切っており、３号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。平成21年度調査第２区では34－138グリッドで11号溝跡、37－140グリッドで12・13号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平成19年度調査第1区では、ほぼ南北方向に流れる。検出された長さは調査区内全面に及び、幅も第１区の約１／４を占め、約11.5mを測る。確認面からの深さは東端の最深部で2.7m程を測り、西端から最深部までは緩やかに下る。覆土は73層（１～73層）と非常に多く確認された。混入物が多くみられ、中層に砂層、下層に粘土層が多い。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

平成21年度調査第２区では、南西から北東方向へやや蛇行して流れる。検出された長さはおよそ25.5mである。幅は調査区内で北西側の立ち上がりを検出することができなかったため正確な数値は得られなかったが、非常に幅広であることは確かである。確認面からの深さは、計５本入れたトレンチでは３トレンチが最も深く、1.2mを測るが、北西方向に向かってさらに深くなることは確実である。覆土は各トレンチで粘土ないしシルト層が複数確認され、混入物が多くみられたが、いずれもレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第55～58図）は、弥生土器壺（１～22・26・33～43・77～82）、甕（23～25・27～29・44～76・83～89）、高坏（30～32）、土製紡錘車（90）、打製石斧（91～94）、古墳時代前期の土師器壺（97・98）、甕（99～103）、



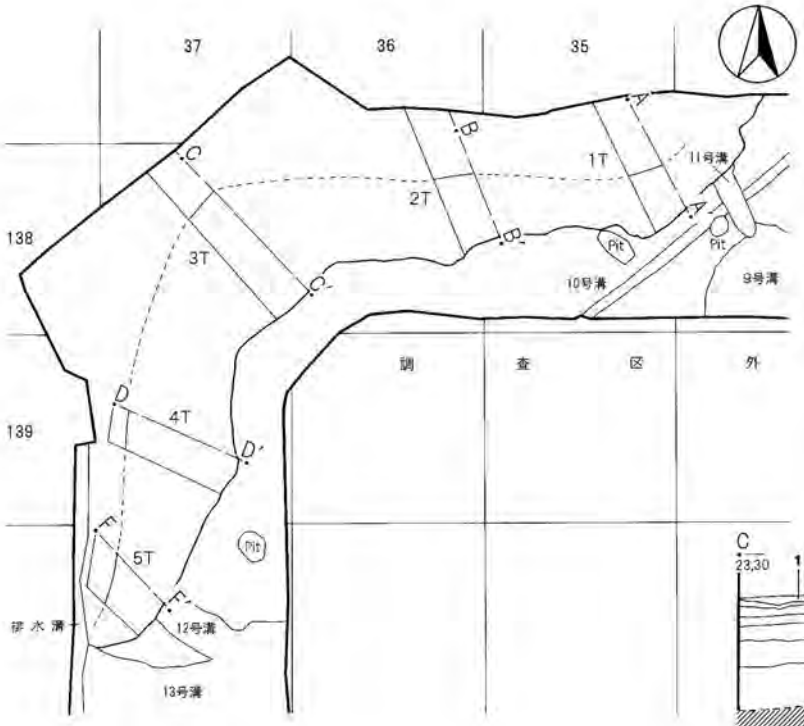
第52図　第１号河川跡（１）

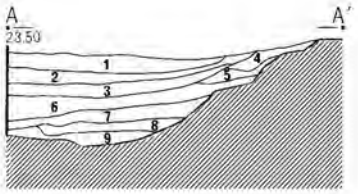
土層説明（ＡＡ′）

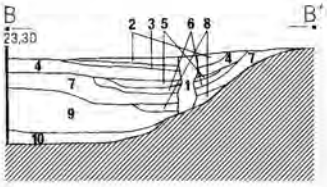
1 オリーブ黒色土：粘土質。腐蝕植物層。
2 黄灰色土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
3 褐灰色土：粘土質。火山灰、焼土、炭化物、灰白色粒微量含む。
4 灰色土：粘土質。浅黄色粒、炭化物微量含む。
5 オリーブ黒色土：シルト質。灰白色砂、明オリーブ灰色砂少量含む。
6 灰色シルト：オリーブ黒色粒、灰白色ブロック、明オリーブ灰色砂微量含む。
7 黒褐色シルト：灰白色粒、礫微量含む。
8 オリーブ黒色土：粘土質。腐蝕植物、木片少量、灰白色粒微量含む。
9 灰色土：粘土質。しまり無。腐蝕植物、木片多量含む。
10 灰オリーブ色土：粘土質。灰色砂、腐蝕植物多量含む。
11 灰色土：粘土質。腐蝕植物多量、灰白色粒少量含む。
12 黄灰色土：粘土質。灰白色粒多量、明オリーブ灰色土帯状に含む。
13 暗灰黄色土：粘土質。腐蝕植物、明緑灰色砂少量含む。
14 灰色土：粘土質。腐蝕植物、木片少量含む。
15 灰白色砂：酸化鉄多量、黄灰色粒・ブロック少量含む。
16 オリーブ黒色土：粘土質。腐蝕植物多量含む。
17 明オリーブ灰色砂：オリーブ黒色粒・ブロック少量、灰色ブロック微量含む。
18 明青灰色砂：オリーブ黒色粒・ブロック微量含む。
19 青灰色砂：酸化鉄多量、オリーブ黒色粒微量含む。
20 明青灰色砂：酸化鉄多量、黄灰色粒少量含む。
21 青灰色砂：青灰色ブロック少量含む。
22 オリーブ黄色砂：青灰色砂多量含む。
23 明オリーブ灰色シルト：オリーブ黒色ブロック多量含む。
24 黄灰色土：シルト質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
25 灰黄色粘土：木片少量含む。
26 明青灰色砂：黄灰色土多量含む。
27 オリーブ灰色砂：オリーブ黒色粒多量含む。
28 オリーブ灰色シルト：腐蝕植物多量含む。
29 明青灰色砂：黄灰色土多量含む。
30 明オリーブ灰色シルト：下層にオリーブ黒色シルト帯状に含む。
31 黄灰色粘土：明緑灰色砂微量含む。
32 黄灰色土：粘土質。オリーブ灰色ブロック、木片微量含む。
33 オリーブ灰色砂：オリーブ黒色粒微量含む。
34 青灰色砂
35 オリーブ灰色砂
36 オリーブ灰色砂：明緑灰色砂少量含む。
37 緑灰色シルト：オリーブ灰色砂少量含む。
38 灰白色砂：酸化鉄多量、黄灰色粒・ブロック少量含む。
39 明青灰色砂：酸化鉄多量、炭化物、黄灰色粒微量含む。
40 緑灰色土：粘土質。青灰色砂多量含む。
41 明緑灰色シルト：青灰色砂微量含む。
42 青灰色砂
43 青灰色シルト
44 明緑灰色シルト：灰色砂少量含む。
45 灰白色砂：酸化鉄多量、黄灰色粒微量含む。
46 灰白色砂：明青灰色ブロック多量含む。
47 オリーブ灰色砂：緑灰色ブロック少量含む。
48 青灰色土：粘土質。灰色シルト多量含む。
49 灰白色シルト
50 灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
51 オリーブ灰色土：粘土質。明オリーブ灰色シルト多量、灰色ブロック微量含む。
52 明緑灰色土
53 緑灰色土：シルト質。灰色シルト多量含む。
54 明青灰色土：粘土質。
55 灰色砂：明青灰色粒少量含む。
56 灰色シルト
57 明青灰色土：粘土質。
58 明青灰色土：粘土質。57層より暗い。
59 青灰色土：粘土質。
60 黄灰色粘土：褐灰色粒微量含む。
61 褐灰色粘土
62 灰黄褐色粘土：下層に青灰色砂含む。
63 灰白色粘土
64 褐灰色粘土：青灰色粒、木片多量含む。
65 明オリーブ灰色粘土：褐灰色粘土多量含む。
66 明オリーブ灰色粘土：褐灰色粘土少量、炭化物微量含む。
67 褐灰色粘土：炭化物微量含む。
68 黄灰色粘土：青灰色砂多量含む。
69 褐灰色粘土：オリーブ灰色ブロック少量含む。
70 黒褐色粘土：青灰色砂少量含む。
71 灰黄褐色粘土：木片微量含む。
72 暗灰黄色粘土：木片少量含む。
73 黄灰色粘土：炭化物多量、青灰色砂、木片少量含む。

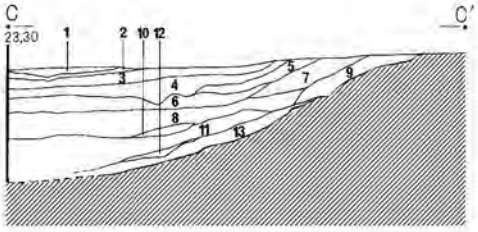
0　2m　1：80

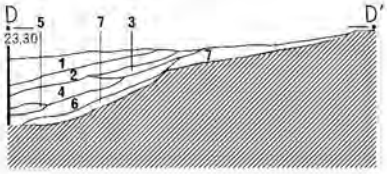
第53図　第１号河川跡（２）

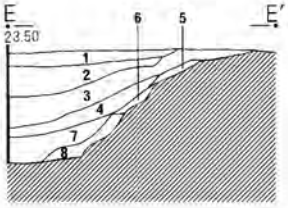












土層説明（AA'）

1 灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
2 暗灰色シルト：褐色砂、酸化鉄、炭化物多量含む。
3 黒色シルト：褐色砂、炭化物少量含む。
4 灰色シルト：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
5 灰オリーブ色シルト：酸化鉄多量含む。
6 オリーブ灰色シルト：酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。
7 暗オリーブ灰色シルト：酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。
8 青灰色・黄褐色砂：酸化鉄多量含む。
9 暗灰色シルト：酸化鉄多量含む。

土層説明（BB'）

1 黄褐色粘土：酸化鉄多量含む。
2 暗灰色シルト：褐色砂、酸化鉄、炭化物多量含む。
3 褐色砂：酸化鉄多量含む。
4 黒色シルト：褐色砂、炭化物少量含む。
5 灰色シルト：褐色砂少量含む。
6 黒色シルト：褐色砂多量含む。
7 灰オリーブ色シルト：褐色砂、炭化物少量含む。
8 灰色シルト：酸化鉄多量、灰オリーブ色シルト少量含む。
9 暗灰色シルト：青灰色砂所々ブロック状に含む。
10 暗灰色シルト：青灰色ブロック多量含む。

土層説明（CC'）

1 暗灰色シルト：褐色砂、酸化鉄、炭化物多量含む。
2 褐色砂：酸化鉄多量含む。
3 黒色シルト：褐色砂、炭化物少量含む。
4 オリーブ黒色シルト：炭化物、灰白色ブロック、木片少量含む。
5 暗オリーブ灰色シルト：木片少量含む。
6 暗オリーブ灰色シルト：炭化物、木片少量含む。5層より明るい。
7 オリーブ灰色シルト：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
8 暗緑灰色シルト：青灰色砂多量、木片少量含む。
9 オリーブ灰色シルト：酸化鉄多量含む。
10 オリーブ灰色粘土
11 オリーブ黒色シルト：青灰色砂、木片少量含む。
12 青灰色砂
13 オリーブ黒色シルト：青灰色砂多量、木片少量含む。

土層説明（DD'）

1 灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
2 黄灰色粘土：酸化鉄多量、炭化物少量含む。
3 灰色シルト：酸化鉄多量、炭化物少量含む。
4 暗灰色シルト：炭化物多量、酸化鉄少量含む。
5 青灰色粘土：酸化鉄少量含む。
6 灰色シルト：酸化鉄多量含む。
7 淡黄色砂

土層説明（EE'）

1 灰オリーブ色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
2 明青灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
3 暗灰色シルト：酸化鉄少量含む。
4 オリーブ灰色シルト：暗灰色シルト多量、酸化鉄少量含む。
5 淡黄色シルト：酸化鉄少量含む。
6 青灰色シルト：酸化鉄多量含む。
7 オリーブ灰色シルト：酸化鉄少量含む。
8 オリーブ灰色シルト：酸化鉄少量含む。7層より明るい。

平面図：0 ―― 5m 1：200　　断面図：0 ―― 2m 1：80

第54図　第1号河川跡（3）

高坏（95・96）、古墳時代後期以降の須恵器皿（104）、甕（105・106）、土師器坏（107・108）、土師質土器高台付椀（109・110）、建築部材と思われる木製品（111）がある。遺物は主に弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期以降の大きく三つの段階に分けられるが、弥生時代はさらに中期前半、中期中頃、中期後半から後期初頭、後期後半の四つ、古墳時代後期以降は古墳時代後期と奈良･平安時代に分けられる。第１・２区ともに弥生時代の遺物が多く、古墳時代前期及び後期以降の遺物は、ほとんど第2区からの検出である。なお、第１区東端では自然木が多数確認されており、111は自然木に混じって検出された。以下、時期が前後してしまうものもあるが、各時代･時期及び番号順に述べる。

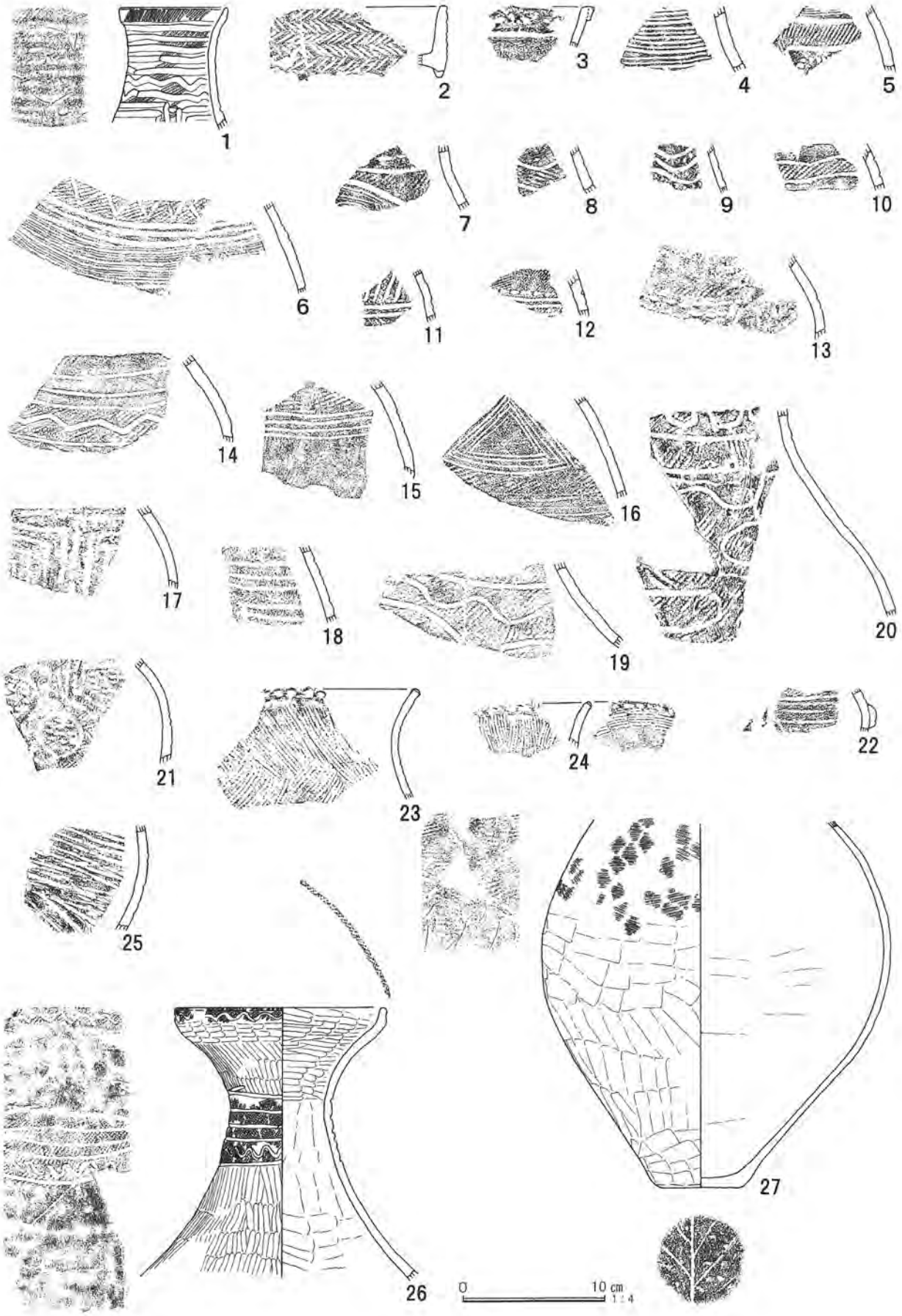
１～94は弥生時代の遺物。１～24は弥生時代中期中頃の土器。１～22は壺。１は口縁部から頸部にかけての部位のみであるが、残存状態は良好である。口縁部はやや受け口状を呈し、頸部は短く、ややすぼまる。文様は口縁部に無節Ｌ、頸部以下は口縁部と同じ無節Ｌが地文に施文され、太い平行沈線五条と波状沈線が二条巡る。以下は同一工具で重四角文と思われる文様が描かれており、重四角文の連結部上に半円形の刺突が刻まれている。内面は横位のヘラナデ調整である。

２・３は口縁部ないし口縁部から頸部にかけての破片。２は受け口状を呈し、やや細い短沈線で横位の羽状文が描かれている。３は複合口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

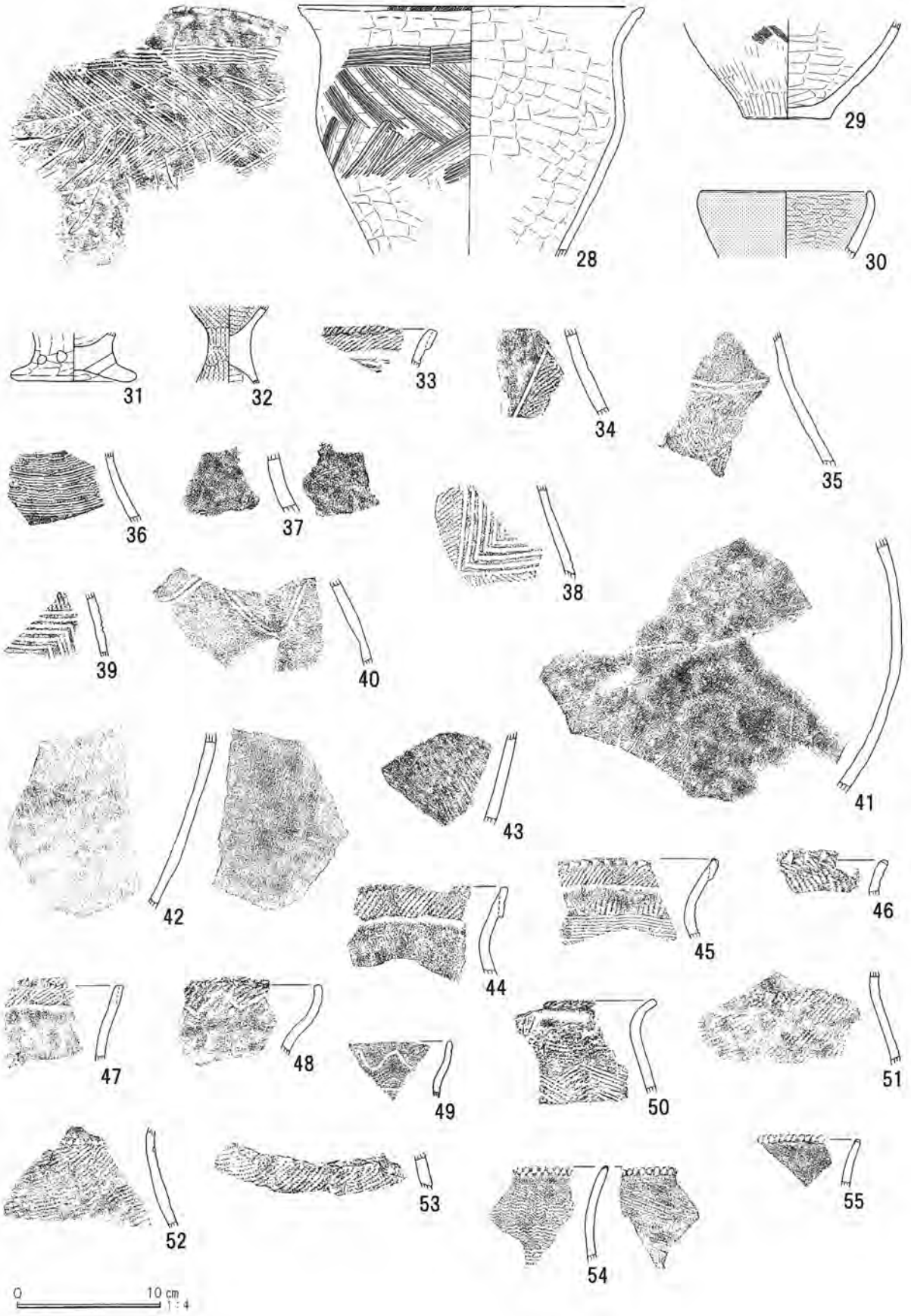
４～６は櫛歯状工具による多条沈線が横位に巡る一群。４は肩部片、５・６は胴上部片である。４は３本一単位で複数巡る。５は単位不明であるが、多条沈線下にやや太い沈線二条で重四角文とも見ることができる文様が描かれ、区画内に半円形の刺突、沈線間にＬＲ単節縄文が充填されている。６はＬＲ単節縄文地にやや太い沈線で山形文が描かれており、以下に太い平行沈線三条と単位不明の多条沈線が複数巡る。

７～10は沈線が弧状ないし波状に巡る一群。10のみ胴上部片、その他は肩部片である。７は横位の太い沈線下に弧状の沈線が一条描かれており、その下に単位不明の櫛歯状工具による多条沈線が沿って走る。横位の沈線と弧状沈線間にはＬＲ単節縄文が施文されている。８は二条の波状沈線間にＲＬ単節縄文が施文されている。９はやや太い沈線が波状に複数描かれており、沈線間は半円形の刺突列と無文部を交互に配置している。10はやや細い沈線で浅い弧線文が描かれており、間にＬＲ単節縄文が充填されている。文様上下は無文で斜位のヘラナデ調整である。

11はやや太い沈線が斜･横位に描かれた胴上部片。分かりづらいが、地文にＲＬ単節縄文が施文されている。12・13は半円形の刺突列が刻まれた胴上部片。12はカナムグラ系の擬縄文下に刺突列が刻まれ、下に細い平行沈線が巡る。13は分かりづらいが、ＬＲ単節縄文下に刺突列が二列刻まれている。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。14・15はやや細い平行沈線が複数巡る胴上部片。14はやや間隔を空けて平行沈線が複数巡り、胴部中段付近の幅広沈線間真中に太い波状沈線を一条、上下にＬＲ単節縄文を施文している。15はＬＲ単節縄文下にやや細い平行沈線が四条巡る。以下は無文で横・斜位のヘラナデ調整である。16は細い沈線で重三角文が描かれた胴上部片。区画内は無文であるが、外は下の横位に巡る三条の平行沈線との間にＬＲ単節縄文が施文されている。17･18は太い沈線で重四角文が描かれた胴上部片。18は地文にＬＲ単節縄文が施文されている。19・20は同一個体であり、19は肩部、20は頸部から胴上部にかけての破片。太い沈線で全面に円形や波状、王字状の文様等が描かれている。地文に無節Ｌが施文されている。21はフラスコ文が描かれた胴上部片。フラスコ文内外に半円形の刺突が刻まれており、地文にＬＲ単節縄文が施文されている。22は突起が付けられた胴部中段付近の破片。突起は



第55図　第１号河川跡出土遺物（１）



第56図　第１号河川跡出土遺物（２）

やや縦長であり、脇にやや細い平行沈線が複数描かれている。外面には煤が付着していた。

壺破片２～22の内面はすべてヘラナデ調整であり、５・11・12・16が斜位、14・18・21が横・斜位、その他は横位に施されている。

23・24は甕の破片。櫛歯状工具で文様が描かれている。23は口縁部から胴上部にかけて、24は口縁部の破片である。23は口縁端部に刻みを持ち、以下は4本一単位で横位の羽状文が描かれている。内面は横位のヘラナデ調整である。24も口縁端部に刻みを持つが、内外面に５本一単位で文様が描かれている。外面は縦位に施文され、内面は簾状文が巡る。内面の文様下は無文で横位のヘラナデ調整である。

25は弥生時代中期前半の土器片。一点のみの検出である。今回報告する弥生土器では最古段階に位置付けられる。条痕文が斜位に施文されており、内面は横位のヘラナデ調整である。壺の可能性もある。

26～76は弥生時代中期後半から後期初頭にかけての土器。大半は中期後半と思われるが、壺には明らかに後期初頭に位置づけられるもの（36・40）がある。また櫛歯状工具で文様が描かれた甕は、そのほとんどが中期末から後期初頭に位置付けられると思われる。

26・33～43は壺。26は口縁部から肩部にかけての部位。口縁部は受け口状を呈し、頸部はすぼまる。肩部は緩やかに下る。文様は口縁部と頸部にみられ、ともにＬＲ単節縄文地にやや細い沈線で口縁部が波状沈線、頸部は四条の平行沈線が等間隔に巡り、最下の平行沈線間のみ口縁部と同じく波状沈線が描かれている。外面無文部及び口縁部内面はヘラミガキ、頸部内面以下はヘラナデ調整である。

33は口縁部から頸部にかけての破片。端部を含め複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、以下はやや太い沈線が複数巡る。34～37は肩部片。34はやや細い沈線で鋸歯文が描かれており、鋸歯文下に無節Ｌが充填されているが、上は無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。35は磨耗が著しいため分かりづらいが、横位のヘラナデ調整が施された無文部下にやや細い沈線が上に二条、下に一条巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されている。また下には鋸歯文が描かれており、鋸歯文上は無文であるが、下にはＬＲ単節縄文が充填されている。36は５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線と波状文が交互に複数描かれており、下は斜位のヘラミガキ調整と赤彩が施されているが、一部ヘラミガキ前のハケメ調整が残る。37は無文であり、内外面ともに横･斜位にヘラナデ調整である。38～40は胴上部片。38・39は沈線で重四角文が描かれている。38はやや細い沈線で描かれており、区画外脇はＬＲ、下はＲＬ単節縄文が施文されている。39はやや細い沈線で描かれた重四角文上にＲＬ単節縄文が施文されている。40は２本一単位の櫛歯状工具で鋸歯文に近い波状文が描かれており、区画内上にＬＲ単節縄文が施文され、下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。41～43は無文で41が胴部中段付近、42・43が胴下部片である。41は内外面ともにヘラミガキ調整であるが、外面は横･斜位、内面は斜位に施されている。内面には一部輪積痕がみられた。42は外面が斜位のヘラミガキ調整であるが、一部ヘラミガキ前に施された横位のハケメが残る。内面は上位が横・斜位のヘラナデであるが、下位は横･斜位のハケメ調整である。43は内外面ともに斜位のヘラナデ調整であるが、一部ハケメに近い箇所がみられた。

壺破片33～36･38～40の内面はすべてヘラナデ調整であり､36･38が斜位､その他は横位に施されている。34は輪積痕、36はヘラナデが一部ハケメに近い箇所がみられた。

27～29・44～76は甕。27は胴上部から底部にかけての部位であるが、残存状態は比較的良好である。胴部はほぼ球形を呈し、中段が膨らむ。文様は胴上部全面に無節Ｌが施文されている。なお、図では所々に施文されているように見えるが、これは欠損ないし磨耗が著しい箇所があるためである。胴部中段以

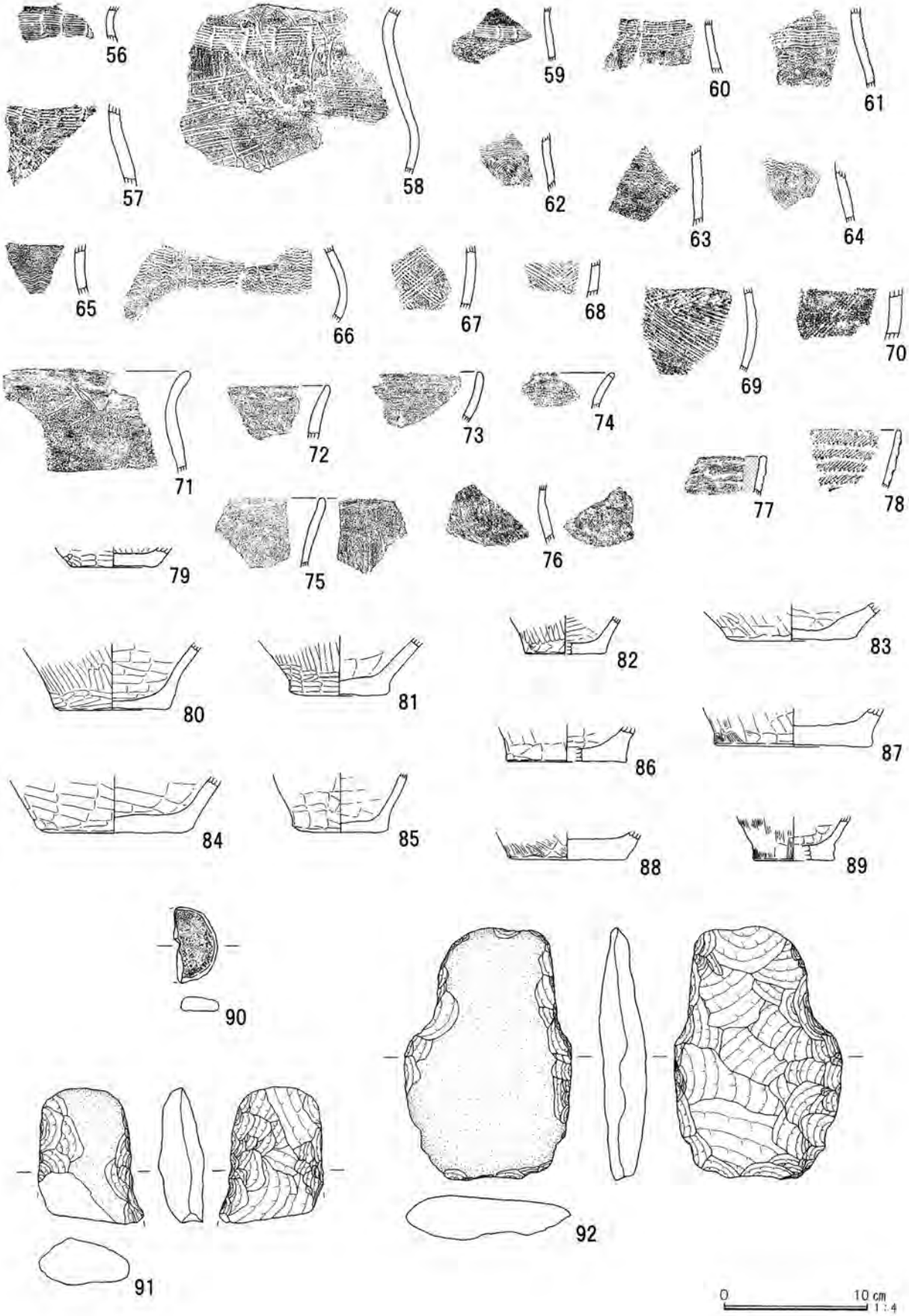
下は無文で内面とともにヘラナデ調整である。底部外面には木葉痕が認められた。28は口縁部から胴下部にかけての部位。短い口縁部が大きく開き、最大径を持つ。頸部はほぼ直立し、胴部は中段よりやや上が膨らむ。口縁部には一部輪積痕がみられた。文様は口縁部、頸部、胴上部にみられる。口縁部は端部にＬＲ単節縄文、頸部と胴上部は５本一単位の櫛歯状工具により頸部が簾状文、胴上部は横位の羽状文が施文されている。文様以外は内面とともに横位のヘラナデ調整である。29は胴部中段直下から底部にかけての部位。胴部中段付近にはＲＬ単節縄文が施文され、以下は無文で縦位のヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。甕としたが、壺の可能性もある。

44～50は縄文が施文される一群。すべて口縁部から胴上部までに収まる破片である。このうち44・45・47は複合口縁であり、ＬＲ単節縄文が施文されている。44・47は端部にも施文されており、頸部はともに無文で縦位のヘラナデ調整である。44は外面に煤が付着していた。45は端部に刻みを持ち、頸部はやや間隔を空けて縄目を縦位に施文したＬＲ単節縄文下に８本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡る。46は端部に刻みを持ち、以下に無節Ｒが施文されている。48・49はやや受口状を呈する。48は口縁部がＬＲ単節縄文地に細い沈線で山形文が描かれており、頸部は無文で斜位のヘラナデ調整である。49は頸部に巡る複数の細い平行沈線上まで地文にＬＲ単節縄文が施文され、口縁部には細い波状沈線が描かれている。50は口縁端部のみＬＲ単節縄文が施文され、頸部は無文で横位のヘラナデ調整、胴上部は単位不明の櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれている。外面は煤が付着していた。

51・52は頸部から胴上部にかけての破片。頸部は無文で横位のヘラナデ調整、胴上部には縄文が施文されている。51は無節Ｌ、52はＬＲ単節縄文であり、52は無文部の頸部と縄文の施文された胴上部の境に半円形の刺突列が一列刻まれている。53は胴上部片。波状沈線間にＬＲ単節縄文が施文されている。

54～70は櫛歯状工具で文様が描かれる一群。54・55は口縁部から頸部ないし胴上部にかけての破片である。ともに口縁端部に刻みを持つが、54は内外面に刻まれている。54は６本一単位の波状文がやや間隔を空けて複数巡る。文様施文前及び内面は斜位のハケメ調整が施されている。55は口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。櫛歯状工具による文様は認められないが、おそらく頸部以下に施文されていると思われる。56～62は頸部から胴部中段付近までに収まる破片。56 ～ 60は頸部に簾状文が巡る。単位は56･57が不明、58は９本、59・60は６本である。57は簾状文下に同一工具で羽状文とも見ることができる文様が描かれている。58も簾状文下に同一工具で羽状文に近い文様が描かれているが、粗雑である。57・58は外面に煤が付着していた。59・60は簾状文下に同一工具で波状文も描かれている。61・62は頸部に簾状文に近い文様が二段巡り、下に同一工具で波状文が描かれているが、62は山形状を呈する。63～66は波状文が施文される一群。すべて頸部から胴部中段付近までに収まる破片である。単位は63･66が５本、64は不明、65は７本である。63･64は文様施文前に斜位のハケメ、65は横位のヘラナデ調整が施されている。66は垂下する櫛歯状工具による多条沈線脇に同一工具で波状文が密に描かれている。文様下の胴下部は無文で横位のヘラナデ調整である。67～70は胴部中段の破片であるが、67は斜格子文、68・69は羽状文、70は斜位に施文されている。単位は67が５本、68・69は不明、70は７本である。羽状文は68が縦位、69が横位に描かれている。70は横位の羽状文とも思われるが、間隔が空いているため定かではない。無文部は縦･斜位のヘラナデ調整である。

71～73は内外面ともにヘラナデ調整が施された無文の一群。すべて口縁部から胴上部までに収まる破片である。71は口縁部外面及び内面は横位、頸部以下の外面は縦位に施されている。外面には煤が付着



第57図　第１号河川跡出土遺物（３）

している。72は外面が横・斜位、内面は横位に施されている。73は内外面ともに横・斜位に施されているが、一部ハケメに近い箇所がみられた。

74～76はハケメ調整が施された一群。74・75は口縁部から頸部、76は頸部から胴上部にかけての破片である。74は口縁端部に刻みを持ち、外面に横位のハケメ調整が施されている。内面は横位のヘラナデ調整である。75は頸部が縦位のハケメ調整であるが、口縁部と内面は横位のヘラナデ調整である。76は内外面ともに縦・斜位のハケメ調整である。

甕破片44～53・55～70の内面はすべてヘラナデ調整であり、47・53は横・斜位、59・63・67は斜位、61は縦・斜位、その他は横位に施されているが、45・47・55は一部ハケメに近い箇所がみられた。また62は輪積痕がみられた。

77・78は弥生時代後期後半吉ヶ谷式の口縁部片。二点のみの検出であるが、今回報告する弥生土器の中では最新段階に位置付けられる。ともに複数の輪積を残しており、77は無文であるが、78は全面にＬＲ単節縄文が施文され、各輪積下に細かい刻みを持つ。内面はともにヘラミガキ調整であり、77は横位に施され、赤彩されていた。78は縦位に施されている。

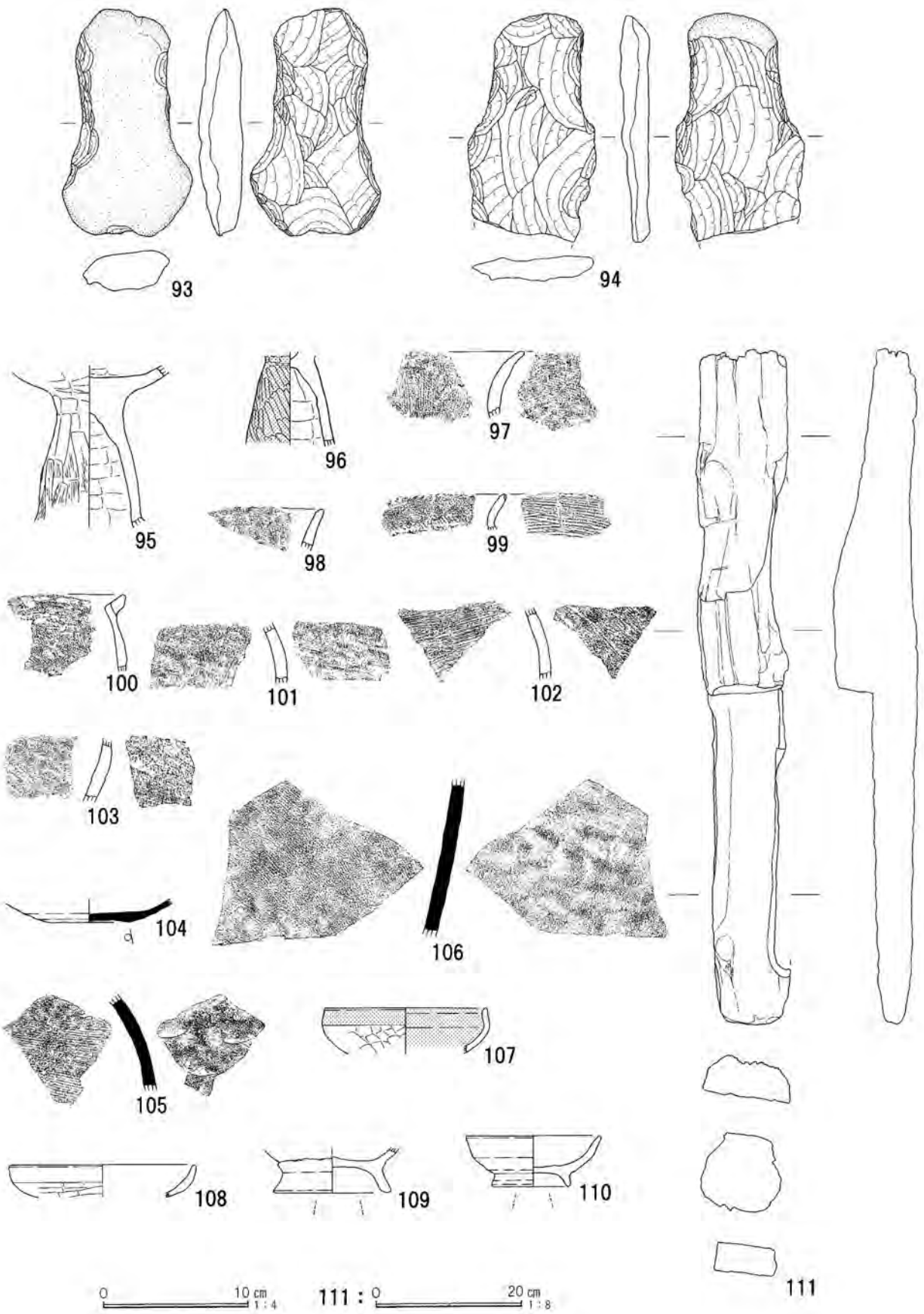
79～82は壺、83～89は甕の底部ないし胴下部から底部である。前者は胴下部が膨らむこと、後者は膨らまないことから壺と甕に分類したが、異なる可能性もある。時期の特定が困難であるため、一括して掲載した。79・82は内外面、80・81は外面にヘラミガキ調整が施されているが、82はヘラミガキ前のハケメ調整が一部残る。80・81の内面はヘラナデ調整である。83～86は内外面ともにヘラナデ、87～89は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整である。87は外面一部にヘラナデ調整もみられた。

30～32は高坏。30は坏部上位。口縁部がやや内湾する。外面は磨耗が著しいため定かではないが、内面は横位のヘラミガキ調整である。内外面に赤彩が施されているが、大半は剥落している。31は接合部から脚部にかけての部位。脚部が短く、接合部付近に２個一対の透かし孔がみられた。その配置状況からおそらく三箇所に設けられていたと思われる。内外面ともにヘラナデ調整である。32は接合部付近の部位。外面及び坏部内面にはヘラミガキ調整と赤彩が施されている。脚部内面はヘラナデ調整である。

90は土製の紡錘車。半分のみ検出された。磨耗が著しいため分かりづらいが、一面のみ無節ＬかＬＲ単節縄文が施文されている。

91～94は打製石斧。91は基部のみの検出であり、94は刃部を欠く。その他は完形である。いずれも肩が張るが、93は弱い。92は大型である。すべて粘板岩製であり、片面に自然面を残す。

95～103は古墳時代前期の土師器。平成21年度調査第２区出土が大半を占める。97・98は壺の口縁部から頸部にかけての破片。97は口縁端部が横位のヘラナデ、その他はハケメ調整である。頸部のハケメは縦位、内面は口縁部も含め斜位に施されている。98は外面が磨耗顕著により定かではないが、内面とともに横位のヘラミガキ調整である。99～103は甕の破片。ハケメ調整のものが多い。99は口縁部から頸部、100は口縁部から胴部中段にかけて破片。99は口縁端部に刻みを持ち、以下は横位のヘラナデ、頸部内外面はハケメ調整であり、頸部外面は斜位、内面は横位に施されている。100は肥厚する口縁部が短い。内外面ともにヘラナデ調整であるが、口縁部から胴上部までは横位、以下は斜位に施されている。内面は全面横位に施されている。101・102は胴上部片、103は胴下部片。すべて内外面ともにハケメ調整であり、101は外面が斜・横位、内面は斜位、102・103は内外面ともに斜位に施されている。95・96は高坏。95は接合部から脚部にかけての部位。脚部が長く、中段以下が膨らむ。内外面ともにヘラナデが主体となるが、



第58図　第１号河川跡出土遺物（４）

第20表　第１号河川跡出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	44-153G	弥生土器　壺	7.8	(8.8)	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸100%	外面磨耗顕著。
2	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	
3	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHIKMN	明赤褐色	B	口～頸部片	
4	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	黄灰色	B	肩部片	
5	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABIK	暗灰色	B	胴上部片	
6	45-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIK	淡黄色	B	胴上部片	
7	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	肩部片	
8	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABHK	灰黄褐色	B	肩部片	
9	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
10	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
11	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABDI	灰黄褐色	B	胴上部片	
12	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
13	44-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDK	淡黄色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
14	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
15	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
16	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIJKM	暗灰黄色	B	胴上部片	
17	44-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	黄灰色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
18	44-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	黄灰色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
19	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	明赤褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。№20と同一個体。
20	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	明赤褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。№19と同一個体。
21	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIKN	黄灰色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
22	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHKM	にぶい黄橙色	B	胴部片	内外面磨耗顕著。
23	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AHIN	黒褐色	B	口～胴上片	外面煤付着。
24	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIN	灰黄褐色	B	口縁部片	
25	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴部片	
26	43-153G	弥生土器　壺	(15.2)	(19.6)	—	ABHIKN	にぶい褐色	B	口～肩80%	
27	44-153G	弥生土器　甕	—	(26.3)	6.5	ADIKN	にぶい褐色	B	胴～底90%	底部外面木葉痕有。
28	44-153G	弥生土器　甕	(24.6)	(17.85)	—	ABHIJKN	黒褐色	B	口～胴20%	口縁部外面輪積痕有。
29	43-153G	弥生土器　甕	—	(7.1)	6.1	ABDIN	黒褐色	B	胴～底60%	外面一部磨耗。
30	H21 3T	弥生土器高坏	(12.2)	(4.8)	—	ABDIK	橙色	B	口～坏10%	外面磨耗顕著、赤彩剥落。
31	44-153G	弥生土器高坏	—	(3.5)	(9.0)	ABIKMN	灰黄褐色	B	接～脚40%	内外面磨耗顕著。脚部孔二個一対三箇所有。
32	H21 5T	弥生土器高坏	—	(5.5)	—	ABHIN	赤色	B	坏～脚80%	内外面磨耗顕著。坏部内面･外面赤彩、大半剥落。
33	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	AHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	
34	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIK	灰黄色	B	肩部片	内面輪積痕有。
35	44-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
36	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	赤褐色	B	肩部片	外面無文部赤彩。
37	H21 4T	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIJN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
38	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	黄褐色	B	胴上部片	
39	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJKN	暗灰黄色	B	胴上部片	
40	44-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
41	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	にぶい赤褐色	B	胴部片	内面輪積痕有。
42	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	にぶい褐色	B	胴下部片	
43	H21 3T	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
44	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	黒色	B	口～頸部片	外面煤付着。
45	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AIN	黒色	B	口～頸部片	
46	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口縁部片	内面磨耗顕著。
47	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ADIK	にぶい黄色	B	口～頸部片	
48	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
49	H21 5T	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIMN	黒褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
50	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AI	黒色	B	口～胴上片	外面煤付着。
51	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
52	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ADIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	
53	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴上部片	
54	44-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	
55	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
56	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHJN	暗褐色	B	頸部片	
57	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABGHIK	黒色	B	頸～胴上片	外面煤付着。
58	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABH	黒色	B	頸～胴部片	外面煤付着。
59	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	明赤褐色	B	頸～胴上片	
60	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	AIN	明赤褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
61	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABDI	黒褐色	B	頸～胴上片	
62	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	AEGHK	黒褐色	B	頸～胴上片	内面輪積痕有。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
63	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	AHKN	黒褐色	B	胴部片	
64	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
65	H21 5T	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIMN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
66	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDKN	灰黄褐色	B	胴部片	
67	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABI	黒色	B	胴部片	
68	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIKN	黒色	B	胴部片	
69	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	胴部片	
70	H21 4T	弥生土器　甕	—	—	—	AEHN	にぶい黄褐色	B	胴部片	
71	43-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIKN	褐灰色	B	口～胴上片	外面煤付着。
72	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
73	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口縁部片	
74	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	橙色	B	口～頸部片	
75	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	AHIK	黒色	B	口～頸部片	
76	H21 3T	弥生土器　甕	—	—	—	AEGHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
77	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ACIN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内面赤彩。
78	43-153G	弥生土器　壺	—	—	—	AHIK	黒色	B	口縁部片	内面剥離顕著。
79	43-153G	弥生土器　壺	—	(1.45)	(5.8)	ABDHIK	赤色	B	底部50%	内外面赤彩。
80	43-153G	弥生土器　壺	—	(4.7)	8.1	ABDHIN	橙色	B	胴～底100%	
81	43-153G	弥生土器　壺	—	(4.2)	(7.0)	ABIK	灰色	B	胴～底50%	
82	43-153G	弥生土器　壺	—	(2.7)	(5.8)	ABHIN	褐灰色	B	底部50%	
83	43-153G	弥生土器　甕	—	(2.6)	(9.2)	ABDIK	にぶい黄褐色	B	底部50%	
84	43-153G	弥生土器　甕	—	(4.0)	(10.5)	ABIKN	灰色	B	底部45%	
85	43-153G	弥生土器　甕	—	(4.2)	(6.8)	ABCI	褐灰色	B	胴～底100%	外面磨耗顕著。
86	H21 1T	弥生土器　甕	—	(2.6)	(8.4)	ABIN	にぶい橙色	B	底部25%	外面磨耗顕著。
87	H21 3T	弥生土器　甕	—	(2.7)	(11.2)	ABEHIN	にぶい褐色	B	底部45%	内面剥離顕著。
88	43-153G	弥生土器　甕	—	(2.1)	8.6	ABHIKMN	浅黄橙色	B	底部100%	
89	H21 5T	弥生土器　甕	—	(3.1)	(5.8)	ABEHIKN	黒褐色	B	胴～底45%	外面剥離顕著。
90	44-153G	土製紡錘車	最大径(5.4)cm、最大厚1.0cm。重量(17.4)g。胎土:ABEIK。色調:にぶい橙色。焼成:B。約半分残。片面のみ縄文施文。							
91	43-154G	打製石斧	最大長(9.6)cm、最大幅(7.4)cm、最大厚3.3cm。重量(267.0)g。基部のみ残。粘板岩製。							
92	43-153G	打製石斧	最大長17.5cm、最大幅11.8cm、最大厚3.3cm。重量808.0g。完形。粘板岩製。							
93	43-153G	打製石斧	最大長15.9cm、最大幅9.5cm、最大厚3.0cm。重量423.0g。完形。粘板岩製。							
94	43-153G	打製石斧	最大長(16.0)cm、最大幅9.0cm、最大厚1.9cm。重量(291.0)g。刃部欠。粘板岩製。							
95	43-153G	土師器　高坏	—	(11.25)	—	ABHKN	灰褐色	B	接～脚90%	
96	43-153G	土師器　高坏	—	(6.5)	—	ABIN	灰赤色	B	脚部70%	
97	H21 3T	土師器　壺	—	—	—	AEHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
98	H21 3T	土師器　壺	—	—	—	ABIMN	明褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
99	H21 3T	土師器　甕	—	—	—	ABCIMN	にぶい橙色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
100	H21 5T	土師器　甕	—	—	—	AE	黒褐色	B	口～胴部片	
101	H21 3T	土師器　甕	—	—	—	ABDGHIMN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
102	H21 3T	土師器　甕	—	—	—	ABK	暗褐色	B	胴上部片	
103	H21 3T	土師器　甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	
104	H21 3T	須恵器　皿	—	(1.6)	(5.7)	ABHLN	灰白色	B	体～底50%	末野産。
105	H21 2T	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴上部片	南比企産。
106	H21 2T	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
107	H21 2T	土師器　坏	(11.3)	(3.2)	—	ABDGHN	赤褐色	B	20%	内面･口縁部外面赤彩。比企型坏。
108	H21 2T	土師器　坏	(13.0)	(2.3)	—	ABDGHJK	にぶい褐色	B	10%	外面輪積痕有。
109	H21 1T	土師質高台椀	—	(3.1)	(8.25)	ABJ	にぶい黄橙色	B	高台部60%	
110	H21 2T	土師質高台椀	7.4	3.55	5.5	ABHIN	にぶい褐色	B	85%	内面タール付着。灯明用。
111	43-153G	建築部材	最大長94.4cm、最大幅12.5cm、最大厚11.3cm。側面一部欠。							

脚部外面下位はハケメ調整である。96は脚部がやや短い。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。外面には赤彩が施されている。

104～110は古墳時代後期以降の土器。すべて平成21年度調査第２区からの検出である。須恵器は104が９世紀後半から10世紀初頭、105・106は破片であるため時期不明である。土師器は107が６世紀後半、108は８世紀前半、109・110は10世紀後半以降に位置付けられる。

104～106は須恵器。104は皿。体部から底部にかけての部位。底部外面は回転糸切り痕を残す。末野産。105・106は甕の破片。105は胴上部片、106は胴下部片である。ともに南比企産であり、外面はタタキ、

内面はあて具痕が僅かに残る。107･108は土師器坏。107は比企型坏である。口縁部は内湾し、端部のみやや外に開く。口縁部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整である。口縁部外面及び内面に赤彩が施されている。108は口縁部がほぼ直立し、体部は内湾する。底部を欠くが、平底に近いと思われる。身が浅い。口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り調整である。109･110は土師質土器高台付椀。底部外面はともに回転ヘラナデ調整である。109はハの字に開く高台部。体部との境に輪積痕がみられた。小振りの110は口縁部がやや外に開き、体部は内湾する。高台はほぼ直立に近い。内面にはタールが付着しており、灯明として使用されたと思われる。

111は建築部材と思われる木製品。現存長94.4㎝と大型であり、中段から半分に切り込みがみられた。

11　遺構外出土遺物

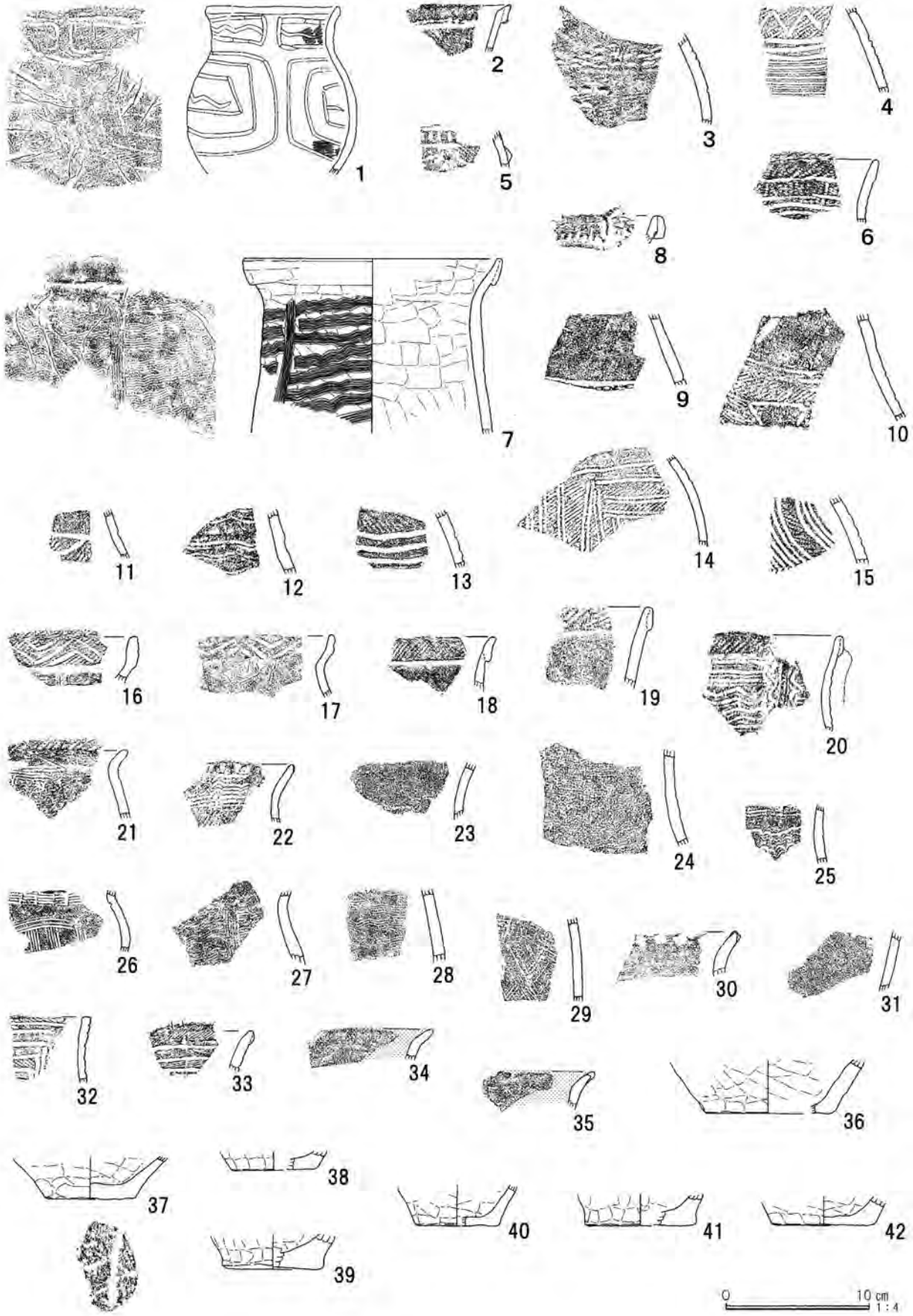
遺構外出土遺物は、弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の須恵器、土師器、砥石、近世の古銭がある（第59・60図）。図示不可能なものも含めて弥生土器が多数検出されており、平成19年度調査第1区からの検出が大半を占める。弥生土器については主に中期中頃、中期後半から後期初頭に分けられる。以下、時代･時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

１～47は弥生時代の遺物。１～６は弥生時代中期中頃の土器。１は筒形土器。底部付近を欠く。口縁部の開きが小さく、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。胴部はやや大きく膨らみ、中段に最大径を持つ。文様はほぼ全面に描かれている。口縁部から頸部には太い沈線で四角文、胴部は間隔のやや空いた重四角文が描かれており、区画内には同一工具で波状沈線が描かれ、磨耗が著しいためはっきりしない箇所が多いが、無節Ｌも充填されている。内面は横位のヘラナデ調整である。

２～５は壺の破片。２は口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁端部の上下に刻みを持つ。その他は無文で横位のヘラナデ調整である。３～５は胴上部片。３は半円形の刺突列がやや間隔を空けて二列巡る。刺突列以外は無文で横位のヘラナデ調整である。４は地文に附加条一種ＬＲ＋Ｌが施文され、太い沈線で山形文が描かれている。下は同じ太い沈線による平行沈線三条と５～６本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が巡る。５は間に半円形の刺突列が刻まれたやや太い平行沈線下にやや細い沈線で重三角文と思われる文様が描かれており、頂点に円形の突起が付けられている。突起脇の区画外にはＲＬ単節縄文が充填されている。６は甕の口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁である。地文にＬＲ単節縄文が施文され、頸部にやや太い平行沈線が巡る。破片２～６の内面はすべて横位のヘラナデ調整である。

７～35は弥生時代中期後半から後期初頭にかけての土器。大半は中期後半に相当するが、櫛歯状工具で文様が描かれた甕は中期末から後期初頭に位置付けられると思われる。

８～15は壺の破片。８は口縁部片。やや縦長の突起脇にＬＲ単節縄文が施文され、下に半円形の刺突列が刻まれている。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。９～12は肩部片。９～11は上位が無文で下位に文様が描かれている。９は斜位のヘラナデ調整による無文部下にやや太い沈線が横位に巡る。10は横･斜位のヘラナデ調整による無文部下にやや細い沈線で文様が描かれるが、詳細は不明である。沈線は横･斜位に描かれており、間に無節Ｌが充填されている。11は横位のヘラナデ調整による無文部下に太い沈線が横・斜位に描かれており、地文にＬＲ単節縄文が施文されている。12は２本一単位の櫛歯状工具による波状文がやや間隔を空けて複数巡る。上位の波状文間に段を持つ。13～15は胴上部片。13



第59図　遺構外出土遺物（1）

はＲＬ単節縄文下に太い平行沈線が複数巡る。14は２本一単位の櫛歯状工具で重四角文が描かれており、地文に無節Ｌが施文されている。15はやや太い沈線でフラスコ文が描かれ、間にＲＬ単節縄文が充填されている。

壺破片８～15の内面はすべてヘラナデ調整であり、９・15が斜位、11・12が横・斜位、その他は横位に施されている。９は一部ハケメに近い箇所がみられた。

７・16～31は甕。７は口縁部から胴部中段付近までの部位。複合口縁部がやや受け口状を呈する。頸部はすぼまるが、胴部中段付近までほぼ直線的に下る。最大径は現状では口縁部にあるが、胴部とあまり変わらないと思われる。文様は頸部以下に５本一単位の櫛歯状工具による多条沈線が垂下し、間に同一工具による波状文が複数描かれている。口縁部は無文で内面とともにヘラナデ調整である。

16～22は口縁部から頸部ないし胴上部までに収まる破片。16・17は口縁部が受け口状を呈し、口縁部に沈線二条で山形文が描かれている。16は口縁部が地文にＬＲ単節縄文が施文されており、端部にもみられた。頸部はともに無文でヘラナデ調整であるが、16は横位、17は口縁部直下が横位、以下は縦・斜位に施されている。18～20は複合口縁であり、ＬＲ単節縄文が施文されている。18・19は頸部が無文で18は斜位、19は横位のヘラナデ調整である。20は頸部に縦長の隆帯が垂下し、両脇上にやや太い沈線が三条、下に同一工具による波状沈線が複数横位に巡る。波状沈線は隆帯に沿って側面にも一条が描かれている。21は口縁端部にＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。頸部は５本一単位の櫛歯状工具による簾状文、胴上部には同一工具による波状文が巡る。22は口縁端部に刻みを持ち、以下に４本一単位の櫛歯状工具による波状文、頸部には同一工具による簾状文が巡る。

23～29は櫛歯状工具のみで文様が描かれる一群。23は頸部片。上位は無文で横位のヘラナデ調整であり、下位は単位不明の波状文が巡る。24～27は頸部から胴上部にかけての破片。24～26は頸部に簾状文が巡る。24は磨耗が著しいため分かりづらいが、頸部に６本一単位の簾状文が二段、胴上部は同一工具による波状文が複数巡る。25は頸部に簾状文、胴上部に波状文が巡る。単位は不明である。26は頸部に５本一単位の簾状文が巡り、胴上部はやや崩れているが、同一工具で斜格子文が描かれている。27は頸部が無文で横位のヘラナデ調整であり、胴上部は６本一単位の多条沈線が垂下し、脇に同一工具で波状文が複数描かれている。28は胴上部片。５本一単位の波状文が複数巡る。29は胴部中段の破片。単位不明であるが、細い櫛歯状工具で斜格子文が描かれている。

30は端部に指頭圧痕が施された口縁部片。以下は無文で内面とともに横位のヘラナデ調整である。

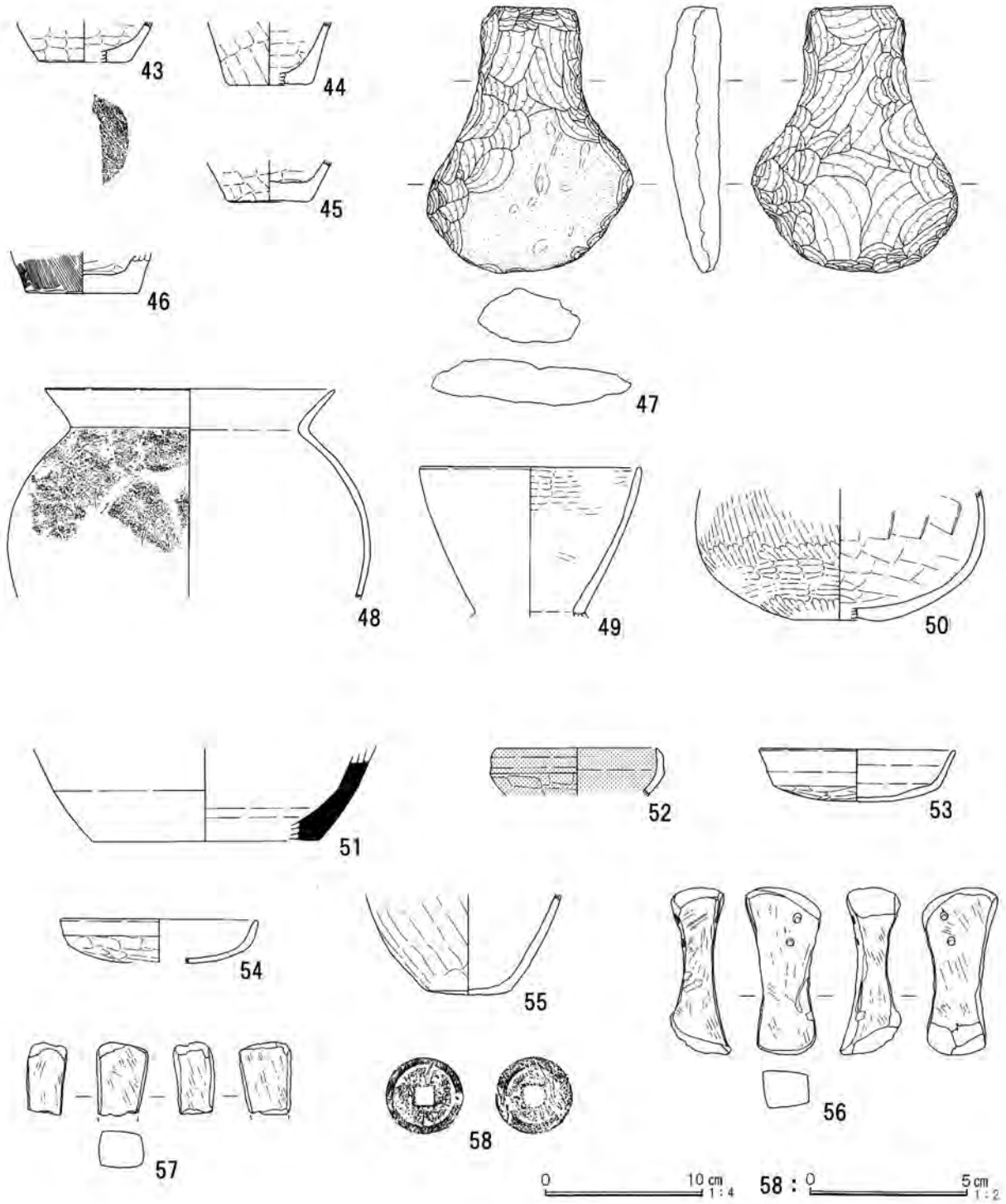
31はハケメ調整の胴下部片。斜位に施されている。

甕破片16～29・31の内面はすべてヘラナデ調整であり、20・29が横・斜位、その他は横位に施されている。26は輪積痕がみられた。

32・33は筒形土器。ともに口縁部から頸部にかけての破片であり、33は複合口縁である。32はやや太い沈線で重四角文が描かれており、口縁端部と区画内一部に無節Ｒが施文されている。33は端部も含めた複合口縁部とやや太い平行沈線間に無節Ｌを施文している。重四角文の可能性もある。内面はともにヘラナデ調整であり、32が横位、33が横・斜位に施されている。

34・35は高坏の口縁部片。口縁部が屈曲し、端部が大きく開く。内外面ともに横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されているが、34は大半が剥落している。35は口縁端部に突起を持つ。

36～38は壺、39～46は甕の底部ないし胴下部から底部である。前者は胴下部が膨らむこと、後者は膨



第60図　遺構外出土遺物（2）

らまないことから壺と甕に分類したが、異なる可能性もある。これらについては時期の特定が困難であるため、一括して掲載した。甕とした46以外はすべて内外面ともにヘラナデ調整である。37・43は底部外面に木葉痕が認められた。

47は打製石斧。肩の張る大型のものであり、片面に自然面を残す。粘板岩製。完形。

第21表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	47-153G	弥生土器筒形	(9.6)	(11.9)	—	ABEIN	灰黄褐色	B	口～胴30%	内外面磨耗顕著。
2	第2区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDEIN	橙色	B	口～頸部片	
3	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGHIKN	黄灰色	B	胴上部片	
4	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABEGIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	
5	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	灰褐色	B	胴上部片	突起有。
6	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABCDIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
7	46-154G	弥生土器　甕	(18.4)	(12.5)	—	ABHIK	黒褐色	B	口～胴30%	内外面やや磨耗。
8	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABIKN	橙色	B	口縁部片	突起有。外面磨耗顕著。
9	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
10	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
11	第2区一括	弥生土器　壺	—	—	—	AIKN	褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
12	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
13	51-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
14	第1区一括	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
15	51-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	黄灰色	B	胴上部片	
16	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	浅黄色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
17	47-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
18	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	
19	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
20	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	口～胴上片	外面やや磨耗。
21	51-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIN	灰黄褐色	B	口～胴上片	外面磨耗顕著。
22	50-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
23	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	橙色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
24	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
25	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
26	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABIJKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内面輪積痕有。
27	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
28	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
29	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEIK	黒褐色	B	胴部片	
30	第1区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	口縁部片	
31	第2区一括	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	橙色	B	胴下部片	
32	第1区一括	弥生土器筒形	—	—	—	ABDIKN	にぶい褐色	B	口～頸部片	
33	第1区一括	弥生土器筒形	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
34	第1区一括	弥生土器高坏	—	—	—	ABCEIK	明赤褐色	B	口縁部片	内外面赤彩、大半剥落。
35	第1区一括	弥生土器高坏	—	—	—	ABEIKN	赤色	B	口縁部片	突起有。内外面赤彩。
36	第1区一括	弥生土器　壺	—	(3.8)	9.0	ABEIN	にぶい黄橙色	B	胴～底50%	内外面磨耗顕著。
37	第1区一括	弥生土器　壺	—	(3.05)	(6.4)	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底45%	底部外面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
38	第2区一括	弥生土器　壺	—	(1.3)	(6.0)	ABEGIN	にぶい赤褐色	B	底部40%	
39	51-153G	弥生土器　甕	—	(2.5)	(7.2)	ABDEHIN	橙色	B	底部45%	内外面磨耗顕著。
40	51-153G	弥生土器　甕	—	(2.95)	(6.0)	ABEIKM	にぶい黄橙色	B	底部40%	内外面磨耗顕著。
41	第1区一括	弥生土器　甕	—	(2.3)	(7.8)	ABDIMN	にぶい黄橙色	B	底部25%	内外面磨耗顕著。
42	第1区一括	弥生土器　甕	—	(1.55)	(7.3)	ABDIK	橙色	B	底部40%	内外面磨耗顕著。
43	第1区一括	弥生土器　甕	—	(2.7)	(6.0)	ABDIN	灰黄褐色	B	底部40%	底部外面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
44	第1区一括	弥生土器　甕	—	(4.15)	(5.4)	ABHIMN	灰白色	B	胴～底40%	内外面磨耗顕著。
45	第1区一括	弥生土器　甕	—	(2.7)	5.4	AIKMN	黒褐色	B	底部95%	内外面磨耗顕著。
46	第2区一括	弥生土器　甕	—	(2.7)	7.4	ABEGIN	明褐色	B	底部100%	
47	第1区一括	打製石斧	最大長17.3cm、最大幅13.25cm、最大厚3.6cm。重量822g。完形。粘板岩製。							
48	34-138G	土師器　甕	(18.6)	(13.6)	—	ABDEHN	にぶい橙色	B	口～胴30%	内外面磨耗顕著。
49	第2区一括	土師器　壺	(14.4)	(9.7)	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸25%	内外面磨耗顕著。№50と同一個体？
50	第2区一括	土師器　壺	—	(8.45)	(5.6)	ABDEGHIJKN	浅黄橙色	B	胴～底40%	内外面やや磨耗。№49と同一個体？
51	第2区一括	須恵器　甕	—	(6.0)	(14.6)	ABDN	灰色	B	胴～底25%	底部内面･外面自然釉付着。
52	第1区一括	土師器　坏	(10.6)	(3.1)	—	ABIN	赤褐色	B	20%	内外面赤彩。
53	第1区一括	土師器　坏	(12.7)	3.4	—	ABK	にぶい黄橙色	B	45%	
54	第2区一括	土師器　坏	(12.8)	2.8	—	ABIKN	にぶい黄橙色	B	20%	内外面磨耗顕著。
55	第2区一括	土師器　甕	—	(6.5)	(5.4)	ABHKN	赤褐色	B	胴～底80%	内外面磨耗顕著。
56	第1区一括	砥　石	最大長10.85cm、最大幅4.85cm、最大厚3.95cm。重量199.1g。砂岩製。完形。四面使用。孔二つ有。							
57	第2区一括	砥　石	最大長(4.7)cm、最大幅(3.25)cm、最大厚(2.6)cm。重量(66.3)g。砂岩製。大半欠。四面使用。							
58	第2区一括	古　銭	最大径2.5cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.6g。完形。「寛永通宝」。							

48～50は古墳時代前期の土器。48は甕の口縁部から胴部中段下までの部位。口縁部から頸部がくの字に屈曲し、胴部は球形を呈する。最大径を胴部中段に持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ調整であり、

胴部外面は分かりづらいが、タタキが施されている。内面は磨耗が著しいため図示できなかったが、ヘラナデ調整である。49・50はいわゆる瓢壺。同一個体の可能性がある。49は口縁部から頸部、50は胴部中段上から底部にかけての部位。口縁部から頸部まで長く、やや内湾しながら立ち上がる。胴部は下膨れで中段下に最大径を持つ。外面は口縁部から頸部まで磨耗が著しいため図示できなかったが、全面ヘラミガキ調整と思われる。内面は口縁部から頸部までがヘラミガキ、胴部以下はヘラナデ調整である。

51～57は古墳時代後期以降の遺物。51は須恵器甕の胴下部から底部。内外面ともに回転ナデ調整である。外面及び底部内面には自然釉が付着している。奈良・平安時代のものである。52～55は土師器。52～54は坏で52は 6 世紀後半、53は 7 世紀後半、54は 8 世紀前半のものである。52は坏身模倣坏、53は有段口縁坏。52は深身で口縁部から体部が内湾する。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は欠くが、丸底を呈すると思われる。口縁部から体部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整である。内外面全面に赤彩が施されている。53は浅身で口縁部の段が一段のみであり、弱い。口縁部の開きは小さく、体部と底部の境にある稜が弱い。底部は丸底であるが、平底に近い。口縁部から体部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整である。54は浅身で口縁部がほぼ直立し、体部は内湾する。底部は丸底であるが、平底に近い。口縁部は内外面ともに横ナデ、体部以下はヘラ削り調整である。55は長胴甕の胴下部から底部。器壁がやや厚い。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。時期は不明である。

56・57は砂岩製の砥石。56は完形で四面使用しており、片端には二箇所孔がみられた。57は半分のみの検出である。56と同じく四面使用されている。

58は近世の寛永通宝。完形であるが、やや捻れている。

V　調査のまとめ

前中西遺跡の調査報告も今回で6回目となり、徐々に遺跡の様相が明らかになってきた。今回は過去の報告に比べると調査面積が少ないが、遺跡の主体となる弥生時代は集落跡と墓の両方が検出され、各遺構からは大量の遺物が出土し、良好な資料を得ることができた。今回の成果は弥生時代の集落跡と墓域の立地に関しては過去に述べた見解をほぼトレースする内容とも言えるが、新たに確認されたこと、また訂正すべきことも認められることとなった。従って、ここで弥生時代の集落跡と墓域に関する新知見と訂正すべき点について述べ、また出土遺物に興味深いものがあることからこれらについても簡単に述べておきたい。そして最後に弥生時代以外についても若干触れておく。

弥生時代の集落跡と墓域について

弥生時代の集落跡と墓域は、平成21年度報告でも述べたとおり、現在も流れる衣川（第１号河川跡）を主な境界線として北側に集落跡、南側に墓域が広がっている。時期はともに中期後半と中期末から後期初頭の二つの段階に大別されるが、集落跡は段階別による立地の違い等が認められず、まとまりを持ちつつも主に河川北側に点在して分布する。一方、墓域は時期別による分布を把握することが困難であり、方形周溝墓が河川南側の遺跡範囲ほぼ中央付近から東側にかけて広範囲に分布し、後期初頭には四隅が切れるタイプの他にほぼ全周するタイプも出現するとした（熊谷市教委2010）。以下、この見解を基に弥生時代の集落跡と墓域の新知見と訂正すべき点について述べる。

まず集落跡について。今回の報告地点は遺跡範囲の北東部にあたり、検出された弥生時代の住居跡は４軒である。いずれも平成19年度調査第１区からの検出であり、厳密に言えば西側となるが、大きく見ると衣川北側に位置することから立地に関してはこれまでの見解と一致する。しかし、本報告４軒のうち、３号住居跡は出土土器が弥生時代中期中頃の池上式に相当することから本遺跡の弥生時代集落の開始時期が中期後半から中期中頃まで遡ることが確実となった。

“確実”と表現したのには理由がある。実は弥生時代中期中頃の遺構が平成21年度報告において住居跡が1軒検出されていたからである（熊谷市教委2010）。３号住居跡として報告した遺構が該当するが、本住居跡は他の遺構との重複が激しく、残存状態が悪いこと、また本遺跡ではこれまで明らかに中期中頃と言える遺構が検出されていなかったこと等から「中期後半の古い段階」として報告してしまったものである。中期中頃の遺物は過去の報告でも多数検出されていたが、遺構の存在は把握できていなかったため、集落が存在するか否かについては慎重にならざるを得なかった。しかし、本報告では明らかに住居跡と言える遺構が1軒検出され、土坑も１基（３号土坑）検出されている。従って、本報告分も含めて住居跡が２軒、土坑が1基検出されたことになり、本遺跡に中期中頃の集落跡が存在することが確実となった。

本遺跡の中期中頃は、遺構の検出数が中期後半以降に比べると極端に少ないが、これまでの成果から考えても中期後半以降に展開される大規模な集落とは異なり、遺跡範囲東側にのみ広がる小規模なものであったことが想定される。

本遺跡周辺には北東約1.5㎞に弥生時代中期中頃の集落跡である池上遺跡、北約２㎞には中期後半の集落跡である北島遺跡があり、東日本の弥生時代を考える上で重要な遺跡が所在する。本遺跡はこれまで北島遺跡とともに池上遺跡に後続する段階と捉えていたが、集落は池上遺跡とほぼ同時期から営まれ

始めることが明らかとなり、集落の下限については現時点では後期初頭まで続くことが分かっているが、今回初めて後期後半の吉ヶ谷式土器の破片（第57図77・78）が河川跡から出土していることから、さらに下る可能性もある。ただ本遺跡の弥生時代集落は存続期間が不確定であるものの、中心となる段階については中期後半ないし中期末から後期初頭にかけての段階とみて間違いないと思われる。

次に墓域について。前述のとおり、墓域は方形周溝墓が主に河川南側の遺跡範囲ほぼ中央付近から東側にかけて広範囲に分布する。本報告では４基の方形周溝墓が検出されたが、弥生時代に相当するものは１号方形周溝墓のみである。１号方形周溝墓は平成19年度調査第１区検出であることから河川北側に位置するため、墓域が河川南側に限定されるとしたこれまでの見解とは異なるが、河川に近い場所に位置することからあくまでも墓域の中心が河川南側にあることは間違いない。従って、立地に関しては細部において修正する余地があるが、概ねこれまでの見解と一致すると言える。しかし、今回報告した１号以外の方形周溝墓は出土遺物等から古墳時代前期のものであることが判明したため、これに伴って過去に報告した一部の方形周溝墓について時期を訂正し、弥生時代の墓域についても見解を若干変更する必要が生じることとなった。

過去に報告した方形周溝墓で訂正すべきものは２例ある。平成13年度報告の３号方形周溝墓（熊谷市教委2002）と平成21年度報告の２号方形周溝墓（熊谷市教委2010）である。これらは全形を検出した訳ではないが、本報告の２～４号方形周溝墓と同じく溝がほぼ全周するタイプと思われる。このタイプは古墳時代前期において全国的にみられる形態のものであるが、平成13年度報告３号及び平成21年度報告２号方形周溝墓は弥生時代の方形周溝墓群内に所在し、出土遺物が弥生土器のみで古墳時代前期の遺物が皆無であったことからその時期を後期初頭に位置付けた（熊谷市教委2010）。しかし、本報告によりこのタイプがやはり古墳時代前期のものであることが明らかとなったため、これらの方形周溝墓についても古墳時代前期と捉えた方が妥当と思われるに至った。従って、平成21年度報告において後期初頭に溝がほぼ全周する方形周溝墓が出現すると述べたが、このタイプについては本報告をもってその時期を古墳時代前期に訂正したい。

本遺跡で検出された方形周溝墓はすべてが弥生時代に該当するものではなく、古墳時代前期のものも所在し、立地は弥生時代と同じく河川南側であり、弥生時代と一部重複するものもあるが、大半は近接して分布することが明らかとなった。現時点において古墳時代前期に該当する方形周溝墓は、遺跡範囲東側の平成21年度報告第４区北側に位置する２号及び本報告２～４号の４基、そして遺跡範囲中央南側の平成13年度報告１・２号方形周溝墓南側に位置する３号の計５基である。この結果、弥生時代の墓域範囲は多少狭まることになるが、分布状況が広範囲にわたることはこれまでの見解どおりであり、弥生時代の方形周溝墓については、四隅が切れるタイプに限定されることが改めて確認された。

以上、現時点における本遺跡の弥生時代の集落跡と墓域について述べた。立地に関してはこれまでの見解に大幅な修正はないが、本報告により遺跡範囲東側に初源となる中期中頃の集落が所在することが明らかとなり、また中期末から後期初頭にかけては衣川に近い南北で集落と墓が入り組んで分布していることが確認された。また方形周溝墓には弥生時代以外のものが存在することも確認された。

本遺跡の弥生時代は調査の進展に伴い、その様相が徐々に明らかになってきたが、同時に混沌としてきた部分もある。今後もさらに精査を行い、様相の解明に努めていきたい。

出土遺物について

今回報告した出土遺物のうち、興味深い遺物がいくつかみられたため、ここでこれらについて簡単に述べておきたい。対象となる遺物は、３号住居跡出土の壺第21図55、１号方形周溝墓出土の壺第41・42図１～９、２号溝跡出土の土偶第33図２-26・27、１号河川跡出土の土製紡錘車第57図90、37-147グリッドピット1出土の磨製石斧第50図9である。以下、順を追って述べる。

３号住居跡出土の壺第21図55は、詳細は第Ⅳ章に記述済であるため割愛するが、文様と胎土等から東北地方南部の弥生時代中期後半に相当する川原町口式土器の搬入品と思われる。本報告３号住居跡は前述のとおり、中期中頃に相当することから本例は流れ込みと思われるが、川原町口式は平成13年度報告の１号住居跡からも破片であるが、同一個体の壺２点が出土しており、本例はこれに次ぐ事例となる（熊谷市教委2002、第７図８・９）。周辺の事例としては県北部に所在する美里町石神遺跡でほぼ完形の壺が出土している（北武蔵古文化研究会他1988）のみであるが、本遺跡を含む当地域周辺では中部地方に系譜が求められる土器が多い中、僅かながらも東北地方南部のものが出土している点は注目すべき事象である。

１号方形周溝墓出土の壺第41・42図１～９は、頸部以上を欠くものが多いが、残存状態が比較的良好である。特徴としては頸部にのみ文様を持つものが多く、器形がやや長胴化する点等が挙げられる。文様の分かるものは１～５のみであるが、未確認の６～９についても調整技法から分類が可能である。詳細については割愛するが、文様及び調整技法から平行沈線区画内に縄文を充填するもの（１・３～５・７～９）と櫛歯状工具により簾状文や波状文等が描かれるもの（２・６）に大別される。時期は前者が中期末、後者が後期初頭に位置付けられることから本報告では１号方形周溝墓の時期を中期末から後期初頭にかけての段階とした。

本遺跡ではこの段階の遺構が数多く検出されているが、良好な資料の増加に伴い、文様構成や施文具、器形等から微妙な時期差を持つことが認められる。例えば、平成21年度報告では方形周溝墓の可能性がある32号溝跡から残存状態の良好な壺が出土している（熊谷市教委2010）。このうち第32図32－１・２は平行沈線区画内に縄文が充填されるが、無文部が多く、簡素化が進むものの文様が胴上部まで施文されていることから、その時期は本報告1号方形周溝墓出土１・３～５・７～９よりも古い段階に位置付けられよう。

このように中期末から後期初頭にかけての土器は、徐々に細分が可能な状況となってきた。また中期末の壺については、文様構成や施文技法が中期後半と異なる点も明らかとなってきた。中期後半の北島式では主に２本一単位の櫛歯状工具により重四角文等の文様が描かれることが多いが、中期末は一本描による沈線で文様が描かれる場合が多い。本報告1号方形周溝墓出土土器のうち、壺第41図３は一本描による沈線と２本一単位の櫛歯状工具を併用していることから新旧の要素を併せ持っており、中期後半と中期末を繋ぐ資料と言える。

中期後半から後期初頭にかけての土器は、大まかな流れとしては文様が縄文主体から櫛歯状工具による簾状文や波状文等へと移行し、文様帯は頸部に集約される傾向にある。この段階の遺構は平成21年度報告や本報告以外にも未報告に良好な一括資料があることから今後整理調査を進めていけば細かい変遷を提示できるのではないか。

なお、ここで本遺跡出土の弥生土器の流れについて簡単に述べておきたい。まず中期中頃の池上式に

ついては、本報告３号住居跡をはじめ、文様に重四角文が多く採用されているが、これは本遺跡の中期後半北島式に引き継ぐ内容である。そして、中期後半北島式については過去の報告でも述べたが、北島遺跡とはやや異なり、文様に重四角文や平行沈線等が描かれるものが多く、フラスコ文が少ないこと、また肩部と胴上部の境に設けられる段が弱いこと等が特徴として挙げられるが、これらの点については本報告により改めて認識することができた。

２号溝跡出土の土偶第33図２－26・27は、26が頸部以上を欠くか不明であるが、ともに残存状態が比較的良好である。両者の形態は全く異なるものであるが、問題となるのはその時期である。まず土偶の特徴としては26が縄文や刺突列を多用する点、27は文様がほとんどないが、沈線の幅等を見ると中期後半とみておかしくない点等が挙げられる。一方、土器は残存状態の良いものは少ないが、いずれもその文様・器形から中期後半の北島式に相当するものである。従って、両者は共伴して出土したこと、そして文様の内容等から見て同時期として良いものであろう。

本遺跡では過去の報告分を含めると計５例の土偶が出土したことになる。これまでは腕や顔等部分的なものが多く、遺構に伴って出土したものは平成20年度報告19号住居跡出土の腕部１点のみである（熊谷市教委2009、第41図108）。平成20年度報告19号住居跡は出土土器が中期後半に相当することから土偶が中期後半まで存在することは既に把握していたが、本報告によりその事実は確実となった。

弥生時代の土偶で中期後半のものは全国的にも皆無に等しく、おそらく本例が最終段階のものと思われる。本遺跡の土偶は当地域が縄文時代の伝統を色濃く残した地域であることを物語る資料であり、また２個体とも破損状況が同じである点は何かしらの儀礼が行われた結果と思われ、興味深い事象である。

１号河川跡出土の土製紡錘車第57図90は、片面に縄文が施文されている点が特徴的である。弥生時代の土製紡錘車は過去にも出土例があるが、無文のものが多く、縄文が施文されたものは今回が初となる。本例は河川跡出土のため時期の特定が難しいが、弥生時代中期中頃から後期後半までに該当するのは間違いない。文様の施文された土製紡錘車は関東地方東部に出土例があるが、本遺跡周辺では例がないことから今後出土例が増加するか留意していきたい。

最後に37-147グリッドピット１出土の磨製石斧第50図９について。本例は石材が緑色岩系であることから中部地方の榎田型磨製石斧の搬入品と思われる。中部地方では中期後半でも新しい段階、栗林２式の後半段階に集落が拡大するとされる（石川ほか2000）が、榎田型磨製石斧はこの現象と一致して普及したと思われ、本例もその段階にもたらされたと思われる。土器同様、当地域が中部地方とのつながりが強いことを示す資料であり、現時点では北島遺跡に比べて本遺跡の検出数は少ないが、未報告分に中期末に相当する住居跡から県内最大級の朝霞市新屋敷遺跡例とほぼ同じ大きさのものが出土していることから今後資料の増加が見込まれる。

弥生時代以外について

本遺跡では弥生時代以外にも多くの時代の遺構･遺物が確認されている。まず古墳時代前期は過去に住居跡が数軒確認されていたが、墓は確認されていなかった。しかし、本報告により方形周溝墓の存在が明らかとなったため、弥生時代と同じく両者が存在することとなった。そして立地についても弥生時代とほぼ同じ様相を呈するが、遺構の検出数からみて弥生時代ほどの規模ではないことが想定される。古墳時代後期も過去に住居跡が検出されているが、本報告により集落が広範囲にわたることが再確認された。ただし古墳時代前期と同じく弥生時代ほどの規模ではないと思われる。古代については平成21年

度報告と同じく河川跡から10世紀以降の土器が出土しているため、やはり遺跡内のどこかに当段階の集落跡が存在する可能性が高くなった。

以上、紙数の都合もあり、簡潔に述べた。遺跡の主体となる弥生時代はその内容から関東地方北西部を代表する遺跡の一つと言える状況を呈してきた。発掘調査及び整理調査は今後も継続して実施されることからさらにその様相について検討していきたい。

引用・参考文献

石川日出志ほか　2000　『長野市誌 歴史編 原始･古代･中世』

北武蔵古文化研究会他　1988　『第9回三県シンポジウム 東日本の墓制』

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』

熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』

1983　『めづか』

1999　『横間栗遺跡』

2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』

2002　『前中西遺跡Ⅱ』

2003　『前中西遺跡Ⅲ』

2004　『籠原裏遺跡』

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ･上之古墳群第2号墳』

2008　『藤之宮遺跡』

2009　『前中西遺跡Ⅳ』

2010　『前中西遺跡Ⅴ』

熊谷市前中西遺跡調査会　1999　『前中西遺跡』

埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』

埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』

1988　『埼玉の中世城館跡』

(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集

2002　『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集

2002　『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集

2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

2004　『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集

2008　『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集

埼玉考古学会　2003　『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』

埼玉考古別冊 7

写　真　図　版

平成19年度調査第１区全景（西から）

図版２

平成21年度調査第２区31～38ー137・138G全景（東から）

平成21年度調査第２区37・38ー137～148G全景（南から）

第 1 号住居跡

第 3 号住居跡遺物出土状況

第 1 号住居跡 P47 土器出土状況

第 4 号住居跡

第 2 号住居跡

第 5 号住居跡

第 3 号住居跡

第 5 号住居跡遺物出土状況

図版４

第６号住居跡

第９号住居跡

第６号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡

第７号住居跡

第８号住居跡

第１号溝跡

第２号溝跡

第５・６号溝跡

第２号溝跡遺物出土状況

第10号溝跡

図版6

第8・9号溝跡

第12・13号溝跡

第13号溝跡遺物出土状況

第14号溝跡

第15・16号溝跡・第2号方形周溝墓

第17号溝跡

第１号土坑

第５号土坑

第３号土坑

第６号土坑

第３号土坑遺物出土状況

第７号土坑

第４号土坑

第１号井戸跡

図版８

第１号方形周溝墓南西周溝

第１号方形周溝墓南東周溝

第１号方形周溝墓南西周溝遺物出土状況

第１号方形周溝墓南東周溝遺物出土状況

第１号方形周溝墓南東周溝壺出土状況（1）

第１号方形周溝墓南東周溝壺出土状況（2）

第３号方形周溝墓

第４号方形周溝墓

第３号方形周溝墓鉢出土状況

第１号畠跡

37-141GP1・２遺物出土状況

図版 10

37-147GP1 遺物出土状況

第 1 号河川跡（平成 21 年度調査）（1）

第 1 号土器集中箇所

第 1 号河川跡（平成 21 年度調査）（2）

第 1 号河川跡（平成 19 年度調査）

第 1 号河川跡（平成 21 年度調査）2T 土層

第 1 号河川跡木製品等出土状況

作業風景

第1号住居跡　第10図1

第1号住居跡　第10図2

第1号住居跡　第10図3

第1号住居跡　第10図4

第1号住居跡　第10図5

第1号住居跡　第10図6

第1号住居跡　第10図7

第1号住居跡　第10図8

図版12

第1号住居跡　第10図9

第1号住居跡　第10図12

第1号住居跡　第11図13

第1号住居跡　第11図14

第1号住居跡　第11図15

第2号住居跡　第16図1

第 2 号住居跡　第 16 図 2

第 2 号住居跡　第 16 図 3

第 2 号住居跡　第 16 図 4

第 2 号住居跡　第 16 図 8

第 2 号住居跡　第 16 図 17

第 3 号住居跡　第 20 図 1

第 3 号住居跡　第 20 図 2

図版 14

第 10 号住居跡　第 27 図 1

第 2 号溝跡　第 32 図 2-1

第 3 号土坑　第 37 図 3-1

第 1 号方形周溝墓　第 41 図 1

第 1 号方形周溝墓　第 41 図 2

第 1 号方形周溝墓　第 41 図 3

第 1 号方形周溝墓　第 41 図 4

第 1 号方形周溝墓　第 41 図 5

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 6

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 7

図版 16

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 8

第 1 号方形周溝墓　第 43 図 32

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 9

第 1 号方形周溝墓　第 44 図 77

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 10

第 1 号方形周溝墓　第 44 図 99

第 1 号方形周溝墓　第 42 図 25

第 4 号方形周溝墓　第 48 図 5

第 1 号河川跡　第 55 図 1

第 1 号河川跡　第 55 図 26

第 1 号河川跡　第 55 図 27

第 1 号河川跡　第 56 図 28

第 1 号河川跡　第 56 図 31

遺構外　第 59 図 1

遺構外　第 59 図 7

図版 18

第 3 号方形周溝墓　第 47 図 1

第 3 号方形周溝墓　第 47 図 2

第 3 号方形周溝墓　第 47 図 3

第 3 号方形周溝墓　第 47 図 5

第 3 号方形周溝墓　第 47 図 6

第 4 号方形周溝墓　第 48 図 2

遺構外　第 60 図 48

遺構外　第 60 図 49

遺構外　第 60 図 50

第5号住居跡　第23図2

第6号住居跡　第25図1

第6号住居跡　第25図2

第6号住居跡　第25図3

第6号住居跡　第25図5

第6号住居跡　第25図6

第6号住居跡　第25図7

第6号住居跡　第25図8

第 6 号住居跡　第 25 図 9

第 6 号住居跡　第 25 図 10

第 4 号土坑　第 37 図 4-2

37-141GP1　第 50 図 1

37-141GP1　第 50 図 2

37-141GP1　第 50 図 3

37-141GP1　第 50 図 4

37-141GP2　第50図5

第1号土器集中箇所　第51図1

第1号土器集中箇所　第51図2

第1号土器集中箇所　第51図3

第1号土器集中箇所　第51図4

第1号河川跡　第58図110

遺構外　第60図53

第17号溝跡　第34図17-1

第17号溝跡　第34図17-2

図版22

第1号住居跡　第11図22～42

第1号住居跡　第11図43～50・第12図51～63

第1号住居跡　第12図64～84

第1号住居跡　第12図85～105

図版 24

第 1 号住居跡　第 12 図 106～108・第 13 図 109～126

第 2 号住居跡　第 16 図 18～29・第 17 図 30～38

第 2 号住居跡　第 17 図 39〜57

第 2 号住居跡　第 20 図 8〜30

第 3 号住居跡　第 20 図 31～40・第 21 図 41～53

第 3 号住居跡　第 21 図 54～76

第４号住居跡　第22図２　第９号住居跡　第26図9-2　第10号住居跡　第27図２・３
第１号溝跡　第32図1-2～4　第５号溝跡　第34図5-3・4　第８号溝跡　第34図8-1・2
第15号溝跡　第34図15-3・4　第17号溝跡　第34図17-6～8

第２号溝跡　第32図2-2～24

第1号土坑　第37図1-1～7　第3号土坑　第37図3-2～5　第4号土坑　第37図4-6～9
第1号方形周溝墓　第43図27～31

第1号方形周溝墓　第43図33～52

第1号方形周溝墓　第43図53～73

第1号方形周溝墓　第43図74～76・第44図78～95

第1号方形周溝墓　第44図96～98・100～116

第1号方形周溝墓　第44図117～130・第45図131～137

第2号方形周溝墓　第46図1・2　第4号方形周溝墓　第48図6～11
37-142GP1　第50図6　第1号河川跡　第55図2～11

第1号河川跡　第55図12～25・第56図33～40

第1号河川跡　第56図41～55

第1号河川跡　第57図56～78

遺構外　第59図2～6・8～20

遺構外　第59図21～35

図版34

第1号竪穴状遺構　第28図1・2
第5号溝跡　第34図5-1・2
第1号河川跡　第58図97～103

第1号溝跡　第32図1-1
第13号溝跡　第34図13-2
第17号溝跡　第34図17-9
第4号土坑　第37図4-1
第1号河川跡　第58図105・106

第13号溝跡　第34図13-1
第15号溝跡　第34図15-2
第17号溝跡　第34図17-3

第1号住居跡　第13図127～136

第2号住居跡　第17図58～62（上）　第3号住居跡　第21図77～81（下）

第10号住居跡　第27図4　第2号溝跡　第32図2-25　37-147GP1　第50図8・9
第1号河川跡　第57図91・92・第58図93・94　遺構外　第60図47

第1号竪穴状遺構　第28図3　第17号溝跡　第34図17-5
遺構外　第60図56・57

第17号溝跡　第34図17-4

第 2 号溝跡　第 33 図 2-26

第 2 号溝跡　第 33 図 2-27

第1号河川跡　第57図90

第1号方形周溝墓　第45図138

第7・9号住居跡　第26図7-1（左）・9-1（右）

第13号溝跡　第34図13-3（左）
遺構外　第60図58（右）

第13（上二段）・15（中）・17（下二段）号
溝跡種子桃

第17号溝跡獣骨

第13号溝跡
第34図13-4

第13号溝跡
第34図13-5

第1号河川跡　第58図111

報　告　書　抄　録

ふ り が な	まえなかにしいせきろく
書　　名	前中西遺跡Ⅵ
副　書　名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ
巻　　次	―
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第９集
編 集 者 名	松田　哲
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会
所　在　地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2011(平成23)年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東緯 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしかみの　ばんち　ほか 熊谷市上之2688番地３他	11202	092	36° 8′ 44″	139° 24′ 22″	20071201 ～ 20080314	299.8	区画整理 街路築造 工事
	くまがやしかみの　ばんち　ほか 熊谷市上之2689番地２他			36° 8′ 46″	139° 24′ 24″	20090605 ～ 20091016	554.1	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
前中西遺跡	集落跡 祭祀 墓	弥生中期中頃	住居跡　１軒 土坑　１基	弥生土器・石器	・本遺跡では２例目となる弥生時代中期中頃の住居跡が確認された。 ・２号溝跡からは弥生時代中期後半の土器とともに土偶が２個体出土した。 ・１号方形周溝墓からは弥生時代中期末から後期初頭に位置付けられる良好な壺がまとまって出土した。
		弥生中期後半	住居跡　３軒 溝跡　３条	弥生土器・石器	
		弥生中期末～後期初	方形周溝墓　１基	弥生土器・石器	
		古墳時代前期	溝跡　５条 方形周溝墓　３基	土師器	
		古墳時代後期	住居跡　６軒 溝跡　１条 土坑　１基	土師器・石製品	
		奈良･平安時代	井戸跡　１基 ピット 土器集中箇所　１箇所	土師器	
		近世	溝跡　５条	陶器・瓦質土器 銅製品・古銭 木製品・石製品 板碑	
		弥生～中世	河川跡　１条	弥生土器・石器 土師器・須恵器 土師質土器 土製品・木製品	
		時期不明	竪穴状遺構　１基 溝跡　３条 土坑　５基 畠跡　１箇所 ピット群	弥生土器・石器 土師器・須恵器 円筒埴輪	

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第９集

前 中 西 遺 跡 Ⅵ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ－

平成23年3月18日

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社　ピーアイピー